猿飛佐助

講談名作文庫

カバー画　生頼範義
装　幀　平野甲賀

猿飛佐助

講談名作文庫

猿飛佐助

講談名作文庫9

講談社
320

講談名作文庫

320円
0193-433095-2253 (0)

猿飛佐助

猿飛佐助

講談名作文庫

講談社

講談名作文庫
9

猿飛佐助

講談社

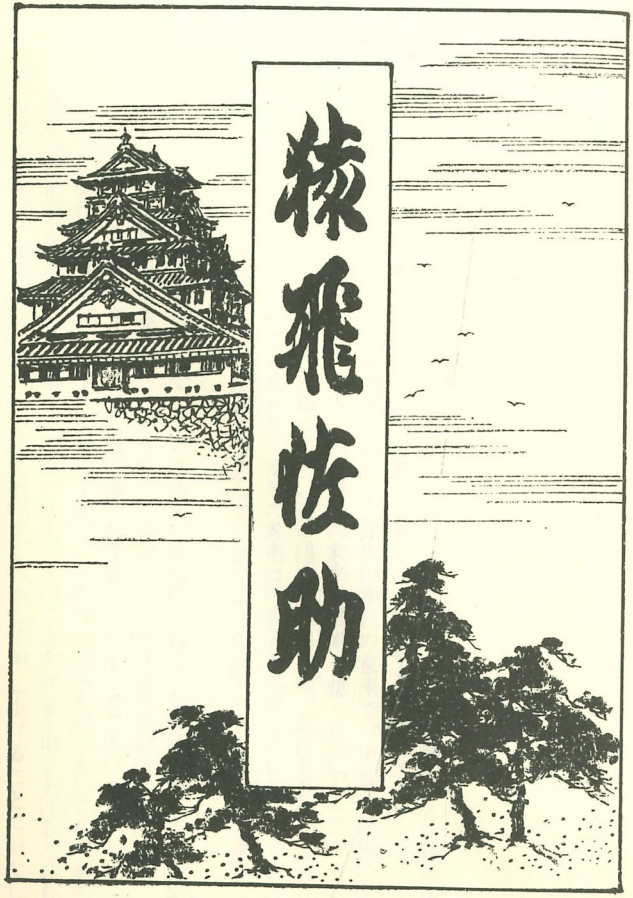
目次

まるで人間の洗たくだ……九
忍術修行に二十四時間勤務……一五
がまの平兵衛「ギューッ」……二六
佐助、六勇士を手玉にとる……三七
逆手を食った布団蒸し……四七
あわや、腰元楓は落花狼藉……五六
楓、日ねもす身をこがす……六三
猿飛もこれには顔赤らめる……六九
奥御殿に忍び寄る黒装束……七三
六勇士、一番家老につめ寄る……七九
捕らえてびっくり、しまったり……八五

本シリーズは、昭和29年に小社より刊行された『講談全集』の文庫版選集です。今回の刊行にあたって現代表記に改めました。

〈編集部〉

一を知って、二を知らぬ……九一
佐助、沼田城内を騒がす……九六
気合い一声！　人馬もろとも投げ飛ばす……一一
紅一点の女傑白絹の奮戦……一一八
秀吉公の荒武者をひしぐ……一二三
破裂した狸じじいのかんしゃく玉……一三一
ひらめく槍先、鈴鹿峠の大乱闘……一四一
きさまが石川五右衛門か……一五五
塙団右衛門ついにへなへな……一六一
いずれが竜か？　いずれが虎か？……一七〇
思いがけなく手に入る密書……一八〇
女魔術師、佐助を走らす……一八五
これはしたり、素人追いはぎの横暴……一九二
ややっ、猿公の取り次ぎ……二〇一
荒れ牛と忍術試合……二一〇
ギョッチン、あっぱれあっぱれ……二一六
関ガ原合戦に駆けつく……二二七
本多忠勝の肝っ玉ひやり……二三四
横紙破り、なにをたくらんでいるやら……二四〇
吹きも吹いたり大ラッパ……二四五
秘蔵の槍、遠慮なくちょうだいいたす……二五一
ちょん髷チョンチョン……二五七
九度山麓で佐助の祝言……二六五
豪傑組も変名組もめちゃめちゃ……二七三
雨降らし忍術と火縄消し忍術……二八三
血だらけになった鬼勘兵衛……二八五
ハクショイ、ヘクションが歩く……二九〇
替え玉狸じじいの箱根道中……二九八



ドシン、メリメリ、大がまご入来！……三〇二
しまった、密書がない！……三〇六
まんまとせしめた金一千両……三一〇
カチーン、佐助の首がポロリ……三一六

さし絵　富田千秋

まるで人間の洗たくだ

お求めによりまして、忍術の大名人猿飛佐助のおうわさを申し上げます。忍術といえば猿飛佐助、猿飛佐助といえば忍術と思うくらい、猿飛佐助と忍術とはきり放すことができません。

猿飛佐助は信州上田の城主真田安房守昌幸の嫡男与三郎真田幸村の家来で、甲賀流忍術の名人、霧隠才蔵は伊賀流忍術の名人、この二人が同じ幸村の家来で忍術を競ったのでございますが、呪文を唱えて九字を切ってどろどろと煙とともに姿を隠す天竺徳兵衛、あれも忍術ではあるがどちらかといえば妖術、それとはこと変わり、猿飛の忍術は甲賀流の忍術と申しまして、その字の示す通り忍びの術でございまして、隠密の役をして、徳川はじめ諸国の大名の心胆を寒からしめたものでございます。

この忍術は、とかく絵空事とされがちでございますが、血のにじむような修練の結果、人間業とは思われないような活躍ができるのでございます。ですから、これは単なる絵空事ではなく、その術を一つ一つよく見ますといずれも十分に筋の通った理屈がつくようでございます。

現に、甲賀流二十何代かの忍術家という人がおりまして、その方のお話を伺いましても、姿を隠したり、忍び込む術など本当にできるようでございます。そのことを詳しく申し上げるとおもしろいのでございますが、猿飛佐助の活躍の中に、実例をもちまして申し上げることにいたし

ます。

さて、猿飛佐助は忍術の大名人ですが、幼少のころから、火遁の術や水遁の術をやっていたかというと決してそうではございません。けれども昔からよくせんだんは双葉より芳しとか、蛇は寸にして人をのむとか申しますが、佐助もこの例にもれず、子供の時代から、豪胆で、暴れん坊で、大人になってから、人と変わったことをする人はどこか違っていたようでございます。

一に池なら　がまガ池

二に二つの鳥居　八幡宮

三に更科　そばの花

ここ信州鳥居峠のほとり、八幡宮のがまガ池のそばで、十二、三歳を頭にして、八九人の子供がこの唄を歌いながら遊んでおります。

すると、そこへ来かかった一人の男、

○「こらこらがきめら、やかましいわい、目ざわりだ、平兵衛さまのお通りが分からぬか、邪魔立ていたすと、ひねりつぶすぞ」

大きな声でどなっているのは、この辺でもきらわれ者の平兵衛、見ると、ぐでんぐでんに酔いしれて、酒呑童子のような真っ赤な顔、二十貫もあろうという大きな体をもちあぐんで、あっちへひょろひょろ、こっちへひょろひょろ、

子「あっがまの平兵衛がやって来た、捕まったらたいへんだ、逃げろ逃げろ」

くもの子をちらすように、ばらばらと逃げ散じました。その中で、一番年下の一人の少年、そんなことにはかまわず、独り残って遊んでおります。それを見た平兵衛、むらむらとかんに触っ

たか、目をぎょろりと光らせながら、

平「やいやい、きさまはおしかつんぼか、おれの声が聞こえないのか、ひねりつぶされたいのか」

いわれて少年ニヤニヤ笑いながら、

少「なんだって、ひねりつぶす、虫じゃねえや、だれだい、あっがま平か、がまか、なにか用かい」

平「やい、がまがまと心安くいうな、きさまはこのおれが怖くねえのか」

少「怖かねえよ、おらあへびだもの、はじからのんでやらあ」

平「ばかやろう、虫拳と思っていやがる。子供のくせに大人をばかにするな」

少「大人のくせに子供をいじめるな」

平「こいつがこいつが、口のへらぬがきだ、どうするかみろ」

といって、いきなり少年のえり首をつかもうとおどりかかると、その少年パッと飛び下がる、やらじと向かって来ると、パッと横に飛ぶ、右と見れば左、左と見れば右、前、後ろ、とそのすばやいこと、

少「がまこい、がまこい、手の鳴る方へ……」

怒り心頭に発した平兵衛、

平「もう勘弁ならねえ、こうしてくれる」

と、両手をひろげて羽交い締めにしようと躍りかかって来たが、するするっと逃れると、そばにある松の木に登り、

少「ここまでおいで、甘酒進じょ」
いや怒ったのなんの、以前はきこりだった平兵衛、焦って少年の登っている小枝の方へよじ登ってまいりました。手がとどきそうになると、「えいっ」とかけ声とともに、またしてもひょいっと次の小枝の方へ移る、またつかまりそうになると、隣の松の木に飛びつくという有り様、なかなかつかまらない。そのすばやいこと、まるで少年ターザンのようでございます。
がまの平兵衛が、怒って子供をつかまえようと追いかけまわしていると聞いた大人たちが、集まって来てこの有り様を見ましたが、「あれよあれよ」と騒ぐだけで、だれ一人として助けようとする者がございません。
○「なんてまあ、あの子はすばしっこいんだろう、さすがのがま公もだいぶまいっているね」
△「あの子はどこの子だい」
×「鷲塚佐太夫さんの坊ちゃんで、佐助さんという子だよ」
○「だけどさ、相手は名だたる平兵衛、今にきっとつかまるよ」
といっているうちに松の枝がメリメリといって折れる音、そうでしょう二十貫もあろうという平兵衛が、ところかまわず飛び移る佐助をおっているのですから、それを捕らえようと気は焦る、朽ちかけた木をよけるなどという余裕などありません、それが朽ちかけた枝につかまったからたまらない、たちまち枝は折れて、そのままザブーンと水煙を立てて池の中へ落ちた。
○「ややっ、がまが落っこちた」
×「がまの土左衛門が出来るぞ」
本物のがまなら、スースーと水を切って泳ぐところ、ところがこのがまの平兵衛、山育ちで金づちときた、水泳ぎというものを知らないから、アップアップしている。
平「お、おーい、たっ、た、助けてくれ」
叫びますがだれ一人手をかそうとするものがない、かわいそうに平兵衛、ブクブクと沈んでは浮かび上がり、浮かび上がったかと思うと、また沈む、このまま置いたらおぼれ死ぬかも知れない有り様。
×「いい気味だね、もうすこし水に漬けておきましょう」
△「ああして置けば酔いもさめておとなしくなりますよ、もう少し様子を見ようよ」
ひどいことになるもので……、
平「うわーっ、く、苦しい、た、助けてくれ、人殺しっ」
△「なんだい、自分で落っこちて人殺しもないもんだ」
すると、松の小枝に腰かけていた佐助少年、
佐「みなさん、もういいかげんに弱ったようですから、そろそろ引き上げてやって下さい」
鯨と間違えている。その声に応じて五六人の男が、池の端によって来て、ふだんから酒癖が悪くて、悪さをする、恨みがあるから、こらしめてやるのはこのときとばかり、平兵衛の手をとったが、すぐには上げない、一遍ズルズルと上げて、手をゆるめたから、平兵衛また水の中に沈む。また上げて、また沈ませて楽しんでいる。まるで人間を洗たくしているよう。洗たくならジャブジャブと気持ちのいい音がしますが、これはブクブクアップアップ、どうもあんまりパッとしない。
△「どうだ平公、恐れ入ったか」

平「うむ、ヘイコウした、もうガマんできない、引き上げてくれ」

とんだところでしゃれをいっている。

佐助がいったように、がまがへびにのまれたというやつ、お陰で大人たちは、ふだんのあだ討ちができたと喜んでいるという始末。

これが猿飛佐助の腕白時代の暴れ振りでございます。

この佐助少年が後には真田十勇士の一人となりまして、猿飛佐助幸吉、忍術の大名人として徳川家康はじめ、諸国大名の肝を寒からしめるというお話になります。

真田左衛門尉幸村公の家来には、勇士豪傑が多く、ことに穴山岩千代、三好清海入道、三好伊三入道、望月六郎、筧十蔵、海野六郎、猿飛佐助などおりましたが、その中で猿飛佐助が一番年少。人これを呼んで真田の七勇士、いずれも幸村公がまだ、与三郎といった時代から、おそばにつかえた郎党。その後、根津甚八、霧隠才蔵、由利鎌之助の三人が加わって、ここに有名な真田十勇士となりましたが、いずれも、天下に名だたる粒よりの豪傑ばかり、幸村公もこれらをかわいがること一通りではございません。

戦国時代の武将の中には、自分の地位を守るため、朝には平家に仕え、夕には源家に移るという豹変無節操のものが少なくありません。

忍術修行に二十四時間勤務

佐助の父の鷲塚佐太夫という人、もとは森備前守の家来でしたが、越後の国の争いのおり、主君の日和見の態度がいやになり、そのもとを去って、信州鳥居峠のふもとにまいりまして郷士となったという変わり者。

この佐太夫に二人の子がありました。姉をお小夜といってなかなかの美人でおとなしい。弟が佐助、これは姉とは違って前にも申したようにすこぶるつきの暴れもの。年はわずか十一歳ですが、大人も及ばぬ大力の上に豪胆。

ひまさえあれば、山中に入り、大木に登っては猿と鬼ごっこをして遊んでいる。身が軽いから、どんな岩でもよじ上り、十間、二十間の高いところから平気で飛び下りたり、飛び上がったり、それが自由自在。おまけに鹿と走りっこをすれば鹿より早いというのですから驚いたものでございます。

すると、ある一日、佐助が木の上で猿と遊んでいたが、

――昔、牛若丸は鞍馬山中で、剣術の独りげいこをして、後には九郎判官義経という偉い大将になったという話だ、自分も一つ剣術のけいこをして、りっぱな大将になりたいものだ――

と考えた。

それからというもの、毎日のように大木を相手にして独りげいこをはじめた。

佐「あいや、貴殿には、木の分際をもって人間たる拙者に手向かいいたすとは不届きなり、よって手打ちにいたす」

木「ヒャァヒャァヒャァ」（風の音）

佐「なんじ心あらば打ってかかれ、いで尋常に勝負勝負」というと、いきなり、かたわらにあったえのきの枝でこしらえた、にわか作りの木刀を取って、

佐「えいっやっ」

所かまわず打つ、突く、木の皮ははげて、いやはやたいへんな騒ぎ、それでも相手は木だから、痛いもなければ、まいったもない、打つ方の佐助の方では力を入れているから、「ふーふー」いっている始末。

すると、今度は佐助、木刀をかなぐり捨て、

佐「貴殿はおしかつんぼか、まいったもなし、痛いともいわず、張り合いがないではござらぬか」

木「ヒューヒューガサガサガサ」（風の音）

佐「いで、打ち物業（わざ）は面倒なり、さあ組み打ちでまいろう」

いきなり、両手をひろげて、むんずと大木に抱きつき、——やっ、うーむ。

佐「なにっくそっ、うーむ」

顔を真っ赤にしてねじ倒そうとしておりますと、突然後ろの方で、

○「あっはは……」

大きな声で笑う声が聞こえたから、

佐「何者じゃ、拙者が必死になってけいこをいたしおるに笑うやつがあるか」

いいながら、後ろを振り向くと、年取った白髪白髯（はくはつはくぜん）の老人が、つえをついてニヤニヤ笑って立っている。

佐「きさまだな、いま笑ったのは」

老「いかにもわしだ……ニヤニヤ」

佐「ありゃありゃじじい、まだ笑うか、けしからぬ」

老「怒ったか小僧、打つなら打ってみろ」

いわれて向こう見ずで、無鉄砲の佐助、いきなり棒切れを持ち直して、老人目がけて打ってかかると、ひらりひらりと身をかわされ、さすが強情我慢の佐助も、もはやへとへとになってきた。

老「小僧、まいったか」

佐「まだまいらぬ、えいっ」

なおも打ってかかっておりましたが、ついに力尽きて、その場にくずれるようにドウと倒れてしまいました。

老「口ほどにもなき者、いままでの大言はどういたした。木などを相手のけいこでなんになる。したが小僧、そんなに剣術がしたいか」

さんざんに、いためつけられたから、佐助は今までの大言壮語はどこへやら、すっかりすなおになっております。

佐「はい、剣術を覚えて、偉い大将になりとうございます」

老「うむ、子供ながらもあっぱれな心掛け、その方の熱心にめでて、わしが教えてつかわす」
聞いて佐助、両手を大地につき、
佐「はっ……どうぞお願い申し上げます」
老「しからば、こっちへまいれ」
といって、佐助をつれてまいりました広場、小さな祠があって、そのあたりが広くなっております。
老「これこれ小僧、そもそも武術は、十八般と申すくらいで、それをことごとく会得することは容易なことでない、さりながら、その中の一つなりとも、ずんと上達いたさば、他のものは学ばずして自ら達するものじゃ、一芸に秀ずるものは万能に通ずとは、ここのことじゃ……よいか、とりわけ剣術と申すものは、己れの心を静め、変化を考え、人に打ち込まれぬよう心掛けるが肝心、つまりは身を守るに適するものじゃ、小僧わかるか」
佐「はい、わかるような気がいたします」
老「のう、武という字を見ればわかる通り、戈を止むとある、それ抜くぞっ覚悟と、せめると見せて相手の機先を制し、斬らずに戈をさやにおさめて身を守る、これが真の武術と申すものじゃ」
佐「はい、相分かりました」
老「武術修行に師弟の差はない、わしを師と思ってかかるなよ、木と思え、わしのどこぞに透きがあったら、存分に打ってまいれ、さあ打てるか」
佐助木刀を取るより早く、身構えて、じっと老人の透きを見ておりましたが、いかなる透きを

見出したか、
佐「しからばごめんっ」
やにわに、老人目がけて打ち込んだ、すると老人の姿はかき消えております。佐助があっけにとられていると後ろの方で「わはあはははは」と声がするので振り返って見ると老人がニヤニヤ笑って立っている。
老「小僧、わしは木ではないぞ、動くからな、さあもう一度まいれっ」
佐「えいやっ」とかけ声するどく打ち込みましたが、またも老人の姿は見えません、また後ろかと振り返ったとたん、身を軽々とさし上げられたかと思うと「えいっ」気合いもろとも二間ほど横に投げつけられた。
老「小僧、油断があるからじゃ、なぜ足元に気をつけぬ、人の透きが見えても自分の透きを防ぐすべを知らねばなんにもならぬ」
佐「はい、以後気をつけます」
老「今日はこれでよい、毎日毎日怠らずに、ここへまいれ、よいか忘れてはならぬぞ」
と、いったかと思うと、老人の姿はかき消すごとく消えてしまいました。
もとより、けいこ熱心な佐助、老人にいわれた通り、毎日この広場に来て、老人から荒いけいこをしてもらいますから、めきめき腕は上達いたします。しまいには熱心さ余って、家へ帰るのももどかしいくらい、そこで祠のあるのを幸い、ひとつ、ここに寝泊まりして、お師匠様の来ない間は自分で独りげいこをしようと考えたから、五六日分の握り飯を作り、一枚の布団をたずさえて祠に泊まるという熱心さ。

ある夜のこと、昼間のけいこの疲れでぐっすり寝込んでいると、

○「こらこら、佐助、起きろ起きろ」

と、わが名を呼ばれて、びっくり目を開けると、老人がまくら元に立って、今にも自分の首に刃(やいば)を下ろそうとしている。驚いた佐助、

佐「これはこれはお師匠様」

老「そのような油断があってどうする、お前の首は胴についてはおらぬぞ」

佐「はい、面目ございませぬ、昼間のけいこでつい前後も知らず寝込みました」

老「黙れ、およそ武術には油断があってはならぬと申したのを忘れたか、暗夜のつぶてと申すことがある、いつなんどき敵が襲わぬとも限らぬぞ、今夜は許してつかわす、以後は気をつけろ」

といい残してどこともなく立ち去ってしまいました。さすがの佐助も、このように夜もおちおち休まれない程のやかましいけいこ、気を引き締めてはいるつもりですが、なんといってもまだ十一歳の年少者。

その明くる晩、今夜こそはと力んでおりましたが、

佐「ああ眠い眠い、けいこをするのはいいが、寝ている間も休むことなくけいこをするのはつらい、もうけいこなど……」

と思いましたが、「いやそうでない。そんな考えを起こすようでは偉い大将にはなれない」と思い返して、力み返るのですが、いつしかとろとろとなる。すると、突然腰のあたりをピシリッと打たれて、われに返る。

老「こら、わしの入って来たのが分からず、腰を打たれてはじめて驚くやつがあるか、そんなことで武術に秀でることはできぬぞ、ばかめっ、今後気をつけぬと、ますます痛い目に会わすぞ」

小言をいったかと思うと、そのまま姿は消えてしまう。

強情我慢の佐助の体も、綿のごとく疲れ果ててきましたが、

佐「今夜こそは、逆にお師匠様を驚かせよう」

考えついたのは、暗がりを幸い、布団を巻いて、寝ていると見せ、自分は隅に立ち、目を鏡のごとく光らせながら木刀を構えて待っている。すると、草木も眠る丑満刻、音もなく、きつね格子が開いて、老人が入って来た。しばらく床の方を見ていたが、老人床には目もくれず、ずかずかと自分の立っている方へ近寄り、

老「そんな所に隠れていて、このわしに分からぬと思うのか、心眼には闇も昼もない、わしは前後左右どこでも見ることができるのじゃ、きさまにはまだ後ろは見えまい、いかにも不自由なものじゃ、四方八方に目が配れるようにならなければ偉い大将にはなれぬぞ、気をつけろっ」

しかりつけて立ち去ってしまった。

佐助あとから考えた。

佐「なんて無理なことをいうのだろう、ひらめやかれいじゃあるまいし、後ろに目があってたまるものか、人間で後ろに目があったら化け物だ、死ななきゃあ化け物にはなれない、まだ命を捨てるのは惜しいや……」

このようにして、毎日毎晩、まさに二十四時間勤務といった激しいけいこ、今どきなら労働基

準法で取り締まられるところでございますが、そのころはその点はまことに具合がよかった。それだけ人間もしっかりしていたようで……いえ今日だって人間はしっかりしておいでになるのですが少々わがままが過ぎるんで……。

一心は岩をも通すのたとえ、佐助もここに三年四年五年と修行をつんだかいあって、腕前はめきめき上達、このころでは、暗夜でも、七八間先の物も見えるようにもなり、忍びよる足音も聞こえるようになりました。

老「佐助、その方の熱心、腕前もあっぱれ上達いたした、ほめてつかわすぞ」

師匠にほめられること再三ならず、佐助もこのころではすっかり自信もつき、師匠にもなかなか劣らぬ腕前になり、たゆまずけいこに励んでおりました。

ある朝、佐助は例の通り広場にいったが、いつも自分より早く来ているお師匠様の姿が見えない。

佐「はてな、今日はお師匠様の休講かな」

と懐よりメモを取り出して調べたら、そんなことは書いてない。

待つことしばし、東の空に一点の雲が現れたかと見る間に、白髪白髯のお師匠様がその雲に乗っておいでになった。

老「いや、今日はわしの方が遅かったな、その方も足かけ六年の間、よくぞ辛抱してけいこに励んだ。もうこれ以上教えつかわすことはない。今朝はその方に対し、わが秘術の極意一巻授けてつかわす。有り難くちょうだいに及べ」

恭しく一つの巻き物を取り出して言葉を改めた老人、

老「これ佐助」

佐「はい」

老「これをその方につかわすから、生涯肌身につけて、よく身の行いを慎めよ、戦場に臨んでも、また英雄豪傑に出合うても、この中にしたためあることを守っておれば、決して遅れを取ることはあるまい」

と懇ろに教訓を与えて、その巻き物を手渡しいたした。佐助は天にも昇る喜びで、これをおし頂き、

佐「ははっ……貴重なる御巻き物をお授け下さるのみならず、懇々のご教訓、決して忘却つかまつりませぬ……ついては、なにとぞご姓名を承りたく存じます」

平身低頭して伺いを立てると、老人軽くうなずき、

老「なる程、今までわが名を明かさざりし故その不審ももっとも……今こそ名乗って聞かす。われこそは、摂州花隈の城主戸沢白雲斎といえるもの、家督はせがれ山城守に譲り、諸国漫遊の折から、当信州鳥居峠の山中にて、その方の身軽なる働きを見て、武術修行に熱心なる心にめでて武術を授けその上、わが家に伝わる忍術の秘伝極意を授けたのじゃ、もはやその方も武術に加えて、忍術の妙技を会得いたしたればあっぱれなるものである、その方の腕なら、水遁、木遁、土遁、火遁、金遁、やき遁その他とんとん、あらゆる術を行うことができる。されどこれを悪事に用いなば、その身を滅ぼすもといとなる、されば、この上ともせいぜい身の行いを慎み、よき主を選んで仕官いたせ、必ず天下にその名を現すことができるぞ」

佐「ははっ、これは有り難きお言葉、長い年月、日夜のご教導下されしご恩は、海よりも深く

山よりも高く、お礼は言葉につくされませぬ。この後は仰せに従い、ますます身の行いを慎み、決して師匠の御名を汚すようなことはいたしませぬ。必ず必ず天下に名を上げるよう心がけまする」

と喜び余って頭を下げて、ひょいと頭を上げて見ると、こはそもいかに、師匠の姿はかき消されております。はっと思って、

佐「お師匠さま、いずこへいかれました」

その声に応ずるかのように、どこにいるのか姿は見えませんが、

老「佐助決して驚くな、もはやこれが今生の別れである、これをわしの形見としてその方につかわすぞ」

と、パタリ前に落ちた鉄扇、取り上げて見ると、十三本骨のりっぱな鉄扇、親骨は鉄の象眼で、

振り下ろす剣の下は深見川
踏みこんでこそ浮かむ瀬もあり

と刻んである。これなん武術の奥義。

佐「お師匠さま、有り難きお形見として、肌身離さず所持つかまつります……それにしても今一度お顔を……」

と、見上げる。

老「こりゃ佐助、せっかく六ヵ年辛苦して習い覚えし忍術も、身の行い悪しければ術は破れて役に立たぬぞ、この儀はくれぐれも戒めておく……もはやさらばである」

といったかと思うと、パッと立った白雲に乗った白雲斎ははるか東の方をさして立ち去った。

さすがの佐助も、六年間の粒々辛苦のかいあって、今師からの秘術極意と鉄扇を授けられ、白雲斎との別れを惜しんで東の空を伏し拝んでおりましたが、かくてはならじと、夜具を引っ担ぎ、わが家をさして帰りました。

がまの平兵衛「ギューッ」

今日は八月の十四日、鳥居峠の八幡宮の例祭でございます、年に一度のお祭りというので、近郷近在の人出は物すごいばかり。

小「お父さま、おはようございます。今日はたいへんよいお天気で……このぶんでは八幡さまの人出もたいへんでございましょう」

佐太「おお、小夜か、今日はまた格別美しいのう」

小「あれ、お父さままでがそんなことおっしゃって、おからかいになっちゃあいや……」

と顔あからめております。お小夜ももう十九歳、生来の美人のところへ、今日は八幡様の祭りというのでお化粧を施していますから、いっそう美しい、父までが見とれるくらい。

佐太「小夜、これから祭礼にまいるか」

小「はい、これからいってまいります」

佐太「だれとまいるかな、祭りは人出が多いからよく気をつけねばならぬぞ、佐助を連れてまいれ」

小「でも佐助は、すぐいたずらをいたしますから、お母さまとときとまいります」

佐太「そうか、ではよくよく気をつけてまいれよ」

小「はい、ではいってまいります」

母の小波と下女のときを連れて八幡宮の境内に来て見ると、そのにぎやかなこと、見せ物も物売りも、ここをせんどとにぎわしております。

○「さあさあ、いらっはいいらっはい、名代の八幡だんごはこちらでございます」

△「こっちは、猿芝居だ、お猿の芸当、お猿の芸当、ええ、お猿の芸当をご覧なさい……お代は見ての帰りだ、見ての帰りだ」

人の往来だけでもたいへんなところへもってきて、物売りの声、見せ物の客を呼ぶ声、茶店の客を引く声に引き込まれた客が立ち止まるから、たいへんな雑踏でございます。

すると、たつみと軒燈のかかった茶店の赤いもうせんをしいた腰掛けに、三人ばかりの子分をつれたがまの平兵衛、酒さかなをとりよせて、ぐびりぐびり酒を飲んでは、道行く人をちらりちらりと見ている。軒先にしつらえた茶店ですから、前を通る人にも中がよく見える。ならず者の平兵衛がいるなと思うと、なまじ近寄ってなにかいいがかりをつけられるのがいやだから、村の人たちは、これを避けて通っております。

そのところへ、お小夜が母とときとでやって来た。なにさま鳥居小町とうわさの高いお小夜、殊に今日は美しく化粧をしておりますから、目につきます。がまの平兵衛、それを見逃す訳がご

ざいません。

平「おい、三次、てめえ、あの鷲塚の娘をここへしょっぴいてこい」

三「でも親分、あの娘をどうなさるんで」

平「知れたことよ、酌をさせるんだ」

三「だって、あれは郷士の娘でござんすから、うっかりしたこたあできませんぜ」

平「なにいってやがんでえ、べら棒め、郷士だろうが、庄屋だろうが、そんなこたあどうでもいいや、とって食おうてんじゃねえや、気に入ったから酌をさせるんだ」

三「親分ときちゃあ、目が早えからな、飲むといつでもこれだから……またあの手ですかい、かわいそうだなあ」

平「なんだと……」

三「いえ、こっちのことで」

平「四の五のいわねえで、早くいってこい」

いわれて、三次は連れの子分と三人、ずかずかとやって来たお小夜たちの前、

三「鷲塚のお嬢さま、今日はよいお天気で、お母さまとご一緒にご参詣でござんすかい」

見知らぬ男に言葉をかけられ、ぎくりいたしましたが、

小「はい、どなたかは存じませぬが、なにかご用でも……」

三「へっへへ、なに、別に用てえほどのこたあねえんでござんすが、親分がぜひお嬢さまをお連れ申せ、とこう申しやすんで、相すんませんがちょっとそこまでお顔を拝借いたしたいんで……」

小「えっ、わたしの顔を……斬ってお持ちになるのでございますか」

三「とんでもねえ、ご冗談おっしゃって……なあにお体ともそっくりおいで願いてえんでござんす……さあどうぞ」

と、いいながら手を引こうとする。これを見た母の小波、

波「どなた様かは存じませぬが、娘にご用がござりますなら、わたしが承りましょう。娘はまだ嫁入り前の大切な体、めったなところへは独りではやれませぬ……」

三「へい、ごもっともで……わっしもそう思うんでござんすが、なんしろ親分が酌を……いえ、ぜひお嬢さまに、一杯さし上げよう……」

波「なんとおっしゃります、お名前も明かされず、娘に酌をさせよとはあんまり無体なお言葉、……ふつつかながらわたしも郷士の妻、そのようなところへ娘をさし出すことはなりませぬ、して親分親分とおっしゃるが、いったいどなたで……」

三「そいつあ悪かった、親分というなあ外でもござんせぬ、がまの平兵衛親分のことでござんす、へっへっへへへへ」

波「えっ、平兵衛親分……それを聞いてはいっそう娘はやれませぬ……お小夜来や」

立ち去ろうといたしましたので、

三「おっとっと……やいやい、低く出りゃあ大きな面しやがって、なにが郷士の妻だ、郷士をかさに着て、それがどうしたってんだよ」

波「いいえ、なにも郷士を鼻にかけて申し上げてはおりませぬ、嫁入り前の娘をそのような酒席にはやれませぬゆえ、お断りいたしたまでのこと」

三「やかましいやいっ、平兵衛親分といやあこの辺で一番の親分だ、親分が頼むといやあ、てめえの方からのしをつけて娘をさし出すのが本道だ、それをなんだと、お断りいたします……ふふん聞いてあきれらあ……やろうども、かまわねえ、娘をしょっぴいてけ……これ、じたばたするなっ」

あろうことか、お小夜の手首をつかんで、三人で引っ張っていこうとするから、母の小波と下女のときがやるまいと必死に、

両人「なにをなさいますご無体な……」

とお小夜のそでをつかんで放さばこそ、

三「邪魔立てすりゃあこうだぞっ」

いきなり、腰のあたりをけ上げたからたまらない、小波とときはその場にドウと倒れる、あれよあれよという間に、お小夜は鷲に捕らわれた小鳥のよう、身をもがくのもかまわず連れ去ってしまった。

この有り様を見た参詣人たち、後のたたりを恐れてどうすることもできず、

○「おい、どうです、ひどいことをするやつもあるものだ」

×「奥様もお女中もつき飛ばされるし、お気の毒に……」

と、いっておりますが、相手が悪いから、だれ一人として助けようとする者がございません。

三「親分連れて来やしたぜ、どうも世話のやける女郎でしてね、骨が折れやした」

平「ご苦労ご苦労……、おお、きれいなお嬢さんだ、その髪の乱れたところやすその散ったのは、色気があってまた格別だ、おい三次よだれをたらすな」

平兵衛、お小夜の取りみだした姿を、やに下がってつくづくながめております。

平「おい、お嬢さん、すまねえが、一つ酌をしてくんな、どうだいその白魚のような指、白い肌の二の腕をちらっと見せられちゃあ、おらあもうたまらねえ」

小「どなたさまかと思えば、平兵衛さま、まあ……郷士の娘をかどわかし、酌をしろとはあんまりご無体なされ方、……わたしはいやでございます」

腹にすえかねて、お小夜はきっとねめつける。

平「それそれその目が土台いけねえ、なんともいえねえ色っぽさだ、どうだいおれのいうことを聞いちゃあ、ええ、かわいがってやるぜ、もうちょっとこっちへ寄んな……」

と、引き寄せようとすると、お小夜は死にもの狂いに、はねつけざま、白い二の腕もあらわに、平兵衛の横顔をピシャリッと打った。

平「ややっ、小娘だと思って穏やかにしていりゃあ、つけ上がりやがって、よくもおれのしゃっ面をぶちゃがったな、……だがいい気持ちだったぜ、あの柔らかい手でよ、こうピシャッときやがった、もっとぶってくれ、……こうなりゃあ、どうでも酌をしてもらわにゃあおかれねえ」

むりやり手を取って、ちょうしを握らせようとする。

平「え、おい、おらあなにもおまはんを取って食おうの、どうのてんじゃねえよ、おまはんだって、もうりっぱな女だ、日陰の豆だって、時がくりゃあ、ひとりでに割れるんだぜ、たまには男の肌に触れても悪くはあるめえ、もういいかげんに我を折って、気持ちよく酌をしてくんな」

小「いやでございます。ではごめん下さいませ」

と、立ちかけようとするのを、後ろからえり首をつかんだ平兵衛が、手荒くお小夜を手元に引

き寄せておし倒し、あわや手込めに及ばんとしましたから、

小「あれーっ、だれか……」

と、叫んだとたん、外の方でガヤガヤザワザワ人声がはげしくなった。

こちらは、八幡宮の境内、押し合いへし合う人混みの中を、ばらばらと走って来た一人の男、パッと雑踏の中に飛び上がったかと思うと、人の頭といわず、肩先といわず、ピョンピョンと跳びながら、茶店の方へ――。

×「やいやいおれの頭の上を土足にかけやがって……」

○「あっ、おれの肩先を渡りやがった」

△「なんだなんだ、人が跳ねてくるぜ、あっ痛えっ、頭をふんづけて、人間が飛んでいった」

見れば、姉の危難を聞きつけて、烈火のごとく怒って駆けつけた猿飛佐助、形相物すごく、身も軽々と人波の上を跳んでいくのを見て、

×「ありゃありや、あれは鷲塚の佐助さまだ、平兵衛とおっぱじまるぞ」

△「平兵衛となにがおっぱじまるだ」×「けんかよ」

△「なんでけんかする」×「お小夜さまをさっきかどわかしたからよ」△「そりゃあたいへんだ、おれもいくべえ」

走ろうとするが、人にぶつかって動けない。

□「えれえものだね、佐助さまは、人の上を歩くんだからなあ、そんでもあんまり痛くねえから、不思議なもんだ、あんまさかかるより痛かねえ」

×「そんなこと感心するやつがあるか、あれが、それ忍術ちゅうもんだ」

○「そうけえ、忍術ちゅうもんは、姿が見えねえものと思ったら、姿の見える忍術もあるのけえ、おらあはあ、おったまげただ」

これなん、佐助が、自らあみ出した、頭上早渡りの術。

村人たちの、「あれよあれよ」と驚きさわぐのをしり目にかけて、当の佐助は、人波の上をとっとっとっと一散走り、茶屋のたつみの前へ来ると、パッと飛び下り、いきなり平兵衛のところへ走り寄ったのでございます。

佐「やいやい平兵衛、性懲りもなく、またしてもきさまは姉上に対して無体なことをいたすか、大事な姉上を手込めにいたそうとはけしからぬやつ、万人のため、こうしてくれるっ」

いきなり平兵衛の胴体を引っつかみ、目よりも高くさし上げ、ばたばたするのを構わばこそ、茶店の前にある大きな石目がけて投げつけたから、なんじょうたまりましょう、「ギューッ」といったがこの世の別れのあいさつ、あっけなくその所に血へどを吐いて息絶えました。

これを見た子分の三次、

三「親分のかたきっ」

と、呼ばわり、佐助のぞんで三人が刀を引っこ抜いて大上段からもろに斬り下ろす。佐助の体はあわや真っ二つかと思いきや、佐助の姿はどこへやら、消えて見当たらない、三次きょろきょろあたりを見回していると、「えいっ」という声がしたかと思うと、横っ腹に当て身をくらったから「うーむ」といって倒れる。

他の二人、思わぬこの様子を見て、おじけがついたか、浮き腰になってぼんやりしていると、これはしたり、二人のちょん髷がポロリッと前に落ちた。

○「おいおい、おまえのちょん髷が無えぜ」
×「てめえのも無えぞ」
○「ギョッ、道理でちょん髷が二つ落ちてると思った」
つまらないところに感心している。すると、
「あっははははは」
どこかで大きな笑い声がするが姿は見えません。二人の子分いよいよ薄気味悪くなって、こそこそと逃げようとすると、パッと姿を現した佐助、二人の前に立って、
佐「こりゃあっ、今後も弱い者いじめをすると、このような目にあわせるぞ」
二人「へえ、恐れ入りやした」
佐「今日はこれで許してやるが、二度と再び弱い者をいじめるなよ」
と、二人を立ち去らせますと、ワーッという喚声が上がりました。
佐助は、白雲斎から、足かけ六年の間、仕込まれた忍術と武術、白雲斎に別れてからというもの、毎日、山に入ってはたゆまず独りげいこをいたしておりましたが、今日も今日とて、山へいこうとして、八幡宮に参詣に立ちよりますと、姉が平兵衛のために引きさらわれたと聞いたので、実験するのはこのときなりとテストしたが、相手が相手ですから、手もなく第一回のテストはみごと大成功、大いに自信を得ましたので、その後もいっそう独りげいこに励むことに相成りました。
この思わぬ出来事で喜んだのは、いずこも同じ野次馬というしっぽのない馬、芝居ならぬ本物の芝居、それも見るがはじめての忍術の実演、しかもただで見られるのですからこんな安いもの

はない。参詣はそっちのけにして、たつみの前の木という木は鈴なりの人、人の山また山で大変なにぎわい。

佐「お母上さまも、お姉上さまも、おけががなくてなにより、私がまいりましたから、もうご安心下さいまし」

波「おお、佐助、よく来てくれました。助かりましたぞえ」

小「お父上さまが、おまえを連れてまいれとおっしゃったのに……でもよかった、佐助、ありがとうよ」

と、礼を述べると、

佐「不届き極まる平兵衛、いつかはこらしめようと思っておりましたので……」

いいながら二人を連れてその場を立とうとする。この有り様を見た人たち、

○「鷲塚の佐助さまは、大したもんだ、人間じゃない、火の玉だ、お陰様で悪い者がいなくなりました」

×「今の若さで、あのような腕前、末はどんなになりなさるか、こんな山の中にいるのは惜しいもんだ」

と、ほめそやしていると、早くもこの事件が代官所に聞こえたから、そのままに捨ててはおけません。直ちに係役人がまいりまして、取り調べますと、佐助にはまったく罪とががなく、非はことごとく平兵衛にあることが分かりました。ふだんから人のきらわれ者ですから、お構いなし、かえって佐助の働きを賞してこのことは落着いたしましたので、佐助は、母と姉をつれて改めて、神前に参詣してわが家へ立ち帰りました。

それからというもの佐助の評判は、いよいよ高くなってまいります。この話を聞いた父の佐太夫の鼻は、にょろにょろと伸びて、あたりをぐるりと見回してニヤニヤと笑ったと申しますが、さもあらんかと存じます。

佐助、六勇士を手玉にとる

するとある日のこと、村の名主の幸兵衛、村内を軒別にふれ回って、

名「明日は、ご領主さまの若殿与三郎様が山狩りをお催しのため、この鳥居峠へお越しになるそうじゃから、万一そこつがあってはならぬから、明日一日は、遠慮して、村の者は峠に入らぬよう」

と、いって申し伝えて歩きました。

これを聞いた佐助、

佐「なにっ、真田の若様が山狩りをなさると。これはおもしろい、名主がなんといってもかまわないから、よーし一つ見物して、もしもおれの友達を討ち取るようなことがあったら、邪魔してやろう」

豪胆な佐助は妙なことを考え出しました。

この若殿与三郎幸村という方は、お年わずかに十六歳ですが、知仁勇を兼ね備えた麒麟児とい

われたほどの器量人。山狩りの当日は、お気に入りの家来、三好清海入道、同じく伊三入道、望月六郎、筧十蔵、海野六郎、穴山岩千代の六人を左右に従え、ご家来二百人ばかりを勢子としてつれ、威風堂々、馬上豊かに鳥居峠さして乗り込んでまいりました。

若君は、峠の八合目ほどのよき場所へ陣取り、だんだんと勢子の追い出す獲物を家来の面々とともに、おもしろそうに遠矢にかけて、射倒し射倒し、互いに功名てがらを争っております。

すると、若君の立っている頭上に生い茂っている松の枝が、風もないのに、ガサガサゴソゴソと怪しい音をたてたので、おそばに控えていた海野六郎、ひょいと顔を上げ、音のした方を見て驚いた。

海「あれっ、若様あれをご覧遊ばせ、あんなところに大きな猿めが……」

幸「なにっ、猿がおると申すか、それは珍しい、どれどこに……」

海「あれ、あそこでございます」

と、六郎の指さす方を見ると、子牛ほどもあろうかという大きな猿が、らんらんたる目を怒らせて、かっと幸村主従の方をにらんでおります。

幸「おお、よき獲物なるぞ、六郎、予が腕前を見よ」

と、いうより早く、弓を満月のごとくキリキリッと引き絞り、十分ねらいを定めて、ヤッと一声ヒョーッと切って放した。みごと大猿は射貫かれたと思いきや、南無三、くだんの大猿、右手をさし出して、飛び来る矢を引っつかみ、若君をながめてキイキイと怪しげな声を発した。そのさまは、まるであざけるようだから、若君大いに怒り、

幸「ややっ、こいつめ、畜生の分際をもって、わが射放せし矢を受け止めるとはこしゃく千万

……いで今一本受けて見よ」

とばかり、二の矢をつがえて、勢いするどくヒョーッと射放ったが、またしても同じように今度は左手でちょうと受け止め、キイキイ怪しき声を発している。二本までもやり損じて若君いよいよ怒り心頭に発し、はったとばかりにらみつければ、こはいかに、大猿体をすくめたと見えたが、キイキイと悲鳴をあげて枝の上からズッテンドウと転げ落ちた。

これを見た六勇士の一人、三好清海入道、ずかずかと進みいで、

清「やい、武術の心得あるおれたちでさえ受け止められぬ弓矢を、畜生の分際にて受け止めるとはけしからぬやつ、いよいよ若君さまのご威光に恐れをなしたか、ざまあ見ろ、……若君さま、かような怪しき猿は、打ち殺して猿汁か、猿テキにいたすが、一興かと存じます、これだけボリュームがあれば、たらふく食べられます」

清海入道にかかっては猿もたまらない、いきなり、たちすくむ大猿の首筋を引っつかみ、さざえのような大きなこぶしを固め、ハアハア息を吹っかけ、しめりをくれて振り上げ、今や殴りすえようとした一刹那、どこから降って来たか、佐助が忽然としてその所へ現れ、清海入道の振り上げたこぶしの利き腕ぐっと引っつかみ、「やっ」とかけ声もろとも、さしも大兵肥満の大男を目よりも高くさし上げ、

佐「これやい、坊主、大坊主、おれの親友を猿汁にするといったな、おれはきさまを坊主汁にしてやる」

と、傍らの大石目がけて投げつけた。

真田六勇士のうちでも、清海入道といえば、名だたる豪傑、力五十人力と豪語するほどのした

たか者です、なみのものなら、佐助の力で投げられたら、脳天はもとより、体は粉々に打ち砕かれるところですが、そこはさすがに清海入道、武術の心得がありますから、くるっと一回転、もんどり打ってすっくと立ち上がり、目をみ張って佐助をかっとねめつけた。

清「やい、天から降ったか、地からわいたか、己れにっくきやつ、その名も天下に鳴り響く清海入道を取って投げるとはちょこざいなり、勘弁ならぬ、覚悟しろっ」

つるつる頭に湯気を立てて、佐助に躍りかかって来た。さはさせじと佐助、右に左にフワーリフワーリと巧みに身をかわす、その身の軽さ、すばしこさ、さすがの清海入道、うでだこのようになって立ち回る。

清「おっ、こいつ、なかなかすばしっこいやつ、……なにくそっ……あんれ姿が消えた」

と、あたりをきょろきょろ見回していると、

佐「あははははは、ここだここだ、坊主ここだ早く来い早く来い、こっちの水はあまいぞ」

清海入道、ポンポン手の鳴る方をひょいと見ると、佐助は、五六間離れた大きな松の枝の上に腰掛けている。——あいつ天狗の回し者かな——と思ったが、そんなことでひるむ清海入道じゃない。

清「うーむ、よーし、こうしてくれる」

ばらばらとくだんの松の根方に走りより、湯気立つ坊主頭に豆絞りの手ぬぐいをはち巻きなし、双肌ぬいだるその上に、赤いたすきがけ、てもはでやかな身仕度に及び、

清「やあや、そこなる小僧、ちょこざいなり、こしゃくなり、われこそは真田家にその人ありと知られたる清海入道なり、いでおいらの腕の力を見せてくれん」

と、割れ鐘のような大音声。なんのことはない、たこ入道が風呂から上がって、戦場に臨んで名乗りをあげているようだ。

たちまちもろ手を松の幹にかけ、「やっ、うーむっ」と金剛力かけて力み返る。大言吐くだけあって恐ろしい力もあるもので、差し渡し三尺もあろうという松の大木が、ゆっさゆっさ揺れだした。

佐助はと見れば、揺りかごに乗ったつもりで、ひじをひざの上に置き、手を頤にあてがっていい心持ちそうにゆられている。やがてメリッ、ミシッと音を立てはじめるや、猿のごとくパッと次の松の木に飛び移り、

佐「坊主、こっちだこっちだ、もうその木にはいないよ」

あざけるようなその言葉、失敗したりと清海入道、

清「うーむいまいましいやつだ、こうなりゃあ、もう生かしてはおけぬ」

と、またしてもその松の木を、ウンスウンスと揺すぶる。大分揺すったと思うころ、ひょいと上を見ると、佐助はまた隣の松の木に飛び移っている。三度、四度とこんなことを繰り返されたから清海入道ますますやっきになって怒るが、いかに清海入道でも力には限りがある。頭から湯気をぽっぽっと発し、顔は真っ赤になって、息はフーフー、汗は滝のよう。

清「ああ、ああ、苦しい……おい弟、きさまなにをしている。兄貴のこの奮闘をだまってながめているやつがあるか……海野、筧、あ、穴山……きさまたちも友達がいのないやつらだ、なんとかしろ」

と、とうとう音をあげた。

すると、今まで佐助の神業にも等しい身軽な振る舞いをじーっと見守り、あの男なかなか世にもまれなる者よと感心していた若君、もうこの辺でよかろうと考えたから、

幸「あいや、清海入道、そちの立腹もっともながら、もうよい、もうよい、これ清海入道静まれ、そこな男、子細をたずねたい、苦しゅうない、ここへまいれ」

いわれて、佐助は十間ばかりある木の枝からいとも身軽にひらり飛び下りて、早くも若君のご面前へ。

じーっと若君のご面体を拝見するに、人品骨柄の凡ならざるを見て、ははあ、この方が上田城主真田様の若君か、どうしてどうしてただの人間ではない、お師匠さまの仰せられたよき主というのはこの方だ、主を持つならこういう方に仕えたいものだ――と心の中に思って、自ら心に尊敬の念が起こってきて、若君からお言葉のかかるのを待ち受けている。

幸「やよ、その方は、いずこの者でなんと申すぞ」

佐「はい、このふもとに住まいいたします郷士鷲塚佐太夫の一子佐助と申します」

幸「うーむ、どことなく人品備わると見えたが、さては郷士のせがれであったか、してその方の身軽なる術は自ら修得いたしたるか、またはいずれかの師匠につきたるか」

佐「ははっ、実はかようしかじか、師匠戸沢白雲斎先生より譲り受けたる術の徳でございます」

と一部始終を申し述べた。

幸「ふむ、しからばわが国忍術の大名人と呼ばるる、戸沢白雲斎先生より習い受けし妙術なるか、なるほど比類まれなる振る舞い……さもあろう。してこれなる猿の腕前も、なかなかもってあっぱれなるもの、定めしその方が仕込んだものであろうな」

佐「仰せの通りわたしが幼少のころよりの遊び仲間、毎日遊び戯れおる間に、自然に物を受けとめる術を覚え、今では弓矢にては、しとめることはできませぬ」

幸「うーむ、畜生とは申せ、鍛練の功は恐ろしきものじゃ」

と、しきりに感じ入っておいでになる。ややあって、

幸「これ佐助と申したな、そちは予の家来になる気はないか」

いわれて、佐助、今か今かと心の内で待っていた言葉ですから、胸をときめかし、

佐「ははっ、有り難きお言葉、お師匠さまのお言葉にもありましたること、願ってもなきお言葉、お家来にお加え下さればこの上なきしあわせに存じます」

幸「先刻よりの振る舞いと申し、今の言葉と申し、その方は、必ず、あっぱれものの役に立つべき人物である、ここにおる六人の者はいずれも股肱の臣、その方を加えて七人となし、予の七勇士といたすであろう、やよ、一同の者、この後これなる佐助を兄弟同様に思いて、いたわり取らせよ」

一同の家来に披露に及ばれると、三好清海入道先刻の遺恨があるから、

清「こらっ、佐助、この後はわしたちを兄貴と心得て、はいはいとよくいうことをきくのだぞ、万一われわれの言葉に背くと承知せんぞ、忘れるなっ」

もはや兄貴風を吹かせている。

佐「はいはい、年の上では坊主、いや清海殿のおっしゃる通り兄貴と心得ますが、腕前はこっちが兄貴と心得て下さい」

清「こいつめが、こしゃくなことをぬかす、しからば、ここで改めて腕比べをいたそうか」

望「そうだそうだ、新参者に兄貴呼ばわりはできぬわ、……若様いかがでございましょう、われわれ六人とこの佐助と一つ腕比べいたしては……」

幸「これはまたおもしろい、だがひきょうな振る舞いはならぬぞ」

望「心得ましてございます」

こうなると山狩りなどはそっちのけだ。六人の勇士はそれぞれ身仕度をして、第一番に飛び出したのは、清海入道の弟の伊三入道、兄に優るとも劣らぬ乱暴者、

伊「さあ佐助、おれが一番もんでやるから仕度しろ」

佐「仕度などいらぬ、どこからでもかかって来い、小坊主さあ来い」

伊「なにをっ、小坊主だと」

佐「大坊主の弟だから小坊主だ、そんなことはどうでもいい、さあ早くかかって来い」

かしの棒切れを無造作にひっさげて立っている。伊三入道の方はぷんぷん怒って、はじめからけんか腰だ。

伊三入道が、気負って打ち込んでくるやつを、佐助は心得たりとハッシと受けとめ、上段下段と秘術をつくし渡り合っておりましたが、白雲斎にみっちり仕込まれた佐助の目から見ると、腕前ははるかに劣っているから、打ちすえるのは訳はないが、今ここで勝ってもねたまれるだけで万事都合が悪い、ここは驚かせておけばよいと思ったから、伊三入道が今しも気負い込んで激しく打ち込んでくるやつをパッとはねっ返しておいて、「えいっ」と一声、大地をたたくと見えたが、こはそもいかに、佐助の姿はどこかへか消え去った。

伊三入道、あたりをきょろきょろ見回していたがひょいと向こうを見ると、高さ三丈もあろう

かと思うような大きな岩の上にあぐらをかいて、ニヤニヤ笑っている。

伊三入道びっくりしていると、若君それを見て、

幸「ははははは、伊三入道、もうよい、もうよい、下がれ」

伊「いえ、まだ勝負がつきませぬ……どうあっても、あいつをたたかねば気がすみませぬ」

幸「あはっははははは、きさまには佐助ほどの妙術はあるまい、まあ勝負なしの引き分けといたせ」

つづいて、清海入道、重ね重ねの敗北、殊に弟のあだ、今度こそはと出たが、これも以前のごとく佐助の妙術にあってきりきり舞いをさせられ、ぷんぷん怒って引きさがる。穴山、海野、望月、筧と順々に打ち向かったが、二三合すると佐助は木の上、岩角へピョイピョイ飛び上がり飛び下がりいたしますから、いくら勇士でもどうすることもできません。いずれも怒るやら、あきれるやら、さんざんな目にあわされてしまった。

若君にはことごとく感心され、

幸「思ったよりもあっぱれなる腕前、戸沢白雲斎が仕込んだ程あって、末頼もしき若者である。今日よりその方は鷲塚の姓を改め、猿のごとく飛び回る妙を得ておるゆえ、予の名前の一字をとり今日より猿飛佐助幸吉と名のれ」

若君与三郎幸村殿におかれては、至極満足の体で名のりまで下さった。

佐「はっ、有り難きしあわせに存じます」

とお礼申し上げる。

若君には今日の獲物中の一番は猿飛佐助幸吉を得たることであると大喜び、わざわざ父鷲塚佐

太夫をお召しになって、委細の話を遊ばした上、佐助を家来に申し受けたいと申し込むと、若君が賢明な君ということをよく承知している佐太夫、佐助のためになることですから、

佐太「有り難く承知つかまつります。しからば、ただ今よりお召し連れ下さりますよう、てまえの家督は姉の小夜に養子を迎えて跡目をつがせまする」

幸「早速の承知、予も満足に思うぞ」

佐太「これこれ佐助、今日よりおまえは若君を主人と仰ぎ、あっぱれ勇者となって名を上げよ」

佐「はい承知いたしました、ご教訓のほどは忘却いたしませぬ、きっと後世に名を残し、家名を興す所存でございます」

若君には、上田城へ帰城するや、父君昌幸公にこのことを申し上げると、昌幸公も殊の外の喜びで、

昌「ああさようか、それは得難き家来である。万卒は得易く、一将は得難し、天下にいずれは大乱が起こるだろう、有用の人物を召しつれたとあればこの上ない、目通り許す、召しつれよ」

そこで昌幸公も佐助を末頼もしき人物とおぼしめし、引き出物として、二尺八寸の三条堀川の住人国広の一刀を下しおかれました。このとき佐助、年十六歳でございます。

逆手を食った布団蒸し

さて幸村公は、猿飛をお召しかかえになってからというもの、殊の外のお気に入りで、なんでも猿飛猿飛で、猿飛でなければ夜も日もあけぬという有り様、そうなると、他の六勇士たちがおもしろくない、そろそろ不平をいい出し、なにかことがあったら猿飛をひとつこらしめてやろうと、よりより相談している。

ある日、六人が一室に集まって、話は猿飛のことに及んだ。

すると、中でも横紙破りの清海入道、

清「おいおいみんな、どうもしゃくにさわってたまらないなあ」

望「あははは、なんだ三好、なにをそんなにむきになって怒っているのだ」

清「そうじゃないか、あの佐助が来てから若君は、佐助佐助とおっしゃって、われわれはあたかもあって無きがごとき存在だ」

筧「うむ、まったくそうだな、おれも内々そうは思っているのだが、あいつはどうも化け物みたいな男で、暗闇でも目が見えるし、三丁四方で話している声が聞こえるという物騒なやつだから、うかつなことをすると、逆に計略の裏をかかれるからな」

海「あははは、きさまらは妬いているな、男らしくもない、見っともないからよせよせ、

おれは猿飛が来たお陰で大いに喜んでいるが……」

清「なにっ、喜んでいると……」

海「まあまあそう怒るな、このごろ若君のご用は、猿飛が一人で引き受けてやってくれるから、われわれのご用向きが少なくて楽になったからさ」

覚「おや、こいつ、妙なところに理屈をつけて、猿飛に加勢いたしおるわい」

伊「うむ、こいつけしからぬやつだ……そもそもわれわれの家は、先君幸隆公よりつらなる真田家譜代の家柄だ、しかるに不意に飛び込んで来た猿のような人間の下馬になるとは心外、なんぼあいつが忍術を心得ていても、やっぱり同じ人間だ、今のうちに思う存分やっつけて置くのがいい」

穴「そうそう、海野め、妙に猿の肩を持つから、猿飛征伐の血祭りに海野から先に……」

望「おお、やれやれ」

海「おいおい待て待て、そんな無茶なことはよせっ、そりゃおれだってあいつの下馬になるのはおもしろくはないさ、しかし、まごまごするとあべこべにやられるぞ」

清「なに、その辺にぬかりがあってなるものか、いくら猿飛でも、油断ということがあろう。だから今夜寝息をうかがって、あいつの部屋に忍び込み、六人がかりで、われわれ仲間の厳罰布団蒸しの刑に処し、がんじがらめにしてお廊下にほうり出して置くのだ」

伊「うむ、賛成賛成、布団蒸し……あっははは、それはゆかいゆかい」

覚「しかし、身軽いぬけ目のないやつだ、油断はならぬぞ」

清「おい覚、ふだんに似気ない弱音を吐くな、万事はこの清海入道の胸三寸にある、まあまあおれに任して置け」

六人の勇士は、別に悪気があってするのではありませんが、なにしろその当時は戦国時代で、することがとかく荒っぽい。殊にこれらの六人は真田家名代の荒小姓、主君とはいいながら幸村公とは兄弟同様にしている間柄だから、暇さえあれば、立ち相撲、座り相撲、腕押し、あるいは頭の殴り合いなどをして、すこぶる仲むつまじいのですが、一人がこういい出すと、いやが応でも賛成するのが定法、少し気に入らぬことがあると、袋だたき、布団蒸しなどという手荒なことをして喜んでいるのですから、手がつけられない。

もっとも、むかしの話ですが、学校の寮などでストームとかなんとかいって無邪気な騒ぎをしたものですが、これに類するものでございましょう。

若いうちには、女の尻を追っかけまわすよりもこのくらいの元気がある方がよろしいようでございます。

六勇士の中でも清海入道は、竹を割ったようなさっぱりした気性なのですが、気短で、怒りっぽく横紙破りのところがあるから、こういうことには先棒をかつぎます。

この男、坊主とか入道というと、いやに年寄りに聞こえますが、決してそうではない。この兄弟は幼少のころ、過って人を殺め、いったん仏門に入ったのですが、安房守昌幸殿に見込まれ、幸村殿の近侍小姓になったという経歴の持ち主、いったん仏門に入ったものが、小姓になったというので、自分たちだけが普通の人間のような格好をしていては、親兄弟に対して申し訳がないと、姿だけはいつも墨染めの衣でくりくり頭、その上へ両刀を帯びるという奇妙な風体、年は二十一歳と十八歳、自分たちから入道入道といったのが通称になって、人々も兄を清海入道、弟を

伊三入道と呼ぶようになったのでございます。

この清海入道が先達で、今しもこの六人が猿飛を布団蒸しにしようという相談がまとまった。ところが猿飛の方では、離れた自分の部屋にいてこの六人の話を忍術の力ですっかり聴き取っているから話はおもしろくなってまいります。

佐「ははあん、あいつら、おれを布団蒸しにしようというのだな、よしそんならこっちにも考えがある、よし一泡吹かしてやろう」

と待ち構えている。

そのうちに日は暮れてくる。宵の内は七人仲よく、幸村殿の前で、戦争の物語などに打ち興じておりましたが、夜もだんだん更けて来たので、それぞれ御前を退き、当直の者の外は己れの部屋に引き取りました。

清海入道をはじめ五人の小姓は、口にはいわないが、上目使いに目と目で合い言葉、「分かったな、ぬかるなよ」ラジオよりも確かです。

はたで見る猿飛にもちゃんとそれが分かるのだから、知らぬは仏ならぬ六勇士。こちら佐助は「今に見ろ、清海め、泣き面こくな」

と心の中、赤い舌をペロリ出してわが部屋へ引き取った。

猿飛に計略を聞かれたとは露知らぬ六勇士、時の来るのを今や遅しと待ち構えている。

こちら猿飛佐助、部屋に入るなり、布団をすっぽり被って寝ておりましたが、夜は次第に更け渡り、どこで打ち出すか九つの鐘の音が、陰にこもってゴーンと物すごく鳴り響く。

むくむくと起き上がった佐助、枕元の行燈の灯をフーッと消し、

佐「これでよし、……おやっ、そろそろやって来たな、よーし、おれの代わりに先達の清海入道をぐるぐる巻きにしてやろう」

と、そばの壁にぴたりと体をつけて待ち構えている。そんなことは神ならぬ身の少しも知らない六勇士、足音を忍ばせて早くも部屋の入口に立ってじーっと中の様子を見すましているのは清海入道、後ろを振り返りながら小声で、

清「おいおい、これはまたよく寝入っているわい、おれと望月と穴山と海野は夜具の四隅を押さえ、覚と伊三入道は、上からぐいぐい押さえつけろ、それからみんなでぐるぐる巻きにするんだぞ」

望「よしっ心得た、しかしこう真っ暗では具合が悪いな」

清「なあに大丈夫だおれが先にいく、おれにつづけっ」

暗がりの中を手さぐりで布団の隅を探している。ところが猿飛にはことごとくその動きが見えるからたまらない。清海入道が、まず隅を探し当てたとたん、いきなり力に任せて夜具の中に押し込んで、声を立てようとするところを、すばやく頭から布団をかぶせ、忍術の名人だから、人の声色をつかうくらいはお手のもの、清海入道になりすまして、

佐「さあ押さえたり押さえたり、おいみんな、暴れるからしっかり押さえろ、伊三入道と覚はぐんぐん踏みつけろ、望月、穴山、海野の三人は四隅を持って包んでしまえっ」

三人「よし来たっ」

と、中では苦しいからウームウームうなっている。それが清海入道だとは知らないから、

覚「なにっ、いくらうなっても承知せんぞ」

筧と伊三入道が、やっ気になって大力でゴツンゴツンと殴りつける。見ている佐助おかしくておかしくてたまらないが笑うわけにはいかない、笑いを抑えて、

佐「おいおい、早くぐるぐる巻きにして廊下へほうり出してしまえっ」

皆「そうだそうだ」

とばかり寄ってたかって踏む、ける、殴る。さんざんなのは清海入道、

佐「さあ、みんな引き上げようぜ」

と、先に立ってめいめいの部屋へ帰る。まさか猿飛がいっしょに出たとは思わない。猿飛は廊下を一回りしてわが部屋に帰り、

佐「あははははは、朝になったらみんな驚くだろうな、ばかなやつらだ、開いたときの清海入道の顔が早く見たいものだ」

ごろりとそこに横になって寝てしまった。

翌朝になると、宿直の武士田中才蔵が目早く、廊下にある布団巻きを見つけ、

田「おやっ、これはなんだろう、いつの間にこんな物を運び込んだのだろう」

不思議に思って同僚の木村にこのことを話すと、

木「これは布団包みではないか、いったいだれのものかな」

田「まさか夜逃げをする者もなかろうし、いったいなんだろう」

木「猿飛の部屋の近くにあるから、ひとつ聞いてみてはどうかな」

田「それもよかろう……これこれ猿飛氏、猿飛氏……起きて下され……あれいないぞ、顔でも洗いにいったのかな」

いってるところへ猿飛が手ぬぐいを持って帰って来たから、

田「これこれ猿飛氏、このようなものが置いてあるがなんだかご存知ないかな」

猿「拙者もさきごろこれを見て不審に思っておったが、見れば布団、だれか引っこしでもすると見えて厳重に縛ってあるな、定めし清海入道あたりのものかも知れん……」

田「ありゃありゃウームウームうなっておるが……」

猿「えっ、うなっている……なるほど、これは怪しき品、ご主君様に申し上げたがよかろう」

といって、自分の部屋へ引き上げた。そこで田中、木村の両人からこのことを申し上げると、

幸「なにっ、廊下に布団包み……うなり声が中から聞こえる……それはけしからぬ、まただれかのいたずらだろう」

と、いっているところへ、どやどやとやって来たのは望月、海野、筧、穴山、伊三入道の五人、

筧「なんだなんだ……布団包みとな、これはおもしろい」

いっているところへご主君が、お出ましになる。

皆「ははっ、麗しきご尊顔を拝し奉り恐悦至極に存じ奉ります」とごあいさつ申し上げる。

望「若殿さま、これはなんでございましょう」

そしらぬ顔でお尋ねすれば、

幸「清海入道はいかがいたしたな、いつも先棒になるやつが見えぬようだが……」

いたいところをさされたが、

海「あいつ、どこかに隠れたかな、猿飛はどうした。あの二人が怪しい」

怪しいもあったものではない。

いっているところへ、猿飛が静々と出仕、ご主君にごあいさつを申し上げ、
猿「ご同役おそろいで、お早いご出仕、だいぶさわがしいがどうしたんだ」
猿飛も人が悪い、これを見て、五人は互いに顔を見合わせ、
望「ややっ、猿飛が来た……どうも不思議だな」
伊「あれっ、いったい兄貴はどうしたんだろう」
と、五人は佐助の顔を穴のあくほど見つめている。
この様子をご覧になった幸村公、これはどうもおかしいとおぼしめしたから、
幸「なにはともあれ、この包みを解いてみよ」
との仰せ、一同もじもじしているので、
幸「佐助、その方早く解いてみよ」
佐「はっ」と答えて佐助は直ちにその包みを解いて見ると、これは以外、坊主頭にはち巻なし、すっ裸で、赤いふんどしをしている男が、飛び出した、見るとそれが清海入道だから、みんな驚いた。
清「うわーっ、苦しかった、だれだおれを……」
といいかけて、じろじろ見回すと、主君の御前、
幸「こりゃ清海入道、いかがいたした」
清「うへーっ、こ、こりゃたいへん……」
と、スタコラスタコラ自分の部屋へ駆け込んだ。
そこへ追って来た海野六郎、

海「おいおい三好、いったいこれはどうしたことなのだ、あの中からきさまが飛び出すとは思わなかったぞ……」
清「おれが布団に手をかけるといきなり突き飛ばしたから、おれだおれだというのにひどい目に合わせおって、これ見ろ、坊主頭はこぶだらけだ」
海「うーむ、やっぱり一杯くわされたんだ……まあまあ仕方がない、主君のお召しだ、早く来い」
清「おい、一晩中布団蒸しにあわされてこんな苦しかったことは生まれてはじめてだ、猿飛というやつ、年は若いがなかなか容易ならぬやつじゃ、戦場往来数度のおれも、こんな目にあったことはないぞ」
と、ため息をつきながら、衣服をかえ、海野と共に主君の前へお目通り。
清「はっ、ごきげん麗しき体を拝し、恐悦至極に存じ奉ります」
まじめくさってあいさつをしている。幸村殿おかしくてたまらない。
幸「清海入道、その方の頭はどういたした」
清「はい、これは……その……あの」
幸「なにかそれには子細のあることであろう、包まず申してみよ」
互いに顔を見合わせてもじもじしておりましたが、もともとやき気味でやったいたずらですから、清海入道から、昨夜来のしくじり話をつまびらかに申し上げました。ところが幸村殿には少しもこれをおしかりにならない。
幸「あはは、……三丁四方、のみの飛ぶのも分かるという猿飛佐助を計略にかけようといた

しても、それはちとむずかしかろう、人を呪わば穴二つということわざがある。以後は七人が互いに兄弟同様にいたし、予の手足となって、働いてくれよ」

さすがに知仁勇兼ね備わった幸村殿、家来をなずけるのがうまい、すぐさま酒肴を命じておもてなしになる、七人は今さらながら、主君のおぼしめしに感激しております。

清「ああ有り難いことじゃ、ご主君にこれ以上ご心配かけては相すまん……猿飛この度のことは忘れてくれよ、おれが発頭人でやった仕事だ、以後は義兄弟の交わりを結ぼうではないか」

佐「いかにも承知した。取るに足らぬ争いから、若君にご心配をかけては相すまん、おれはなんにしても新参だ、気に入らぬこともあろうが、なにかと目にかけてくれ」

雨降って地固まるのたとえ、七人はここに全く打ちとけて義兄弟の約を取り結び、主家のために尽くそうと決心いたしました。

こうなると、猿飛佐助の名は、だんだんと高まり、上田城内の若手豪傑七勇士の花形として人人の尊敬を受け、また主君のご寵愛はますます深くなってまいりました。

あわや、腰元楓は落花狼藉

そもそもこの真田安房守昌幸殿というお方は、武田家において軍師同様のお方で、わが国の孔明張良とまでいわれたあっぱれの人物、天文地理、人情風俗、日本国中の事はなに一つ知らないことはないくらい、博学知識の名将でございますが、一子与三郎幸村殿も父に優るとも劣らないといわれるくらいの大器量人、さればわずか五万石の大名でありながら、信州上田の真田家といえば、関東八州は申すに及ばず、日本国中に鳴り響いた家柄でございます。

ところが父君昌幸公は、全国に目をつけ、あるいは間者を多く送って、いながらにして諸国の諸大名の動静を探っておいでになる。

文武両道に達すると申しますが、昌幸公は、文学の心得もまた格別、ときにはお慰みとして、歌会などを催される。この歌会のときには、表御殿、奥御殿の男女が打ち交って、それぞれ歌を詠んで昌幸公のお手元へそれをさしいだす、その秀逸なものにごほうびが下りるということであります。ところが新御殿の幸村殿の方はというと、殺伐とまでいかないでも、どちらかというと、武術の練磨に余念のない若武者が多いから、従って幸村殿もこの会にはあまりお出ましにならない。例の七勇士などは一度も出たことはございません。

ところが、この歌会は男女が入り交るので若武者の間にはなかなかの人気でございます。というのは、平生は、不義はお家のご法度というので、男女はあからさまには、うっかり口もきけませんが、このときばかりは、大ぴらに自由に話に打ち興ずることができるから、ここに集まる連中の中には、歌よりも美人を見られるという余得があるので、その方を楽しみにしているものが多い。

数多いお女中の中で、美人の評判高いのは、侍大将海野太郎左衛門守勝の娘楓、年は十八歳、原節子か山本富士子、歩く姿はマリリン・モンロー、すこぶるつきの美人、その上殊のほか歌をよくし、これまた与謝野晶子そっちのけ、毎度殿のごほうびにあずかっております。

若侍連中、よるとさわるとこの楓のうわさで持ち切り。ところが、相手がなにしろ侍大将の娘ですから、及ばぬ鯉の滝登りとばかり、思いを焦がしております。

しかるに、真田家の第一家老伊勢崎五郎兵衛成正の一子、五郎三郎成清というのが、この楓を見染めた。

他の若侍連中が、楓のうわさをしているのを聞くと、ご本人すっかりのぼせ上がっているから、やけてやけてならない、万一楓を他の若侍にとられてはたいへんと焦っている。

五「おれこそ楓を妻にして、他の若侍の口をあかせて見せる、相手は侍大将の娘、おれは家老のせがれだから、こんなつり合った縁はない、おれから話せば、よもや楓も首を横にふるようなことはあるまい」

と、一人ぎめにしている。

ところが、この楓という人、父の血を受けておりますから、女らしいしとやかさはありますが、志操堅固で男ぎらいというのではないが、引く手あまたな男を板にゴムまりをぶっつけたようにポンポンはじきかえして、この世の中に男というものがあるのが邪魔だくらいに思っています。

そこで五郎三郎、尋常のことでは楓の気持ちを確かめることはできないから、ひとつ金の力でなんとか楓の召し使いの菊の井を手なずけて物にしようと、そこに目をつけたまではよかったが、これがそもそものまちがい。

艶文、今日のラブレター、それをしたためて時の来るのを待っていると、ある日楓の召し使いの菊の井が、表御殿へ用事があって来たのをチラリと見た五郎三郎、この帰りを待ち受けて、

五「これこれ菊の井どの、ちとお願いがあるが聞いてはくれまいか」

菊「はい、わたしになんぞご用でございますか」

五「そうじゃ、そなたに頼みたいことがあるのだが……」

といい渋るのを見た菊の井、

菊「私の身にかないますことなら、なにとぞご遠慮なくおっしゃって下さいませ」

五「うむ、ぜひそなたでなければ……」

菊「ええっ、そなたでなければとおっしゃいまして、なにか私に……」

五「うむ、そなたを見込んで……拙者が……」

菊「懸想なさいまして……でもわたしのようなこんなおかめ……あなたさまのような美しい殿御と……」

五「ああ、菊の井どの、早まってはならぬ、拙者がなにもそなたに懸想したとは申さぬ……実は、その、そなたからこの文を楓どのに手渡してはくれまいか」

菊「えっ、文を楓さまに……五郎三郎さま、不義はお家のご法度、そのようなお使いは菊の井困ります」

五「でもあろうが、菊の井どの、そなたを見込んでの頼みじゃ、ぜひこの文を楓どのに渡してくれ、これこの通り頼みます」

両手を合わさんばかりにして、頭を下げる。この様子を見た菊の井、根がお出入り商人の娘で、伊勢崎の家は金を持っていることを知っているから、

菊「それほどまでに、ご執着でございますなら、一度だけ、ほんに一度だけでございます、お

手渡しいたしましょう」

五「渡してくれるか、それはかたじけない……」

といって、なにがしかの金を握らせた。

ところが、楓の心の城は、そうたやすく陥落いたしませぬ。一通が二通となり、三通四通となり、そのつど菊の井になにがしかの金を握らせますが、それがことごとくなしのつぶて、そこで菊の井を責めますが、どうにもいたしかたが、ございませぬ。

菊の井にしてみれば、この恋は楓さまに気がない、どうせかなわぬ恋だ、一つお化粧代かせぎに五郎三郎から取れるだけ取ってやろうと考えたからたまらない。五郎三郎こそいい災難でございます。

菊「伊勢崎さま、初恋と申すものは、そうやすやすとはまいらぬもの、押して、押して、押し通さねばなりませぬ」

と、けしかけられたからたまらない、菊の井に小遣いを取られるとは気がつかない、菊の井にいわれるままに出しも出したり二十五通、ところがいっこうきき目がない、それもそのはず、菊の井が金だけ取ってすべて楓の文箱の中に納めておくだけで、楓に手渡しいたしません。

五郎三郎という男まことにあきらめが悪い、二十通ラブレターを出したときに、こう返事をよこさないのは、先方に気がないのか、それじゃ、この恋、とお（十）とお（十）、ヤブレターか、としゃれっ気でもあって、思い切ってしまえばなんのこともなかったのですが、どうもえてして、煩悩という犬はなかなか追えないのが、人間の常のようでございます。もっとも、ここで五郎三郎にあきらめられたら、この講談の種が、なくなってしまう。

昔から、人若きとき、これを戒む色にありと申しまして、この色香に迷ったために、家蔵はもとより、自分の命まで失くしたという例は少なくございません。孔子さまはいいことをおっしゃった。

今月の歌の会も、とどこおりなく相済み、後は無礼講で、お酒が出る、ごちそうが出る、男女混って騒ぐようなことになるのですが、とかくこういうときにはまちがいがおこり易いもので、「はじめて会ったのはダンスパーティーの夜だった」てえなことになります。

ところが、毎度申し上げますが、この楓という人は、いたって品行方正、ただいまはございませんが、ごく最近まで、特待生というのがありましたが、楓はさし当りこの特待生。

お歌会が終わりまして、お酒が出ますと、もう用がない、うっかりこんなところに長居して、五郎三郎にからまれて、そそうがあっては、物堅い父の顔にもかかわるし、自分も迷惑だと思ったから、絹地に遠山を描いたぼんぼりを左手に持ち、重ねぞうりをはいて、右手で裲襠の褄を取り、部屋部屋をあらためて、殿中名代の三十六間の畳廊下を静々通りかかると、横合いから飛び出した怪しき男、いきなり楓の行く手に立ちふさがった。

○「あいや、楓どの、しばらくお待ち下され」

声をかけられ楓はぎょっとしたが、気性の勝った女ですから、ぼんぼりをかざしてじーっとその男の顔を見つめておりましたが、

楓「どなたさまかと存じましたら、五郎三郎さまではござりませぬか、人も通らぬこのお廊下、なにかご用でもございますか」

五「これはしたり楓どの、なにかご用かとはつれなきお言葉、菊の井どのを通して二十五通も

文をさし上げたるに、今もってなんのご返事も下さらぬとは情けない。五郎三郎も、武士の片割れ、面目にかけてもこの恋必ずかなえずには置きませぬ」

いいざま、ぼんぼりを吹きけしたから、あたりはたちまち、あやめも分かたぬ真の闇、楓もはっと思ったが、一足下がって、帯の間の懐剣握りしめ、命にかけてもと身がまえた。

楓「これはご無体なされ方、不義はお家のご法度、そこお通し下さいまし」

と、逃れようといたしますと、

五「これさ、楓どの、よいではござらぬか、やよ楓どの……」

と、ねこなで声で近寄りざま、やにわに楓を抱きしめて、あわや落花狼藉に及ぼうとした。ただの女なら、「あれーっ」とか、なんとか大声で救いを求めるところでございますが、

楓「これ、なにをなさいます。お武家らしくもない、お放し下さいませ」と、もがけども、近習頭を勤める五郎三郎、そのところへ楓をねじ倒そうとした一刹那、音もなくすーっと現れた一人の男、これなん、猿飛佐助幸吉でございます。

どんな暗闇でも見えるという代物だ、——日ごろから威張りくさる伊勢崎五郎三郎だな、ひとつこらしてやれ——と思ったから、つつーっと五郎三郎に近寄り、猿臂をのばして五郎三郎のえりっ首をひっつかみ、ぐいっと引き倒した。

その間に楓は、やれうれしやと虎口を逃れて立ち去ってしまいました。

こちらは五郎三郎、顔を見られてはならぬとしきりにもがいておりますが、大力無類の猿飛につかまれているのですから動かばこそ、

佐「何人かは知らねど、かかる所にて女をとらえ、怪しき振る舞いに及ばんといたす不届き者、

表ざたにいたすべきだが、今夜は大目に見て逃してつかわす、以後は必ずかような、しわざをいたすなっ」

いいもおわらぬうちに、目よりも高くさし上げエイッと掛け声もろ共、傍らの芝生に投げつけて、そのままゆうゆうと立ち去った。五郎三郎はころころっと転がったが、起き上がり、「アジャー」といいながら、人目につかぬようすごすごと屋敷へ立ち帰りました。

五郎三郎、翌日になってだんだん調べて見ると、昨夜の新御殿の宿直は猿飛佐助であることが分かった。——どうりで大力なやつだと思った——と首をすくめたといいます。

これで、五郎三郎あきらめればよいのですが、邪魔が出たり、せき止められればとめられるほど、なおつのるのが恋路のつね。

——ああああきらめられぬ、なんとか楓を手に入れる方法はないものか——

と、このごろでは五郎三郎寝ても覚めても頭にあるのはこのことばかり、夜もおちおち寝られないという始末。

楓、日ねもす身をこがす

このことがあってからというもの、どういう風の吹きまわしか、楓どのどうもこのごろ、なんとなく気がそわそわして落ちつきません。召し使いの菊の井を呼ぶのに、「猿さま」といって顔を赤

らめたり、なにかいいつけても、ときどきつじつまの合わないことをいったりする。しかしどこまでも慎み深い楓のこと、そのようなことにまけることなくお勤めに精を出しております。

ところがこのごろでは寝ても覚めても、佐助の凛とした面影が、目にちらついている。楓とても、もう十八歳、木のまたから生まれた訳ではない、いとしいいとしいと、なにやら胸がうずくので、どうやらこれが恋というものかと、気づいたそうですが、……古の人はうまいことをいったものです。戀という字は糸し糸しと言う心、今では当用漢字で戀という字は恋と変わりましたから、私とあなたの心で亦あいましょうとでも申しましょうか。

ある日のこと、思い余った楓、召し使いの菊の井を呼び、

楓「あのう、菊の井どの、どうしたのだろうね、わたしはこのごろ……ええわたしとしたことが……」

と、いいかけて顔赤らめる。

菊「楓さま、どうなさりました。近頃世間で流行っております唄がございますね、――わたしこのごろ変なのよ――というのをご存じでございますか、楓さま、あれでございません?」

いわれて楓は顔を真っ赤にして下うつむいてしまった。これを見逃す菊の井では、ございません。

菊「楓さま、なにかお心に余ることがございましたら、なんなりと仰せつけ下さりませ、お力になりまする」

楓「でも女の身のあられもない、はしたない女と見下げられるのが恐ろしゅうて……わたしの口からそんなこと」

菊「ほほほほ、楓さまとしたことが、もしや猿飛さまを……」
楓「えっ、猿飛さま……おまえそれを、どうして……ええほんに……いとしや猿飛さま、今ごろどうしていなさるかと……思うだに胸がうずくわいな」
菊「それほどまでに猿飛さまを、おしたいなされてでございますか」
楓「あーい」
といって、そでで顔をおおいかくすいじらしさ。
菊「それでは、楓さま、お文でもさし上げて、猿飛さまのお気持ちを、伺ってはいかがでございます」
楓「これ菊の井どの、おまえは五郎三郎どのの文をなんといいやった、不義はきついお家のご法度、見るも汚らわしやと……今はそのようなこと……でものう、まことは、わたしもその文をしたためて、おまえに頼もうと思っておりました」
菊「まあ、なんとくどくどしいことでございます。それならそれと、ずばり手っ取り早くおっしゃればよいものを、わたしはこのごろどうとか、はしたない女とか、ほんに今ごろはどうしてなどと、えーえ気をもませて腹が立つ……め、めっそうもない、ええ不義はお家のきびしいご法度などと……野暮なことは申しませぬ、よろしゅうございます」
と、菊の井快く艶文の取り次ぎ役を引き受けたものの、こちらは奥御殿づき、猿飛さまは新御殿づき、どうしたものかとしばらく思案にくれておりましたが、菊の井という女、その方にかけてはなかなか度胸があります。その翌朝、善は急げとばかり、出仕前の猿飛の部屋へ、楓どのの文を持っていった。猿飛の部屋の前に立った菊の井、

菊「ごめん下さいませ、猿飛さまはおいでござりますか」
聞きなれぬ女の声、猿飛不審に思いましたが、
佐「どなたかは存じませぬが、どうぞお入り下さい」
しとやかに、部屋に入ってあいさつして、菊の井は猿飛の顔をしげしげ見つめて、ああ楓さまはお目が高い、あありっぱな殿御、楓さまが思いを寄せるのも無理はない……のんきな女もあったもので。
菊「わたしは奥御殿お女中楓どのの召し使い菊の井と申します。楓さまよりくれぐれもよろしくとのことで、この文持参いたしました、どうぞお受け取り下さいませ」
さし出した手紙を見て、猿飛ぎくりっとしたが、
佐「あいや、しばらくしばらくしばらく」
芝居の「暫」のせりふみたいな口上。
佐「独り身の拙者に対して、楓どのよりのお文、受けてよいやら悪いやら、……いや、なまじお女中の手紙など受け取ったばかりに不義呼ばわりされては迷惑、これはどうぞお持ち帰りを願いたい」
菊「でも、どうぞお受け取り下さりませ、お受け取り下さるまでは、わたしは帰れませぬ」
佐「でも」
菊「さあさあどうぞお願いでございます」
と、こうまで強くいわれてみると、受け取るだけなら差し支えあるまいと思ったから、
佐「では、確かにお受け取り申す」

菊「ありがとうございます、では失礼いたしまする」

菊の井そのまま立ち帰りましたが、その後で、猿飛は――さてこの文ひらいたものかどうか――と迷ったが、そのまま文箱の中へ。

こちらは楓どの、待てど猿飛からの返事が来ないので、またも菊の井を呼んで、第二便を持たせたが返事がない、第三便を出したが、やっぱり返事がまいりません。

恋し恋しと鳴く蟬よりも鳴かぬ螢が身をこがす、という文句がございますが、このころの楓どのの心境そっくり。

郵便が配達になる時刻になると、いそいそとポストに走っていきますが、しおしおと帰って来る姿を見て、菊の井も慰める言葉もなく、ただはたからながめているばかりでございます。

するとある一日、

楓「菊の井どの、猿飛さまからまだご返事を下さらぬが、どうなされたのだろうね、三通もさし上げたのに……お気持ちを悪くしたのではなかろうね……」と心配顔。

菊「楓さま、あなたさまは五郎三郎さまの手紙を二十五通もお受けになって、ご返事もお出しにならずにおいでになったではございませぬか、四通や五通では、まだ押しが足りませぬ」

菊の井人が悪い。そこで楓どのは利口な方ですから、これはなまじ他人が間に入っているから、かえって事がうまくはかどらない、といって、本人とじか談判など思いもよらぬこと、だれかしっかりした人を介して、自分の気持ちを打ち明けようと考えたのは、さすがにその心掛けは見上げたものでございます。

猿飛もこれには顔赤らめる

ある一日、猿飛佐助、自分の部屋で書見をしておりますと、

清「猿飛、どうじゃ、ひとつ座り相撲でもやらんか、非番の日は退屈でならぬわ」

といって入って来たのは、清海入道と海野六郎、

佐「相変わらずだなおぬしは。よし一番やるか、せっかく、塚原卜伝の赤城の奉納試合のくだりを読んでいるところだが……よかろう」

たちまち衆議一決して座り相撲がはじまった。この相撲が豪傑ぞろい力自慢同士だから、どうして生やさしいものではございません。座り相撲だか、立ち相撲だか分からないくらい。ドタンバタンとその勢いのすさまじさ。

清「やっ、どっこいまだまだ」

佐「うーむ、くそっ、しりをつねったな、よしこうしてくれるっ」

いいざま、足に手をかけて、はね上げたからさすがの清海入道たまりかねて、ドウと倒れた、それが運悪く、机のそばの文箱に足がぶつかったから、バリバリと文箱は破れて中のものが散らばった。

すると目の早い清海入道、なにを見つけたか、

清「ややっ、猿飛、これはなんだ、おい女の手紙ではないか、こいつけしからぬやつじゃ」
海「これ猿飛、不義はお家のきついご法度じゃぞ、これやい、おれたちに隠れてなんだこのざまは……」
猿「おいおい、きさまたちは人をうたぐるのもたいがいにしろ、きさまたちの目はどこについている」
清「なにっ、目は人より大きくついているわい、きさまのように闇の中が見える畜生目とは違うぞ」
佐「あはははは、そうか、そんならその文をよく見ろ、三通が三通、四通が四通とも開封してはないぞ、それがなによりの証拠、この猿飛佐助は婦人に迷うような腰抜け武士ではないぞ」
といわれて、清海入道、その艶文を取り上げると、なる程開封してない。
清「ではきさまはこれを取りっ切りにしていたのか」
佐「そうだ」
海「しからば、友達がいに許してやる、だが猿飛、強いばかりが武士ではないぞ、人の情けを知ってこそ真の武士じゃ、返事をやるのが武士の礼儀である」
清「うむ、海野のいう通りじゃ、しかし猿飛、拙者は生まれてから母から手紙をもらっただけで婦人から手紙をもらったことはないぞ、どんなことが書いてあるか後学のために読ましてくれ」
佐「よし、読んでみろ」
海「よしよし、さあ読むから有り難く拝聴いたせっ」
と、読み上げたのを聞くと、去る日畳廊下で助けられたことについての礼状であったから、

清「おいおい猿飛、きさまは忍術を使うと申すが、だいぶ焼きが回ったとみえるな、この手紙の内容が礼状かどうかくらいが分からないのか」
佐「もういいもういい、あやまるから、もうよいではないか」
つづいて次の手紙を見ると、これはしたり、いよいよこれこそ本物の艶文だ、男の中の男と見込んで、おしたい申していると、書いてあるから、清海入道だまっていない、
清「これこれ、猿飛、きさまお安くないぞ、しかし海野、これは表ざたにいたしてはよろしくない、友達がいにどうだ、これはご主君に申し上げてよしなにお取り計らい願った方がよいのではないか」
海「清海入道にも似合わず、ばかに情けをかけたな、よしきさまのいうことはもっともだ、これからご主君に申し上げよう」
二人はそのまま猿飛を連れて、ご主君幸村殿にいちぶしじゅうを申し上げると、幸村殿もお若いから、父君の安房守昌幸殿にこのことを申し上げると、清海入道の話をお聞きになっておいでになりましたが、
昌「猿飛、その方は楓をどう思うか、楓がその方をしたいおるのは相分かったが、肝心のその方の心を聞かぬではこれを裁くことはできぬがどうじゃ」
このお尋ねには、猿飛その答えにとまどい、猿飛にしてはめずらしく顔を赤らめて下うつむいておりましたが、
佐「殿、それは困ります、おい、三好、どうお答えすればいいのだ……困ったな」
清「きさまの思った通りお答えすればよいではないか」

佐「それが困るのだ、恥ずかしいな、海野、きさまはどう思う」
海「人のことはおれには分からぬ」
昌「猿飛、ふだんのその方にも似合わぬ、男らしく、はっきり申せ、その方も真田家七勇士の一人なるぞ、思う通りに申せ」
佐「ははっ、楓どのはまことにしとやかな、りっぱなお女中と存じます」
というのがせいぜい、昌幸殿、猿飛も気がないではないとおぼしめしたから、
昌「猿飛、その方は何歳に相成るか」
佐「はい、十九歳に相成ります」
昌「楓は何歳かな、幸村存じおらぬか」
幸「たしか、十八歳かと存じまする」
昌「十九歳と十八歳か、まだ早いな、されば猿飛、その方が二十五歳に相成るまで、この婚礼は、予が預かり置くぞ、楓には予から申す」
佐「有り難きお言葉を拝し、猿飛身に余るしあわせに存じ奉ります」
昌「三好も海野も立ち会いじゃ、今後とも、猿飛と楓のことは面倒を見てやれよ」
両人「承知つかまつりました」
昌幸殿のおとり裁きで、ここに猿飛と楓はめでたく許婚(いいなずけ)ということになりました。
このことを聞いた楓どのの喜びは一通りではございません。
猿飛さまが二十五歳といえば、あと六年、一日は三百六十五分の一年かと思うと、ずいぶんもどかしいようでございますが、一日一日を楽しみにその日の近づくのを待ちわびております。

このごろのように、一目ぼれ、OK、じゃ結婚しましょう、早いのになると一年はおろか二ヵ月もたつと、あなたとわたしは性格が合わないから離婚しましょう、OK、てんで簡単に結婚を解消するというのとはだいぶ違います。六年間も楽しみにして待つというのですから、いやはや昔の人は気も長いが辛抱強いことでございます。

奥御殿に忍び寄る黒装束

楓(かえで)どのの方はこれで、天下晴れて猿飛佐助と許婚となりまして、自分の思うように願いがかなったからよいのですが、このことが公にされて、納まらぬのは五郎三郎の胸の中、なんとかして楓どのを一度は、わがものにしたいと思いますが、今となってはそうやすやすと手が出せない。来る日も来る日ももんもんの情やるせなくすごしております。
するとどこのお屋敷にもあるものでございますが、ご主人にへつらって同僚をだしぬいてお眼鏡(めがね)にかなおうとするごますり坊主、これが自分の地位を守るために金をつかって手下をふやすからなかなか勢力を持っておりますが、これがやがてその屋敷を滅ぼすもとをつくるものでございます。五郎三郎のうかぬ様子を早くも見て取ったのは五郎三郎お気に入りの家来で源五郎、
源「若さま、だいぶこのごろ、お気分がおすぐれになりませぬご様子、いかがなされました」
五「うむ、楓どのが思い切れぬのじゃ、そちになにかうまい思案はないか」

源「そんなことは私におまかせ下されば造作なきこと、こうなされば」
と、五郎三郎の耳に口を寄せ、なにやらムニャムニャ。
五「源五郎、そのようなことができるか」
源「私がお引き受け申せばもう磐石でございます。では明晩四ツ刻を、お忘れなく、ではごめん」
スタコラ、立ち去ってしまいました。五郎三郎、これが身の破滅になろうとは気がつかず、すっかり源五郎の口の端にのせられ、明くる晩の四ツ刻、黒装束に身をかため、奥御殿の裏方にやってまいりますと、同じいでたちをした六人の者が、先に来て待っております。源五郎とおぼしき黒装束が、手招きするがままについてまいりましたのは奥御殿づきお女中の部屋の裏木戸、とその中の二人がするすると垣根を越えたと見えましたが、どこをどうして入ったものか、程なく一人のお女中を肩にして五郎三郎のところへ連れてまいりました。
源「若さま、楓どのをお連れ申しました、あて身でただ今は気を失っておいでになりますが、どうぞお受け取りを願いまする」
と、いっているところへお女中部屋の中より、
○「あれ、楓さま楓さま」
と狂気のようにして追って来た召し使い、ばたばたと五郎三郎たちの前を通りすぎようといたしますから、源五郎、いきなりその女をひっとらえて、横っ腹にあて身をくれたから、
女「うーむ」
といって気絶した。

源「この女に用はない、声を出すと面倒だから、猿轡をしてそこの柱に縛りつけておけ」
傍らにある柱に縛らせて、そのままそこを立ち去り、裏門から、新御殿の方へ足音を忍ばせてやってまいります。
すると、夜回り三人が、カチカチ拍子木をうって来る様子、悟られてはならじと、塀に身をつけて、やり過ごそうとしたが、相手は提灯を持っている。提灯の光に照らし出された七人、しまったと思うから、パッと飛び出して、その一人の提灯を打ち消し、ひるむところを目と目の間にめり拳を一つくらわせたから、へなへなとその所へうずくまった。それを見た火の番、呼び子を鳴らしながら、
番「かたがたお出合い下さりませ、曲者でございます」
と、声高に呼ばわったから、宿直の番卒ばらばらと飛び来って、曲者を相手に立ち回ったが、曲者も死に物狂い、だが、番卒は手に手に突棒、刺股、あるいは六尺棒など思い思いの得物をひっさげて打ち込んでまいります。かなわじと思った曲者、五郎三郎一人を残して、楓をひっ背負って逃げてしまった。ただ一人残った伊勢崎五郎三郎、もはやこれまでと、一刀すらりと引き抜き、番卒めがけてしゃにむに刀を振り回せば、番卒はしだいしだいに後に下がっていく、早くも形勢不利と見てその中の一人がいちもくさんに宿直の番所へ駆けつけ、
番「ご注進ご注進、ただ今新門の近辺でしかじか、はやくおいで下さいまし」
といいすてて、またどんどん引き返した、この夜の宿直はちょうど猿飛佐助、
佐「先刻より怪しき物音が聞こえると思ったが、さては曲者であったか、よし、召し捕ってつかわす」

そばにあった六尺棒を取るより早く、それを小脇にかい込み一散走り。なにしろ忍術の名人の猿飛が一散走りというのですから、われわれの走るのとは違います。跳ねるとか飛ぶどころの話ではない。ロケットのような早さで宙空をすっ飛んで来て見ると、一人の侍が一刀を水車のように振り回して番卒と、斬り合いの真っ最中。

佐「あいや、そこなる曲者は何者なるか、われこそは猿飛佐助、尋常に縄にかからばよし、さもなくば手の内は見せぬぞっ」

と呼ばわった。それを聞いた、伊勢崎五郎三郎、

五「とんだところに猿飛佐助、またしても猿飛か、さるとはつらいね」

と、いったと申しますが、これも不思議な因縁でございます。

五郎三郎、猿飛と聞いただけで、もう闘志が半減して、逃げ腰になった。

ひきょうにも一刀ひっ外して逃げ出した。

これを見た猿飛佐助、

佐「おのれ逃げるとはひきょうなり、曲者、あいや五郎三郎待てっ」

いいも終わらず、はっしと投げた六尺棒、ねらいたがわず五郎三郎のまたの間にはさまり、バッタリ倒れた、アッと叫んで起き上がろうとするところへ佐助飛び乗り、首筋ひっつかまえてそのところへ取り押さえた。

佐「番卒どもは早く控え所へまいって休息いたせ、この曲者はおれがひっ立てまいる」

と、縄をかけ、よいしょと背にかけ、控え所へ来てドンと引き下ろした。

佐「あいや五郎三郎殿、そこへお座りあれ」

といわれて五郎三郎、

五「いや拙者は五郎三郎では……」

佐「あはは……そのくらいのことが相分からないで忍術の名人といわれようか」

五「でもまこと拙者は……」

佐「まだしらばくれるか、あくまで強情を張れば仕方ない」と猿臂をさしのばし、覆面をひっぱずせば、まごう方なき伊勢崎五郎三郎だ。

五「面目次第もござらぬ、どうかご内分に……」

佐「なにご内分にとは……」

五「実はしかじか」

佐「これはしたり、先夜と申し、また今晩も再び拙者が召し捕るとは不思議な因縁、しかも拙者とは許婚の楓を奪い去るとははなはだ穏やかならず……して楓どのはどうなされた」

五「家来どもがただ今盗み出したばかり……」

佐「えっ、奪い去った……真田家のご家老の息子ともあるものが……」

五「いやなんとも申し開きようがござらぬ、以後は決してかようのことはいたさぬ、いま一度ご勘弁に預かりたい」

しきりにわびるので、佐助もこれを表向きにすれば、真田家のためにもかんばしからぬことと考えたから、

佐「よろしい、お許し申す、されど楓どのは早く返されよ、拙者が許しても、楓どのを返さねば表向きになるぞ」

五「猿飛どのかたじけない、このご恩は決して忘却いたさぬ、楓どのは必ず夜明けまでにお返し申す」

五郎三郎にして見れば地獄で仏に会った思いでございます。五郎三郎が立ち帰った後で番卒どもに対して、今夜の働きの慰労としてなにがしかの手当を与えて、念のために、

佐「ただ今召し捕った曲者は身分あるもの、よってわしが意見をして助け帰した、決して口外いたすなよ」

と、申し渡したのは花も実もある心遣いでございます。

こちらは五郎三郎、佐助に助けられ、心から悔いて帰って来たわが家、源五郎を呼びよせて、

五「おれはとうとう猿飛に召し捕られたが、また助けられて帰って来たのだ、楓どのは夜の明けぬうち、人目につかぬよう返さねばならぬ、気の毒だが早く返してくれ、猿飛と約束したのだから……」

源「それは若様、いくら猿飛と約束をなされましても、命がけで連れて来たものを今さら返すなどと……」

松田源五郎不満そうにいっているうちに、東の空はほのぼのと白み渡ってまいりました。

六勇士、一番家老につめ寄る

話変わってこちら奥御殿においては、夜が明けると、お女中部屋の近くに召し使いの菊の井が柱に縛られているし、お女中取り締まりの楓どのが行方が分からないというので、早速それぞれのお役に届け出る、奥御殿は上を下への大騒ぎでございます。

このことが城主真田安房守昌幸殿のお耳に入りましたので、直ちに老臣勇士を召され大評議。

昌「その方どもも存じおると思うが、城内のいずこよりか曲者忍び込み、女中取り締まり楓を盗み出したるものがある、このように捨て置くときは予の威勢の鈍きに似て、隣国への聞こえもおもしろくない、早々詮議に及べっ」

と、日ごろの沈着にも似ず、殊のほかのご立腹、一家老伊勢崎五郎兵衛、二家老相木源之助、三家老覚十兵衛、侍大将海野太郎左衛門その他の人々互いに顔を見合わすばかりで、だれ一人として言葉を発する者とてはございません。

このとき、伊勢崎五郎兵衛一ひざ進め、

伊「あいやかたがた、警固厳重なるご城内へ曲者忍び入るさえ奇怪なるに、奥方お気に入りの腰元を盗み出すとは、案ずるに奥殿の勝手をよく知る若侍のしわざであろうと心得る、もし曲者悔い改めて早く名乗りいずればその罪を許してもやろうが、万一包み隠して露見したそのときは、

当人は切腹、一家一族に至るまで、厳罰に処するといたしていかがかと存ずるが、かたがたいかがでござろう」

まさかわが子の犯行とは夢にも知らないから、かく述べたのですが、まことにりっぱな意見、異議を申し立てる者もない、その通りに決定いたし、その調べに取りかかりました。ところが、そのことを聞き伝えた前夜の番卒たち、猿飛から口止め料をもらっているが、これが発覚したらたいへんと思って、その中の一人が係の役人に委細を訴え出た。係役人も聞いて驚き、直ちに老臣に申し出ました。

これを聞いた伊勢崎五郎兵衛、ふだんから、幸村殿の近侍（きんじ）の若侍どもをなにかと憎たらしく思っているところですから、

伊「うむ、不届きなるは猿飛佐助、若侍の分際をもって、召し捕ったる曲者を一存にて逃がすとは、はなはだもってその意を得ぬ。たとえ若殿お付きの若侍でも容赦はならぬ……あいや者ども、新御殿にかけ合い、猿飛佐助に縄打って受け取ってまいれっ」

一家老の威光を振りかざして厳命した。他の老臣家老は、あの思慮深き猿飛佐助のいたしたること、これには子細があると思ったが、ぜひもなし、このことを新御殿の幸村殿方に掛け合いましたが、幸村殿さして驚くご様子もなく猿飛佐助をお召しになって、

幸「佐助、その方昨夜新御殿の近くにおいて怪しき曲者が、その方の許婚楓を奪い逃げ出さんとするをひっ捕らえながら、なんじの一存にて放ちやったとか申すが、それに相違ないか」

佐助――だれかしゃべったな、こいつは具合が悪いことになったと思った。

佐「はっ……おおせの通り曲者の首領らしきやつを召し捕りましたが、子細あってわたくしの一存で許してやり申しました」

幸「さようか、なんと思って許した。曲者召し捕ったる上は、その筋へ差し出すが至当ではないか、実はただ今本丸よりしかじかと申してまいったのだ、いったいその曲者というのは何者じゃ」

佐「はっ、お言葉にはございまするが、わたくしの一存で差し許せしほどの者……この儀ばかりは……どうかわたくしに縄をかけ、お差し出しをお願い申し上げます」

ときっぱり答えた、さすがは猿飛佐助――自分がいったん助けたもの、それがまだ五郎三郎のしわざと分かっていないところをみると、これは番卒の口からもれたと察した。武士の一言は金鉄、腐っても自分の口からは五郎三郎の名はいわないと決心した。

その様をご覧になった幸村殿、これにはなにかよほど子細があるとお察しになったから、

幸「うむ、その方はあっぱれ武士（もののふ）、これより本丸にひっ立てるぞ……一度助けつかわしたる曲者、その方の口より申すようでは真の武士ではないぞ」

佐「はっ……おおせにや及ぶ、猿飛佐助は武士でござる」

幸「おおそれでこそ幸村の家来だ、筧、望月、海野、穴山、三好の兄弟、なんじらは猿飛に縄打って本丸に引き立てよ」

一同「はっ」と答えたが、――猿飛なんだ、名くらいいってしまえばいいものを――とグズグズしている。幸村公声を荒らげて、

幸「こりゃ、六人の者、予の命にそむくか、早々に猿飛に縄を打てっ」

一同「はっ」

幸「くれぐれも申し置く、あの伊勢崎五郎兵衛はとかく家老の威光を振りまくやつであるから、万一にも猿飛に拷問などいたすようなことあらば、なんじらやかましく申して掛け合えよ、それから海野と望月は今夜しかじか、誠の曲者を探し出せ、猿飛は白状いたさねど、予にはおおよそこれと目星がついておる」

と、それぞれ計略を授けられました。

幸村殿にもなにかお考えがあるらしいと察した六人の者ども、直ちに猿飛に縄を打って本丸にまいりましたが、その途中、

清「おい、猿飛少しの間がまんしろよ、おれたちがついていれば大丈夫だ、これから本丸で老いぼれどもを向こうに回して掛け合うことになりそうだ、こいつはおもしろいことになるぞ」

たいへんな縄取りもあったものでございます。

この伊勢崎五郎兵衛成正というのは、真田家の主席家老をつとめておりますが、いたって奸佞邪知のしたたか者、したがって安房守昌幸殿にはあまりお気に入りではございませんが、先代からの臣で大いに戦功もありましたので、一家老にはなっておりますが、とかく権威をかさに着て威張り散らすので下々の受けがよくない。

今しも六人の勇士が、猿飛佐助をひっ立ててまいりますと、大殿若殿のご寵愛深い猿飛佐助に一つ赤恥をかかせてやろうとぐっと佐助をにらみつけ、

伊「こりゃ猿飛佐助、面をあげいっ」

と、大音に呼ばわる。佐助は――こいつ大きな面をしおるが、今に目をむくな――と心のうちであざわらいながら謹んで面をあげました。

すると正面には、真田安房守昌幸殿悠然とご着座遊ばされ、右手には伊勢崎五郎兵衛、これはご存じの通り五郎三郎の父、それにつづいて二家老相木源之助、その次が三家老の筧十兵衛これは筧十蔵の父親、左手には侍大将の海野太郎左衛門、この人は海野六郎の叔父にあたり、楓の父親でございます。その他老臣勇士がずらりと居並んでおります。

伊「やあ猿飛佐助、昨夜奥御殿に曲者忍び入り、女中取り締まりの楓を奪い去ったが、その曲者の首領とおぼしきやつを、なんじは召し捕りながら何故その筋へ突き出さず、一存にてさし許したか、重々不埒千万っ、その曲者の名をなんじは存じおろう、速やかに白状いたせっ……」

佐「はっ、いかにもその者は助けてやりましたが、その名を申しあげることはできませぬ」

伊「うむ、しからばその名を知らぬと申すか」

佐「いや、よく知ってはおりますが、弓矢の神に誓って申し上げられませぬ」

伊「黙れっ、ここをどこと心得る、当国の領主真田安房守昌幸殿の御前なるぞ、隠し立ていたすとかえってその方のために相成らぬ、早く白状いたせっ」

佐「いやなんと仰せられましても、この儀ばかりは私の口からは申し上げられませぬ」

伊「どうあっても申さぬと申すか」

佐「さよう、猿飛佐助は武士でござる」

伊「うむ、あくまで強情張るにおいては、拷問にかけてもいわしてみせるぞっ」

佐「いや、それはご勝手に……」

少しも悪びれた様子もなく毅然と控えております。この様を見た伊勢崎五郎兵衛烈火のごとくに怒り、

伊「こしゃくなるその一言、それっ者ども、拷問の準備いたせっ」

近「はっ……」

と答えて近侍の面々立ち上がらんとしたそのときに、はるかに末座に控えておりました六人の勇士ずかずかと進みいで、先刻の若殿からのおいいつけでもあるから、清海入道、

清「あいや、ご家老様、しばらく、猿飛佐助は若殿ご寵愛の家臣でござる、しかるにかばかりのことを拷問にかけるとはあまりにもぎょうぎょうしきなされかた、殊に猿飛は武士の情けによって、その名をいわざるは、なかなかもってあっぱれな精神、おほめあってしかるべきかと存じまする」

伊「黙れっ、この場所はなんじらごとき若侍のくちばしをさしいだすところではない、控えおれ、たわけものめがっ」

権「ずくにどなりつけると、次に控えし弟の三好伊三入道、黙ってはおりません。

伊「おやっ、ご家老、たわけものとは失礼でござろう、腰抜け武士ならいざ知らず、かりにも義を重んじ情けを知る武士、殊に天下の豪傑ともあろうものが、いったんいわぬと申したらどこまでもいわぬのはもっともな次第、われわれ義兄弟の者六人がここにまかりあるからは、指一本たりとも猿飛に触れさすことは相成らん」

望「強って拷問なさるとあらば、腕ずくでやって見さっしゃい」

海「そうだそうだ、ご主人より預かりきたいせつなこの猿飛、拷問などとは不都合千万じゃ」

穴「次第によってはお家のため、一家老などとはいわさぬぞ」

覚「ご家老、ご返事はなんとでござるっ」

まるで六人の勇士は必死の色を現して、けんか腰でつめよった。かねてから幸村殿おつきの七勇士の荒々しいのを知っているから、さすがの伊勢崎五郎兵衛も、なんとなく薄っ気味悪くなってもじもじしている。このとき、安房守昌幸殿、

昌「やあいずれも控えよ、穏やかならざるただ今の振る舞い、かりにも予の一家老に向かってその有り様は何事なるぞ、この度の事件は、事小なるに似たれども捨て置くことは相成らぬ。猿飛がいかに義を守ってその姓を申さずとも曲者を逃げつかわしたる落ち度は落ち度、よってその曲者出るまでは、猿飛は相木源之助の屋敷へ預け置く、さよう心得よ」

こうなると鶴の一声、六人の勇士も、

皆「はっ」と、平伏した。ほっと安堵の胸をなで下ろしたのは、五郎兵衛でございます。六勇士の面々も新御殿へ立ち帰って、若殿へ委細のことを申し上げました。

捕らえてびっくり、しまったり

本丸より立ち帰りました六勇士、早速若殿へこれこれと申し上げますと、

幸「あはは……そうであったか、よしよし、ついては海野、穴山、その方両人は先刻申しつけたる通りにいたせ……」

両「はっ、かしこまりました」

と、両人直ちにそこを立っていずこかへ出かけました。

早くも日は暮れてあたりは薄暗くなったころ、伊勢崎五郎兵衛の屋敷の門前へぬっと現れた覆面の曲者二人、これなん穴山、海野の両人でございます。

穴「おいどうした。海野、さっぱりだれも出てこないではないか」

海「いや、そう焦ってはいかぬ、もう出て来るに違いない、穴山、きさまはそっちの塀にひっついておれ、おれはこっちの塀にひっついている」

すると、通用門をギイーッと開けて、ひょろひょろ千鳥足で出て来た一人の武士、

武「げーっぷ、ああいい心持ちに酔った、……若様をおだてて楓どのを奪ってはきたものの、こうまで大事件になろうとは思わなかった。猿飛というやつ、敵ながらあっぱれなやつ、うっかりこのことが露見したら一大事、今夜のうちにどこかへ隠さねばなるまい」

この武士こそ五郎三郎に悪知恵を授けた松田源五郎、あたりにだれもいないと思うから、酒がいわすか、思わずもらす独り言、天に口なし人をしていわしむ、とはこのことでございましょう。これを聞いた穴山、海野の両人、たちまちその所へどっと躍り出し、海野は猿臂をのばしてそやつのえり首をぐっとひっつかみ、

海「こいつ」

といいながら、その男の顔を眺めると、

海「ややっ、きさまは伊勢崎五郎三郎のごま坊主の松田源五郎だな」

穴「なにっ、こいつが源五郎か、どうりで、源五郎鮒みたいな鼻だ」

と、いっているところへ海野六郎げんこつ固めて源五郎の右の横っ面をポカリッ。

源「痛いっ、どうぞ、おたおたおたすけ」

穴「なにがおたおただ……えいっ、おれもこうしてくれる」

いいかけて、今度は穴山が源五郎の左の横っ面をポカリッ。

源「痛いっ、もうご勘弁を……おたすけ下さいまし」

二人にかわりがわり右と左にアッパーを食っちゃたまりません。源五郎はすっかりグロッキーになって、ダウンの一歩手前でふらふらになってしまった。

海「おい穴山、縛りあげろ」

穴「よしよし」

と、二人がかりでぐるぐる巻きに縛り上げてしまった。こうなれば、源五郎はもう酔いなんかどこかへ吹っ飛んで、ぶるぶる震えている。

海「やいっ、源五郎、よくもよくも従妹の楓を奪ったな、どこへ隠したか白状しろっ」

源「いえいえとんでもない、拙者はなにも知らぬこと」

穴「こら、いまさらしらを切っても許さぬぞ、白状しなければ、しないでもよい、体にいわせる」

またしても、両人がポカポカポカッと殴りつけたから、源五郎ヒイヒイ悲鳴をあげている。構わず猿轡をして片隅へほうり出し、なお様子をうかがっております。

と、今度は正門の大戸がギギイーィと八文字に押し開かれて、一挺の駕籠が出て来た。四五人の侍がそれを警護してスタスタやって来る。ところへ、左右から躍り出した黒装束の二人、駕籠の前に立ち塞がり、

穴「その駕籠待った、駕籠の中の主人に用がある」
と、いうより早く、真っ先に立った一人を押し倒した。
武「やあ狼藉者っ、油断召さるなっ」
覆面の二人に対して、身構えた。
海「やあちょこざいなうじ虫どもっ」
ここで、両豪傑、武士を相手に大乱闘といいたいが、両豪傑に会ってはたまらない、またたく間に打ち倒されてしまった。海野が、駕籠の垂れ戸をけ倒して見ると、こはいかに、楓が猿轡をされていた。
海「やっ、楓どのではないか、六郎じゃ気をしっかりさっしゃい、若殿の仰せでそなたを助けに来たっ」
猿轡をとり縛めを解いてやると楓は夢に夢見る心地、
楓「おお六郎さま、ありがとうございます、して猿飛さまは」
海「こらっ、こんなところ……猿飛などどうでもいい、礼などはいうに及ばん、早く」
急いで楓を助け出す、そのとき、行く手にあたって、なにやらガヤガヤいい合って来る三四人の人声、
○「おいみんな、なんと若殿も気がきかんではないか、海野と穴山に仕事をいいつけて、われわれ四人を打っちゃって置くとはあまりにもひどすぎる」
△「そうだそうだ、少々おもしろくない、おれはどうも伊勢崎五郎三郎というやつが怪しいとにらんでいるがどうだ」

×「怪しかろうが、そうでなかろうが構うものか、だいたいあいつは気に入らぬ、虎の威をかる狐というのはあいつのことだ」
○「あんなやつはこういうときに制裁を加えてやらんといかんて、のう」
△「なんでもかまわぬから、五郎三郎をやっつけてみろ、まかり間違ったら申し訳けに、若君さまの御前で腹切って死ぬばかりだ、さあ乗り込め」
こちらは海野と穴山、――どうもあの声は三好らしい――ひとつ驚かしてやろうと考えたから、もうすぐそばにくるまでじーっとこらえていたが、真っ暗だから分からない。清海入道の一行向こう見ずに正門さしてやって来ると、三好清海入道なにかにつまずいた。
清「こんな大道の真ん中に……ははあ、海野、穴山の両人はどうやら仕事をしたらしいぞ」
覚「うむ、いまいましいやつだ、ではもう楓どのを助けて帰ったのかも知れんぞ」
伊「なに、われわれの目的は楓どのではない、五郎三郎に用があるのだ」
清「そうだ、幸いに門は開けてある、さあ乗り込め」
その折しも、門内よりドヤドヤッと十七八人が出てこちらへやってまいります。
その先に立って来たのは、これぞ伊勢崎五郎三郎、片手に提灯を高くかかげ、片手に抜きはなった太刀をひっさげ、
五「こりゃ八助、曲者はどこじゃ」
八「へえ、若さま、そこで……」
そろそろ駕籠のそばへ立ち寄ろうとしたとき、闇の中より、ばらばらっと躍り出した四人の勇士、三好清海入道はいきなり五郎三郎に飛びかかり、

清「やあ、きさまは五郎三郎、神妙にいたせっ」
いきなり利き腕をひっつかんで肩に担いで岩石落とし、ズッテンドウと投げつける、驚いた五郎三郎起き上がろうとするところを、今度は望月六郎、
望「やいやい、じたばたするな、こうしてくれるぞっ」
と、いってやにわに鼻っ面に強烈なストレートパンチをくらわせたから、パッと鮮血が散った。
五郎三郎すっかりグロッキーになったが、まだダウンはしない。これを見た伊三入道、
伊「おれにも殴らせろっ、腕がむずむずしてきた」
グロッキーになっている五郎三郎に左右のダブルパンチ、五郎三郎は、ねこにじゃらされるねずみそっくりであっちへふらふら、こっちへふらふら、よくもダウンしないと思うくらいでございます。
清「おい、望月、もういい加減にして縛り上げろ」
そこで、四人総がかりで持って来た荒縄で五郎三郎の体をぐるぐる巻きつけた。まるで鉄道の荷物の荷造りだ。この様をながめた家来の面々――曲者を召し捕れっ――と斬ってかかったが、四勇士、
四人「やあやあ一人二人は面倒だ、束になって来いっ」
こうなると、清海入道兄弟はお得意の大暴れ、つかんでは投げ、よせては倒し、岩石落としに、空気投げ、力道山得意とする空手チョップ、ばったばったとうち倒し、うち投げるこの勢いにひるんだ家来ども、くもの子散らすように逃げたといいたいが、体が地べたに食い込んでいる

から動けない。なんのことはない、もぐらが半身を出して娑婆を見物している格好でございます。
こっちの塀際でこの様子を見て取った海野に穴山に楓の三人、四人組が大暴れをはじめたのを見るとたまらなくなって、加勢に飛び出ようといたしましたが、若殿が定めしお待ち兼ねだと思ったので、三人はそのまま闇に紛れて新御殿へ立ち帰ってまいりました。

一を知って、二を知らぬ

四人の勇士の小気味よい働きで、五郎三郎はみごとに打ち据えましたので、それを担いで帰ろうとすると、そのそばで、ウーム、ウームうなっている者がある。伊三入道それを引き起こし、薄い星明かりに顔を近づけて見ると松田源五郎だ。
伊「やっ、こいつは五郎三郎の巾着侍松田源五郎だ、こいつはその駕籠の中へほうり込め」
清「おい望月、先棒担げ、伊三きさまは後棒だ」
四人がかわりがわりに駕籠をかつぎ帰ってまいりました上田城の裏門、ひとまず番卒小屋に両人をほうり込み、番卒どもに見張りをいいつけてその夜はそのまま休み、翌朝になると、四人うちそろって幸村殿にお目通り、しかじかと申し上げる、幸村殿は、昨晩すでに海野と穴山から事の次第を申し上げてあったから、別に驚かれた様子もなく、
幸「あはは…大儀大儀、その方らのことはすでに聞き及んでいる。苦しゅうない、両人をここ

へ連れてまいれ」

皆「はっ」と答えて、両人を御前へ連れて来た。そこで幸村殿は、言葉優しく証拠をもってお尋ねになると、五郎三郎も源五郎もすでに観念しておりますから、ことごとく白状をいたしました。

そこで幸村殿は、六人の勇士に命じて、しかじかと計略を授け、本丸へひっ立てさせられました。六人は直ちに本丸へ出かけ、一室に両人を閉じ込め置き、望月六郎は、老臣勇士の居ならぶ大広間へまいり、

望「ははっ……ご家老様に申し上げまする」

伊「なんじゃ」

望「はい、ただ今前夜の曲者を首尾よく召し捕り、次の間に控えさせてございますが、なにとぞ特別のお慈悲をもって、寛大なるご処置を願い上げ奉ります、本人はもちろん、親類縁者に至るまで、なにとぞおとがめなきよう」

伊「黙れっ、名乗り出た曲者なれば許してやらぬこともないが、召し捕られたる者は当人は切腹、親類縁者に至るまで厳罰に処するといい渡してあるわ」

望「でもございましょうが、それではあまり気の毒」

伊「何が気の毒じゃ、不埒極まる曲者、あくまで厳罰に処してつかわすぞ、早く引けっ」

どこまでも、曲者がわが子だとは知る由もない五郎兵衛、――こりゃきっと新御殿の者のしわざだから、あんな命ごいをしているのだろう、いったい新御殿のやつらは気にくわない――と思ったから、元来意地の悪い五郎兵衛はどうしても聞き入れません。

望「いや、これまで心を配ってお願い申してもお聞き入れがなければやむを得ませぬ、後悔召さるな、……やあやあお次に控えし五人の者、召し捕ったる曲者を早ここへひっ立てえっ」

大音に呼ばわる声に応じて、次の襖を押し開き縄付きのまま二人の曲者を引っ立てて来た。五郎兵衛は果たして曲者は何者なるかと、目をすえてきっとにらみつけている。五人の勇士は、二人をその場へ引きすえ、

清「はっ、わが君様はじめ一座の方々、これなる両人が前夜の曲者でございます、こちらが伊勢崎五郎三郎、こちらが伊勢崎家家来松田源五郎にございます」

と披露に及ぶ、両人とも下うつむいておりますから、清海入道、

清「これ、面をあげてご家老様にお目にかけろっ」

わざと髷を引っつかんでぐいっと面を上げる、ちらり眺めた伊勢崎五郎兵衛、

伊「ややっ、その方は五郎三郎……して源五郎」と、腰を抜かさんばかりに打ち驚き、なんともかともいえないような渋面をつくって、面目なげに下うつむいてしまった。今までの強気はどこへやら、恥を知るだけしおらしい。して見るとワンマンの方がしたたか者でございます。

すると、侍大将海野太郎左衛門は、じりじりとにじりいで、

太「あいやご家老、拙者の娘を奪い去った曲者が出た上は、どうか当人切腹、親類縁者はそれぞれ厳罰に処して頂きたい、今まではわが娘のことでござるから差し控えておりましたが、かく曲者を召し捕らえたからはお申し渡しが願いたい、ご返答いかがでござる」

太郎左衛門にこう詰めよられたが、

伊「うーむ」といったきり、言葉に詰まって一言半句もいい出せず、このワンマンはコップの水

を引っかけるどころか、冷や汗は背筋をつたってたらたらと流れている。一座の面々口にこそいいませんが、顔を見合わせてあざわらっております。この場の空気をじーっとご覧になった安房守昌幸殿やおら口を開き、

昌「やよ五郎兵衛、藪をつついて蛇を出すとはこのことであろう、以来はよく気をつけるがよかろう、あいや、一同の者、それなる曲者の処置は予において少しく考えがある、よってなんじらが調べるに及ばず、まず両人のものは、屋敷に引き取り謹慎いたしおれっ」

まことに寛大なるお言葉でございます。五郎兵衛はその場にいたたまらず、いつかこそこそと退出してしまいました。

後に安房守殿は両人を召されて、

昌「以後は必ず改心いたし、人の道を忘れるな」

と、懇々とお諭しになった上にお帰しになった。

そのことを聞いた六勇士は、荒々しく御前へ進みいで、

一同「大殿様へ申し上げます」

昌「何事じゃ」

一同「われわれ六人が艱難して召し捕ったる曲者を、一応のおとがめもなく、お許しになるとは、はなはだ御意を得ませぬ、どうかかねてお触れの通り、厳罰に処して頂きとう存じます」

と、申し上げますと、安房守はニッコリと打ち笑いながら、

昌「あははは、なんじらの申すところ、もっともなれど、それは一を知って二を知らぬと申すもの、……それは立ち帰って幸村に尋ねてみるがよかろう」

と仰せられるばかりで笑っておられます。

このことを聞いた六勇士の面々、どうもおもしろくない。

清「おい、こんなばかばかしいことがあるか、どうもけしからん」

覚「そうだそうだ、これから若殿にひとつ伺った上、断固たる処置を取ろう」

清「断固たる処置というのはどんなことをするのだ」

覚「分からんやつじゃな、まごまごしたら、伊勢崎親子の首を打ちはねて、われわれも潔く腹かっさばいて死ぬのだ」

清「それはいい考えだ」

早速六勇士うち連れて若殿の御前へまかり出ましたが、いずれもぷりぷりしております。

清「はっ、若殿様、われわれは残念でたまりませぬ」

幸「ははあ、みなの者だいぶきげんがよくないようじゃな」

清「はい、実はしかじかかよう、大殿さまは帰って幸村に尋ねろとおっしゃいました」

幸「うむ、さようか、それは父上の仰せらるる通り、そちらは一を知って二を知らぬと申すものじゃ、いや、聞けよ、もしも伊勢崎五郎三郎と松田源五郎の両人を相当の罪に処すれば、やはり、一存にて曲者を逃した猿飛佐助も罪におとさねばならぬ、よってこれは両人を許してつかわせば、佐助も罪に行わずにすむという深きおぼしめしである、分かったか」

聞いた六勇士、いまさらながら幸村殿の思慮あるところに感心いたしました。幸村殿は海野六郎に命じて相木の屋敷におります猿飛佐助を引き取らせました。

そこで、昌幸殿には家臣を集めて、伊勢崎五郎兵衛親子の身について評議されました。元来こ

の伊勢崎五郎兵衛は真田家恩顧の家臣でありながら、ややもすると情誼を敵国の者に通じて、おもしろからぬことがたびたびあったことを、大殿も若殿もよくご存じで、この親子は真田家には害あって益なき人物であるとおぼしめしておいでになった矢先にこの事件が起きた。

こういうことになると、恐らく今夜あたり城下を逃げ出すかも知れない、いっそ家臣への見せしめに、打ち果たしてしまう方がよかろうという相談になりましたので、いよいよ猿飛佐助の活躍ということに相成ります。

佐助、沼田城内を騒がす

そこで、猿飛佐助をお召しになって、

昌「やよ、猿飛、近うまいれ」佐「はっ」

佐助、前に進み出ますと、

昌「察するに伊勢崎親子は、このまま当家に出仕することはできまい、さすれば今夜一族郎党をまとめてひそかに他国へ走るに相違ない、さればなんじこれよりその後をつけて、落ちつく先をとくと見定め、場合によっては、たとえその先が隣国大名の城内でも苦しくないから、忍び込み、親子の首を上げて持ち帰れ、この役はその方でなくば勤まり難い、しかと申しつけたぞ」

佐「ははっ、かしこまりましてございます。ご当家にお仕え申してより既に四年、まだなんの

功も上げませぬわたくし、必ずともに当人の首をひっさげて立ち帰ってまいります」

これを聞くと他の六勇士が黙ってはおりませぬ、こそこそ額を集めて、なにやら抜けがけの功名をやろうと作戦を計っているのをちらっとご覧になった幸村殿、

幸「六人の者の気持ちはよく相分かるが、この度のことは表向きにいたすことはできぬ、猿飛の忍びの術でのうてはかなわぬ、六人の者の働くべき時は必ずまいるから、決して抜けがけの功を競っては相成らぬぞ、猿飛の働きにより、十日前後には戦争が起きるようなことに相成る、それまでしばらくおとなしくいたしてくれよ」

と、たしなめられた。戦争と聞いて、小躍りして打ち喜んだ六勇士、

清「これは有り難い、……おい猿飛、なるたけ大きな戦争になるよう頼むぞ」

覚「聞いただけで、腕がむずむずしてきたぞ」

清「おれたちの日ごろの腕の力が現せる」

物騒な連中もあったもの、いずれも血気盛んな勇士ぞろいでございますから、猿飛一人を残して、大いに力み返ってその場は立ち去りました。

幸「やよ佐助、伊勢崎親子の者は、隣国沼田の城主、竹由新兵衛のもとへまいるに相違ない、その方も存じおる通り、予の家と竹由家とは日ごろよりにらみ合い、事あらば……と虎視眈々といたしおる間柄じゃ、されば伊勢崎親子が討たれたるを憤り、この上田城を攻め来るは必定、当方としては、その機会に彼を打ち滅ぼす所存、されば油断なく伊勢崎親子を討ち取りまいれよ」

佐「はっ、かしこまりました。年来覚えたる忍術の武術により、首尾よく仕とげてご覧に入れます」

と、それより自分の部屋へ引き下がり、十分に身支度に及び、日の暮れるのを待ち受け、上田城を立ちいでました。

お話変わって、こちら伊勢崎五郎兵衛は、自分の屋敷へ立ち帰りましたが、家来に命じて五郎三郎を呼び寄せ、

伊「これ五郎三郎、困ったことをしでかしたな、明日より殿中へ出仕いたす訳にも相成るまい。なんとか身の振り方を考えねばならぬ」

五「はい、どうも申し訳ございません」

親子の者はしきりに思案に暮れておりますところへ、襖押し開けて、ずいと入ってまいりましたのは、五郎兵衛のお気に入りの家来芥川紋右衛門、この紋右衛門というのは、実は隣国沼田の城主竹由新兵衛の間者で、真田家の様子を探るため、五郎兵衛の家来に入り込んでいたものでございます。

五「おお、紋右衛門ではないか、なにか用かな」

紋「はい、いえ……実はただ今、子細のことは襖越しに承り申しました。ご両所にはたいそうお困りのご様子、……なあに、この上田にばかり日は照るのではござらぬ。ご心配はご無用ではござらぬか」

五「なんと……意味ありげなその言葉、しからば、その方になにかよい思案でもあるか」

紋「はい、このしおを幸い、あなた様方は、かねてご懇意の沼田の大将竹由新兵衛殿にお仕官替えなされてはいかがでございます。きっと重くお用い下さると存じます。そうなさりませ」

五「おお、それはよいところへ気がついた……予も竹由殿には少なからず恩顧に預かっておる

……しかし今さら頼っても……その方は平素より竹由殿をたいそうほめておるが、なにか因縁でもあるのか」

紋「はい、今だから申し上げまするが、実は拙者は竹由家の家臣」

五「えっ、その方は間者」

紋「そのご不審ごもっとも、……もしもあなた様が真実真田家にお背きなさるならば、竹由家へご推薦いたします」

そこで、紋右衛門から、言葉巧みにいいまくられましたから、五郎兵衛としては、願ってもないところ、渡りに舟と喜び、委細を紋右衛門に頼みました。事なれりと、心中ニヤリほくそえんだ紋右衛門、事はいそげ、気が変わらぬうちだと思うから、

紋「そこで、ご主人、そうと話が決まりましたら、一刻もご猶予はなりませぬ。真田親子は目から鼻に抜けるような優れた眼力、ぐずぐずしておっては露見のもと、今宵のうちにも脱出するが上々と存じます」

と、せきたて、たきつけられたから、たださえ、心の落ち着きを失っている伊勢崎親子は、早速一族郎党七十有余人に、このことを申し渡して、直ちに逃げ出しの仕度を命じました。

×「おいおい、若様が女に振られて夜逃げだとよ、世の中が変わってきたな、よせばいいに選ぶに事かいて、猿飛というれっきとした夫の決まった女をなにも盗むことはねえよ」

△「女ってえものは、男に取ってはやっかいなもんだなあ、惚れりゃあつけ上がり、殺しゃあ化けて出るし、盗みゃあ首になるし……」

○「色と金とは身を滅ぼすとはよくいったもんだなあ」

×「だけどよ、金せえあれば、少しの間臭え飯を食っただけで、罪にならないのもあるし、女も女で、自分が知らねえうちにリベートの金で売り買いされてる世の中だからな」

ぶつぶついいながら、郎党片づけをしていましたが、夜になるのを待ちかねて、芥川紋右衛門の案内で、上田城を逃げ出し、沼田をさして急ぎました。

こちらは猿飛、日が暮れるのを待って、伊勢崎方へ来て見ると、案の定、主人のいった様なことに相成りましたから、

佐「うむ、ご主人のお察しの通りであったわい、にっくき不忠者め……、今に見ろ、城内をひっくり返すような騒ぎを起こしてやるぞ」

と、決心した。こんな物騒なやつにねらわれたものこそいい災難でございます。

一方、この沼田の城主竹由新兵衛は、折あらば、真田家を打ち滅ぼし、つづいて武田家と一戦に及ぼうと野望を抱いておりましたところへ、芥川紋右衛門の働きで真田家の一家老が一族を引き連れて降参して来るということになりましたから、まさか真田方で先手が打ってあるとは思わない、――真田家を滅ぼすのは近いと、内心ほくそえんでおります。

そこで伊勢崎親子が入城したのを機会にして、さい先を祝うために酒宴をいたすことに相成りました。

これを忍術の力で早くも知った猿飛佐助、

佐「うーむ、ばかめが、……ちょこざいなり、よし、この透きに一番これから城内に忍び入り、伊勢崎親子の首をちょん斬ってやろう」

十分に仕度をして、沼田城の搦め手へやってきて、あたりの様子をじーっとうかがっておりま

したが、ヤッと大地をけったかと思うと、二丈ばかりある黒板塀をひらりと乗り越え、内部へ飛び下りた。

佐「いで、これよりひとつテストしてやろう」

あちらこちらの木戸を通り抜け、ようやく本丸の玄関口へ差しかかりますと、一間の中に若武者三人、膳部を前にして、しきりにちびりちびりやっている。

それを見た猿飛佐助、口になにか、呪文を唱えて、ヤッと気合いをかけると、もう佐助の姿は見えなくなった。

三人のそばへやって来たが、佐助の姿は見えない様子、佐助はひとつけんかをさせてやろうと思ったので、そばにあるとっくりを取って、独り酌であけてしまった。それとは知らぬ一人の武士、

○「ああいい心持ちに酔った、酒はいくらもある、ひとつ拙者が酌をいたそう」

×「これはこれは鈴木氏のお酌とはかたじけない」

と杯を出して受けようとしたが、そのとっくりに酒は一滴もございません。

×「おやっ、このとっくりは今持って来たばかりなのに……ははあ鈴木氏、これはけしからぬ」

○「拙者がいかがいたした」

×「どうも貴公、静かだと思ったら、みな独りで飲んだな、それはあまりひどいではござらぬか」

○「おいおい松本氏、なにをいうか、拙者は一向にさようなことは存ぜぬぞ……やれ、拙者の肴がない……松本氏そなたこそ……拙者の肴を……体裁が悪いので、拙者にぬれぎぬをきせたな」

×「いや拙者はそのようなエチケットに反するようなことはいたさぬ」
○「知らぬといわれるが、現にないではないか」
△「不思議と申せば、拙者のはしがないと思ったら松本氏の膳の上にある」
×「工藤氏、お身は杯を二つ膳に置いて、……さては貴公だな、酒を独り飲みしたのは……」
口でいい争っていると、一人の頭を殴ったから、
×「これはしたり、だれか、拙者の頭を殴ったな」
△「だれだ拙者の耳を引っ張るのは」
○「だだだだ、だれじゃ……あれ、とっくりが空中に舞い上がったぞ、あれ皿が、あれ杯が、これはどうしたことじゃ」
といっていると、
×「あれ拙者の頭をまた殴ったな」
と、二人が今にも、つかみ合いになろうとすると、工藤という若侍が立って、それを仲裁しようとすると、その髷をつかんでぐっと引っ張ったから、
○「痛い、痛い、これはしたり、仲裁人の髷をつかんだのはだれじゃ」
少し酒が回っているところへこんないたずらをされたから、とうとう殴り合い突き合いが始まった。
まず第一テストはこれで成功した——とその透きに、猿飛、そのままずんずん奥座敷へ来て見ると、正面には竹由新兵衛、その左右には竹由家の老臣勇士がずらりと居並び、少しく下がって伊勢崎五郎兵衛親子、はるかに下がって、伊勢崎の一族郎党が列を正しており、酒宴はただ今た

けなわでございます。
竹由新兵衛は、脇息によりかかりこの様を見てすこぶる満悦の体、
新「これ、伊勢崎五郎兵衛、苦しゅうない過ごせ過ごせ、これよりなんじを先手として上田城に攻め込み、真田父子を討ち取るか、降参させるか、二つに一つの手詰めの戦じゃ、勝利は見えたぞっ、ああ、めでたやめでたや、者ども酒持て酒持て」
と、上きげんで酒をしきりに傾けている。伊勢崎五郎兵衛大いに面目を施して、竹由家の老臣勇士と杯を取り交わし、いい気なもので真田家の悪口を物語り、自分の方に落ち度のあったことなど少しも口にいたしません。えてしてこういう人間はいるもので、こうもりのような人間というやつで、どっちにいっても体裁のいいことをいってばかりいます。
猿飛佐助、大広間の入り口に突っ立ち、はるかにこの様をながめたから、怒り心頭に発し、
佐「おお人面獣心とはきゃつのことか、伊勢崎親子のやつ、いでその首はそのままにはすて置かぬぞっ」
姿の見えぬを幸い、直ちに進み出て素っ首討ち落とそうといたしましたが、いっそ新兵衛の手で斬らせてやろうと考えた。
五郎兵衛、新兵衛はじめ重臣勇士からちやほやされたからいい気なもの。
五郎兵衛、新兵衛の前へまいりまして、
五「この度は特別のおぼしめしをもちましてお取り立てに預かり、衷心よりお礼申し上げる。先程より、真田家へ攻め立てのお話を承りましたが、その節にはなんなりお申しつけに預かりたい……時は今にござります、先んじて敵を制せらるるが上々と心得申す」

これを聞いて、猿飛ますます怒り、

猿「こいつめが、よし、そろそろ仕事にかかるか」

ずかずかと、新兵衛の背後にやってまいりまして、今しも竹由新兵衛が伊勢崎に杯を取らせようと、差し出しますところを、横合いからその杯をぐんと引ったくったから、新兵衛怒ったのなんの、

新「これやい、伊勢崎っ、無礼であろうぞ、なんの遺恨ありて予のさしたる杯を奪いとった、次第によっては容赦いたさぬぞっ」

青筋立てて猛り立つ、

伊「御前、これはしたり、わたくしはこの通り先ほどよりてまえの杯を持っております」

しきりにいい訳をしていると、今度佐助は酒どっくりを取って膳の上にこぼしながら、いきなり新兵衛の横髪を引っ張った、それがどう考えても、五郎兵衛のしわざとしか受けとれない、

新「こらっ、なんだこの酒は……、しかのみならず身どもの横髪を引っ張るとは……えい、もう勘弁ならぬ」

元来、気短の新兵衛、気違い水といわれる酒が回っているからたまりません、傍らの小姓の持っている大刀抜くよと見えたが、いきなり五郎兵衛の肩先目がけて斬り下げたから、なんじょうたまりましょう、不意をつかれて五郎兵衛身をかわす暇もなく「うわっ」といったのがこの世の名残、血煙立ててそのところにばったり倒れた。

この有り様を見たせがれの五郎三郎、

五「やっ、これは父上……」

と、ばらばらっと駆けつけて来たのを見た新兵衛、坊主憎けりゃ袈裟までものたとえ、物をもいわずに飛びかかって、袈裟がけに斬り下ろしてしまった。

この騒ぎに酒宴は上を下へとざわめき立ち、伊勢崎の郎党も驚いて総立ちになったが、そのとき、血刀下げた新兵衛、

新「窮鳥懐に入るときは、猟師もこれを殺さずと申す、伊勢崎五郎兵衛、芥川紋右衛門を通じて、われに降参してまいったにより、これを救いつかわしたるに、ただ今の振る舞い、言語道断なり、よって親子もろとも一刀両断に成敗いたした。なんじら主人の敵として予に立ち向かう者はおらぬか、それともわれに従わんと思う者はただ今臣下になれ」

と、いわれたときに、伊勢崎の股肱といわれたごまのすり、松田源五郎進みいで、

源「お殿様に申し上げます、松田源五郎総代となりましてお願い申し上げます。伊勢崎の家臣一同なにとぞ当家の臣下にお加え下さいますよう……」

と、願い出た。

これを見た猿飛佐助、――なんたる腰抜けぞろいだ、源五郎というやつ、どだいけしからぬやつじゃ、こうしてくれよう――と思ったから、ずかずかと源五郎のそばへ進みより、やにわに斬り下ろした一刀、源五郎の首が前へポロリと落ちた。

居ならぶ人々――あれよあれよ――と立ち騒ぐうちに、

佐「驚いたか、竹由新兵衛はじめ、一同の奴輩、わが計略にかかって伊勢崎親子ならびにその臣を討ち果たしたり、これことごとく身よりいでし天罰なり、あははは」

大音声に呼ばわる声は聞こえるのですが、姿は見えない。

これを聞いて新兵衛怒りの声するどく、

新「やっ、何者なるかっ」

と、ぎょろぎょろあたりを見回している。

佐「あいや、遠からん者は音にも聞け、近くば寄って目にも見よ、われこそは、信州上田の城主真田安房守昌幸殿の一子、与三郎幸村の郎党にして、忍術の大名人と呼ばわれたる猿飛佐助幸吉とは拙者のことなり、主君の仰せにより伊勢崎親子を討ち取らんがため、当城内へ忍び込み、姿を隠して仕組んだる仕事、竹由新兵衛、なんじの首をひっさげ帰るはいと易けれど、特別の慈悲をもって今しばらくの間娑婆の臭いをかがしてつかわす……いでわが姿を現してやるから、きりきりよっく、拝めっ」

と、大音声を放ったかと思うと、大広間の入り口にあたって、猿飛佐助の姿が彼方にすーと現れた。

――ややっ、己れ憎き猿飛っ――と一座の者ども立ち騒ぐ中を、猿飛佐助は、伊勢崎親子のそばに飛び込むざま、手早く両人の首を斬り落として左手にひっさげ、右手に大刀を振りかざし、

佐「やあ、木っ端ども、ならば手柄に召し捕って見よっ」

この勢いにのまれて、ただわいわい騒いでいるばかり、だれも追いかけるものはございません、ますます怒りの声を絞り立て、

新「ふがいなき者どもかな、いで、予が打ち取りくれん」

いいも終わらざるところへ立ちいでたは名和修理之助秀春、

秀「あいや、わが君、下郎を討ち果たすに殿のお手を下さずとも、拙者がみんごときゃつの素っ

首討ち落としてご覧に入れまする……やあ下郎覚悟っ」

名に聞こえた大兵肥満、竹由家名代の豪傑、大身の槍をリュウリュウと引きしごき、ブスリッと突いてかかる、心得たりと佐助、受けつ流しつ、右に左にかわしていましたが、いかなる透きを見いだしたか、

修「えいっ」と突いてかかる、あわや佐助は田楽刺しになったかと思いきや、佐助の姿は見えませぬ。

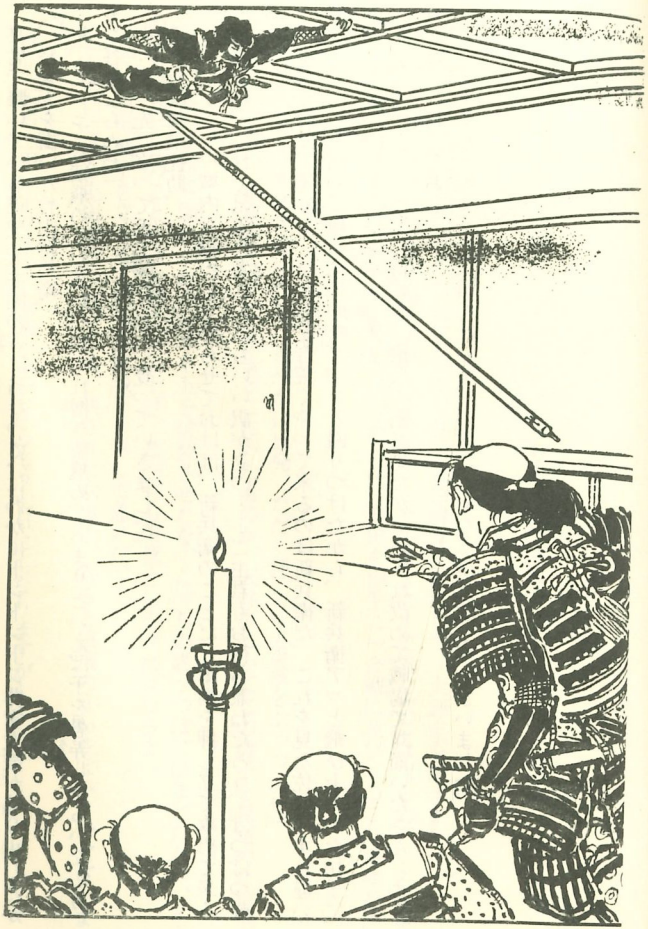
佐「ここだここだ」と上の方で声がする。修理之助、ひょいと見上げると、佐助の体は天井にはりついている。

修「ややっ、奇っ怪なるやつ、こうしてくれん」

と、佐助目がけて槍を投げつければ、パッと煙を立てたかと思うと、新兵衛のそばにあった火ばちから炎がぼうぼうと燃えさかった。これなん火遁の術だ。人々立ち騒ぐうちに、猿飛の姿はどこへやらかき消え、修理之助の槍が天井板に突きささっているだけでございます。

佐助としては、ここで新兵衛はじめ家臣勇士の首を片っ端から斬り落とすのは、いと易いのですが、主君の仰せ通り伊勢崎親子の首を斬り取り、おまけに源五郎の首まで落とした、それにここで自分だけ働いても、自分の帰りを待ちわびている六勇士の戦争の種になる土産を持っていかなければならないと思ったから、一同が燃え盛る炎の方に気を取られているうちに、やってまいりましたのは天主閣の上、

佐「よし今度は戦争の準備だ」とばかり、そこにあったる大太鼓を、めったやたらに打ちつけた。



宴席で騒いでいる連中、天主閣の方に当たって、にわかにドンドンドン非常太鼓が鳴り出したから、怒髪天を衝いた竹由新兵衛、

新「またしても猿飛のしわざか、おのれ憎き猿飛め、あまりといえば予を愚弄したるいたし方、もう容赦ならぬわ」

と、真っ先に立って天主閣さして、登っていきました。

こちらは猿飛佐助、

佐「このくらい城内を騒がして怒らせておけば、新兵衛のことだ、軍馬を押し立て攻めて来るに相違ない、これで兄弟の者たちにもいい訳が立つ……ご主君もお待ち兼ねだろう、ぼつぼつ帰ろうか」

天主閣を降りて来ると、下から足音荒くやって来るのは新兵衛だ、これを見た佐助、すれ違いざま、こぶしを固めて新兵衛の頭をグワンと殴りつけたから、新兵衛アッと飛び上がった拍子に足滑らしてコロコロッと転がり落ちた。

佐「あはは……、どうだ新兵衛、猿飛の腕前見たか、いずれ改めて戦場で対面いたさん、よく首を洗って待っておれっ」

あくまでじらせるような大言を吐いて、いずことなく消え散じてしまいました。

気合い一声！　人馬もろとも投げ飛ばす

その翌日、沼田城内にあっては竹由新兵衛、老臣勇士を前にして、大評定を開きました。

新「かくまで猿飛ごとき下郎にもてあそばれて、そのままにすて置く訳にはならぬ、……豪勇をもって聞こえたる予が家の恥辱、かくなる上は、真田を相手に一合戦に及び、ここに勝敗を決せねばならぬ」

と、いい放ち、一座をずーと見回し、

新「直ちに、軍馬の用意いたし、速やかに出発、ただ一押しに上田城をぶっつぶせ」

下知に及んだ。前夜姿を消したままどこにいたものか、天井裏にいてこの様子を見定めた猿飛佐助、

佐「いよいよ新兵衛め、かんしゃく玉を破裂させたな、こっちの思うつぼにはまったわい、さあ早く帰ってこのことをご主君に申し上げ、こっちも用意をしなければなるまい」

と、沼田の城下を立って、信州上田城下をさして急いだ。

しかるにこちら上田城内においては、残された六勇士、寄ると猿飛のうわさばかりでございます。

清「ご主君へ申し上げます、猿飛が出てからもう七日にもなりますが……」

幸「あはは……なにもそう騒ぐには及ばぬ」

清「戦争の方はいかが相成りましょう、猿飛から電話かなんかございませぬか」

幸「猿飛のことじゃ、そのへんにぬかりはなかろう、昨夜以来、われ天文を見るに、沼田の方に当たって殺気みなぎりおる様子、猿飛はだいぶあばれおると見える、このぶんでは戦争になること必定じゃ……もうそろそろ、猿飛も立ち帰るころじゃ、万一戦争がはじまらば、掛け引き万端は父上が指図を仰ぐつもりじゃ、今からあまり戦争戦争と騒ぐでないぞ」

懇々戒められて、いきり立つ六勇士は引っ込んでしまった。その夕刻、猿飛が立ち帰り、幸村殿にお目通り、それより主従うち連れ、本丸の昌幸殿の御前へいで、佐助より一部始終を申し上げまするると、昌幸殿横手を打って感心せられ、

昌「幸村、われらの思うつぼにまいったぞ、この上は直ちに軍馬の用意に及べ……先んずれば人を制すじゃ、戦の掛け引きは機先を制するにあり、途中に伏兵を設けて、新兵衛の兵を食い止め、一泡吹かしてくれん、明早朝総登城を申しつけよ」

いよいよ上田城は合戦の準備にとりかかることに相成り、その翌朝は総登城、安房守昌幸公より一同に対して、軍議評定につき意見を求められました。

このとき、与三郎幸村殿、

幸「あいやお父上、この度の竹由との合戦、なにとぞこの幸村へいっさいお任せ下されたく、日ごろ幸村が股肱と頼む七人の勇士をもって、きっと竹由新兵衛を打ち取ってご覧に入れます」

と、勇気りんりんと申し述べられました。

すると安房守昌幸殿にっこり笑い、

昌「望みとあらばなんじ一手に任すが、その軍勢は何程召し連れるか」

幸「竹由勢は三千人とのこと、されば当方は千人にてよろしいかと存じます」

昌「うむ、よくぞ申した、しからばこの度の戦いはなんじに万事任せつかわす、しかし大敵と見て恐れてもならぬが、小敵と見て侮るな、油断は大敵なるぞ」

幸「はっ承知いたしました、なにとぞ、ご安心下さるよう」

相木源之助、筧十兵衛、その他の老臣勇士の連中も、日ごろ若君幸村殿の技量には敬服しておりますから、だれ一人として危ぶむものもございませぬ。

そこで幸村殿は早速新御殿にお帰りになり、合戦の準備、七勇士はいずれも大勇み、幸村殿には直ちに一千人の軍勢を集め、夜に乗じて密かに上田城を立ち、間道を通って急行、沼田より五里ばかり手前の臼田に到着いたしました。そこで間者を放って敵の動静を探らせますと、竹由勢は明日早朝より沼田城下を出発、軍勢三千人をもって上田城へ押し寄せようという手はずだと聞いて、

幸「よしっ、しからばこの所にて待ち伏せ、三千人をみんごと追い返してくれようぞ」

と、仰せられ、七勇士に打ち向かい、

幸「清海入道兄弟には三百人の勢をもって沼田街道の片脇に陣取らせ、望月六郎は、百五十人を従えて臼田より二十町ばかり天神の森の神社側に隠れ、穴山岩千代は、二百五十人にて臼田より半里ばかり隔たる街道の右側に、猿飛佐助には、五十人を添えて遊軍となし、残る三百人は幸村自ら率いて、海野六郎、筧十蔵を左右に従え、臼田の町外れに待ち伏せいたす、者ども旗指物を巻き、馬には枚をふくませ、静まりて、竹由勢の来たるのを待ち受けよ」

と下知した。

竹由勢、城下間近にかかる計画ありとは夢にも知らず、上田城を一つぶしにせんものと、正々堂々と押し寄せてまいります。今しも臼田の町の十町ばかり手前まで来ると、突然ドーンと、天にとどろく狼火。

竹由勢はあっと驚く間もあらばこそ、ウワーッと鯨波をつくって、竹由勢の行く手にドウと現れた。竹由新兵衛、へんぽんとして翻る旗馬印を見てあれば、六文銭の旗馬印、これなん真田勢と見て取った。

新「ややや、あれなるは真田勢なるぞ、伏兵あり油断いたすな」

という折しも、ドウと駒を陣頭に乗り出したる身の丈抜群の大入道一騎、いわずと知れた清海入道、伊三入道の両人でございます。

清「やあやあそこへ来たったるは沼田城将竹由新兵衛なるか、よく聞けよ、われこそは信州上田城主真田安房守昌幸殿の一子与三郎幸村殿の郎党において、さるものありと知られたる三好清海入道、同じく伊三入道の兄弟なり、先刻より、なんじらの来たるを待つこと久し、いで合戦に及ばん」

と大声、いい終わりもせず、三百人を従え、まっしぐらに三千人の真っただ中へドウと突っ込んだ。両勇士ともに十八貫もあろうという鉄棒を苧殻のごとく振り回し、馬を卍巴と乗り立て乗り立て、暴れ出したる様は、実に悪鬼羅刹の狂いたるもかくやと思うばかり、しかし相手は三千人、味方は三百人の小勢、兄弟はここを先途と戦い、寄せ来る敵をなぎ倒し、押し返し、押しまくり、奮戦に及んでおります。これを本陣にてながめたる幸村殿、三好兄弟の戦い危うしと見

て取って、左右に控えております筧十蔵、海野六郎の両人を振りかえり、

幸「さあ、両人早く三好兄弟を助けつかわせ」

両人「はっ」と両人は、二百人を従えて駆けだし、左右横合いよりドウッとばかりに突いて入る。

三好兄弟これに力を得、一撃に五人三人ばったばったとぶっ倒し、またたく間に屍は積んで山をなし、流るる血潮は川をなす、勇猛突進その勢いは破竹の勢い、ほうれんそうを食ったポパイそっちのけ。多勢を誇る竹由勢、この勢いに押されて、たじたじと雪崩をなして敗走した。大将竹由新兵衛大いに怒り、

新「やあ、ふがいなき者どもかな、かばかりの傷手にひるむことやある、進め進め」

と自ら真っ先に馬を乗り立て、草ずり長の大鎧に半月形の前立打ったる冑を着こなし、采配もちぎれんばかりに打ち振り打ち振り、士卒を励まし陣頭指揮に及んだが、ひとたび浮き足立ったる竹由勢、ばらばらとわれ先にと逃げ出し、今しも天神の森にさして押し合いへし合い落ち延びたる折から、またしても、ウワーッと鯨波をつくって忽然と現れいでたる一隊は望月の率いる軍勢、真っ先に六文銭の旗指物を押し立て、一人の大将道の行く手に駒を乗りつけ、天地にとどろく大音声、

望「やあやあ竹由勢の腰抜けども、よーっく承れ、われこそは、真田与三郎幸村殿の郎党において、豪勇無双と呼ばれたる、望月六郎景成なり、一人たりともここを通すことはまかりならぬ、兜を脱いで降参いたせ」

と、百五十人を左右に従え破竹の勢いで斬り込んで来る。

○「こりゃたいへん、逃げろ逃げろ、いよいよ真田の計略にかかったぞ」

と、田の中、あぜ道をばらばらと逃げ出す、そのときまたしても鯨波の声もろともに二百余人を従えて、七勇士の中において大太刀遣いの名人といわれた穴山岩千代、四尺に余る陣刀、真っ向に振りかざして沼田街道さして逃げていく敵の中へ突っ込んだ。これを見た幸村殿、

幸「この機を逸せず追い討てっ」

と下知すれば、九百五十人が一手になってドウと追い駆ける、竹由新兵衛、バリバリバリと歯がみをなしてくやしがったが、全軍敗れて残兵全からず、さすがに猛き新兵衛も、後退し、今しも沼田城の手前二三十町の所まで来ると、稲むらの中よりドーッと起こる鯨波の声、忽然現れたるは、甲冑に身を固め、栗毛の馬に打ちまたがり、大身の槍を小脇に抱い込み、威風堂々と乗り出し、逃げ行く軍卒には目もくれず、大将竹由新兵衛目がけて突進するは、これなん猿飛佐助、

佐「あいや、竹由新兵衛ようっく聞け、去んぬる日、なんじの素っ首預けたる猿飛佐助幸吉なり、御大将幸村殿の下知に従い、遊軍としてなんじの来たるをここに待ち受けたり、いでや一騎打ちの勝負に及ばん」

と大身の槍をリュウリュウと引きしごき、いで一突きに及ばんと突っかかる。

いや新兵衛怒ったのなんの、

新「こざかしきかな猿飛め、よくも過日はわが城内を騒がしたり、ここに落ち合うたはなんじの運の尽き、いでその素っ首はねてくれん」

力七十五人力豪勇無双と呼ばれたる新兵衛、左右には股肱の臣、名和修理之助、安田玄蕃を従え、陣刀を水車のごとく振り回し振り回し、獅子奮迅の勢いをもって斬りかかる、佐助は心得たりと、

大身の槍をひらめかし、打てば開き、開けばつけいり、上段下段ちょうちょうはっしと秘術を尽くして三十有余合、かかるところへ味方の総勢一度にドウと押し寄せ来たったから、佐助は焦って、ヤッと大喝一声、叫んだと見ると、今まで馬上にあった猿飛の姿はたちまち消え失せた。

新「ややっ、またも忍術で逃げおったかひきょう者っ」

とあたりをきょろきょろしている。折しも佐助は新兵衛の馬の下腹へ回り、やにわに馬の前足をとって、エイッと叫んで新兵衛を乗せた馬もろともドーンと横っ倒しに投げつけた。新兵衛は馬上に居たまらず、五六間向こうへドーンと投げ出された、してやったりと猿飛佐助、躍り込まんとしたる一刹那、主君の大事と修理之助秀春、玄蕃の両人佐助をさえぎり、左右より斬ってかかる。なんといっても竹由家の名だたる勇士でございますから、そう易々とは打ち取れません。その間に新兵衛しりに帆をかけてほうほうの体で逃げ失せた。大将が逃げ出したのを見た竹由勢は、いずれも大将につづけとばかり、ばらばらと逃げ出して沼田城をさして引き上げた。このとき幸村殿、

幸「やあやあ戦いは勝利なるぞ、長追いは無用無用」と七勇士をまとめ、沼田城より二十五六町手前に野陣を張り、明日の攻め口を評定に及びました。

紅一点の女傑白絹の奮戦

こちらは沼田城内、竹由新兵衛は思わぬ敗戦を食らって命からがら逃げ帰りましたが、新兵衛の妻は白絹といって、巴や板額という女豪傑をしのぐといわれるくらいの女スーパーマン。この白絹が、

白「大の男が真田幸村ごとき弱冠に敗北を取るとはふがいなし、いでわらわが自ら寄せ手を悩ましくれん、者ども、女ながら武者ぶりをようっく見よ」

と大気炎、自ら城兵五千人に命じて、持ち場持ち場を固めさせ、射手をそろえて、待ち受けました。真田方においては間者をさし向けてこのことを承知しておりましたから、

幸「新兵衛の妻白絹といえば、新兵衛に優るとも劣らぬ勇婦、殊に軍略に秀でたるものと聞く、女と侮って思わぬ不覚を取るな」

と七勇士を集めて、それぞれ攻め口の評定をいたしました。

その翌朝になると城内はひっそりと静まり返って白絹が攻めいずる様子もございません。すると先鋒の三好兄弟は、昨日の勝利でいささか敵を侮っているので、白絹のごときなにほどのことやあらんと、五百人の手勢を引きつれて大手前近く駒を進め、

清「やあやあ城内の奴輩出て来いっ、三好兄弟ここにあり、勝敗を一挙に決せん」

この様子を見たのは、やぐらの上から、寄せ手の模様を見ておりました竹由新兵衛、

竹「それっ」と下知すれば、一度に狭間を押し開き、射手をそろえてピューピューと透き間なく射出しました。

清「これはしたり、敵方にかような計略ありしか、残念ながら引け引け」

と、さすがの三好兄弟も雨あられと飛び来る飛び道具にはかないませんから、横に開いてどんどん引き下がる。

このとき、城門をさっと八文字に押し開いて、ただ一騎現れいでた女武者、黒髪を後ろに下げ浅黄模様の衣類を着し、後ろはち巻き玉襷、薙刀を小脇にかい込んで、駒を縦横無尽に乗り回し、大音声に、といっても女だから鈴を振ったようにすみ渡る金切り声。

白「沼田城内に勇婦あるを知らざるか、わらわは新兵衛の妻白絹なり、真田の先鋒は三好兄弟と見たり、敵に後ろを見せるとはひきょうなり、遠路わざわざご苦労千万、いで、いささかわらわより陣中見舞としてごちそうな進ぜん、静まりたまえ、静まりたまえ」

と、いわれて三好兄弟怒り、きびすをかえしてどっとばかりに引き返す。このとき白絹、なに思いけん薙刀投げすて、馬上よりひらり飛び下りたと思いきや、大手門外にあったる目方百貫もあろうという大石を、むんずとばかりさし上げ、

白「やあやあ寄せ手の方々、わらわのごちそうはこれなるぞっ、お受け取り下されっ」

ヤッ……と一声力に任せて投げ出した、第二第三第四第五、……第九第十とつぎつぎに、大石を投げて来た。不意をくらってそれに当たって死するもの数知れず、三好の同勢、うろたえ騒ぐとき、白絹ひらり馬上に打ちまたがり、薙刀を水車のごとく振り回し、三好勢さして突っ込んで

来た。勢いを得て城内よりもドウと平一文字に押し出したから、さすがの豪傑三好兄弟も、はとが豆鉄砲を食らったようにほうほうの体で退散した。この有り様を見て、真田幸村殿には、全軍に対して血気の勇にはやるなと、じっと構えさせた。

戦いはここで休戦――。

昔の戦はのんきなもので、城を根じろにして出たり入ったりして、休憩時間つきの戦争とくるから時間がかかる。今なら、こんな城くらい十キロ爆弾を一つ落とせばおしまいです。

城内では新兵衛、白絹の働きで真田勢を退散させたというので、戦勝祝いの宴を張り、飲めや歌えやの大振る舞い、根性の小さい大将は困ったもので、少し分がいいとすぐこれだから、いざというときに引き締めることができない。

敗けた真田勢ではなんとかして、形勢を挽回せんものと、知勇兼備の幸村殿は七勇士を集めて、攻め手の評定おこたりなく機会の到来を待っております。

夜もようやく更けて、城内の宴は、いよいよたけなわならんとするとき、城外に当たって起こる人馬の声、ドンドンブーブージャンジャン、貝、鉦、陣太鼓、つづいて起こるウワーッという鯨波の声、昼からの祝いの酒に酔いしれた新兵衛、酔眼かっと見開いて、

新「ややっ、合点のいかぬあの人馬の声、まさしく寄せ手の攻め寄せたりとおぼえたり、これ早く鎧を出せっ」

と、うろたえる。されば歓楽の夢は一瞬にして破れ、城内は上を下への大騒ぎ。

すると、城内の方に当たって、メリメリ、バリバリという物音とともに、城門を打ち破り、ドウと押し寄せ入りたる真田勢、朝の間の敗戦を一気に挽回せんものと、たけりにたけって立ち回り、

たちまちにして、白絹をはじめ主なる家臣勇士ことごとく打ち倒しました。

一方、竹由新兵衛は、清海入道に押しかけられ、穴山に斬りまくられ、あっちへ逃げ、こっちへ隠れておりましたが、そのところへ、パッと現れいでたる猿飛佐助、大身の槍をリュウリュウと引きしごき、

佐「新兵衛見参っ」

と、身構えたり。新兵衛も、猿飛と見て死に物狂い、七十五人力のメーターは、急ピッチに上昇したと見れば、大刀を水車のように振り回しての大奮戦、さすがの猿飛もその勢いに押されてじりじりと、後ずさりしていたが、新兵衛、真っ向上段に構えた太刀先ヤッと斬り下ろせば、猿飛の体は空竹割りにされたかと思いきや、そのとき早く、かのとき遅く、佐助の姿はどこともなく消え失せてしまった。

新「えい、またしても忍術を使いおったか、ひきょうなやつっ」

佐「あっははは、新兵衛ここだっ後ろだ」

と、いわれて新兵衛振り向くと見るや、佐助をのぞんで突いて出たやつを、軽くいなして、

佐「これでもかっ」

と、突き出したる槍先は、新兵衛の太ももへグザッと突き立った。

新兵衛なんじょうたまるべき「うわっ」というとドウとそのまましりもちをついた。してやったりと佐助、二度目の槍を新兵衛に向けたとき、後ろの襖がさっと開いて声あり、

幸「あいや、猿飛待てっ、敵とはいえ大将を討つには作法あり、控えおれ」

静々現れたは大将真田幸村殿、新兵衛のそば近く進み寄り、

幸「あいや竹由新兵衛、御身の妻白絹は既にこの通り討ち死にを遂げたり、戦国の世、敵味方と別るるもぜひなし、潔く割腹してお果てあれ」

と、白絹の首級をそこへさし出した。豪傑竹由新兵衛ももはや武運の尽きたりと覚悟をなし、新「なる程、真田家の麒麟児と呼ばれたる与三郎幸村殿、花も実もある扱い感じ入った。いかにも切腹いたす、よろしく介錯お頼み申すっ」

腹十文字にかっ切って相果てました。

ここで幸村殿には、七勇士を従え、正々堂々と上田城へ引きあげました。この合戦にも勇士それぞれてがらをあらわしましたが、中でも猿飛佐助二十歳の初陣功名抜群なりとして安房守昌幸殿より特別の感状が授与されました。

秀吉公の荒武者をひしぐ

さて、真田昌幸殿は、一子幸村殿をして、伊勢崎五郎兵衛親子を討たせ、今また竹由新兵衛を滅ぼさせましたが、天下の形勢はと申しますと、既に武田家は滅亡、つづいて天正十年六月には、一世の豪傑織田右大臣信長が、本能寺において逆臣明智光秀のために弑され、凶変を聞いた羽柴筑前守秀吉は急ぎ中国より引き返し、みごと光秀を討って以来、その勢力は朝日の昇るごとく、やがて天下の権を掌握しようという有り様、そこで、天正十年十月十五日、故信長公の大法

会を営まんと、かの有名な大徳寺焼香を営むことになり、天下の諸大名をことごとく京都へ呼び寄せることに相成り、真田安房守昌幸公もこの通知に接しました。

そこで幸村殿をお呼びになって、

昌「これ幸村、天下の形勢を見るに、やがて天下は秀吉の手の内に相成る様子、彼は知といい勇といいまことに敬服すべき人物と見受けたり、この度の大徳寺の法要は、威勢を示すための企てと思う、予の名代として法会に連なってくれよ、何事が起こっても手出しいたすなよ、柴田、滝川方との間に争いが起こるやも知れぬ、そのときにはただ焼香して帰ってまいればそれでよい」

幸「ははっ、いかなることが起こりましょうとも、きっとご名代は無事に勤めてまいります。して、供回りはいかがつかまつりましょう。」

昌「うむ、予の名代である。よって五万石の格式でまいるが至当であるが、そういばるには当たるまい、その方の気に入りの七勇士とその他の供回りとして二十人も従えてまいるがよかろう、血気にはやってつまらぬことをしてはならぬ。すべて秘密な用向きは猿飛佐助に命じてよかろうぞ」

こんこんと申し渡された。かわいい子には旅をさせよとか、獅子は子を谷に落とすとか申します。こうして昌幸殿は幸村殿をりっぱな人間に仕上げようと考えておられる。幸村殿は、仰せを受けて、すぐさま七勇士を呼びよせ、しかじかこうこうと命じ、それよりいずれも準備をいたして、その身は乗り物に乗り、上田城を出発、道中つつがなく都に到着したのはその月の十二日。

そこで一行はまず、二条通りへ宿を取り、このことを築前守秀吉公のもとへ届けいで、一同に

は休息を命じ、猿飛佐助を呼び寄せて、

幸「この度の法会は秀吉の威勢を示すつもりであるから、お父上の仰せの通り、柴田、滝川らと不和を生ずるは必定、諸国大名もみなその向背に迷うていることだろう、秀吉は定めしわれらを味方につけんと計るに相違ない、その方これより秀吉の宿舎に忍び入り、とくとその動静を見届けてまいれ」　佐「はっ……」

身支度して立ち去った佐助、つまびらかに動静を探って帰り、幸村公の前に進み、

佐「はい、ただ今帰りました」

幸「おお、大儀であった、どうだ様子は……」

佐「仰せのごとく、秀吉の宿舎にまいりますと、長谷川、前田、蒲生をはじめその他秀吉公の荒小姓、加藤、福島、片桐など集まりいろいろ評定いたしておりました」

幸「なんと申しておった」

佐「はい、秀吉公の仰せでは、真田安房守の名代として、一子与三郎幸村がまいったとやら、かれ幸村は若年なれど父安房守にも優る大器量人、それを味方に取り込み、柴田、滝川等をへこます手段を尋ねて見ようではないかと、かよう申されますと、前田、長谷川、蒲生の連中は、なるほどそれがよかろうと直ちに賛成いたしましたが、荒小姓の連中は承知せず、中でも、福島市松のごときは、なあに与三郎幸村がなにほど器量人といえども、たかが二十一二歳の若輩、それよりわれわれ七人が乗り込んで引っ張ってまいりましょう、秀吉公ご自身おいでになるには及びませぬと申しておりました」

幸「うむ、そうか」

佐「すると、秀吉公もうなずかれ、なる程、しからばこれよりなんじら幸村の宿所へまいり、彼の荒肝をひしいで引っ立ててまいれ、万一仕損じたら予に考えがある……とこう申しておりましたから今に七人が乗り込んでまいります」

幸「あははははは、腕力で幸村を味方に引き入れんとは笑止千万っ……よしっ、ではこっちにも考えがある、予は病気と称して彼らに面会いたさぬから、その方ら七人が応対して追い帰してしまえ、相手も名だたる豪の者ぞろいじゃ、一筋縄では帰るまい、次第によったら、なんじの忍術で逆に荒肝をひしいでやれ」

佐「ははっ、承知つかまつりました」

幸「やよ、六人の者、早くここへまいれっ」

六人に向かって、幸村殿より委細を物語り、

幸「なるたけ、けんか腰で応対する方がよいぞ、後には予が控えておるから、決して心配いたすことはない」

聞いて六勇士喜び勇み、者ども、はやご参なれと待ち構えている。こんな物騒な応接者が待っているとは夢にも知らぬ羽柴方の荒武者七人、肩ひじ張り往来狭しと風を切ってやってまいりました玄関先、戦場で鍛えた大音をあげて、

○「頼む、おっ頼みもーうす」

割れ鐘のような声で案内をこうたは、加藤虎之助をはじめ福島市松、片桐助作、脇坂甚内、加藤孫六、平野権平、柏谷助右衛門の七人。玄関に出て来たのは、猿飛佐助、

佐「え、どちから」

○「あっちから」
佐「はあ、ではソ連から……」
○「これはけしからぬ、身共は羽柴家の七勇士の一人、加藤虎之助、控えおるは、福島、片桐、脇坂、加藤、平野、粕谷と申すもの、いずれも天下にその名とどろく豪傑ぞろいじゃ、幸村殿にお目通り願いたい」
佐「ははあ、羽柴家の七勇士の顔見せでござるか、われこそは真田幸村殿の郎党にて元祖七勇士の一人猿飛佐助と申すもの、お見知り置き願いたい」
加「なにっ、元祖七勇士な……つべこべいわずに早く取り次ぎさっしゃい」
佐「いや、せっかく羽柴殿のご勇士のご到来なれど、お気の毒ながら、主人幸村目下ご病気にてとてもご面会はかなうまじ、ご用の趣は拙者よりお取り次ぎ申す」
聞いて怒りを発した福島市松、
福「いわしておけば、ええい、めんどうじゃ、猿飛か、猿面か知らないが、われらは秀吉公の名代で参じたる者、その方ごときものに話すべき筋はない、幸村殿ご病中とあればなおのこと、じきじきお目にかかり、お見舞かたがたお枕元にて用事の趣申し述べよう……方々出合え出合え」
まるで戦場へでも乗り込むときの口上でございます。気短な福島、いいさして、はや片足を式台にかけている。そのとき佐助すこしも騒がず。カンラカラカラと打ち笑った。
福「なんだその笑い方は……気持ちが悪い、そんなのが今はやるのか」
佐「いや、これが拙者持ち前の豪傑笑いだ……もっともご用の趣はちゃんと分かっておる。しかし秀吉公じきじきならばいざ知らず、御身たちではきりきりお取り次ぎはなりませぬ」

加「なにっ、ご用の趣を知っておるとは奇っ怪至極、さあいって見ろ、間違ったらそのままには置かぬぞっ」
なにさまそろいもそろって横紙破りでしたたかの猛者ときているから、答えによっては、つかみかかろうと気構えている。
佐「……ほほーっ、だいぶお腹立ちの様子、怒るは損気、ここは議会ではござらぬ、お静かにお聞きとりが願いたい。貴殿方ご用向きはこうこうしかじかでござろう、よってご主人にお取り次ぎいたさずともよろしいと申すのじゃ、殊に幸村殿は目下秀吉公の麾下にはあらず、今回の法会に連なりたるは信長公に対する礼、秀吉公に対しては格別ご機嫌伺いをいたす必要もござらぬ、秀吉公たって幸村に面会いたしたいとあらば、相当の礼をもってまいられよ、はじめより権柄ずくで脅しつけんとは近頃笑止千万、小国に対するアメリカやソ連の手口じゃ、信州上田五万石の小大名なれども、弓矢取っては日本一の真田幸村、まった清和源氏の嫡流、よしんば天下の大軍を押し寄せても、いやとなったら首は縦には振らぬ、さあさあお身らではらちがあき申さぬ、とっとお帰り召されい」
吹きも吹いたり大ラッパ、烈火のごとくに怒った福島市松、
福「黙っておれば、よくもまあぺらぺらしゃべるやつだ、きさまのようなやつは代議士か講釈師にでもなれっ、……加藤、片桐、こんなやつとは問答無用だ、さあ、やっつけろ」
乱暴なやつもあったもので、われ先にてんで、福島が猿飛目がけて飛びかかり、むんずと抱きしめた。
○「痛い、痛い、おれだおれだ」

福「なにがおれだ、こうしてくれる」
と、なおも力強く、ギューッと引き締めたから、
加「おいおいおれだ、加藤だ……」
びっくりした福島、手を緩めてよく見れば加藤虎之助だ。
福「ややっ、これはどうも……あいつ、妖術を使うぞ、油断するなっ」
先刻より玄関のついたての陰に隠れて様子をうかがっていた真田方の六勇士、ばらばらとその場へ躍りいで、
皆「やあ狼藉者取り押さえろっ」
と、清海入道は福島市松、伊三入道は片桐助作、望月六郎は加藤虎之助、穴山岩千代は加藤孫六につかみかかり、一対一の七組が投げる、殴る、ける、押さえるの大乱闘がはじまった。
いやその騒ぎは一通りでない。
この物音を聞きつけて幸村殿つかつかと玄関に立ち出でて見ると、そのときはるかかなたより、馬蹄の音高く、カポカポカポとやってまいりましたる一人の騎馬武者、この様を打ちながめ、
武「真田の七勇士も、なかなかやりおるわい——これ加藤しっかりやれ、市松どうも形勢が悪いぞ、ほれ右のフックだ、それ、ダッシュだ……」
まるで拳闘の応援をしているようでございます。これを見た猿飛佐助、止めに来たと思いきや、けしかけるとは不届きなやつ、とばかり、ヤッと一声かければ、忍術の奥義でその姿はパッと消え、くだんの騎馬武者のそばへいったかと思うと、左足を引っつかんでずるずると引きずり下ろした。騎馬武者は姿なき者に引き下ろされたから怒ったのなんの、

武「われこそは中川清兵衛なり、あいや、真田方には忍びの術を使うものありと聞く、ひきょう未練なり、この場において成敗いたしてくれん」

と、腰なる一刀引き抜くかと見えたが、姿が見えないから、盲滅法に突きまくる。

これを見た真田幸村、

幸「あいや、大人気なし中川清兵衛殿、羽柴筑前守の麾下において、豪勇無双と呼ばれたる御身でありながら、かかる若武者を相手となさるとは笑止千万、真田幸村ここにあり、いで相手つかまつらん」

これを聞くと、中川清兵衛もさる者、こういわれて、あくまで敵対するようなことはいたしませぬ、面を和らげ、

清「御身が真田幸村殿か、はじめて対面つかまつる、いや面目次第もござらぬ、実は秀吉公の命を受け、無法者の使者ゆえ、いかなる無礼あるやも知れず、身共が引き立てにまいったるも、あまり力の入りたるおもしろさに……ついその——お許しあれ、これやい、福島、加藤、片桐、一同もう争いはやめろ、話は相すんだ」

と、取り鎮めましたが、若武者同士は、せっかく油が乗ってきたので、なかなか簡単にはやめられない、片方が緩むと片方の手がポカリと横面に来たり、頭に来たり、やったなとばかりまた争いがつづいてなかなかに納まりませぬ。

幸村公、機転をきかして、白い布をパッと投げたら、その争いがピタリと止まった。真田幸村はもうこの時分拳闘のルールを知っていたと見えます。

そこで改めて、清兵衛はじめ七人の荒武者を奥の間へ招じ、酒肴を出してあいさつをする、もとより竹を割ったような天下の豪傑でございますから、先刻のけんかはいつのことやら忘れ、さしつさされつ仲むつまじく酒汲み交わしております。

そのところへ、堀田善右衛門、松倉十兵衛、木下将監、大谷平馬が幸村殿をお迎えとして乗り込んでまいりましたから、幸村公快く承知いたして、中川清兵衛と駒をならべて七人の荒武者に守られて秀吉公と対面、ここに両雄互いに意気投合しました。これがやがて幸村公秀吉方として、大阪の陣に活躍する原因に相成ります。秀吉公には幸村殿に対して、大徳寺焼香につき万事腹蔵なく物語なさり、幸村殿の意見を求められましたので、柴田、滝川の裏をかく手段を申し述べますと、秀吉公もことごとくそれを用い、首尾よく焼香をすませました。

秀吉公においては、その返礼として甲府十万石をつかわそうといたしましたが、幸村殿はそれを辞退して使命を果たして、そのまま無事上田城に帰りました。

破裂した狸じじいのかんしゃく玉

すると、ある一日、幸村殿には猿飛佐助をお呼び出しに相成り、

幸「猿飛佐助、その方はここ二三年の間、諸国を漫遊いたして、諸国大名の動きを探り、天下の勇士豪傑と交わり、修行いたしてまいれ、しかしくれぐれもいって置くが、自分の術に慢心いたして人を侮ってはならぬぞ、この度の漫遊はその方の武術修行はもとより、諸国大名の動きを探

るにある、されば諸大名の動きは一々わがもとまで知らせてまいれ」

佐「ははっ、かしこまりましてございます」

佐助は喜び勇んでわが部屋へ帰ってまいりますと、待ち受けていた清海入道、

清「おい、猿飛、ご主君のお呼び出しのご用むきはなんだったのだ」

佐「うむ、諸国漫遊のため三ヵ年の間お暇が出たのだ」

清「えっ、諸国漫遊か、うらやましいな、おれもいっしょに連れていってくれ」

佐「それはいかんよ、おれが承知しても、わが君のお考えが分からぬ」

清「それもそうだな、よしおれもひとつわが君にお願いしてくる」

清海入道、ずかずかと幸村殿の御前にやってまいりまして、

清「わが君、今日はまことによいお天気で結構でございますな」

幸「ばかを申せ、今日は雨が降ってよいお天気でと申しましたので……ときにわが君お願いがございます」

清「いえ、雨が降ってよいお天気で結構でございますな」

幸「なんじゃ、はあん人相を見るになにか無心にまいったな、さてはその方猿飛から聞いたな」

清「ご名察、実はそのことについてお願いにまいりましたので……さすがはわが君、天文、地文ばかりでなく人相までなさるので……これはどうもたいしたもので」

幸「ばかな世辞を申すな、猿飛が立ち去って間もないから、そのくらいのことだろうと察しがつくわ」

清「それまでお察しでございましたら、どうぞ、わたくしめにもお暇を下し置かれますよう」

幸「ならぬ、……なぜと申して、その方は酒は飲む、けんかはする、気は短い、思慮分別とい

うもの猿飛のつめのあかほども持ちおらん、勇気ばかりありても英雄にはなれぬぞ」

清「ははっ、これはしたり、今日は風向きがだいぶ悪いわい、わが君には低気圧の中心におられまするか、うわはっははは……」

幸「なにがおかしい」

清「これがおかしくなくて……知仁勇兼ね備わる名君と聞こえ高きわが君には、日ごろより猿飛の知、三好兄弟の勇を車の両輪といたさば鬼に金棒と仰せられましたること、よもお忘れではござりますまい……はははあ、察するにわが君にはお許し下さるご心底と拝察いたし有り難くお礼申し上げまする」

幸「これこれ三好、その方勝手にきめてはならぬぞ」

清「わが君には、酒を過ごすなけんかをするなとおっしゃいましたが、酒は過ごさぬよう慎めばいってもよいとのおさとしの意味で仰せられたのではございませぬか、三好清海入道、有り難くお暇いただきましたるそのときは、三年が四年なんの酒くらいやめられぬことはございませぬ、猿飛ともども諸国大名の挙動を探り、お知らせつかまつります。旅は道連れ世は情けとか、旅は一人より二人の方がよろしいようでございます」

幸「三好、その方は、そんなにまいりたいか」

清「ははっ、なにとぞお許しのほどお願い申し上げます」

幸「その方は酒さえ過ごさねば、まことによい男だがのう……よし、特別に許してつかわす、くれぐれも心を慎めよ」

清「あ、有り難きしあわせに存じます。必ず君命を辱めるようなことはいたしませぬ」

小躍りして再びやってまいりましたのは猿飛佐助の部屋、

清「おいおいお許しが出たぞ」

佐「おやおや困ったな、お許しが出たのなら連れていってはやるが、おれのいいつけはなんでもすなおに聞くか」

清「もういっしょにいければ、なんでも聞く、なんでもする、きさまのいう通りになる」

佐「きさまは酒を飲みすぎなければいい男だがなあ、それも慎めるか」

清「ほほーっ、ご主君もそうおっしゃったぞ、よしよし酒など過ごさぬよう一滴も飲まぬぞ」

そこで出立に際して、大殿と幸村殿から、再び事細かなご注意をいただき、両人は諸国漫遊の途に上ることになりました。両人のいでたちを見てあれば、猿飛佐助は武者修行姿、三好清海入道は山伏姿となって、勇ましく上田城下を立ち、早くもやってまいりましたのは東海道は遠州浜松の城下。

両人しばらくここに足をとどめ、徳川の動静をさぐってやろうというので、浜松屋惣兵衛という旅籠屋に泊まり、毎日あちらこちらと徘徊しておりました。

ある日のこと、猿飛佐助が三好に向かい、

佐「なあ、三好、徳川家にはりっぱな家来がたくさんいるし、家康という大将は情けが深いから、城下は、なかなかよくゆき届いているな。わが君も、将来恐るべきは徳川家康だとよくおっしゃったが、なる程その通りだ、いや感心なものじゃて」

清「うむ、おれもそう思っている。こうゆき届いていては、ちょっと事件も起きそうもないな」

佐「まあ、そうだろう」

清「そいつは困ったな、なにか騒動を起こさないと、徳川の威勢に恐れたようでいかにも残念じゃ、なにか一つ事件を起こしてもらわないと、土産話ができぬぞ、起きたらあとはおれが引き受ける」

佐「いやどうも、きさまはどこまでも物好きな男だなあ。しかし下手なことをして、わが君の顔にかかわるようなことをしてはならぬぞ」

と、いい置いて、佐助は清海入道を独り宿に残して、ぶらり出かけてしまった。あとに残った清海入道、講談全集もなし、ただぼんやりとしていましたが、

清「うむ、どうも退屈でいかぬ。漫遊に出かける前に、ご主君の前で三年の間、酒は一滴も飲まぬとお約束したが、過ごすな、とはいわれたが、飲んではいかぬとはおっしゃらなかった。こういうときには、せめて一本ぐらいはいいだろう、酒を過ごして乱暴さえしなければいいだろう……ちょうど猿飛もいないし、……おーい、お女中……」

理屈はつくもので……ポンポン手をたたいてちょうしを持ってこさせましたが、もとより酒には目のない清海入道、かれこれ一月余り飲まないで、久し振りに口にした酒の味はまた格別でございます。

清「うむなんともいえぬ味だ、舌がぬるぬるしてきた……どうだこの香り……なんともいえないな、のどがごろごろいっている、えーい、五臓六腑にしみるわい……ああなんともはや、どうも……」

味をしめたからもういけません、酒飲みの癖で一本が二本、二本が三本……一升が二升になり、ついに三升。ここまでくると、さすがの清海入道もべろべろに酩酊。

清「うーいっ、さ、酒、の、飲みが、酒を飲んで、ど、どうしていけないっ、こら、もう一本持って……こい……げーっぷ」

とうとうたいへんなとらになってしまった。そうなると部屋の中になど、じっとしてはいられません、外に出ましたが、足もとも心もとない千鳥足、さしかかって来たのは浜松城の大手前、

清「いよう、徳川の家来どもが下城して来るわ、どいつもこいつも満足なやつはおらぬわ」

と、酔眼もうろうといいたいが、酔眼を皿のごとくにかっと開いて大入道、一人一人をにらみつけている。通りかかる町人どもは、うでだこのような大入道が、顔を真っ赤にして立っているのを見て、薄気味悪がってそばに寄ってくる者がございません。

清「どうも浜松のやつらは意気地のないものばかりじゃ、ういーっ、げーっぷ……ああ、来たぞ来たぞ、あの乗り物はなかなかりっぱだな、これ町人、あの乗り物はだれじゃ、さあいえ、いわぬか」

いきなり町人の胸ぐらを引っつかんだから、町人驚いたのなんの、

町「く、苦しい、いいますよ、いいますから、手を放して下さいまし、ああ驚いた、……あのお乗り物は、山辺丹後守様でございます」

清「な、なんと、あれは山辺丹後守か、うーむいいところであった、ようし、あいつは元武田家の臣でありながら、勝頼公天目山に討ち死にすると見るや、直ちに徳川家に随身いたしたる不義不忠の犬侍、武士の風上にも置けぬやつ、これ町人しかとそれに相違ないな」

またも胸をぎゅっーとしめつけてポンと投げ出された。町人こそいい迷惑でございます。

町人をほうり出すと、躍りかかるようにして、静々と出て来る駕籠の前へ進んで駕籠の棒鼻むんずとつかみ清海入道、割れるような大音声。

清「いや珍しや、真田家七勇士の一人、三好清海入道ここにあり、そこな駕籠は山辺丹後守の乗り物と見たり、武田家滅びたりと見るや、敵方徳川方に身売りして、禄を食む人非人、このところにおいて成敗ないたしくれん、いでや見参見参」

と、呼ばわった、駕籠の中の山辺丹後守、三好清海入道と聞いてびっくりぎょうてん、

山「やいやい者ども、引き返せ引き返せ」

いわれて駕籠は大手門さして逆走り、これを見た清海入道、

清「なんだ、飛び出すかと思いきや、不意に逃げ出すとはひきょうなやつ……返せ返せ」

とどんどん後を追っかける。

今や駕籠が門内へ入らんとするそのときに、横手から現れいでたる大兵肥満の侍、これなん余人ならず、徳川四天王の一人榊原小平太康政、この有り様を見て、

小「やあやあご城内大手前において狼藉いたす曲者っ、ぐずぐずいたさば、ひねりつぶしくれん」

と、負けずにどなりつけた。聞いた清海入道得意の豪傑笑い、

清「カンラカラカラ……あいや榊原殿とな、われは信州上田城真田昌幸殿の一子与三郎幸村殿の家臣三好清海入道と申すもの、その駕籠の中なるは、不忠不義なる畜生武士山辺丹後守、天に代わりて成敗いたす、御身はそれを邪魔立ていたされるかいかに」

清海入道、頭から湯気をぽっぽっさせながら、きっと居丈高になって、榊原の返答いかんと待ち受ける。

小「うむ、きさまのいうこと相分かった、いかにも憎き不忠不義なる山辺丹後守、苦しゅうない、存分に手痛くやりなさい」

変わり者もあったもので、スタスタいきかけたが、振り返り、

小「お望みとあらば拙者も助勢いたそうか」

清「いやその儀に及ばぬ」

小「しからばご存分に……」

ひどいやつもあったもので、横紙破り同士が初対面で意気投合したから、丹後守もたまったものではない。その間に丹後守の駕籠はスタコラスタコラ城内へ。それを追う清海入道、駕籠わきに来たかと見るや、家来の者を取る手も見せず、右と左に投げ飛ばし、乗り物の垂れをまくり上げ、中から丹後守を引きずり出そうとすると、丹後守もさはさせじと、反対の側から家康公お得意の三十六計逃げ延びの術、一散走り。二の木戸、三の木戸と通り抜け、今や本丸玄関にさしかかろうとする。ようやく追いついた清海入道、丹後守の後ろからえりっ首むんずとつかみ、

清「やい、大侍、どこまで逃げるか、もう逃さぬぞ、こうしてくれる」

と、いったかと思うと、横っ面を大きなげんこで一つ二つ三つつづけざまに殴りつける。

丹「い、痛いっ、痛いっ、これはしたり、三好殿これには深い訳が……」

いいも終わらせず、

清「訳がどうした……もう一つおまけだ」

と、また二つ、丹後守の横っ面が三角になった。

この騒ぎをききつけ、中から飛び出してきたのはお小姓頭の大久保彦左衛門、そのときにはま

だ二十四歳の青年武士、

彦「何奴なるぞ、お玄関先において狼藉いたす無礼者、名乗れっ」

早くも腰の一刀に手をかけて、返答によっては斬って捨てんずの構え。

清「えい、無礼者呼ばわり笑止千万、カンラカラカラ……不忠不義なる大侍こらすになんのとがめやあらん……家康公にお目通りいたしたい、はやはや御前へ案内しろっ」

彦「いやならぬ、きさまが不忠呼ばわりいたすとも、今は徳川家の家臣、すなおに放さばよし、さもなくば、かくいう、大久保彦左衛門が相手じゃ、さあまいれっ」

清「なにっ、きさまの知ったことか」

と、乱暴者の清海入道、無法にも玄関を飛び上がろうとするから、大久保彦左、

彦「これっ、たこ坊主めっ」といきなり清海入道の腰帯引っつかんだから、丹後守をそこへほうり出し、――こいつが――とばかり大久保に組みついた。

ドタンバタンドタンバタンそのにぎやかなこと一通りではございません。すると、そのところへ、またしても出てきたのは徳川家の荒武者、永井伝八郎、松平小源太、三浦亀千代の三人。この様を見るより、

永「大久保しっかり、もう少しでホールだ、がんばれがんばれ」松「やいやいもうそろそろおれと代われっ、早くタッチしろ」

彦「なにを申す……おれがホールする、うーむ」

レスリングと間違えている。三好の力が優れたか、ドウと引っくり返された、今度は清海入道が首がためでせめ立てる。

清「どうだまいったか、さあ案内するか」
彦「いま負けても、案内はいたさぬ」
彦左衛門、奮戦すれどもようやく敗色が濃くなってまいりました。
永「大久保代われ代われ、拙者が代わる」
これを聞いた清海入道、大久保をつき放し、
清「やあやあ一人二人は面倒なり、束になってかかって来い」
なにしろ、酒という力水が三升もはいってエネルギーが十分だから、力はふだんの百倍千倍、争いはいつ果てるとも見えませんでしたが、そのところへ、現れいでたる大の男、これぞ徳川家随一と呼ばれる豪の者鳥居彦右衛門。
鳥「場所がらをもわきまえず、このていたらくは何事だ、静まれ、静まれーっ」
と、大音にいいながら手に持ったる鉄扇にて敵も味方もあらばこそ、パンパンパンと盲打ち、
清「こりゃっ、やたらに人の頭をたたくのはだれだ、木魚と間違えるなっ」
鳥「きさまこそ何者だ」
清「われこそは信州上田城主真田家の七勇士の一人、三好清海入道なり」
鳥「なにっ、うわさに聞く清海入道とはその方か、して、何用あって城内へ忍び込んだ」
清「実はこれこれしかじか家康公の御前へ案内さっしゃい」
彦右衛門も日ごろ丹後守が主君の寵愛をほしいままにしているのを苦々しく思っているから、
鳥「よーし、話はわかった、さあ来い」
鳥居彦右衛門、清海入道を家康公の御前へ連れてまいりまするに、家康公殊の外のご立腹、

家「やあやあ三好清海入道とやら、なんじは察するに当城内を探りにまいった『犬』だろう、殊に予が寵愛する丹後守を手込めにいたすとは不届き千万、それ者どもこの坊主を召し捕れっ」
三好清海入道烈火のごとく怒り、
清「やあやあ、家康公は海道一の良将と思いしに、聞くと見るとは大違い、うわさに違わず狸じじいに相違ない、いやはや見下げた狸じじい、さあ召し捕れるものなら召し捕ってみろ」
いいざま、近侍の若武者五六人を前後左右にブーンブーンと振り回して投げ飛ばす。ならぬ堪忍するが堪忍の家元家康公も、堪忍の緒が切れて、怒りその極に達し、
家「誰かある、四天王はおらざるか、はやはや坊主を召し捕れ」
と下知に応じてはせ参じましたるは井伊万千代、本多平八郎の両人、左右から清海入道めがけて躍りかかりました。清海入道いかに力優れたりとも、先刻よりの奮戦にいささか疲れておりますところへ、四天王の二人に左右から組みつかれたからたまらない。はじめの程は組んずほぐれつ争っておりましたが、ついに力つきて両人のために組み伏せられ、縛られてしまった。
清「口惜しきかな、口惜しきかな、残念なり、無念なり、遺憾なり。……さあ殺さば殺せ、突くなら突け、徳川のへなちょこ侍の刀の肥やしにしてつかわす」
と、歯をバリバリとかみしめる音は、さびついた歯車がまわるよう、見ると口から血がたらたらと出た、気の早いのが、
○「ややっ、自害いたせしか」
と、近寄って見たら前歯が二本折れたと申しますが当てにはなりません。この様を見た家康公、

家「山辺丹後、その方を悪口雑言なしたる憎きやつ、もはや手向かいもいたすまい、坊主を引っ立て獄屋にほうり込め」

山「ははっ」と答えて、二歩三歩進んだかと思うと、山辺丹後守の首が前へポロリと落ちた。

いや驚いたのは家康公をはじめその他の勇士、これは不思議といぶかるうちに、またもや、縛られた清海入道の体がふわふわと浮き上がり、足を動かさずして空中を歩き出し、次の間に入ったかと思うと清海入道の姿はパッと消えてしまった。

すると、どこからともなく、

○「あはっははははは、徳川の狸じじいをはじめ勇士豪傑の方々よう承れよ、われこそは、信州上田城主真田家の七勇士の一人、忍術の名人と名高き猿飛佐助幸吉、これなる三好清海入道はもらって帰る、そこな方々の首を切るはいと易けれど、なにも事を好むものにあらず、いずれ後日対面ないたさん、さらばでござる」

いうだけのことをいうとそのままいずこかへいってしまった。家康公もぶるぶるっと身を震わして、

家「かねて、真田家には忍術の名人ありと聞き及びしも、いつの間に当城内に忍び入りしか、恐ろしき術じゃ、真田幸村と申すやつ、よい家来を持ちおるわい、ても真田は恐ろしき者よ」

しみじみ家康公がこうまで嘆息したところをみますと、よほど骨身にこたえたものでございましょう。

こちらは猿飛佐助、忍術をもって身をかくし清海入道の体を小わきにかかえ、城内から二三町離れた丘の上に来て、その縄を解いてやりましたが、

佐「こりゃ三好、少しは身にこたえたか」

清「もうなんにもいうな、おれが悪かった、許してくれ」

佐「きさまはご主君の命に背いて酒を飲み、乱暴いたすから、かようなことになるのだ、おれがいなかったら、きさまの命は無いぞ、ご主君に対してなんと申し訳いたすのだ」

清「もう分かった、もう酒は過ごさん、してきさまはどうしてあんな所に現れた」

佐「きさまとおれとは考えが違う、おれが毎日出かけていたのは、浜松城内の様子を探っていたのだ。今日も城内に忍び込み、要所要所を探していると、玄関先が騒々しいから、いって見ればあの騒ぎ、どうなることかと、ずーっと姿を隠して、見ていたがついにあんなことになって縛られたではないか、きさまと歩くとろくなことはない、だからきさまといっしょにいくのはいやだといったのだ」

清「猿飛、本当に悪かった、今後はどんなことがあっても、きさまの下知に従うから、今日のところは勘弁してくれ」

佐「きさまがそれ程までにいうなら許してやるが、この後は決して許さぬぞ」

両勇士いうだけのことをいってしまえばもう心に残るものはございません、仲よく旅籠に引き上げてまいりましたが、猿飛佐助はもうすっかり浜松城内の様子は調べ上げておりますから、

佐「なあ、三好、もうこの土地は引き上げよう」

清「よし承知した」と両人、早速に旅籠を引き払い道中を急いで、江州さしてやってまいりました。

ひらめく槍先、鈴鹿峠の大乱闘

猿飛佐助と三好清海入道の両人、今しもかかってまいりましたのは鈴鹿山のふもと、もう日はとっぷり暮れております。

見ると向こうに一軒の茶店、

清「猿飛、あすこに茶店が見える、ひとつ茶でも飲んで一休みしてから、この峠を越そうではないか」

佐「それもよかろう」

二人やってまいりますと一人の老婆が寂しそうに店番をしております。

清「許せよ」

老「はい、いらっしゃいまし」

佐「茶を一杯くれ、それに駄菓子をそえてな」

老「お菓子はなににいたします。豆板にねずみのふん……」

佐「ねずみのふんとはきたないものを商売いたすな」

老「いいえ、これはねずみのふんではございません、小豆で作ったもので、ねずみのふんに似ておりますので、ねずみのふんと申しまして、これは後の世では甘納豆と申すことになっており

ます」

佐「おもしろいことをいう婆さんじゃ……しからばそのねずみのふんと茶を持ってまいれ」

婆「はい」

そこで茶を飲みながらしばらく休息しておりました。すると、

婆「お武家様、これからこの峠をお越しになるのでございますか」

佐「いかにも、夜の道は、足がはかどるから越すつもりだ」

婆「それなれば、悪いことは申しませぬから、お止めになった方がよろしゅうございますよ」

清「それはまた、どういう訳じゃ」と清海入道ひざを乗り出した。

婆「はい、この山には、元江州観音崎の城主佐々木様の残党で由利鎌之助春房という山賊の張本がおりまして、軍用金を集めるの、味方を募るの、佐々木家の再建をはかるのと申して、大勢の手下を連れて山塞にこもっておりますから、ご用心なさって下さいまし」

清「なにっ、山賊が住んでいると申すか、それを聞いて腕がむずむずいたしてきた、われら二人乗り込んで、その山賊を追っ払って諸人の難儀を除いてつかわす」

婆「まあまあお二人様ともご気丈な」

清「それ聞いては引き返せぬわ」

茶代を払って、茶店を出た二人は、のんきに大きな声で謡曲をうたいながら、スタスタ山を登ってまいりました。

清「猿飛、山賊がいるとはおもしろい、近ごろどうも腕が鳴って困っているところだ、今夜は山賊を斬りまくってやるぞ、気を晴らしてやろう」

佐「きさまのその元気はいいが、見くびって、不覚を取るなよ、山賊とはいいじょう、なかなかのしたたか者と見えるから油断はするなよ」

こんな物騒な二人がやって来たとは気づかない山賊たちは、早くも二人の姿を見つけ、いいかもござんなれと待ち構えている。二人の大きな声を聞きつけた山賊たち、

○「おいおいばかに元気のいいのがやって来るじゃないか」

×「近ごろのようにこう不漁じゃ、うめえ酒も飲めねえ、今晩はいいあんべえにかもが来やがった、ぬかるなっ、早く合図しろっ」

○「合点だ」

かねて用意してあった狼火をズドーンと一発上げる、その音がごう然山に響き渡ると、どこから来たか、ばらばらと集まった五十人余りの山賊、いきなり猿飛佐助と三好清海入道の行く手に立ちふさがった。その中の小頭ともおぼしき一人の男、

小「やいやい武士に坊主、よく来てくれた、いいかもだ、おれたちの網にかかったのが運の尽き、身ぐるみ脱ぐか、すなおに味方になるか二つに一つの返事をしろ、返事によっちゃあそのままにはしねえ」

と、大身の槍をきっと構えた。

佐「きさまたちのいうことはよく分かる、きさまたちも山賊が稼業、なんなりいうことはきいてつかわしたいが、拙者が許しても、この太刀が首をたてには振らぬ、三好おまえはどうだ」

清「うむ、おれもそうだ、きさまらは佐々木家の残党と称し、山賊夜盗をして身の栄華をはかる不届きな奴輩、さあ天に代わってこの清海入道が――坊主頭に免じて引導を渡してくれる、一人二人は面倒だ、束になってかかってまいれ」

と、大刀ひらりと抜けば、

○「やいやいもう勘弁ならねえ、野郎ども坊主からやっつけろ」

くだんの小頭は槍をリュウリュウしごいて三好目がけて突いてくる、三好ひらりひらりと身をかわして、ヤッと大声に叫んで、斬り下ろした一刀、「あっ」と叫びざま小頭はもんどり打って崖下へ真っ逆さま、この様を見た猿飛佐助にっこり笑い、パッと大地をたたけば、身は軽々とかたえの松の木の枝に飛び上がり、腰掛けて高見の見物ときた。

佐「いや、三好がんばれ、おれはここでしばらく休んでいるぞ」

清「おれの腕前のほどをよっく見ておけ、片っ端からなぎ斬り打ち倒し、死人の山を築いてくれん」

と、山賊どもが前後左右から、斬り込んでくるやつを、右に左にひらりひらり身をかわし、前にいで後に退き、一上一下虚々実々、バッタバッタと斬り倒す。三好今日はなかなかコンディションがいいので、猿飛も見ていて小気味のいいくらい、その働きは物すごいばかり、猿飛の十八番を奪った形でございます。この勢いにひるんだか山賊、たじたじたじ、たじたじたじと後ろに下がる、これを見た由利鎌之助の股肱の一人服部三五郎、烈火のごとくに怒り、

服「よくも手下の者を斬りやがったな、今度はおれが相手だ、さあ来い」

と、二間余りの大身の槍をしごいて三好目がけて電光石火と突き出す。実にや、大蛇の吐く紅蓮の舌もかくやと思うばかり、今しも、三好の横腹目がけて「えいっ」と突き出したる槍先、あわや田楽刺しかと思いきや、三好みんごと、これを取っ払ったから、はずみを食らって三五郎よ

ろよろとつっかかるその透きに、大喝一声横に斬っ払った一文字、ぐざっと三五郎の胴体真っ二つに別れてこの世にサヨーナラ。この勢いに恐れをなして山賊、これはかなわじと雲を霞と逃げていく。

清「おーい、猿飛、この腕どんなものだ、久し振りで気持ちがせいせいした」

佐「うむ、きさまも思ったより腕が上がった、だいぶコンディションがいいではないか……おいおい三好、向こうから張本の由利が来たぞ」

闇にも目が見える猿飛だから早くも由利の来るのを見てとって、ひらり枝から飛びおりると、

佐「なあ三好、今度はおれに代わらせろ」

三「まだまだ気がすまぬ。もう少しやらせろ、山賊の五十人や百人斬ってもまだ物足りないよ」

佐「由利鎌之助が独り来たのではない、手下を百人ばかり連れて来ているから、そっちの方はきさまにまかせるから、おれには由利の方をよこせよ」

三「よし、きさまも腕がむずむずしているだろうから、友情によってそういうことにしてやろう」

たいへんなところに友情が出たもんです。

ほどなく山賊の張本由利鎌之助が手下百人余りを従えてやってまいりました。

佐「やあやあそこなるは、由利鎌之助と見たり、いで見参見参」

聞いて由利鎌之助、カンラカラカラと笑えば、猿飛が――こいつ豪傑笑いをするとこを見るとなかなかの豪傑だな――と思ったといいますから、笑い方もばかになりません。

由「いうないうな、なんじよくもわが手下の者を討ち取ったな、今度はそうはいかぬから覚悟

してまいれ、それ者ども、てめえたちは坊主をやっつけろ、この武士はおれ独りで引き受けるっ」

大身の槍をリュウリュウしごいて詰め寄って来る。猿飛佐助、この様子を見て――うむなかなかやるわい、山賊には惜しいもの、……うむそうだ、――となにを思ったか知らないが、

佐「きさまの命はもらった、覚悟しろ」

と腰をひねって一刀すらりと引き抜いて身構える、由利鎌之助それを見て、これまた、

由「うむ、鵜の毛ほどの透きもない、今までこれ程のものに出会ったことがない、娑婆に置くのは惜しい、うーむ」

両方で「うーむ」と同じようなことを考えている。

由「えいっ」と、電光石火の早業で、猿飛目がけて突いてくる、心得たりと猿飛、ひらりと体をかわす、猿飛も負けじと斬り下ろす。互いに前後左右、一上一下虚々実々の対戦、まさに竜虎相打つの感、いずれ劣らぬ勇士と豪傑の一騎打ち。

片や忍術と武術の名人猿飛佐助、片や槍術の達人由利鎌之助のこの勝負はなかなかきまりがつかない、由利の突き出す槍は物すごく、さすがの猿飛も追い詰められておりましたが、

由「えいっ、面倒なり、これを食らえっ」

突き立てれば、あわや猿飛の一命果てたか、と思いきや、パッと姿はかき消えてしまった。

由「ややっ、摩訶不思議、面妖なり、こしゃくなり、こいつ妖術を使いおるか」

怒って、由利鎌之助、じーっとあたりを見回してあれば、その後ろに佐助が、ぬっと現れて、由利の頭をポンと打つ。

由「おのれひきょう者っ」

なおも激しく突っかかれば、二合三合斬り結ぶと、またもや佐助の姿はパッと消え失せる。

由「こいつ、魔術使いの回し者か、こざかしきやつ、どうしてくれん」力み返っている。

と、傍らの木の上から、

猿「由利公、由利公、ここまでおいで……」

ポンポン手をたたいている。由利はいよいよ焦って、飛びかかろうとするが、手がとどきません。ところがそれで思いとどまる由利ではございません。木の根のところへ来ると、するするとよじ登って来た。

猿「登って来ないでもいいよ、おれがいく」

と、木から飛びおりて、——さあ来い——と猿飛身構えて待っている。

由「やいやい、おのれっ」

くやしがった由利鎌之助、取って返し、大身の槍をしごいて突っかかる。一上一下、五六合したかと思うと、またしても必死の大決戦。

由利鎌之助はいよいよ焦って、突っかかる。そのたびにパッと消えたり現れたり。五六度すかされたから、さしもの由利鎌之助もすっかり槍は乱れはじめる、全身は滝のような汗。

猿飛、このときとばかりすかさず横合いから、——ヤッと一声斬り下ろしたやつ、今突き出した由利の槍の千段巻きをズバリと斬って落とした。

由「ややこれはしたり」

一歩下がって、大刀の柄に手をかけんとした一刹那、佐助はパッと躍り込み、由利鎌之助の胴体にむんずと組みつき、一気にねじ倒さんとしたが、なにしろ力五十人力といわれる由利だ、な

かなかそうは問屋が卸さない、互いに金剛力を絞り出して、組んずほぐれつ、ここを先途と争っております。

こちら三好清海入道にあっては、手下の者を斬り倒し追っ払っておりましたが、ひょっとあっちを見ると、佐助が由利と覇権をかけたレスリングの大試合、見ると猿飛が危うい。

清「おーい、猿飛、もう一人斬ると五十人だ、もう一人斬ったら加勢にいくぞ」

のんきなやつもあったものでございます。

三好の透きに躍りかかった手下のやつを、横に斬り払った一文字、パッと血煙立って斬り倒した。——これで五十人、ちょっとあばよ——と、いい残して、一刀ひっさげ、ばらばらと佐助の所へ走り寄り、

清「おいまだ勝負がつかないのか、加勢するぞ、後ろから斬ってやろうか」

佐「これこれ、三好、余計なことをするな、斬り殺すのはやさしいが、生け捕りにするつもりだから骨を折っているのだ、そこでもう少し見物していろ」

清海入道の加勢に気をよくしたのか、猿飛佐助、ぶるぶると武者震いをしたかと思うと、満身の金剛力を絞り出して鎌之助をその所へねじ伏せて馬乗りになってのどをしめつけた。

佐「さあ野郎どうだ、きさまを殺すつもりなら、こんな大汗をかいて争うことはないのだが、きさまはあっぱれな腕前、山賊の張本としておくのは惜しい……意見を加えて善心に立ち帰らせようと思えばこそ、生け捕ったのだ、きさまくらいの腕前があれば戦国の世の中だ、しかるべき大名に主取りせば、千石二千石の出世は思いのままだ、山賊を働いていても末はろくな往生は遂げないぞ、聞けば佐々木家再興とやらの野望のため、軍用金を集め、味方を集めるための山賊と

か、そんなつまらぬ野望は捨て、今日ただ今より真人間に立ち帰るつもりはないか……、不服となればいたし方ない、その方の命はもらうが、返答はどうじゃ」

清「猿飛、きさまはいつそんな説法を覚えた、山賊の張本にそんな説法は無駄だ、早いところ片付けてしまえ」

佐「いやそうでない、一将は得がたし、上に立つ人間一人で世の中がよくもなり悪くもなる、頭に立つ人間ほどたいせつなものはない、そのくらいのことは、毎日の新聞やニュースできさまも分かっているはずだ、おれにまかせろ」

なおも意見をしているところへ、山塞からやって来た手下の者ども、お頭の仇と斬ってかかろうとすると、由利鎌之助、苦しい息の下から、

由「やい者ども、心得違いをするな、手向かいをいたすな」と、気負い立つ手下の者を制しながら、

由「いやご意見、恐れ入った、貴殿のお腕前と申し、お情けと申し、鎌之助、ほとほと感じ入り、真から後悔いたした。今日ただ今より心を入れかえ、以後は決して悪事はいたしませぬ、どうか一命だけはお助け下されい」

そこで猿飛は手を緩めて起こしてやると、鎌之助は大地にぴたりと両手をつき、

由「いや、実に恐れ入ったるお腕前、拙者ごとき者のとうてい及ばざるところ、ほとほと感じ入り申した。拙者は元江州観音崎の城主佐々木六角入道承禎の臣、由利鎌之助春房と申する者、志あってこの山塞に入りたるも、もとはと申せば主家の再興を夢見てのこと、もうその望みは捨て申した、して貴殿のご姓名を承りたい」

佐「いや姓名を名乗るほどの者ではないが、信州上田の城主真田家の家臣、猿飛佐助幸吉、またこれなるは同じく三好清海入道と申すもの、以後お見知り置きを願いたい」

由「それでは、うわさに聞きし豪傑猿飛佐助殿に三好殿でござったか、このご恩は生涯忘却いたさぬ。今夜限り下山いたす覚悟。ついては、これより山塞にお泊まり下されますよう。一献さし上げたい、かつ手下の者どもにもそれぞれ意見をいたし、改心いたさせたうえ、手当を与えて離散いたさせまする」

真心を面に現しているのを見て取った猿飛佐助、

佐「三好どうしよう、せっかくの話だから今晩はともかく、山塞へまいろうと思うがどうじゃ」

清「そうだな、酒と聞いてもうがまんがならぬわい、いこういこう」

気の早い清海入道、ずんずんいきかけるのを見た由利鎌之助、

由「三好殿、どこへいかれるのだ」

清「どことは知れたこと、山塞へまいる」

由「山塞はあべこべ。それから先は崖でござる」

清「ギョッ、これはどうも失礼」

佐「失礼もないものだ、そそっかしいやつだ」

由利鎌之助が連れて来た山塞、見ると、岩を抜いて鉄の扉があって、なかなか厳重な構えで、弓矢、鉄砲、槍、薙刀が飾りつけてあって、ぜいたくなことご主君の真田家でもこれ程でない。両人は大広間に案内され、そこで、歓迎と解散を兼ねた大宴会、猿飛と三好は正面にすえられ、由利鎌之助はその次に座っただけで、手下のものには上下のへだてなく己がじしに座を占めた。

運び出されたものを見ると今日を限りの山塞のことですから、倉庫を全部解放して、珍味という珍味尽くし、生物もあればかんづめもある、酒も特級酒からどぶろく、洋酒もウイスキー、ブランデーよりどりという豪勢さ、帝国ホテルのバイキング料理も遠く及ばない。

清海入道喜んだのなんの、酒を一献と聞いただけでのどをグウグウいわした程ですから、

清「猿飛、今夜は飲んでもよかろう、どうせどろぼうでかっぱらったものだからな」

佐「ばかなことを申せ、あまり過ごしてまた暴れるな」

清「心配するな、今夜はきさまも飲め、どろぼうの家へ来て、遠慮するやつがあるか、どうせ元手のかかった品ではない」

まるで自分が振る舞っているような口振り。清海入道は佐助の許しが出たから飲むわ飲むわ、あげくのはてには、たこ踊りのステップを踏むというはしゃぎ方でございます。

その晩は、この山塞に泊まり、その翌朝この山塞に火を放ち焼き払ってしまいました。

猿飛佐助、清海入道、由利鎌之助の三人は、山を下って石部の宿に来て旅籠へ泊まることになりましたが、由利鎌之助改まって、

由「さて、猿飛氏、拙者折り入ってのお願いがござる、なんと聞き届けては下さるまいか」

猿「改まって……拙者にてかなうことならなんなりと……」

由「拙者も貴殿のご意見によりようやく真人間に立ち帰ることができ申したが、今後は貴殿のような豪傑勇士と交わり、天下に名を残すような者になりたいと存ずる、ついては貴殿の弟分にして下さることはできまいか」

猿「よくいってくれた、いったんは山賊となっても、主家の再興を願うとは見上げた志である……昨日からの様子、まことに神妙である、よし弟分にしてやろう」

由「いやさっそくのご承知千万かたじけない、三好殿は介添え役になってくれ」

清「どろぼうも善に帰ると強い、うむ承知した」

ここで互いに血をすすり合って義兄弟となり、猿飛佐助が義兄、鎌之助が義弟ということに相成りました。

きさまが石川五右衛門か

佐助、三好、由利の三人の豪傑、泊まりを重ねて、今しもやってまいりましたのは、花の都京都、四条通りの山城屋藤蔵という旅籠に宿を取りましたが、旅の疲れが出たか、三豪傑とも翌日の日の高く昇るまでぐっすり寝込んでしまいました。

三「いやおはよう」

佐「おはようでもあるまい、お日さまがニコニコ笑ってらあ、でもなあ三好に由利、この二三日夜昼なしに歩き通したから疲れたな」

由「おれはもうとっくに目がさめていたが、二人があまりよく寝ているのでおつき合い寝をしていたのだ、こういうおつき合いなら楽でいいや」

女中の持って来た朝飯を、たんまり食べてみんなそろってぶらりと宿を出ましたが、佐助は、

大徳寺の法要の折、主君のお供で一度来たことがありますから、勝手を知っているので案内役、ここが金閣寺、ここが嵐山、ここが平安宮、ここが大徳寺、ここが本能寺、東本願寺に西本願寺、ここが三十三間堂、ここが有名な祇園だなどとなかなかな名調子で説明しますから、二人とも四五日というもの楽しく名所旧跡を見物しておりました。

ある日、猿飛佐助、ただ独り、ぶらり宿屋を出て足にまかせて歩いているうちに、やってまいりましたのは東山南禅寺、その山門を抜けようと、歩いて来ると、どこかでひそひそ話す三人の声、三丁四丁先から人の話し声が聞こえるという代物だから、いち早くもその話し声を聞きつけた、あたりを見回したが、どうしても人影が見当たりません。どうやら山門のところからもれてる様子、見ると、傍らに大きないちょうの木がそびえ立っているから、お得意の忍術で大地をパッとたたくと、身は軽々と三丈もあろうという大いちょうのてっぺんに上がった。それから山門の中を透かして見ると、さっきまで、たしかに三人で話していた声がぴたっと止まった。

おかしいな——となおも様子をうかがっていると、山門の方から、ピューッと飛んで来た手裏剣、猿飛の真っ額にささったかと見えたが、佐助さっと右手を開いて受け止め、「えいっ」と投げ返すやいなや、ごう然一発、今度は弾丸が飛んで来たが、佐助、その弾丸に向かって「えいおっ」と気合いをかけると、あな不思議、その弾丸はシュートして左に外れた。

いよいよ怪しいとにらんだ佐助、気合い一声！　七八間も離れた山門目がけて飛びつく。油断なくあたりを見回したが、目に入った四畳の部屋、金銀珠玉を山のごとく積み重ねる豪華とも絢爛とも、飾り立ててはありますが、人っ子一人いないところを見ると、佐助の早業に恐れをなして逃げたるか、と忍び足に入って見ると、隣の二畳の間にだれやら、呪文を唱えながら九字を

切っているものがある。術をかけているからただの人間には見えないが、天眼通の佐助にはそれがよく見える。怪しきやつ、何者なるかと飛び込まんとすれば、くだんの男の姿は煙のごとくスーッと消え失せてしまった。

佐「ははあ、こいつ、こざかしや、忍術を使いおるわい、こいつはおもしろい」

と、腰をひねって、手裏剣取るやと見えたがそばの大いちょうの茂みを目がけて「えいっ」となげつければ、こはそもいかにくだんの男、印を結び手裏剣を口にくわえて姿を現し、パッと楼上に飛び下りて来た。

○「あいや、それなる若侍、思いの外に手ごわいやつだ、てめえの名を名乗れ」

佐「はっははは、わが名を聞きたくば、まずきさまの名を名乗れ、察するにきさまは部屋の様子といい、今の口のきき方といい、武士ではあるまい、不正の栄華をむさぼる盗人と見たがどうじゃ、こうとにらんだわが目に狂いはあるまい」

○「ギョッ、ご名答、サイザンス、恐れ入った。かくなる上は名乗って聞かそうか、われこそは後世までもその名をのこしたる大盗人の総本家、石川五右衛門だ、どうだ恐れ入ったか」

佐「うーむそうか、近ごろ京洛のちまたにちょいちょいうわさに上る石川五右衛門か、ああ、きさまが五右衛門か、盗人たけだけしいとはよく申した、そのくらいの忍術で恐れるような拙者ではない。わが名を名乗ってつかわすから耳の穴をようくかっぽじって聞け、われこそは、戸沢白雲斎より免許皆伝の奥義を授けられ、当時は信州上田の城主真田家にその人ありと知られたる猿飛佐助幸吉だ、きりきりっとよく拝め」

石「うーむ、さてはこのごろちーっとばかりうわさに聞こえた猿飛佐助さんかい、おいらの忍術

は伊賀国の浪人百々地三太夫先生より授かりしもの、盗人の術にはこれに限る」

佐「これやい、五右衛門、盗人の術とはなんたること、いやしくも武術と共に尊ばれたる世にもまれなる忍術を利用してどろぼうを働くとは不届き千万、お師匠が聞かれたら残念に思われることであろうぞ」

五「さてもさても気の小さきことよ、おいらのどろぼうは天下相手の大どろぼう様だ、二千や三千石の大名は物の数じゃねえ、見ろ、おいらの幼友達の猿面冠者は天下を握っているではないか、それを思えばまじめくさって仕官しても、さようしからばごもっともで、あまり度がすぎればイエスマンなどとあだなされ、おまけに知行がわずか二千か三千石のへっぴり大名、気に食わねえ大名相手に荒くかせいで、この世を太く短く暮らすのだ」

佐「その力量と見識を持ちながら盗人の総本家などとうそぶくとはあたら男がすたれるぞ、どうじゃ了見を改めて世のため人のためつくす気はないか」

石「そんなこと、きさまから聞かないでもよく知ってる、分かってる、釈迦に説法馬の耳に念仏たあこのことだ、まあまあ意見がましいことは抜きにして、せっかく会ったんだ、ひとつ術くらべをやらねえか」

佐「盗人と試合をしたところで自慢にはならぬが、断るのもひきょうゆえひとつ見参いたそう」

石「よし、おいらからいくぞ」

と、五右衛門、エイッと一声叫ぶや、姿はパッと消えて一匹のねずみと変わる。

佐「そんなのはもう古い、忍術の幼稚園で教える第一課だ」

といいながら、ヤエイッと掛け声とともに身をひるがえせば、たちまち佐助の姿はねこと変わ

り、くだんのねずみをはったとねめつけ、今にも飛びかからんと身構えた折しも、

五「負けそー、いけまへんわ、わてよういわん、さればこれはどうだ」

と、傍らにある火ばちを臨んでその中になにか投げ込んだと見るうちに、パッと火焔が立ち上り、五右衛門の姿はまたもや煙と消えて火焔はますます勢いを増すばかり。

佐「ややっ、火遁の術で来たな、よし、こしゃくなやつ、こうしてくれる」

と、白雲斎先生から、授けられました鉄扇高く左手にかざし、天に向かって二度三度さし招けば、あな不思議、どこからともなく打ち寄せ来たったる水は、ドブンドブンと音を立て洪水となり、火焔は次第次第に打ち消されてしまった。

すると、どこかで、苦しげな声で、「まいったまいった」と、うめき声がしたかと思うと、石川五右衛門姿を現し、

五「またもしてやられたか残念」と、くやしがる五右衛門をしりめに佐助、鉄扇をひらいて水をあおげば水はどこともなくスーッと引いて失くなった。いよいよ第三ラウンド、最後の術比べでございます。石川五右衛門、今度こそはと、「テケレッツのパー」と妙な掛け声をかけると、あたり黒闇々となるその中から一つの火の玉がふわりふわりと飛んで来る。

佐助少しもあわてず、火の玉のそばに進みより、かの鉄扇でその後ろを「えいっ」と一声気合いとともに打ちたたけば、「あっ痛い」といったかと思うと術はとけ、姿を現した、石川五右衛門の額からは血潮が流れております。それを見た佐助カラカラと軽く打ち笑い、

佐「こりゃ五右衛門、そもそも忍術とは相手の目をくらます術じゃ、きさまより腕の優れたる拙者の目をくらまそうとしてもそれは無駄なこと、火遁の術には水遁の術、水遁の術には火遁の

術で防ぐ、ねずみと出ればねこと出てそれを追う、火の玉と見せかけて、姿を後方に隠すくらいは、これ虚と見せて実を隠す忍術の第一歩、われは火遁、水遁、木遁、金遁、土遁、やき遁、すい遁の術をことごとく会得しおれども、これをめったなときには行わぬ、しかるにきさまは盗人の手段に忍術を使うとは不届き千万、先刻より見るに部屋の飾りといい、なにからなにまで贅の限りを尽くしおるが、気に食わぬ大名相手の荒稼ぎと申すが、人の世に悪の栄えしためしはないぞ」

と、いいながら、そばの戸を開ければ、美人一人、ひよひよと飛び出して、

女「あれさ、猿飛さまおこーんにちわ」

佐「ああ気持ちが悪い、五右衛門、この女はなんじゃ、案に違わず、きさまの性根は腐っておるわい、かようなことで忍術が使えると思うのか、ばかめ、今日はこのまま別れるが、以後再び会うときには、なんじの一命はないものと思えよ」

みっちり意見をして、楼上の欄干に片足をかけ、エイッと一声かけて三丈もあるところからひらりと飛び下り、宿をさして帰っていきました。

塙団右衛門ついにへなへな

佐助は、何事もなかったような格好で宿に帰って来ますと、

佐「いやどうも、今日という今日は、おもしろかったぞ、おい三好、きさまも連れていってや

ればよかった、実は南禅寺の山門のところで、近ごろうわさに上る石川五右衛門という盗人に出会い、これこれだった」

と話すと、三好くやしがること、

清「そうか、それは残念だったな、おれだったら、引っ捕らえて来て五右衛門風呂でもたかせるところだったがなあ」

由「三好はすぐそんなことをいうからいかんよ、天下の怪盗石川五右衛門が、そんなにたやすく生け捕れてたまるか」

佐「うむ、あの男もあたら惜しいものだ、普通にいけば大した者になる器量を持ちながら、邪道に踏み込んだばかりになあ」

同じ忍術を修行したわが身に引き比べて、なんとなく感慨無量の体でございます。

清「怪盗だろうが、なんであろうが、どろぼうはどろぼうだ、由利のように改心すれば今はどろぼうではないが、それでも前科調べをすればどろぼう、山賊、誘拐、殺人といろいろな前科がつくからなあ、おい元どろぼう」

由「おいおい、どろぼうはよせよ」

清「だからさ、おれもきさまが今どろぼうだとはいっておらぬ、元どろぼうだったから、元どろぼうといっただけだ」

佐「もういいかげんにしろ、三好の口の悪いのは今にはじまったことではないが、もうそろそろ京都を立とうではないか」

清「そうだ、明朝は出立しよう」

明くる朝、宿を立ち出て、どこをあてとなく歩いているうちに、日はとっぷりと暮れたころ、三豪傑がやってまいりましたのは、伏見の藤の森近くの野道、幸い月影がさしておりますが、人里離れた寂しい街道。

佐「うむ、向こうに荒れ寺らしいものが見えるぞ、この近くには宿も人家もないから、あそこで一夜の宿を頼もうではないか」

由「おい大丈夫か、野盗の隠れ家かも知れぬぞ、……しかしこの三人なら大事なかろう」

清「なにを申すか、きさまだってついこのあいだまでは山賊でかせいでいたやつだ……ことによるときさまの子分かも知れぬぞ、もしそうだったら、こよいのサービスは満点とくるところだな」

由「またどろぼうか、もうたいがいにしろ」

話しながら三人が乗り込んできた古寺、門に立って見ると、門は傾き軒は破れ、縁は朽ち、とびらは倒れ、本堂の畳は破れ、所々に雑草が生えていて、昼でさえ狐狸が出そうな所、さし込む月の光でそれが見えます、まるで幽霊屋敷みたいに薄気味が悪い。

清「やっ、これは少しひどすぎる、雨でも降った日には雨露をしのぐどころじゃない、今夜は月夜だから、さしずめ月見の床としゃれるか、それにしても冬の月見は寒すぎる」

佐「風流気でも出して、これで『荒寺の月』でも作詩するのも一興だ」

由「それにしても、これは無人の廃寺かな」

佐「いや、廃寺ではない、人の臭いもするし、奥の方で火のいぶる音がする、おれにはちゃんと分かる」

由「なる程、猿飛兄は、忍術の名人、そのくらいのことは分かるはずだな」
清「そういえば、どうやら奥の方から煙が立っているらしい、一つ探ってまいるか」
佐「うむ、三好、きさまは案内役になれ、しかし、かりにも人の住まい、案内をこわずに上がるのはエチケットに反するぞ」
清「よし……え、お頼み申す……え、お頼み申―す……だれもおらぬのかな、え、お頼み申―す」
だんだん大きな声で呼んだがだれも出て来る様子がございません。
清「これはおかしい、だれもいないらしい、それとも坊主はつんぼかな、まだ寝ている訳でもあるまい」
と、つかつか玄関を上がり奥へいって見ると、なる程猿飛のいった通り、炉が切ってあって火怪の住みかに火はないはず、おかしいと思いながら、庫裡とおぼしき部屋に来て見ると、一升どっくりがあって、肴が膳の上に用意してあるから、お酒つき据え膳というところ、燗さえすればいいようになっております。
一日中、歩き通して来ているから、清海入道もうたまらない。
やがて玄関に来て、
清「だれもいないが、これこれだ、もう間もなく、主も帰ってくるだろう、そんな所に立っていては風邪をひくといかん、とにかく上がって待とうではないか」
と、いうので、三人連れ立って、この部屋に待っておりましたが、清海入道、一升どっくりが目の前に据えてあるから、もう腹の虫が納まりません。

清「みんな腹は空かないのか、おれなどはもう腹ぺこだ、主はどうしたのかなあ、早く帰ってくればいいのにのう」
酒のとっくりと肴の方を等分に、見分けております。やや一刻も待ちましたが、主の帰る様子がないから、清海入道、もうがまんができなくなって、とっくりをなでたり、膳を動かしたり、ねずみを捕ったねこが、ちょくちょくちょっかいを出してなぶっているようでございます。
清「酒はだいぶ入っているようだ、そろそろ遠慮なくちょうだいしようではないか」
佐「三好、きさまとうとう本音を吐いたな」
由「もっとも据え膳にはしをつけぬのは、男の恥と申すからな」
佐「ばかなことを申すな」
清「だが、理屈は同じだ、くだらぬ遠慮はやめて、じゃ案内役から毒味をいたす」
と、いって清海入道はしをとったが、
清「いや、これはしゃれたものだ、酢だこにうなぎのかばやき、オムレツ、トンカツ……、なんだこれは、うどんに穴があいてるぞ、よくこんな長いものに穴をあけたな、由利知ってるか」
由「それはイタリヤが名産地で、マカロニと申すものじゃ、それはうまいぞ」
清「たとえマカロニにもせよ、うまく穴をあけたものだなあ」
清海入道つまらぬところに感心しています。
清「せっかくのおもてなし、遠慮なくちょうだいいたす……猿飛一献いこう、これは灘の生一本じゃ、こくがあるぞ」
佐「うむ、これはいける、これならおれにも飲める。二級酒は酔っても、すぐさめるから……」

少し酒が回ってくると食欲が出るもので、飲みながら三豪傑、膳の上の肴をつまんでむしゃむしゃやり出した。三豪傑のことですから、一升くらいはたちまち平らげてしまった。

膳の肴がなくなると、清海入道が台所にいってたくあんと飯びつを持ってきて、茶漬けで腹十二分に食ったから、一杯きげんの三人はごろっとなると、手まくらでそこにぐうぐういびきをかいて寝てしまった。

それから一刻もたったころ、のそりのそり帰って来たこの寺の和尚、

坊「おお寒い、今夜はばかに冷える、どうりゃ一杯やって寝ましょうかい」

いいながら、部屋に入って来たのを見ると、身の丈あくまで高く、大兵肥満の大坊主、どう見てもただの坊主ではございません。

射ぬくような眼で部屋の中を一わたり見回すと、三人の大男が炉のそばに寝ころんで高いびきをかいてる、膳の方を見ると、膳の上は取り散らし、とっくりは倒れておりますから、大坊主の目はきっと光った。

坊「空き巣ねらいというのは聞いたが、この空き巣は空き巣食らいか、とんでもないやつがあるものだ……不届きな奴輩、主人の留守中に無断で上がり込むばかりか、酒肴まで勝手に食い散らすとは、けしからぬ……これやいっ、起きろ起きろ」

ずかずかやって来ると、佐助の肩口をけ上げた。佐助は、先刻から目を覚ましていましたから、ぱっと身を起こすや、気合いをかけて、五六間向こうにひょいと飛び退いた。

坊「やり損じたか、今度は坊主だ」

と、清海入道の胸ぐらを取って引き起こし、

坊「やいやい坊主目を覚ませっ」

いいざまざざえのようなげんこつで、いきなり三好の横っ面をポカリッ、

清「あ、痛いっ、なにをするか無礼者」

びっくりして清海入道見つめれば、雲つくような大坊主、

坊「無礼とは何事、だれに断って酒肴を食らった、食い物のうらみはこんなものだ、さあ、覚悟しろっ」

清海入道の胴体をむんずとつかみ、目よりも高くさし上げ、こっぱみじんに砕けよとばかり、庭石めがけて投げつけた。

寝ぼけっ面のところを不意を食らって投げつけられたから、舵をとることもできません、さすがに清海入道、くるりっと一回りして起き上がったが、ようやく目が覚めたから、怒ったのなんの、青筋を立て、組みついて来た。大坊主はそれをほいと受けとめて、腰帯に手がかかったと思うとしゃにむに片手で二度、三度振り回して、またも庭の方へ投げ飛ばした。いやその強いのなんの超金剛力だ。

これを見た由利鎌之助、足をふみしめ、はずみをつけ、横合いから飛びかかったが、大入道巌として動かばこそ、

坊「なんだ蚊とんぼ、きさまはこうしてくれる」

と、猿臂を伸ばして片腕つかんだと見るや、ハンマー投げのモーションをつけるように、くるり、くるりっと二度、三度振り回してポイッと本堂の方に投げやった。

この様子をじーっと見つめていた猿飛佐助、——この坊主、ただの坊主ではない、三好や由利

を子供扱いにするとは油断のならぬやつだ――と思ったから、

猿「よし今度はおれが相手になるっ」

とつかつかとそばに寄ったかと思うと、

猿「えいっ」と一声気合いをかけるや猿飛の姿はパッと消えて失くなった。

大坊主、あっけにとられて、

坊「ややっ、こいつおかしなことをやりおるわい」

いいながらきょろきょろしていると、いきなり後ろの方から耳をぐいぐい引っ張る。

坊「痛いっ、これこれ、耳を引っ張るとはひきょうなり、こうしてくれる」

と背後を振り向くと、今度は頭をポンとたたいて鼻をいやっという程引っつかんで、ぐいぐい引っ張った。

坊「ほおい、痛いよ痛いよひどいことをするな、痛いってば……」

姿の見えない者から耳を引っ張られたり、鼻をつままれたり頭をたたかれたり、左を向けば右に、右に寄れば左に、姿を現したりくらましたり、前後左右自由自在に、くるくる立ち回られて、さすがの大入道も手の施しようがなく、フーフーいっている。

佐「さあ坊主、もうそろそろ降参するか、いくら力が強くてもおれにはかなうまい、手の鳴る方へ……」

と、さし招く、五条の橋の牛若丸と弁慶の争いもかくやとばかり、大坊主今は怒り心頭に発し、

坊「さあ、こうなったらきさまの命はもらうから覚悟しろっ」

と、長押にかけたる二間柄の大身の槍をとるより早く、リュウリュウしごいて電光石火と佐助の胸板のぞんで突いて来る。佐助もひらりひらりと軽くいなして空を突かせば、してやったりとまたもねらい定めて突き出すやつ、佐助の胴体は田楽刺しかと思いきや、パッと姿を消す。五度、六度と空を突かせれば、一突き一突きに渾身の力を注ぐ大入道の体は、ひょろりひょろり。その透きをのぞんで、飛び込みざま、坊主の顔を逆さになでた。

坊「いや、ぶ、無礼者、ふざけた真似をいたすなっ、さあ来い」

と、槍を投げすて、大手を広げて佐助を目がけて暴風のようにうなりを生じて飛び込んで来るやつへ、猿飛の姿はパッと消えたからたまらない、大入道はまたも空をくらって、柱へ頭をガンとぶっつけて、ばったりその所に横ざまにぶっ倒れ、うんうんうなり出した。佐助ワン、ツーとカウントして、エイトぐらいになると、剛情我慢の大入道、ひょろひょろっと立ち上がり、飛びかかってまたも自分の力で、柱に頭をぶっつける。こんなことを三度もつづけられてはどんなしたたか者でもたまりません。顔面蒼白となった大入道目からポロポロッとそら豆のようなくやし涙を流し、歯を食いしばったままドウとその場に座ってしまった。それを見てころはよしとばかり姿を現した佐助、

佐「どうじゃ、そこなる豪僧、御身はよもや、ただの坊主ではござるまい、姓名を名乗られたい。かくいう拙者は信州上田の城主真田左衛門尉幸村殿の家来、猿飛佐助といえる者、またあれなるは三好清海入道、由利鎌之助と申すものでござる」

坊「うーむ、さもありなん、真田家にその人ありと知られたる忍術の大名人、猿飛佐助殿なりしか、いや珍しき御仁に出会ったものだ、拙者は大言に似たれども、今の今まで一度たりとも後

れをとったことはござらなかったが、六十九連勝ならずついに貴殿に名をなさしめたり、さても忍術は調法なるものよ、なにを隠そう、拙者は塙団右衛門藤原直之といえるもの、以後は昵懇に預かりたい」

これを聞いて驚いた三人、強いはずだ、天下名代の豪傑だから無理からぬ話。こうと素性が分かると、いずれも竹を割ったような気性だから、今となってみれば、争いなどはけろりと忘れ、遺恨に思うようなことはございません。その晩は互いに打ちくつろいで語り明かし、翌朝、三人はここを立ちいでました。

いずれが竜か？　いずれが虎か？

途中別段のお話もなく三豪傑やってまいりましたのは伏見、そこに二三日足をとどめ、桃山城内の様子を探り、それより河船によりまして淀川を下り、大阪の八軒屋へ到着。

宿をとって、毎日三人は市中をあちらこちらと回っておりました。猿飛は相変わらず、忍術をもって大阪城内に忍び込み、城内の様子を探っておりました。

ある日、三人が宿で話しておりますと、外の方に当たってわいわいとたいへんな騒ぎ、

○「けんかだ、けんかだ」

×「じいさんが殺されそうだ、助けろっ」

と、野次馬が高声に話しながら走っていくのを聞きつけた清海入道、

清「なにっ、けんか、町人か武士かは知らないが、けんかと聞いては黙っておられぬ、義をもって助太刀いたしてくれん」

坊主頭にはち巻きをして、清海入道が先立ちになって押しかける。

清「あすこだあすこだ、たいへんな人の黒山だ、なにがなんだか分からないが、押し開けて入れっ」

三人の豪傑、どいたどいたと黒山の人を押しのけて分け入りて見れば、一人の老人を相手に多くの若者が刀をぬきつれ斬りかからんとしておる様子、

清「老人がかわいそうだ、ひとつ助太刀をしてやろう」

由「うむ、そうだ、助太刀してやろう」

今にも二人が乗り出そうとしたが、猿飛、老人の様子をじーっと見ておりましたが、

佐「いやいや待て、見受けるところ、あの老人なかなか腕に覚えがあると見える、なまじ助太刀は考えものだ、武士の情け、もう少し様子を見てからにした方がよいぞ」

はたせるかな、老人の構えには、少しの油断も透きもなく、老人の気合いに押しまくられて若者はじりじりと退いていく。

すると、残りの二十人余りの若者が、仲間危うしと見て、これまた老人目がけて斬ってかかる、老人はそんなことでひるむ様子もなく、

老「なにっ今時の若い者に敗けるおれではないわ、鍛えに鍛えたこの腕前……討てるものなら討って見よ、元気ばかりでは勝てぬぞ、年は取っても……さあまいれ、いくぞっ」

さっと払った一刀、閃一閃、前にいる若者の三四人、胴輪斬りになって、胴体は上と下に生き別れ。

○「ややっ、敵は手ごわいぞ、老人だなんて侮るな、油断するなっ」

四方八方から、一人の老人めがけて斬りかかる、右に左に身をかわし、前へ後へと一進一退息づまるような血戦、群がる若者の方は老人の必殺の刃のために、ばったばったと斬りに倒されておりましたが、いかに気丈の老人も、なにさま、先刻よりの奮戦に、体はぐったり疲れてきた様子、相手の若者は新手が加わっての対戦でありますから、

佐「うーむ、このまま捨て置いては老人の命にもかかわる大事、それ助太刀いたせっ」

と、下知するや、佐助は得意の忍術で身をかくし、若者の中に飛び込む、清海入道と由利鎌之助は、前にいる群衆を押し分けて進んでいきました。

佐助は、争いの真っただ中に姿を現し、若者たちに向かい、

佐「老人一人を相手にこの多勢、義によりてわれら老人に代わって相手をいたす、ご老人しばらく休憩めされい」

○「やいやい、てめえは天から降ったか、地からわいたか知らねえが、つまらねえ義理立てをしやがると、ただじゃ置かねえぞっ」

佐「騒ぐな、なんじら見れば市井の無頼が、武士に対して無礼であろう、しかのみならず、ご老体一人にかくも多勢にて立ち向かうとはひきょう千万、こうしてくれるっ」

いったかと思うと、どこに隠してあったものか、かんしゃく玉をめったやたらに投げつけたから、あたりは白煙もうもうとなる、これが火遁の術。

若者たち、あっけにとられているところへ、清海入道と鎌之助の二人が飛び込みざま、手当たり次第に殴る、ける、投げるの早業に、手の施しようもなくほうほうの体。

この透きに、佐助は老人を小わきに抱え込み、パッと地をたたけば、老人もろとも、黒山の人の上を例の頭上乗り切りの術で乗り越えて救い出してしまった。

若者たちは、清海入道と由利鎌之助のために、散々いためつけられましたから、

△「いや、こいつあかなわねえ、逃げろ」

×「そうだ命あっての物種だ、逃げた逃げた」

と、黒山の人を押し分け、どんどん逃げ出した。見ると佐助と老人の姿が見えない、

清「由利、猿飛と老人が見えないが……」

由「あれっ、けんかの方に夢中になっているうちに逃げたか、それにしてもどこにいったのか」

と、二人がきょろきょろしていると、

佐「おいおい、ここだ」

声する方を見れば、そばの松の木の根かたに猿飛と老人が腰かけて招いている。

二人そこへやってまいりますと、老人は三人の前にていねいに会釈をなし、

老「いや、お三方のご助勢、千万かたじけない、根も葉もなきわずかな口論の末にこの騒動、相手はこの界隈を荒らす無頼の徒、御身たちがご助勢下さらねば、拙者はあたら生命をおとすところでござった。お三人のお腕前恐れ入る外ござらぬ。拙者は大谷刑部少輔吉隆の家臣勝田新吾左衛門でござる」

佐「あいや、ご賞美にあずかりかえって恐れ入る。しかしお怪我がなくてなにより重畳、拙

者は信州上田の城主真田家の家臣にて、猿飛佐助、これなるは三好清海入道、由利鎌之助と申すものにござる」

それを聞いて驚いた勝田新吾左衛門、

新「えっ、御身たちは真田家のご家来でござったか、してみれば、まんざら他人ではござらぬ、いやどうもお礼は言葉では尽きませぬ、とにかく拙者宅までお越しが願いたい」

というのは、真田家と大谷家とは、親戚の間柄、殊にその息女千代姫は後に幸村公の奥方になったという因縁がございます。

佐「ははっ、せっかくのお言葉、どうだ三好、由利、ご老人のお供をしようではないか」

両人「うむ、よかろう」

そこで、町役人に対して、けんかの次第を届け、死体はそれぞれ片付けさせて、新吾左衛門は三人を連れてわが屋敷に帰り、いろいろと手厚いもてなしをいたしました。

新吾左衛門からこのことを主人の刑部吉隆に言上、その後吉隆より、秀吉公に申し上げますと、秀吉公は筑前守の時代、大徳寺の焼香のときに、佐助と清海入道に会ったことがありますから、はたと小ひざを打ち、

秀「うーむ、真田の豪傑猿飛佐助と三好清海入道が当大阪表にまいったとは幸い、彼らと予はかねてより見知りの者、由利鎌之助といえる者も同道して予が目通りを得させたい」

と有り難いお言葉、吉隆はこのことを勝田新吾左衛門に申し伝える、新吾左衛門は三人に通知に及びましたから、日を選んで秀吉公にお目通りを得ました。

そのとき、大阪城にお召し抱えになった亀井流の祖、槍術の名人亀井新十郎と試合をして興を

添えよとの仰せが下りました。

刑部吉隆はこのことを三人に申し伝えますと、猿飛は由利鎌之助に向かい、

佐「鎌之助、きさまは槍術の名人と聞き及んでいる、どうだきさまがお相手いたせ」

由「うーむ、他のものなら兄貴には及ばないが、槍術では、いかなるやつが出るとも、そう易易とは後れを取ることはあるまい、いかにも承知した」

そこで、亀井、由利の両人、かいがいしく仕度に及び、広場に立ちいで、形のごとくあいさつをして、両人は蒲公英つきのけいこ槍を携えて、双方に別れて身構えに及びました。縁側には秀吉公おん着に相成り、天下の豪傑が星のごとく居流れて、この勝負いかにと、かたずをのんで控えております。しばらくの間両人、エイといえばオーと答え、相手の透きをうかがっておりましたが、その様は竜虎相打つの形、一方が竜の勢いを出せばこちらは虎の勇を現し、場内は鳴りを静めて控えている。両人しばしの間は、作りつけの人形のよう、新十郎、由利の構えを見て驚いた。

新「うむ、こいつはどうしてどうして大した腕前だ、気合いといい構えといい、寸分の透きというものがない、油断はならぬ、勝てなくても互角の勝負はしたいものだ」

槍をもって三位の位を頂いたほどの人物ですから、それくらいのことは分かります。

由利鎌之助の方でも、

由「ほほう、これは偉いやつに出会ったぞ、槍をもっておれに向かうものは少ないと思ったが、天下は広い、こいつは、なる程槍一本で三位の位をいただく値打ちは十分にある、しかしおれも佐々木家にあって槍をとっては万夫不当とまでいわれた者だ、見苦しい敗けは取られない」

両人とも同じようなことを考えています。しばらくはなおも、透きをねらって相対しております。

このとき、由利鎌之助、いかなる透きを見出したか、「えいっ」と繰り出した槍先は、電光のごとく、新十郎の胸板をのぞんで突き出した、まともに受けては気合いの満ちた槍先、真槍でなくても気絶はいたします。新十郎それを開いて繰り出すその手練は、稲妻のひらめくに似て目にも止まらぬ早業、アッといずれも声をのみ、手に汗を握っている。

またもや、位取りをいたして、にらみ合っておりますが、由利の繰り出す槍先は、大蛇が舌を出すごとく、閃一閃、一本の槍が数十本にも見える早業。これをご覧になった秀吉公、

秀「由利といえる者、新十郎の槍先に向かってあわすほどの者、天下広しといえどもあっぱれ槍術の名人なるぞ」

こちらは亀井新十郎、秀吉公のご指南番、日本全国の名人の中から選ばれたほどの腕前だけに、驚かず騒がず、突けば開き、開けばつけ入って一上一下、虚々実々、竜虎の争いは千変万化を尽くしていつ果てるとも見分けがつかなかったが、由利の突き出した間髪を入れざる早業に、天下無双の名人亀井新十郎も槍を手元に引く透きもなく、パッと手元につけ入ったかと思うと、

新「まいった」

と一言。

場内は、うーむと感じ入ったうなりに似た声がゆれ渡り、由利鎌之助の腕前をほめそやさないものはございません。秀吉公殊の外にごきげん麗しく、鎌之助に対してはその非凡の腕前を賞美され双方へお杯を下されました。

このとき、つかつかと立ちいでました身の丈六尺余り、眼光けいけいとして人を射るようなすごい大の人物、これなん、筑前福岡五十四万石、黒田甲斐守長政公の家臣で大隅において御高三万石、天下三槍の一人といわれた、後藤又兵衛基次、この度主人長政公のお供をして秀吉公のごきげん伺いとして大阪城にまいって、ご陪席をしておりました。なにしろ後藤又兵衛といえば天下の大名は一目も二目もおいている、秀吉公にしてもかなりの遠慮をしている。黒田の五十万石はこの後藤又兵衛の槍先で取ったといわれるくらい。秀吉公その他に会釈をなし、

又「あいや、由利鎌之助とやら、しばらく待たれい、御身の槍術なかなか鮮やかなり、拙者は後藤又兵衛基次なり、お相手をいたすから十分に来さっしゃい、勝負は時の運、亀井殿を破りたるその許の手並み、さあ遠慮なくおいでなさい」

いいおわるや、槍をとってリュウリュウとしごきをくれて広庭の真っただ中に突っ立った。由利もこれが天下の豪傑後藤又兵衛か、もとより大胆不敵な由利、ひとつ自分の力を試そうと思ったから、

由「おおこれはこれは、貴殿が天下無敵槍術の大名人といわるる後藤又兵衛基次殿でござるか、とても拙者ごとき未熟者がお相手はでき難きところではござるが、せっかくのご教授かたじけなくお相手つかまつります」

すると清海入道、つかつかとひざを乗り出し、

清「おい由利、しっかりやれよ、相手を後藤と思うな、一心岩をも貫くためしがある。もし敗れても恥ではない、岩と思って遠慮なく十分に突きまくれよ」

これを聞いた後藤又兵衛、

又「あはははは、おもしろい坊主だ、拙者が岩か、さあ思いきりかからっしゃい」
由「後藤氏、お手柔らかに」
「えい」「やっ」と、互いに槍を構えてにらみ合う。
見物の豪傑連中、こんな勝負はめったに見られるものではないから、いや喜んだのなんの。
秀吉公はじめ、諸大名の面々、顔も振らずにこの勝負いかにと見守る。こうなると、本人より見物の方が一生懸命だ。中には心秘かに由利に勝たせたいと祈るものがあるくらい。
由利はここが一生の大事と思うから、不動の姿勢を取って気を配っておりますが、いつまで立っても果てしがございませんから、又兵衛基次、ヤッと一声叫んで槍をリュウリュウしごいて誘いの透きを見せれば、オーとこたえた由利の槍、速射砲のようにビュウビュウとひらめくさまは稲妻のよう、又兵衛の胸元にのぞんで突き出せば又兵衛ひらりと体をかわし、エイとばかり槍を頭上に振り上げて、由利の小手をピシリと打った。この辺の槍の試合となりますと、突く一方ではない、真槍で戦場に臨んだと同様で、なぎ立て、突く、たたくという具合、槍一本で太刀の役目もすれば、棒の役目もする。
今しも又兵衛が巧みに払って来た槍を、由利も天下の名人、心得たりといなして、飛び込みざま突いてかかれば、又兵衛は手元に寄せつけず、えいやっと両虎深山に、その威を争うがごとく、双竜珠を争うさまもかくやと思うばかりでございます。ものの十五六合というものこの勝負はいずれのものとも分からない。又兵衛はと見れば、その構えは厳として巌のごとく水を打ったるがごとき音無しの構え、由利鎌之助、ますます焦って上下左右と突き立てて繰り込むその早業は目にも止まらぬくらい。今しも由利が捨て身になって南無八幡と、横に払った槍先、さしもの又

兵衛なぎ倒されたと見てあれば、ひらめく一閃、間髪を入れざる手練の早業、又兵衛の突き出したる槍はみごと由利の額を突いた。
由「まいった」
たしかに由利が勝ったと見えたが、「まいった」と叫んだのですから不審に思うのももっとも、秀吉公をはじめ並み居る見物はなにがなんだか分からないくらい。
○「いったい、いつ後藤又兵衛は槍を突いたのだい」
△「やっぱり大したもんだなあ」
△「後藤も偉いが由利という男の腕前は大したものだ」
と、あっちこっちでも後藤と由利の腕前に感じ入っております。
すると由利の額のはち巻きから血がほんのりとにじみ出ました。すると後藤又兵衛ニコニコと打ち笑い、
又「いや由利氏、失礼つかまつった。痛くはござらぬか」
由「なに大したことはござらぬ。恐れ入ったるお腕前、とうてい拙者らの、及ぶところではござらぬ」
と、一礼して引き下がりました。
秀「うーむ、又兵衛はともかく、由利鎌之助の腕前はまことにみごとなるものである。天下に得難き名人なるぞ、当座のほうびとしてこれを遣わす」
金子若干と印籠を賜ったが、面目を施した由利鎌之助、猿飛佐助、三好清海入道もろ共に立ち帰りました。

道々、三人今日の勝負のことなど話しておりましたが、

清「由利、きさまの槍術は大したものだ、おれは槍は不得手だが、きさまの腕前は、後藤又兵衛につぐ日本第二の槍術の名人だぞ」

めったに人をほめたことのない清海入道、めずらしくほめちぎったので、よほど今日は感心したものとみる。由利もくすぐったい様な気持ちであります。

中一日おいて秀吉公より、由利鎌之助を三千石をもって召し抱えたいと、大谷刑部吉隆までござさたがありましたが、鎌之助は、

由「ええ有り難きご詔、身に余るしあわせではござるが、既に真田家との前約もござればこの儀はいかんながらご辞退申し上げます」

と、お断りいたしたのは、利に迷わぬあっぱれな心掛け、金で身売りするそこらのお勤め人とは違うようでございます。

思いがけなく手に入る密書

さて、三人の豪傑にありましては、その後も、毎日大阪の市中を徘徊いたしておりました。そうこうするうちに月日の小車はめぐりめぐって、猿飛と清海入道が、幸村公からお暇が出てから、はや三ヵ年経ちました。その間に、豊臣秀吉公が朝鮮へ出陣しましたので、西国の大名の

多くはこれに加わり、その軍勢は向こうところ敵なく各地に大勝を納めたのでありますが、惜しいかな、慶長三年八月十八日、その総帥たる不世出の大英雄豊太閤秀吉が、この壮図半ばにして、六十三歳を一期として永眠。そこで出征した軍勢は、早々引き揚げてくることに相成りました。早くもそのことを知ったる猿飛佐助は、清海入道を、この報告のため、ご主君のもとへ帰らせました。すると、一ヵ月も経ったころ、幸村公からご返事があって、

――とに角、ここまる三年のうちには必ず大戦争が起きて、天下を二分するような争いが起こるに相違ない、それまでは、その方は大阪の土地に滞在して徳川方及び大阪方の動きをよく探り、探り得たことは、一々知らせてまいれ――

と、したためてございます。両人相変わらず、市中の諸大名の屋敷に入り込んでは、ひそかに様子を探っておりましたが、ある日のこと、猿飛佐助は由利鎌之助に向かい、

佐「ご主君のお考えでも、戦争がはじまるのは、あと二三年はかかるとの仰せだし、一つ中国から九州地方へ漫遊に出かけようではないか」

ここで二人は探り得たことを事細かく書面にしたため、九州方面へおもむく旨を書き添えて、飛脚をもって信州上田へ送り届けさせました。

猿飛佐助、由利鎌之助の両人は、その翌日旅装をととのえ、やってまいりましたのは、摂州の花隈、ここは佐助の忍術の師匠戸沢白雲斎の嫡男戸沢山城守が城主でございますから、そこを訪ねて初対面のあいさつの後、恩師白雲斎の鴻恩を謝し、来し方の物語りをすれば、山城守もかねて、老父からそのことを聞いておりますから、下へもおかぬもてなしをいたしましたが、やがて再会を約して、そのもとを立ち去りました。

それから、須磨、明石の景勝を打ちながめ、泊まりを重ねてやってまいりましたのは播州は姫路の城下町、播州屋という旅籠に宿をとり、城下の様子を探っておりましたが、この姫路白鷺城の城主は、豊臣家恩顧の大名で、池田武蔵守輝政公、なかなか武勇の聞こえ高き家柄でございます。

こんな事情でありますから、佐助も、ここはさまで探るに及ばないと考えましたから、明日は出立いたそうという前夜、佐助はぶらり宿を立ち出で、足の向くままに歩いておりましたが、さしかかったのは大手先。

大手門の方に当たって闇を通してちらっと光ったから、はてなと思った佐助、その方をじーっと見つめておりますと、大手門の潜りを開けて飛脚体の男が出て来たかと思うと、前後左右に気を配ってから、足早にそこを立ち去ろうとするから、小首をかしげた佐助、

佐「うーむこいつは少々臭いぞ、今の様子はただごとではない怪しいやつ、ひとつ引っ捕らえて詮議してやろう」

見つかった飛脚こそいい災難だ、ずかずかとその者の前にはだかった佐助、いきなりぐっと胸ぐらを引っつかんだから、飛脚のやっこさん驚くまいことか、

飛「うわっ……ど、どうか、おた、お助けなすって下せえまし、な、なにも怪しい者じゃあござんせぬ、い、命だけは……」

佐「やいやい静かにしろ」

飛「へえ、ど、どうか、お、お放しなすって……別に怪しいものじゃねえんで」

佐「どこへいく、その方なにか持っているだろう、それを器用に出せっ」

飛「それでは、あなた様は追いはぎ様で……」

佐「ばかを申せ、追いはぎではない、きさまはこれからどこへいくかしかと申せ、偽りを申すとそのままにはすて置かぬぞ」

飛「はい、そのなんでございます、じ、実は上方の方へ」

佐「上方のどこの屋敷じゃ」

飛「上方の母親が急病で……」

佐「まださようの作りごとを申すか、これでもかっ」

いきなり横っ面をピシャリッと打った。

飛「い痛い、乱暴なことをなさいます……わたしは決して怪しいものではございません」

佐「剛情なやつだ、母親の病気見舞いにいくものが、なぜ大手門を出るとき、あのような仕草をいたした」

飛「ええっ、では、さっきからのわたしを……へーえ、あなた様は隠密かなにかで……」

佐「隠密ならどういたす……」

飛「どちらの隠密で……」

佐「ばかめ、さき程よりのなんじの言動、怪しきことのみじゃ、おれがいったんこうとにらんだ眼に狂いはない、きさまはたしかに書面を持っているはずだ、さあ器用に出せっ、出さねばこうしてくれるっ」

と、のど元をおさえたから、くだんの飛脚、息することもならず、足をばたばたさせてもがいておりましたが、そのまま息は絶えてしまった。

佐「ややっ、殺すではなかったが……うむ、そうだ」

その男の懐に手を入れて探ると、はたせるかな一通の書面、こんなときには猿飛佐助の目は調法だ、暗くても字が読めるから、早速書面をひらいて見ると、

拝復　お尋ねの趣承知仕り候、譬え奸悪なる石田治部少輔三成、豊臣家の名を藉りて幼君の御為めと唱え、如何様なる事をいたさんとも計り難し、不肖武蔵守とは、平素犬猿も同様の間柄、決して味方仕らず候、万一斯様の場合には、却って内府公へ御加勢いたす存念、この儀御承知下され度候、御返事かくの如くに候、なおこの事は誓って他言下され間敷候

池田武蔵

徳川内府殿

佐「うむ、これはいいものが手に入った、これはいち早くご主君に送り届けねばなるまい」

飛脚の死骸は石を縛って堀の中へ沈め、急いで宿に帰って、由利鎌之助に向かい、

佐「おい由利、今日はえらい物を手に入れたぞ、犬も歩けば棒に当たるとはそらごとではないな」

由「なに、えらい物が手に入ったと、酒だるでも拾ったか、どんなものだ」

佐「まあまあそう急ぐな、これだ」

くだんの書面を見せますと、

鎌「いよいよこれは、おてがらおてがら、早く本国へお知らせした方がいい」

早速に金に糸目をつけずしっかりした飛脚を雇い、書面と共に、その夜のうちに信州上田へ飛ばしてやりました。

その翌日、城下を立ち退き、だんだんと中国筋を志して、ひとまず播州三日月の城下に泊まり、播州名代の白旗山を乗り越えて、いよいよ備州岡山領に入ってまいりましたが、途中別段変わったお話もございません。

これより、佐助と鎌之助の両人は備前岡山に入り、その夜泊まった宿にて、計らずも怪盗女魔術師のため、由利鎌之助は冤罪を着て投獄に及び、やがて霧隠才蔵との出会いの手づるになるという、本講談もいよいよ最高潮の場面に相成ります。

女魔術師、佐助を走らす

それはさておきまして、こちら佐助と鎌之助の旅は西へ西へとつづきます。両人が今しもやってまいりましたのは、備前は岡山の城下、佐渡屋八兵衛という宿屋がございます。その前を通りすぎようとすると、客引きの男が、

×「ええ、お武家さま、ご定宿はおきまりでございましょうか、手前は佐渡屋で……なにとぞお泊まり下さいまし、当夜はごひいきのサービスとして不思議な女魔術師の余興がございますので、……どうぞご休息でも結構でございます。ええどうぞお泊まり下さいまし」

と、盛んに客を呼んでおります。顔見合わせた両人、

由「猿飛、おい、女魔術師の余興があるというではないか、どこへ泊まるのも同じことだ、ひと

つここに泊まろうではないか」

佐「うむ、魔法使いはどのようなことをいたすか、後学のためひとつ見物いたすかな」

そこでこの佐渡屋に宿泊することに相成りました。

夕飯どきのことでございますから、酒肴を命じて杯を傾けておりますと、奥の間では大勢の者が集まって、なにやらがやがや笑い興じておりますので、小首をかしげていた佐助がちょうどちょうしの代わりを持って来た女中に向かって、

佐「ああこれこれ女中や、たいそう奥座敷がにぎやかのようだが、いったいなんとしたのだ」

女「はい、あれが今晩当家のサービス、余興の会場でございまして、夕食をおすましになったお客様が、待ち兼ねていらっしゃるので……だんなさま方も、お早くお出ましになりましてはいかがでございます」

佐「ははあ、そうであったか、されば早く食事をすませて見せてもらうかな」

由「なあ兄貴、どうだい、その魔法使いと兄貴の忍術比べをしては……」

佐「時と場合によっては、それもいいが、忍術はそのような余興などにはいたさぬぞ」

両人食事をすませて、奥の座敷へやってまいります。

佐「おう、みなの者許せよ、われわれは旅の武芸修行者じゃ、ひとつ見物させてくれよ」

○「へいへいこれはお武家様でございますか、さあさあどうぞ、ずーっとこちらへお入り下さいまし」

佐「いやこれは千万かたじけない、して魔法使いはまだ見えぬのか」

○「はい、もうそろそろ見えることでございましょう」

そこで二人は程よい所へ構えて、皆といっしょに雑談をいたしておりましたが、なかなか魔法使いが出てまいりません。佐助も由利も少々酒を飲みましたから、眠気がさしてきまして、こくりこくりやっていると、にわかに拍手が起きたので、目を開くと、正面に設けてある布団の上に一人の女が座って、一場をじろりと見回しております。そのそばには介添え役の男が二人、その女の左右に座っております。

女魔法使いはと見れば、丸顔でぽってりとして下ぶくれ、水もしたたるような黒髪を、たれ下げ、色あくまで白く、ひとみは鈴を張ったよう、口元にはかすかな笑みをたたえ、京マチ子の雨月物語の若狭そっくりでございます。ところがどこか険のあるところが気にかかる、介添え役の二人は、それとは反対に、色あくまで黒く眼光の鋭いところを見ると、これはただ者とは思えません。

観客はいかなる魔術をするのかと、じーっと女魔術師をみつめております。

佐「ははあ、女魔術師とはこれは近ごろ珍しい、あれが座頭と見える」

じーっとその顔を見つめておりましたが、

佐「ははあ、こいつどうも魔性の女だな、あのやさしい顔に似合わず、目の光り具合がただ者ではない、どうもいかさま者らしい、油断はならぬ」

思いながら素知らぬ顔で控えております。

すると、くだんの女魔術師、おもむろに口を開き、

魔「やあやあ方々、よくお聞き下さりませ、わらわこそは諸国を巡り歩く阿国と申す魔術師でござりまする。天竺伝来の秘法をもちまして、いろいろの術をご覧に入れまする、そもそも魔術

は、みなさまの目をくらます術にござりますれば、よくよくその手の動き、目の動き、身の振り方にご注意下さりませ。先ず一番には姿を隠す術をご覧に入れまする」

といいながら立ち上がって、後ろの壁にぴたりと身を寄せ、エイヤッと叫ぶや、その姿は壁に吸い込まれるように次第次第に薄くなり、果ては全く消えてしまった。これを見た一同は驚き入り、

一同「あれあれ、これはいったいどうしたことだろう」と、互いに顔を見合わせております。すると姿は全く見えませんが、

魔「やあやあみなさま、これよりわらわの体は三匹のねずみと早がわり……はいっ」

見ると壁のところよりして、三匹のねずみがかけ比べでもするようにチョロチョロと走り出て一同の回りを走り回っております。一同の者が「あれよあれよ」と打ち騒いでおりますうちに、一同の中にわけ入ったかと思うと一同の頭を乗り越えてどこかへいってしまった。

正面を見ると、こはそもいかに、介添え男二人もどこかへ姿を消しております。

これを見た佐助、

佐「ははあ、伊賀流の忍術を使いおるわい、いよいよもって怪しきやつ、ことによると石川五右衛門の仲間かも知れないぞっ、よしそれならひとつ取りひしいでくれよう……おい由利」

由「なんだ」

佐「ちょっと耳をかせ、……きさまはここを抜け出しておれたちの座敷へ帰って寝ていろ、しかし決して本当に寝てはいかぬぞ、あの女魔術師は今あんなことをしているが、きっとどこかで恐ろしいことをしているに違いない、あいつらはどろぼうのたぐいかも知れぬ、油断するな、一

刻も早くいけ」

由「よしよし合点だ、いかにもおれが見破ってやる」

鎌之助は早速その場を立ち去りましたが、だれも気づいた者はございません。

こちら見物は、妙技に見取れてただわいわいいっておりますと、魔術者一人の姿だけが、壁にだんだん濃く現れ、しまいにははっきりと現れてきます。見物はワーッと拍手と共にそれを迎え、介添え役のいなくなったことなどは少しも気がつかない。魔術師は拍手にこたえて一礼なし、にっこり笑いながら、

魔「はい、ただ今のは前芸でござりまする。これよりはいよいよ本芸とござい、みなさま決して目をおつぶりにならぬようご用心ご用心……はいっ」

と、気合いをかけるや、あーら不思議、見物はバタバタと打ち倒れ、みなグウグウと寝てしまった。がまに毒気を吹っかけられたよう、そのうちで寝ないでいるのは佐助一人、

佐「うーむ、さてさてこいつ、いよいよ油断のならぬやつら」

と、目をつぶって眠ったふりをしておりましたが、しばらくして目を開けて見ると、今まで正面にいた女魔術師の姿が見えない。むっくと立ち上がった佐助、油断なくあたりに気を配っておりますと、にわかに由利鎌之助の寝ている部屋の方に当たって、ドタンバタンと激しい音がいたします。それを聞くや佐助、おうとばかり宙を飛ぶがごとくに駆けつけて見れば、闇の中で、由利とくだんの女魔術師が組んずほぐれつの組み打ちの真っ最中。

佐「おい由利、曲者は引っ捕らえたか」

由「うむ、兄貴、こいつふざけた真似をするやつだ、大胆にも人の部屋へ忍び込んで来て、床の

間に置いてある胴巻きと大小刀を盗んで立ち去ろうとするから取り押さえようとしたが、女ながらなかなかの大力だ……」

佐「やっぱりそうか、よし、はじめに姿を隠したときに仕事はうんとやったに違いない、おれが行くまで決して取り逃がすなよ」

佐「よしよしいかにこいつが手ごわいやつでも逃がすもんか」

由利鎌之助も大汗をかいて逃がすまいと挑み合っております。その間に、佐助は、大勢のいる奥座敷へやって来て、

佐「ああこりゃこりゃ、みんな早く起きろ、どろぼうだどろぼうだ」

と、大声に呼び起こされて、一同目を覚まし驚き騒ぎ出しました。

○「なにっ、どろぼうだと、どこだどこだ」

さあ、押し合いへし合いでたいへんな騒ぎでございます。そのうちにキャッという女の悲鳴と同時に、一陣の風が吹いてきたかと思うと灯火が一時にすーっと消えた。

佐「ややっしまった、とうとう取り逃がしたな」

と、佐助が部屋へ帰ろうとするところへ、由利鎌之助が飛んで来て、

由「残念なことをした兄貴、取り逃がしてしまった」

佐「うーむ、やっぱりなあ、今さら逃がしたものをどうすることもできない、しかし残念なことをしたわい、いま灯火を消したのもあの女のしわざだ、逃げしなに当家の主人を突き殺していったぞ」

由「えっ、ひどいことをするやつだ」

佐「あいつらは伊賀流の忍術使いの盗人だ、これもみなおれに見破られ逃げるときの駄賃に亭主を突き殺していったに違いない、しかもその短刀はおれのものだ、見破られた仕返しに、おれたちを罪に陥れようという計略なのだ」

由「どうしてそんなことが分かる」

佐「そのくらいのことが分からないでどうする。今逃げしなに役所に訴えたから、今に召し捕りの役人が来るから、その積もりでいろ」

そのうちに灯火をつけて、由利鎌之助が主人の死骸のそばへ来て見ると、なる程佐助がいった通り佐助の短刀が突きささっていた。

由「おお、これはまさしく兄貴の短刀だ」

いっているところへ召し捕りの役人が二十人ばかり、どかどかと乗り込んでまいりました。

佐「お案に違わず役人が向かって来た、ここにいればこの場合どんなに申し開いても用いざるは必定、たかの知れたる役人の五十や百たたき倒すはいと易けれど、この場はとにかく逃げるに越したことはない、おい由利逃げるが勝だ、さあ急げ」

由「合点だ、部屋にいって持ち物を取ってこよう」

二人が急いで居間にやって来て見ると、衣類から大小刀、女中がどこへ片付けたか分からない、そうしているうちに、召し捕りの役人が表と裏から上がって来たから、家のなかは、鼎の沸くがごとく、上を下への大騒動、着物を探している間なぞありません。両人は着のみ着のままで薄い袷を一枚着たっきり、佐助は押し上がって来た役人の中へ躍り込み、投げつけ、はねのけ、突き倒し、

佐「由利、それ油断するな、早く来い」

佐助一人なら忍術で悩ましながらなんの苦労もなく逃げられるのですが、由利の方は忍術を知らないから、こういうときにはそうはいかない。押しつ押されつようやくにして一方の血路を開いたから、二人はばらばらと表へ飛び出し、やれ安心と、ものの十五六間も逃げたころ、物陰にひそんでいた一人の武士、手早くさげた鉄棒、ねらいをつけてヤッと投げた手練の早業、走っている由利の向こうずねへもろに当たったから、なにをかもってたまりましょう、不意をくらってさすが豪勇の由利鎌之助、アッと叫んでその場にドウとばかり打ち倒れた。その所へ二三十人の捕り方が、

役「それ召し捕れっ」

ばらばらと打ち重なって高手小手に召し捕った。

由「うーむ、不覚をとったか、百や二百の人数に生け捕られるようなおれではないが運の悪いときには仕方ない……兄貴さえ首尾よく逃げてくれれば、今に救い出してくれるだろう」

つまらぬ手向かいもせず、ゆうゆうと城内へ引き立てられました。

これはしたり、素人追いはぎの横暴

一方、佐助は夢中になって自分が先に立って韋駄天走り、もうかれこれ三四十丁も来たと思うところ、ひょいと足を止めて後ろを見ると由利の姿が見えません。

佐「おやおや由利のやつ、とうとう捕まったかな、えいしくじった、世話の焼けるやつだ」

しばらく待っておりましたが、由利は現れない。

佐「残念なことした、こんなことになるなら、役人であろうと、なんだろうと、片っ端からなぎ倒してやるのだった……」

そこは調法な忍術、早速姿をかくして、引き返して様子をさぐってみれば、もう由利は召し捕られて入牢したということが分かった、なんとかして救い出してやらなければならないがどうせのことに、岡山の城主浮田中納言秀家の荒肝をひしいでやれと思ったから、どんどん足にまかせて、二里ばかり東の方へ道を取って夜道をやってまいりますと、備前竜天山の山の中、あいにくとその朝から、雪がちらちら降りだし、たちまち綿をちぎったような大つぶの雪になりましたから、あたりはたちまち白一色。

天下の豪傑猿飛佐助もこの寒空に袷一枚ではたまりません。寒さは寒し飢えてはくる。がたがたふるえながらなおも、ずんずん登っていくと、山の中腹に一つの辻堂がある。

佐「いや、これは天が与えた救いの場所、どうりゃここでひとつ休ませてもらおうか、ここなら雪だけはしのげるだろう」

入っては見たものの、袷は雪でびしょぬれでどうにもたまらない。

佐「こんなことなら役人たちをこらしめて、由利もいっしょに引っ張ってくればよかった、人間どんなところで災難にあうか分かったものじゃない」

つぶやきながらふと外を見ると、はるか向こうの方から、四五人連れがさくさく雪を踏み分け

大声で話しながらやってくる様子、この夜更けの寒空にこの山中を歩くやつ、油断はならぬと様子を見届けておりますと、いずれも異様ないでたちをした者ばかり、いわずと察しのつく山賊、あたりをはばからぬ大声で、

○「おいおい今夜のように寒い晩にいくらがんばっていろといわれても、うまい鴨のひっかかる訳がねえ、親分も今夜はお帰りになるめえ、しばらくあの辻堂でたきびでもして温まろうや」

△「それがよかろう」

佐助の耳にはこの話が、手にとるように聞こえます。

五人の山賊ども、ずかずか辻堂のところへやって来て、縁に腰をかけ、落ち葉や枯れ枝を集めてたきびをはじめました。この体を打ちながめた佐助大いに喜び、狐格子を開け、

佐「いよー、どろぼうたち、おれにもひとつあたらせろ」

といいながら飛び出すと、

○「出たっ」と一人が叫ぶとみんなが逃げようとするから、

佐「ばかめ、山賊稼業と見受けるが、見かけによらぬ肝っ玉の小さいやつだなあ、まあまあ遠慮なくここへ来てあたれ」

いわれてよくよく見ると、びしょぬれの着物を着た男だから、強気になった山賊ども、

○「やいやいてめえはなんだ、武士でもなし、町人でもなし、いってえなんだ」

佐「なんだっていいや人間様だ、きさまのような盗人とはできが違うだけだ」

○「なにぬかしやがる、なんの用があってこんな所へ来やがった、第一そのなりはなんだ」

佐「なりで人間の値打ちが分かるのか、見栄坊の銀座マンじゃあるまいし……実はのう、少

少無心がある」

○「なにっ、無心だと、ふーむ事と次第によっちゃあ聞いてもやるが、いってえなんだ」

佐「おまえたちも心配するように、おれはこの通りの素っ裸も同様で寒くてたまらない、着物を一枚おれに貸してくれ」

五人は顔を見合わしていたが、なにしろ相手がたった一人だから、

○「やいやい、ふざけたことをぬかしやがるとただじゃおかねえぞ」

佐「そうか、こうまで下から頼んでもきいてはくれないか、情け容赦のないやつっ」

○「ばかやろう、情け容赦があって、どろぼう追いはぎができるかってんだ、ぐずぐずいいやがるとその給も引っぱがすぞ」

佐「ふーむ、はげるものならはいでみろ、きさまたちがはいでいるうちに、きさまたちの荒肝をかっぽじるぞ」

○「やいやい、いわして置けばぬけぬけと勝手放題の念仏を唱えやがって……命やあもらうからそう思えっ」

佐「なんだ、さっきの驚きようとは打ってかわり、なかなか元気がいいな、命知らずのうじむしとはきさまたちのことだ」

○「やいやい聞いた風なことをぬかしやがったな、もう勘弁ならねえ、えい面倒だ、やっつけろ」

△「合点だ」

相手をみくびった一人の山賊、やにわに山刀を引っこ抜き佐助めがけて斬ってかかれば、ひら

り体をかわして、たちまち相手の利き腕引っつかみ逆をとって、エイヤッと掛け声かければ、もんどり打って五六間先に吹っ飛んだ。

○「野郎っ、味なことをやりゃがったな」

と、またも一人が背後から、斬ってかかるやつを、佐助身を沈めて、またぐらをポンと突き上げると、「痛いっ」といったきり、へなへなとなって気絶、後ろからかかって来るやつを右と左に投げ分けて残る一人をしりめにかけて、

佐「ああ少し暖まってきた、どうれ、ひとつゆっくりたきびに当たるか」

どこ吹く風とすましている。これを見た一人、腰を抜かして歩くことができない。いずれも青くなって、

五「ど、どうぞ、い、命ばかりは、おた、お助け下さい」

佐「無駄な骨折りをさせおって、だからはじめからすなおに出せばいいものを……」

○「いえ、なにも逆らったのではねえんで、すなおに出そうとは思ったんだが、素人に追いはぎされたといわれちゃあ、山の大神様に合わせる顔がねえ……もう着物はみんなさし上げます」

佐「ばかだなきさまたちは、五人分の着物が着られるか、一枚あればたくさんだ、襦袢と褌だけは、いらぬ、しらみがたかると困る」

○「どうか、そうおっしゃらねえで、五人分さし上げますから、どうかまあ着替えにお持ちなすって下さい、……お寒い、ぶるぶるっ、ハックション」

佐「もうよいもうよい。たきびにあたってがまんしろ、お陰で拙者は温かくなってきた」

○「お侍はいいか知らねえが、わっちらはもう寒くって、……なにしろどろぼうが素人に追いはぎされるなんて、世は逆さまだよ、まったくの話が……」

ぶつぶついっているのを聞いた佐助、

佐「なにをもそもそいっている。今まで暖かい思いをしたのだ、人は相身互いということがある。たまには困る人間の身にもなってみろ、きさまたちは、ふだん人のものを盗んでぜいたくをした報いだ、少しは骨身にこたえたか、ときにだいぶ腹が減ってきたが、なにか持っているだろう」

△「へえへえ弁当を持っております」

佐「おいおい今度は、いやにすなおに出したな」

△「へえ、すなおに出さねえと、また下から突き上げられちゃ、たまりませんや、役に立たなくなると困ります」

佐「そっちにいるの、腰に下げているのはなんだ」

×「へえ、これは酒でござんす」

佐「それもこっちへよこせ……他にあるものはみんな出せ、うむう遠慮なくちょうだいいたす」

いいながら弁当をひらいて見ると、三つ重ねの洋食弁当だ、一つには握り飯、二つには洋食の盛り合わせがいっぱい入っております。

佐「これはこれは結構な料理だ、どれ、ひとつごちそうになろうか、酒どっくりはたきびで燗をしろ」

佐助は、五人の者に見せびらかして、独りでむしゃむしゃ食べながら、ぐびりぐびりと酒を飲

んでおります。見ている五人の連中、かわいそうにのどをごくりごくりさせながら、うらめし気に見ております。

佐「ああうまいぞ、さすが盗人だ、酒は上々、料理は結構、これもおおかた、ふもとの料理屋から盗んだものだろう、ああいい気持ちだ」

△「だんな、どうも申し訳ありませんが、その弁当は出がけにかわいい女房が、作ってくれたものだ、一つだけで結構でござんすから、食わせておくんなせえ」

佐「これこれ、こんなところで女房ののろけはよせ、まあよい一つだけ食わしてやろう」

△「ああこれでかかあにいい訳が立った」

佐「きさまはよっぽど山の神に甘いな」

△「えっへへ、まったくその通りなんで、両方でアイラブユー」

佐「そうそう山の神で思い出したが、さっきだれか、山の大神様になんとか申したが、山の大神様とはなんのことだ」

○「へえ、わっしらの女親分のことで……天人阿国と申しまして、すげえべっぴんで魔法使いでさあ」

佐「えっ、美人で魔法使いっ……して今その者はどこにいる」

○「ほらきた、女といったら目の色が変わったぜ、だんな。無理もねえ、男だものなあ、今日は岡山の城下へ出稼ぎにいきやした、もう帰って来る時分でさあ」

佐「なにっ、岡山城下へ出稼ぎにまいったと申すか、うーむ」

○「だんなうなっちゃいけません、お供いたしやしょうか、年は十九でまだ独りもの、すこぶ

るつきのいい女ですぜ、さしずめ今年のミス・ユニバースだね」

佐「ばかめっ、くだらぬことを申すな、女魔術師といえば、これこれこうこうの者だろう」

○「へえへえ、まったくその通りで、だんなはよくご存知ですね」

佐「やい、こらっ、きさまたちが天人阿国の手下と聞いては、そのまま帰すことはできぬ、かわいそうだが仕方がない、しばらく、窮屈でもがまんしろっ」

にわかに変わる権幕に、五人の者うろたえるのを、難なく取り押さえ、これを珠数つなぎにして辻堂の狐格子に縛りつけてしまった。

佐「さては今晩の女魔術師は山賊の張本だったのか、よしわれわれがこうなったのもあいつのため、ひとつ生け捕って責め上げくれん」

ヤッと気合いをかけて、姿を消し、松の枝に腰をかけ、帰り来るのを今や遅しと待っております。

五人「おいおい今の侍はヤッといったらどこかへいっちゃったぜ、やっこさん忍術使いらしいな」

こそこそ話していると、なにやら話しながら人の来る気配、佐助が闇を通して見ると、まさしく天人阿国が、子分二人を連れてやってまいります。佐助においては様子いかにとじーっと見ておりますと、天人阿国、たきびのところへ来て見ると、手下の五人が辻堂の狐格子に珠数つなぎに縛られているから、そのそばに立ち寄ろうとすると、佐助はひらりと飛び下りざま、阿国の帯際ぐっとひっつかみ、

佐「やいこれ、岡山城下の佐渡屋において、よくも皆を惑わし、あまつさえ主人を殺して置き

ながら、その罪を他人に塗りつけ、踪跡をくらまさんとしたな、女魔術師天人阿国っ、われここに来りて先刻よりなんじの来るを待ち受けた」

大音に叫んで、ずるずると引きよせようとすると、

阿「ややっ、さてはきさまは佐渡屋に泊まった武士だな」

佐「うーむ、いかにもその通りだ、さあ尋常に縄につけっ」

と、ねじ伏せようとすると、阿国はエイッと声を掛けるや、姿は消えて見えなくなった。佐助は少しもあわてず、「その手は食わぬ」とあたりを見回しておりましたが、下にある小石をつかむやいなや、辻堂の屋根を目がけて発止とばかりに投げつければ、「わっ」という悲鳴とともに、くだんの女魔術師阿国が転げ落ちて来た。運の悪いというか、天罰とでもいうか、落ちるところに事欠いて阿国はたきびの燃えさかる真ん中に顔を突っ込んだ。佐助見るよりパッと飛びついてえり髪つかみずるずると引き出し、

佐「やいやいどろぼうの分際にて、こしゃくにもわしに対して忍術を使うとは笑止千万、きさまの忍術を見破れぬ拙者と思うか、われこそは信州上田の城主、真田左衛門尉幸村の家臣にして、忍術の大名人といわれたる猿飛佐助幸吉と申す者だ」

聞いて阿国はいよいよ驚き、

阿「やや、さてはあなた様は名代の忍術の名人猿飛佐助様か、うーむ、術を見破られるのも、当然、いや降参いたしました」

額から流れる血潮を拭いながらためいきをついております。

ややっ、猿公の取り次ぎ

なんといわれても、女魔術師天人阿国は、ぐうの音も出ません。

佐「けしからぬやつだ、よくも佐渡屋においてわれわれに主人殺しの罪を着せ、義弟由利鎌之助を召し捕らせたな、さあ城下へ引き立てて申し開いて助け出すからそう思え」

もうこうなっては、すべて観念した天人阿国、

阿「もうなにも申しませぬ、師匠の戒めを破ったのが身の破滅でございます。さあさあ潔くお引き立て願います」

度胸があり、腕に自信があったればこそ、阿国は女ながらも張本として荒くれ男を手下に荒稼ぎもできたのですが、今日は、自分より上手の猿飛と相対してはどうにも手の施しようがございません。

すると、阿国の言葉を聞きとがめた佐助、

佐「ええっ、師匠というのはだれのことだ、そなたの忍術の師匠だろうな」

阿「はい、さようでございます。わたしの忍術の師匠は、霧隠才蔵宗連とおっしゃって元葦名下野守様の浪人でございます」

佐「ふーむ、葦名家の浪人の霧隠才蔵か、して今はどこにいる」

阿「はい、あのー……そればかりはお許し下さいませ、師匠の隠れ家は、どんなことがあってもいうなと口止めされておりますから、これればかりは申し上げられませぬ」

佐「そうか、よしよし無理にとはいうまい、人間はそうなくてはならぬ、いったん誓ったことは、命にかえてもいわぬとは見上げたものだ、実はおれも、一度その霧隠才蔵という男に会ってみたいのだが、なんとか会わせてくれる手段はないか」

いわれて、しばらくじーっと考えておりました阿国、

阿「さようでございますか、それまで事を分けてのお話でございましたら、この上いやだとは申し上げられません。師匠の隠れ家の近くまでご案内いたします。師匠の隠れ家は、手下の者にも包み隠しているくらいでございますから、あそこに縛ってある子分たちにはよく意見して逃がしてやりますから、それまでお待ち下さいませ」

と、傍らの辻堂の狐格子に縛られている子分たちの縄を解いて懇々と意見を加えてこれを放してやり、そのまま阿国は先に立って、どんどん山を下って、およそ三四里も下ってまいりますと、夜も白々と明けはじめたころふもとにたどりつきました。

すると、足をぴたりと止めた天人阿国、

阿「あーもし猿飛様、それあの向こうの岩の間に屋根が見えますのが、あれが霧隠才蔵先生のお宅でございます。私が先にまいっては具合が悪いと存じますから、どうぞあなた様が先においで下さいませ」

佐「しからば拙者が案内をこうてまいる」

佐助が独りやってまいりました霧隠の宅、門を入って玄関口に立って、

佐「お頼み申す」

その案内をこう声に応ずるように、中から出て来たのは、人間ならず一匹の猿、人間のようにちゃんと座って頭を下げて辞儀をしたから感心した佐助、

佐「感心感心、猿真似とはよくいったものだ、よほどよくならしたものと見える」

と頭をなでると見せかけて、やにわに猿のえり首をひっつかむや、「やっ」と気合いをかけて外へ投げ出せば、あな不思議、「きゃっ」と奇妙な声を発したかと思うと、くだんの猿はたちまち人間の姿に変わり、そばの木にするするとよじ登り、猿飛佐助をハッタとにらみつけた。それを見た佐助、

佐「あはは……、さてはなんじ、伊賀流の忍術を使いおったな、そんなごまかしにだまされる拙者ではない、はやはや降りて、腕比べをいたせ」

いわれて、下り立ったるくだんの男、

男「やあやあなんじは何者だっ、おれの隠れ家を探し出すさえただならざるに、猿を人間と見破ったる眼力は、よも尋常の者ではあるまい、名を名乗れっ」

と、大音声に呼びかければ、

佐「あっはははははは、そのくらいのことが分からんでなんとする、われは甲賀流忍術の名人猿飛佐助という武芸修行者だ」

男「な、なんだと、きさまが今天下に名も高き猿飛佐助であったか、ふーむ、われは伊賀流の忍術の名人霧隠才蔵宗連だ」

佐「きさまが霧隠才蔵か、術比べをいたさんためにやって来た」

聞いて才蔵カンラカラカラと打ち笑い、

才「あはっははははは、よせよせ、きさまの腕がどのくらいか知らないが、おれにかなう訳がない、目下、天下の義賊とその名も高い石川五右衛門はおれとは兄弟分、門人には天人阿国をはじめとし、いたるところに山塞を構えて軍用金を集め、都にいる石川五右衛門からの知らせがあり次第、すわといえば一時に立って、豊臣の天下を落とす計画である。われは軍師としてここに隠れているのだ、きさまと腕比べをして味方に引き入れるからそう思え」

大胆不敵の霧隠才蔵、意気まさに天をつく有り様でございます。

佐「うーむ、ほざいたな、よし、きさまがおれを味方に引き入れるか、きさまがおれに引き入れられるか、二つに一つの術比べ、これは、おもしろい」

才「さあまいれ」

と、才蔵が外の方を見ると、意外にも門人の天人阿国が立っているから驚いた。

才「こらこらそこにいるのは阿国ではないか、そなたはどうしてここに」

阿「はい、これにはいろいろ家庭の事情で」

才「なにっ、家庭の事情と申すか、ではやっぱりあの話はだめになったか」

佐「これこれ霧隠そんな話はあとにして、阿国については拙者からも話がある、早く術比べをいたそう」

才「うむ、よし、しからば、きさまからこい」

佐「しからばまいるぞ」

佐助が呪文を唱えて九字を切ると、傍らにあった庭石が、ゆらゆらと動いたかと思うと、ツーツーツーと宙天に舞い上がりはじめた。

才「なかなかやるな、よししからば」

と、才蔵も同じように、九字を切って「えいっ」と気合いをかけると、その庭石はぴたっと止まったかと思うと、ふわりふわりと上がったり、下がったりする、しばらくすると間もなくツツーッと下りて元のところに戻りました。

才「今度はおれがいくぞ」と才蔵が口中でなにやら呪文を唱えると、不思議やはるか山の彼方から、物すごい羽ばたきをして、見るも恐ろしい大鷲がパーッと飛び来り、才蔵の立っている傍らに下り立った。才蔵くだんの大鷲にひらり飛び乗るや、大鷲は見る見る大空高く飛んでいく。

佐「ははあ、味なことをやったな、よし」

と、腰なる鉄扇を打ち広げ、さっと山の方に向かってさしまねけば、不思議やまたも大鷲現れて佐助のところへ飛びおりて来た、パッと飛び乗った佐助、才蔵の乗ったる大鷲を追いかけて舞い上がる。しばらくの間は空中に戦闘する飛行機さながらに、横転、逆転、宙返りと秘術をつくす。しかるところへ、猿飛の乗ったる大鷲は才蔵の大鷲めがけて上空より急降下、体当たりかと見たる一刹那、佐助は才蔵のぞんで投げたる手裏剣、あわや才蔵の額につきささったかと思いきや、危うく身をかわしてやりすごした才蔵、

才「おっと危ない、味をやるな、これでも食らえっ」

腰なる小柄抜きとり、佐助の大鷲とすれ違いざま「えい」と投げつければ、佐助は右手をかざして、「おー」とばかり、発止と受けとめ、そのまま東の空さして、物すごい勢いで飛び去った。

オ「ありゃあ、あいつ、どこへいった」

つぶやきながら大地へ飛び下りて見れば意外や佐助が先に下りて、ニヤニヤ笑って立っていたから、驚いた才蔵、目を丸くして、

オ「なんだ、きさまはここにいたのか」

佐「あはっははは、なかなか優れたる腕前だが、年が若いだけに、まだ術も若い、おれの手裏剣はどこかへ飛ばしてしまったろう、貴公の小柄は、それ返してやる」

才蔵これを受け取って見ると、自分の小柄に相違ないから、才蔵ことごとく感じ入り、

オ「猿飛氏、投げた小柄を受け止めるなど恐るべき腕前、拙者の敗けだ、拙者のごとき遠く及ばざるところ、これこの通り」

と、手をついて三拝九拝に及ぶ。

オ「これこれ阿国、これへまいれ」

呼んだが返事がない、不審を懐いて猿飛と、もといたところへ来て見ると、こはそもいかに、猿飛の投げた手裏剣が、阿国ののどに突きささり、紅に染まって打ち倒れている。

佐「おい阿国、阿国」と叫び呼んだがすでに事切れております。

佐「うーむ、不憫なことをいたした。これも天罰でいたし方もあるまい」

オ「天罰だと？　してどういう訳だ」

そこで佐助が、佐渡屋の件を実はこれこれこうだと話すと、

オ「そうであったか、おれが堅く善民をまどわすなとあれほど禁じたのを聞かず、そのようなことをいたしたか、あたら……おしいことをいたした」

いいさして、才蔵涙ぐむのを、

佐「霧隠、その方もしや、この阿国と……」

才「それをいってくれるな、師となり弟子となったのが因縁で、つい情けにほだされ、恥ずかしきことながら、二人は割りない仲となり、近く祝言いたすことになっていたのだ、恐ろしきかな、因果応報、これも天罰とあきらめよう」

佐「そうであったか、先刻、きさまが阿国にあの話はだめになったか……と聞いたとき、はて怪しいとは思ったが、やっぱりそうだったのか、かわいそうなことをしたな、南無阿弥陀仏」

佐助は手を合わす、

才「ともかく死骸は、埋めよう」

と、傍らの広場に埋めてしまった。

才「猿飛氏、まず何はなくとも一献まいろう」

佐「せっかくだからお邪魔いたそう」

案内されて霧隠の宅に入った二人、

佐「霧隠、さあどうだ、今日のことにこりて改心いたさぬか、きさまのごときはわずかな忍術を覚えているばかりに、石川五右衛門などと心を合わせ、あたら秘術を悪に用い、道ゆく善民を苦しめるとは言語に絶えたること、今このところにおいて改心いたせ、石川五右衛門といえばきさまも百々地三太夫先生に教えを授けられたのだろうな、師匠に対しても申し訳ないぞ」

下うつむいて聞いていた才蔵、

才「よーく分かった、猿飛氏のいわれる通りに相違ない、天下を取るの、お家再興のといった

悪夢は今ようやく覚めた、今日ただ今より必ず改心して忍術の正道を歩もう」

佐「そうか、きさまの忍術の素性はなかなかあっぱれなもの、これを正しく用いなば、今は天下麻のごとく乱れ、英雄雲のごとく起こり互いに武を争っているときだから、腕次第によっては、一国一城の主となることもできるのだ、どうだ、今心を入れ替えたのをいい機会にして、真田家の家来になる気はないか、おれの弟分の由利鎌之助も元はきさまと同じ素性の山賊だったが、おれの意見を用いて心を改め、今では真田家の家来となり、おれといっしょに諸国漫遊をしている」

と委細の物語。才蔵地獄で仏にあった思いで聞いておりましたが、

才「ご教訓のほど身にしみてまことにかたじけない、これからは拙者の身は御身にお任せするからなにぶんよろしくお頼み申す」

根からの悪人でないから、悟れば大した人間、そこで霧隠才蔵は由利鎌之助と同様、猿飛佐助の義理の末弟という誓いを立てました。

そこで酒肴の用意に及び、武術と忍術のよもやまの話、話をきいて佐助、才蔵の凡ならざるを知り、得難き弟を得たと喜んでおります。すると、どこをどうして来たか、昨夜天人阿国の介添え役として乗り込んで来た子分の一人速風の権六が現れ、

権「先生おめでとう存じます。どうかわっちもお供させておくんなせえまし」

才「おお、きさまは速風の権六か、……ばかなことをいえ、きさまのような根っからのどろぼうは真っ平ごめんだ、きさまは昨夜阿国をそそのかし、ふらちなことをいたしたのだろう、阿国は今まであのようなことは、いたしておらぬ、しかのみならず、阿国は天罰であえない死に方をい

たしたが、きさまのために義理の兄貴の由利鎌之助は冤罪をこうむり、岡山城内の牢屋につながれているのだ」

権「どうも相すみません。それではせめてのご恩返しに、わっちが城内へ名乗って出て、由利様をお救いいたしますから、どうか今までの罪はお許し下せえまし」

オ「うむ、そうか、きさまと天下の豪傑由利鎌之助兄貴とは替えられない、それでは、猿飛佐助殿、いや兄貴、出かけよう」

佐「一刻も早く岡山城内へ乗り込んで、由利を取り返さにゃあならない」

そこで三人連れ立って、岡山城下佐渡屋にまいり、後家にあって、速風の権六が亭主を殺した証人として見せますと、後家は亭主のあだとくってかかりましたが、傷つけられてはたいへんと佐助が、冤罪で牢屋にいる由利鎌之助を救い出すまではたいせつな体だと、懇々といい聞かせて納得させ、一夜は三人ここに泊まることに相成りました。

荒れ牛と忍術試合

翌日になりますと、佐助は霧隠才蔵に向かって、

佐「これこれ霧隠、おれはこれから城内へ忍び込んで、由利の様子を見て来るから、おまえたちはここで待っていてくれ」

オ「おいおい兄弟、その役目はどうかおれにさせてくれ、おれも義兄弟になってから、なにもしていないから、おれが探ってこよう」

強いての才蔵の頼みですから、

佐「うーむ、それじゃあ、きさまがいって、首尾よくやってくれ、鎌之助を召し捕ったやつは、何奴かそれもよく調べて来てくれ」

オ「ああよしよし、それではいって来るよ」

霧隠才蔵は、さっそく身支度をいたしまして、ぶらり佐度屋を立ちいで、どんどん岡山の城内へやってまいりましたが、搦め手の塀を乗り越えて、なんなく忍び込んで五遁の術を行って体を隠し、あちらこちらと探し回りましたが、ようやくのことで鎌之助がほうり込まれている牢屋を探し当てました。

オ「おいおい由利」

と小声で呼びますと、牢内の由利は、もうそろそろ佐助が迎いに来るころだと思うから、首を長くして待っているところへ、自分を呼ぶ声、

由「おいおい兄貴じゃないかい、姿を隠しているから、おれには見えない、姿を現して話をしてくれ」

オ「あはっは、……違いない、姿が見えないから、おれがだれだか分からないのも無理はない、この真っ昼間、姿を現したらたいへんだ、実はこうこうしかじかで、猿飛と義兄弟になった霧隠才蔵というものだ、兄貴に頼まれて御身の様子を探りに来たのだ」

由「ほほう、そうかい、また一人弟ができたか、それは結構だ、まあなにしろ早く助け出して

くれ、ここに居ちゃあ、好きな酒も飲めず、生意気に、牢番のやつらは口汚くののしりばかにいたすからな」

オ「うむうむそいつは気の毒だ、兄貴のいうには、ただ救い出してはおもしろくないから、当国の太守浮田中納言秀家に頭を下げさせるつもりだ、もう少しの間しんぼうしろよ」

由「ふーむ、そいつはおもしろい、まあがまんするから、なるべく早く助け出すようにしてくれ」

オ「おお、いいともいいとも、それで一つ御身に聞きたいのは、御身を召し捕ったやつはなんというやつだか知らないか」

由「うーむ、あれか、あいつは浮田家名代の豪傑花房助兵衛というやつだ」

オ「なに、助兵衛だと、道理でまたぐらをねらったのだな」

由「助兵衛でも、甚助でも、それに驚きはしないが、なにしろ暗闇からだしぬけに投げ棒でやられたのだ」

オ「おお、それさえ聞けばもうだいじょうぶだ、今に救い出してやるから窮屈だろうがもう少ししんぼうしていてくれ」

由「ああいいともいいとも、ただ入れられているなら、こんな牢屋ぐらい暴れておっ壊すのは訳ないが、魔法使いの仲間と見られて、身動きもできないように鎖縛りにされているから閉口しているのだ、それじゃあ霧隠、どうかよろしく頼んだよ」

オ「ああよしよし」

いい残して、そのまま霧隠才蔵は、早速宿屋へ帰って来て、佐助へこれこれこうこうと話しま

した。

佐「うーむ、ご苦労ご苦労、酒が飲めないで困っていたか、かわいそうに、ひとつ早く由利を救い出して、その花房助兵衛というやつを取りひしいでやらにゃあなるまい」

才蔵と両人でいろいろ相談いたしておりましたが、佐助はふと思い出したように、

佐「うーむ、そうだ、浮田家には斎藤真五郎春種という豪傑がいるはずだ、これに頼み込んでみようじゃあないか」

佐助は、直ちに身支度に及んで、宿屋を立ちいで屋敷町へ来ると、向こうの方から一頭の荒れ牛が、角を振り立て、目を血走らせ、口に泡を吹いて勢い物すごく走って来る、往来の者は悲鳴を上げて逃げ惑っております。

この体を見た佐助、きっと立ち止まり、

佐「うむ、こいつはけしからぬ、道行く人にけががあっては気の毒だ」

と、荒れ狂う牛の行く手に向かって大手を広げて突っ立った。これが馬なら「止まれ」の合図を知っているから止まってくれるところだが、牛だからそんなことは知らない「もーかまうものか」とばかり、モー進して来たやつへ、エイッと気合いをかけると、佐助の姿は大きな牛肉のかんづめになった、これを見た牛が、

牛「あれ、いつの間にこんなところに牛かん会社ができたのだろう、牛かんにされちゃあ、たまらねえ」

てんで牛かんめがけて突っかかったところへ、佐助はエイッと気合いをかけると、いきなり牛に飛び乗り両方の角をむんずとつかみ、うーむと力んで横にひねったその怪力、さすがの猛牛も

ズデンドウとそのところへ地響き立てて打ち倒れた。
起き上がろうとするところを右足でギューと押さえ、
佐「やいやいこん畜生、じたばたするな」
いいざまげんこつを固めて、鼻面をポカリと一発アッパーをくれると、
牛「だんなすんません、モー、ギューの音も出ませぬ」
しきりに牛があやまっているところへ、牛方が、息を吐き吐き駆けつけた。
牛方「ああ、だ、だんな……さま、い、いやどう、どうも、すまん、こ、ことしただ、な、なんに驚いたか、いやえらく荒れて取り……お、押せえることもできねえで困っただ、あ、ありがとうござえます、なんとお礼していいだか分かんねえ、……これぶちよ、モー暴れるでねえぞ」
と、牛の頭をなでなで礼をいいながら、よだれをたらしている、どっちが牛だか分からない。
佐「その方が飼い主か、それでは引き渡すぞ、けが人は出なかったか」
牛方「はいはい、まあいいあんべえにけが人はねえようでがす」
佐「そうか、それはよかった、今後は気をつけぬといかぬぞ、さあさあ早く連れて帰れ」
牛はむっくり起き上がったが、佐助の勢いにすっかり精を抜かれてしょげ返り、牛方に引かれながら、横目で佐助の顔をうらめし気ににらみながら、「モーこりごりだ」といいた気にして立ち去っていきました。そのあと見送った佐助は見物人のほめそやす中を、ちりを払ってゆうゆうと立ち去ろうとしますと、
「あいや、そこな御仁、しばらくしばらく」
と呼び止められて、佐助が振り返って見ると、一人の武士が立っております。

武「お止めしてまことに相すまぬ、ただ今の荒れ牛を取り押さえられたるお腕前、実に感服つかまつる。拙者は当城主浮田家の侍大将を勤むる斎藤真五郎と申す者、貴殿には定め し名ある御仁ならん、お差し支えなくばご尊名を承りたい」
問われて佐助は容を改め、
佐「ほほう、さては御身が斎藤真五郎殿でござったか、なにを隠そう拙者は信州上田の城主真田左衛門尉幸村の家臣、猿飛佐助と申す者にござる。以後お見知り置かれ、ご別懇に願いたい」
斎「ふーむ、しからば御身がかねて承った真田家の忍術の大名人猿飛氏でござったか、よいところでご面会いたした、してこれよりいずれへお越しに相成る」
佐「実は貴殿のお屋敷へまいり、少々お願いの筋を申し上げるところでござった」
斎「なにっ、拙者の屋敷へお越しになるとな、それはそれは千万かたじけない、いかなるご用件かは知らぬが、しからばご同道いたすでござろう」
斎藤真五郎に連れられて屋敷へ来てみれば、さっそく美酒佳肴を運んでのもてなし。
斎「ときに猿飛殿のご用向きは、いかなることでござる」
佐「拙者の願いと申すは、余の儀にあらず、かくかくの次第でござる」
とありし次第を物語り、この始末だから、浮田家の豪傑花房助兵衛と申す者に面会致し、太守秀家公のご面前において黒白を争いたく、なにとぞお取りなしに預かりたい、と聞いて、斎藤真五郎大いに驚き、
斎「さようでござったか、拙者ははじめて承知いたした、よろしい、信州の真田家とは別懇の間柄、当家においていわれなく他家の臣下を牢獄につなぐとはもってのほか、明朝は登城いたし、

主君に申し上げるでござろう、よってご心配なきよう」
と快く承諾いたしましたから、佐助はなおも懇々と依頼しました。
そこでその日は胸襟を開いて夜の更けるまで飲みましたが、佐助は万事を頼み、宿屋をさして立ち戻りました。

ギョッチン、あっぱれあっぱれ

さてその翌日、斎藤真五郎は登城して、委細の事を太守浮田秀家公に言上いたしますと、秀家公も大いに驚き、直ちに両名に目通り得させるということになりました。
そこで真五郎は、直ちに佐渡屋にまいりまして、その由を伝えたから、佐助は飛び立つばかりに打ち喜び、
佐「さあ、霧隠仕度いたせ、ひとつ太守を謝らせてやろう」
と、霧隠才蔵には、速風の権六を引き立てさせ、ひとまず斎藤真五郎の屋敷に立ち寄り、真五郎の案内で岡山城内さして、乗り込んでまいりました。
猿飛佐助は、斎藤真五郎の案内でつかつかと御前間近く進み、はっと平伏に及びます。斎藤真五郎は太守秀家公に向かって、
斎「はは っ、恐れながら先刻言上いたしました者これに召し連れました。猿飛佐助にござりまする」

秀「うむよくぞまいった、予が中納言秀家なるぞ、見知り置け」
時に両人は顔を上げ、
佐「はは っ、それがし猿飛佐助幸吉と申するもの、お目通りを仰せつけられ、身に余る光栄に存じたてまつります」
秀家公におかれてはごきげん麗しく
秀「その方の武勇に優れたることは、かねて聞き及びおるが、殊に猿飛は忍術の名人とやら、どうじゃ、予の面前においてその術をひとつ見せてはくれまいか」
このとき猿飛、きっと容をあらため、
佐「あいや、これはしたり、今日われらお目通りを得たるは、拙者の術をご覧に入るるためではござらぬ、なんの犯せる罪もなき兄弟由利鎌之助をなに故にお召し捕りになり入牢仰せつけられたるか、その儀承りたく参じたるもの、次第によっては拙者共にも存じよりがござりまする」
きっと秀家公をねめつければ、
秀「うーむ、そうであったな、その儀は、真五郎より聞き及びしも、予は少しも存ぜざりしことじゃ、こりゃ、花房助兵衛、これへまいれっ」
その声に応じてはるか下手に控えておりました花房助兵衛のっしのっしと立ちいで、
花「ははっ、わが君には、なにか御用にござりまするや」
秀「うむ、これ助兵衛、なんじは夜城下見回りの節、人殺しの大罪人を召し捕ったと申すが、しかとさようか」

花「はっ、召し捕りました、確かに彼は佐渡屋の亭主を殺したる大罪人と心得、城内の牢屋へほうり込み置きましたが、それがなんといたしましたか」

秀「しかとそれに相違ないな、その仕儀につき、猿飛佐助といえる者より願いの筋あり、かの由利鎌之助と申す者は人殺しの罪人ではないと申すのだがどうじゃ」

花「へえ、それはまた異なことを承るものかな、あいや、それなる猿飛氏とやらにお尋ね申す、由利鎌之助が人殺しの下手人でない証拠がござるか、拙者貴殿の人相を見るに、あの夜佐渡屋より逃げ出したる二人の曲者あり、その先に走りたるはどうやら御身に似ておるように心得る、たとえ御身が忍術の名人たりとも、拙者においてはいささかも、それに恐るるものにあらず、北条家征伐の節、太閤秀吉公の横っ面を殴りしことのある花房助兵衛でござる、余人ならいざ知らず、わが目をくらまさんとはふらち千万、こうとにらんだこの目に狂いはないわ」

聞いて佐助、大いに怒り、

佐「なにっ、拙者をも同類と申すか、いかにもかのとき逃げはいたしたが、その実かようかようの次第にてなしたること、人殺しなどとはもってのほかなり、万一人殺しの罪人あらわれしときは、なんと召さる」

花「あっはっは、さては、きさまたちで心を合わせて、太守をたぶらかし、うまくいい逃れんといたしても、その手にのるような拙者ではないぞっ」

と、てんで頭から作り事ときめてかかり、受けつけようといたしませんから、

佐「これはまた奇っ怪なる一言かな、いやしくも武士に向かって、偽りを申しおるかのごとき疑い、近ごろもって迷惑至極、次第によっては、花房助兵衛などとはいわさぬぞっ」

花「うむ、ばかなっ、そんなことがあってたまるかっ、もしあったら、拙者も武士、なんじらの前に手をついてあやまる、それでどうだ」

佐「よし、きっと手をついてあやまるな、……忘れるなよ、きさまの落ち度は主君の落ち度となることを知っておろうな、それではきさまに手をつかせるからそう思えっ」

佐助は、こう念を押してから、次の間に控えさせてあった霧隠才蔵に、

佐「やあやあ霧隠才蔵、早々速風の権六を召し連れてまいれ」

「おー」と答えて、次の間からずかずかと入って来た霧隠才蔵、権六を引っ立て来たり、太守秀家公に一礼いたしてから、佐助のそばに座を占めました。

佐「おお大儀であった、これ、権六、相手が豪傑たりとも、勇士たりとも、はたまた大名なりとも、なにもはばかることはない、観念して佐渡屋亭主殺しの一条事つまびらかに白状しろっ」

というのへ、霧隠も追っかけて、

才「やい、権六、間違ったことを申すにおいては承知せぬぞっ」

権「へえ、申し上げます、改心した印になにもかも有り態に白状いたします」

と、いいながら、花房助兵衛に打ち向かい、

権「ええ、花房さまへ申し上げます。佐渡屋の亭主殺しの介添え役はこのあっしでござんす、実はこうこうしかじか、親分天人阿国は、猿飛さまの手裏剣で亡くなりましたが、もとはといえば、このあっしが親分をそそのかしてやった仕事、猿飛さまに忍術を見破られたくやしまぎれにあんな人殺しまでしてしまいました」

悪びれもせず、よどみなく白状いたしましたから、さすがの花房助兵衛、

花「ふーむそうだったか」

権「全くその通りでござんす」

聞いて花房、しばらく考えていましたが、フフーンとせせら笑いながら、

花「こいつがこいつが、よくもきさまら腹を合わせて見えすいた小細工をしおったな、親分が猿飛の手裏剣により死んだなどとは真っ赤な作り事、そんな苦肉の企らみにたぶらかさるる助兵衛ではないぞ、たってと申さば、きさまも同罪だぞっ」

と、はったとねめつけた。これを聞いた霧隠才蔵、

才「これはしたり、浮田家の豪傑花房助兵衛の言葉とも思えぬ今のいい条、われらは忍術の心得あるもの、城内へ忍び込み、忍術の力によって由利を救い出すくらいは、易々たること、しかるに真田家の家臣たるものが、盗人にも等しきさような振る舞いあっては主君の顔を汚すことになる、善悪正邪をただして青天白日の身となり、大手を振って大道を闊歩したきゆえに、わざわざ手数をかけ、まことの下手人を捕らえて乗り込んで来たのだ、高言も休み休み申せ、ただし、いまだ納得いかざるにおいては、佐渡屋の後家を証人として取り調べるがよい」

聞かれて秀家公、これをもっともなりとして、早速家臣を佐渡屋につかわし、後家を引き連れて来て、権六に引き合わせますと、

後「主人を殺したのは、たしかにこの人に相違ございませぬ、……こいつ、主人のかたきっ」

と、しがみつきそうにいたしましたが、始終の様子をご覧になっていた秀家公、

家「もはやまことの人殺しは相分かった、花房助兵衛これ以上の問答は無用じゃ、由利鎌之助を牢屋より引き出せっ」

主君の仰せですから、花房助兵衛、いたし方なく召し連れますと、由利鎌之助は佐助の顔を見て、

由「おー兄貴よく助けてくれた、かたじけない、これで天下晴れて大手を振って歩くことができる。こうなりゃあ千人力、やいやい、花房助兵衛、この間はよくもこのおれを投げ棒などで召し捕ったな、浮田公のご面前で尋常の勝負をしよう」

と、じりじり詰めよった。これを見た佐助がそばから、

佐「あいや、花房殿、かく疑い晴れたる上は約束通り、手をついてわれわれにあやまれっ」

助兵衛は面目なさに下うつむいておりますが、もじもじしていてあやまるような気配がございません。と、秀家公、

秀「やよ、猿飛佐助、静まれ、先刻その方が申せし通り、家臣の落ち度は主人の落ち度じゃ、予がわびるから、この度のことは許してやってくれ」

と、ていねいに頭を下げた。ここで猿飛佐助もようやく得心いたし、

佐「いや、ご太守がそうまでしておわびいたされたからは、もうとやかくは申さぬ、花房殿と二人前いやそれ以上と心得申す、これにて十分にござる」

すると今度は、由利鎌之助が承知いたしません。

由「おいおい兄貴おれはまだ得心しないぞ、きさまのは闇打ちだ、あんなひきょうな真似をされて召し捕られたのではおれの腹の虫が納まらぬ、ご主君の前で尋常の勝負をさせてくれ」

なんといっても聞き入れませんから、太守に申し上げると、太守も、これをもっともであるとして、

秀「由利の申し分にも一理がある。苦しゅうない、予の面前において尋常の勝負に及べっ」

と、お声がかかりましたから、相手の花房も大いに打ち喜び、

花「ははっ、心得ましてございます、勝負ならいつでもしてやる、千軍万馬の戦場において鍛えたる腕前のほどを見せてやる、わびるなんかは真っ平だ」

そこで、由利も恥辱をそそぐのはこのときとばかり、手早く仕度に及んで蒲公英つきの二間柄の槍を持って庭前に立ちいでれば、花房助兵衛も樫のはまぐり歯の木剣を持ち、襷はち巻き、袴の股立ちを高く取ってあらわれ、両人ともご主君にあいさつをなし、右と左に分かれて身構えた。由利は槍をリュウリュウとしごき、ぴたりと身構えれば、花房は浮田家において名代の大太刀使いの名人といわれた人、木剣を大上段に振りかぶって、エイヤッと気合いを入れる。しばらくの間双方にらみ合っていましたが、どこに透きを見出したか花房、大喝一声由利をのぞんで打ち下ろした電光石火の早業、あわや由利は打ちすえられたかと思いきや、タッと一足退いたかと見えた由利、身をかわして、エイヤッとくり出したる槍先は、闇にひらめく稲妻ともまごうばかり、さすがに大関同士の対戦、互いに千変万化の秘術を尽くして、一進一退、虚々実々のこの勝負はなかなかきまりません。

花房助兵衛は、はじめのうちは、なにほどのことやあらんとあなどって、めったやたらに透きをうかがっては打ち込んでおりましたが、由利の繰り出す槍先は機関銃のようなスピードで、間断なく突いて来るから、じりじりと、次第に後に下がっております。

由利の方ではこのところにおいて、恥辱をそそごうと焦っておりますから、相手に休む暇を与えない、今しも花房が槍先をポンポンと打ち払って手もとに飛び込んだと見るや、身をかわして、

「えいっ」と叫んで、さっと飛び込んだ由利の槍先は、ねらいたがわず花房の胸元をもろに突けば、花房はよろよろとよろめいて、

花「まいった」

と、木剣をそのところに投げ出し、

花「聞きしに勝る腕前、感心なやつじゃ、しかし、いざ戦場に臨まば、一番槍は決してきさまなどには譲らぬぞ」

まだへらず口をきいている。これを聞いて由利がだまってはおりません。

由「よくもよくも、こいつ口の減らぬやつじゃ、よくよくきさまは負けぎらい、往生際の悪いやつ、まだ心からまいったといわぬか、しからば、息の根を止めてやるから、力比べでまいれ」

花「よし、いくぞ」

と、身構えたとき、始終をご覧になった太守秀家公、

家「もうよい、花房勝負は見えたぞ……由利の槍術はあっぱれみごとなもの、先年大阪城内において黒田家の豪傑後藤又兵衛基次と、槍試合をなし敗けはとったるも、豊臣家槍術指南亀井新十郎を打ちすえたるとのこと、いま目の前になんじの腕前を見て感心いたした、どうじゃ、猿飛佐助、ついでにその方の忍術を見せてはくれまいか」

と、たっての所望、

佐「はっ、委細承知いたしました、さりながら、これなる霧隠才蔵は、伊賀流の忍術に達しおる者、この者の忍術をご覧下さるよう願いたてまつります」

秀「ほほう、その方も忍術をよくするか、しからば、なんじの妙術を見せてくれ」

そこで佐助は霧隠に向かい、

佐「これ才蔵、せっかくのご懇望じゃ、一手二手お目にかけたらよかろう」

オ「うむ、承知した、しからば拙者の忍術の秘術をご覧に入れます」

といって、すっくと立ち上がり、霧隠才蔵、ヤッと気合いをかければ、霧隠の姿は煙のごとくパッと消えてしまった、一同はあれよあれよとギョッチン、とあきれていると、一匹のねずみがちょろちょろと出て来て、欄間を走っています。

一同「ややっ、ねずみが欄間を走っている、霧隠はどこへいったのだ」

と、いっていると、花房の耳をぐんぐんと引っ張る者があるから、花房怒るまいことか、

花「だれだ、おれの耳を引っ張るのは……」

○「だれも引っ張りませぬぞ」

花「あれっ今度は鼻をつまんだな、けしからぬやつだ」

△「拙者はなにもいたさぬぞ」

花「これ痛いではないか、もうよさぬか、ややっ、痛いっ、頭を打つやつはだれだ」

○「花房氏、あまり由利氏に胸を突かれて、狂気いたされたとみえるな」

花「ばかを申せ、浮田家の豪傑たる拙者があれくらいのことで狂気いたしてなんとする、拙者は正気だ、やいやい、まだ拙者を愚弄いたすか、そのままには捨て置かぬぞっ」

と、なおも当たりちらしておりますと、背後に当たって、カラカラと笑う者があるので、花房助兵衛、ひょいと後ろを見ますと、霧隠才蔵がすっくり立って、

オ「花房氏、だいぶ耳や鼻を引っ張られてびっくりされたな、よほどちょん髷を切って落とそ

うと存じたが、それはよした」

花「ええっ、ちょん髷を、とんでもはっぷん……さても忍術というものは調法なものだな」

ことごとく感心しております。

オ「ねずみに姿を変えるのは伊賀流の手はじめじゃ、このくらいで驚くようでは、まだまだだ、今度はあの松の頂上に飛び上がって見せよう」

花「ふーむ、あすこまでは二十間くらいはあろうぞ」

オ「あのくらいは、いとも軽きことだ」

と、いいながら、縁側に来て「えいっ」と一声叫んだと見る間に、みるみる霧隠才蔵の体は飛鳥のごとく、パッと松のこずえに上ってしまった、まったく人間業とは思えません、そして、するすると枝から枝、樹から樹と猿のごとく、むささびのごとくに飛び回る、その様は、ひらりひらりとそのすばやいこと、これが人間かと思うばかり、ターザンそっくりでございます。一同が驚きあきれているうちにその姿が見えなくなったかと思うと、いつの間にか霧隠は自分の元いた席に戻っております。

これを見た花房助兵衛、

花「あれあれ、きさまはいつの間にここに帰って来た、奇怪な術をもったものだな」

さすがに強情者の花房助兵衛も、これには二の句がつげません。そのとき、霧隠は秀家公に向かって平伏しながら、

オ「未熟なる腕前にてお目を汚し恐れ入り申しました」

秀「いやいや左にあらず、まことにあっぱれなる腕前である。予もはじめてかかる秘術を見て

感服いたした」

すると霧隠にっこり打ち笑い、

才「かばかりの術はまことは座興にすぎざるもの、風を起こし、水を呼び、雨を降らし、あるいは火を吹き、水にくぐり、雲に乗って天かけることもでき申します。義兄猿飛佐助のごときは、暗中にて物を見分くることは犬ねこよりもすばやく、また、三丁四丁の彼方に針の落ちたるを聞き分けるくらいの術を会得いたしおります、拙者のごとき未熟の腕前にてはとうてい及びもつかぬ名人にございます」

と、ほめ立てれば、いまさらのごとく一座の者感じ入る。

秀「うーむ、恐るべき人物じゃ、真田幸村殿は知仁勇の三位を兼ね備えると申すが、かかる特別の術をよくする家臣を手足のごとくに使えるとは、さてもうらやましきことよ」

猿飛、由利、霧隠三人にそれぞれ太刀を一口ずつ下し置かれ、さらにお杯を賜り、ことごとく面目を施し、お礼を申し上げて御前を退出いたしました。

ところが、由利と代わって入牢いたした速風の権六は、その夜のうちにどこへか逃げてしまった。

さて、三人は、城内から宿屋に帰りましてから、佐助は由利鎌之助に向かい、霧隠が義兄弟になった委細を詳しく話しますと、これまたたいへんな喜び。三人は改めて義兄弟の約を結び血をすすることになり、第一番が猿飛佐助、その次が由利鎌之助、末が霧隠才蔵という順序で杯を取り交わしました。

ところが、その翌日の朝、斎藤真五郎と花房助兵衛の二人が馬を乗りつけ、

佐「いやいや昨日はお陰をもって由利も首尾よく青天白日の身となり申した、おお花房殿もごいっしょか」

花「あははは、昨日はいやはや散々な目にあったわい……それはそうと、たいへんなことに相成ったぞ」

佐「えっ、たいへんなこととは何事でござる。かりにも武士たる者がたいへんといわるるは容易ならぬこと……早々承りたい」

関ガ原合戦に駆けつく

佐助が斎藤真五郎に、たいへんとは何事かと、聞きただせば、

斎「御身らもかねてお聞き及びのこととは存ずるが、石田治部少輔三成が、豊臣家のおんためと称して徳川家康を相手となし、濃州関ガ原において大合戦をいたすことに決まったので、浮田家をはじめとして西国大名は多く石田方に加担いたし、関ガ原に出陣いたすことになり申した、今にも石田方より知らせのあり次第、軍兵を繰り出すことに相決まってござる、よっておいとまごいのため推参いたした」

聞いて三人今さらのごとくに驚きましたが、佐助はかねて播州姫路において池田武蔵守の密書によりこのことはすでに承知し、真田家に直ちに飛脚を飛ばしてはあるが、気にかかるのは真田

家の去就、

佐「ほほう、いよいよ合戦となり申すか、して真田家はどのようなことになっておりまするか、ご承知ござりませぬか」

斎「さよう、真田家は豊臣方なれども、関ヶ原には出陣なき様子、信州上田にあって徳川方を牽制されるお考えらしい」

佐「さようでござるか、さればわれらも早く本国に立ち帰らねば相成るまい、真田家とは縁につながる大谷刑部少輔吉隆殿は石田方と承知いたす、これより関ヶ原表へまかり越し、事と次第によっては大いに働かねばなるまい、由利も霧隠も、直ちに出立の用意をいたせ、いやご両所にはよくぞお知らせ下さった……あはっは……これより世の中はいよいよおもしろくなるぞっ」

斎「この度の合戦、徳川方を相手ではとても見込みはないと思うが、これも運命とていたし方なし、われらとて、再び生きて帰らぬ覚悟、なにぶんご健闘を祈る……名残は尽きせぬが、これにてお別れ申す」

と、斎藤真五郎、花房助兵衛の両人は、そのまま駒に打ちまたがって立ち帰りました。

三人は急ぎ旅の支度を調えましたときに、佐助は霧隠に向かい、

佐「これより関ヶ原に先回りして一働きしてくるつもりである、ついては、きさまは気の毒だが、この手紙を信州上田へ持っていって、わが君幸村殿にお手渡ししてくれ、きさまのことも詳しく書いて置く。おれも帰国することになるかも知れぬが、……この機会にきさまも主君にお目通りするにも都合がよかろう。実は由利をやりたいが、急を要するこの仕事、由利では忍術を知らぬから、ただ道を歩かなければならないが、きさまなら忍術で飛ばせるから……」

才「承知した、それではしばらくの間別れるぞ、体を大切にしてな」

いい捨てて才蔵は信州上田をさして飛ばしていきました。

話かわりまして、こちらは猿飛佐助と由利鎌之助の二人は、関ヶ原さしてやってまいりましたが、それはどういう訳かと申しますと、石田に恩顧があるからではない、石田の軍師役大谷刑部少輔吉隆、この方は主君幸村殿の奥方千代姫の舅、この大谷刑部吉隆に一臂の力をかし、かたがたこの戦いの様子を知って置くことが、真田家にとってなにか得るところがあると考えたからでございます。

そこに目をつけたのは、さすがに佐助、この戦いは豊臣家と徳川家の運命を決める戦となりました。そもそもこの戦いは豊臣家の方からしかけた戦ではなく、徳川方でいろいろ策動をして石田治部少輔三成に事を起こさせたというのが本筋のようでございます。ですから、石田と仲のよくなかった豊臣家恩顧の福島のごときは徳川方についてしまったというくらい。

それはさて置き、石田方の軍師大谷刑部少輔吉隆は、そのとき、業病いよいよ重く、顔もただれてよく目も見えなかったのですが、お家の大事と、四方掛け払いの駕籠に乗って指揮することになりました。

そのそばには、名代の豪傑湯浅伍助高定がついて、一々刑部の訊問に答え、それによって刑部が作戦を施すという有り様。

刑部は、敵味方の声を聞いて軍の動きを察して采配を取っております。

刑「この分でいけば、まずこの戦いは豊臣方の勝利に疑いはないが、気にかかるのは金吾中納言秀秋の備えじゃ、伍助ただ今の金吾の備えはどうじゃ」

伍「はい、金吾中納言殿は雁行の備えでございます」

刑「ほほう、雁行の備えか……ふーむ、それならまずよいが、万一それが八門遁甲の備えに変わるときが、金吾中納言の裏切りをいたすときじゃ、この戦いは金吾の備え一つを見ておればよい、伍助、他の陣へは目も付けず、金吾の陣に油断するな、予はどうも金吾は関東方に味方するとにらんでおる」

と、先の先まで見抜いていたのはさすがでございます。そこで伍助は委細承知して、またたきもせず松尾山の方へ目を注いでおります。

かかるところへ乗り込んでまいりましたのは兵卒に身をやつした猿飛佐助と由利鎌之助の二人、ようやくにして駕籠わきに進み、佐助が、

佐「われこそは信州真田家の家来、猿飛佐助幸吉、これなるは由利鎌之助にございます。諸国漫遊の途次、備前岡山にてこの度の大事を承り、早々にはせ参じました」

刑「ほほう、それはそれはかたじけない、おまえらは真田家の家来か、予の身を思い遠路をはるばる駆けつけくれたか、聞けば猿飛佐助は忍術の大名人とやら、早速ながら、松尾山の金吾中納言の陣中に忍び込み、彼の挙動を探ってはくれまいか」

佐「ははっ、かしこまりましてござる……しからばごめん」

いいすてて、佐助は気合いと共にもう姿は消えてしまいました。伍助があっと驚くのを見て取った由利は、

由「あいや、少しも驚くには当たりませぬ、五遁の術をもって身を隠しましたるもの、今ごろはもう陣中に忍び込んでおりましょう」

伍「うーむ、さても調法な術もあるものだなあ」

と、感服いたしております。するとものの半刻もたったと思われるころ、パッと駕籠のそばに姿を現した猿飛佐助、

佐「ええ、ただ今立ち帰りました」

刑「おお、大儀であった、して様子は、どうであったな」

佐「金吾中納言殿には、関東徳川方に内通の印あり、今に備えを立て直すに相違ございませぬ」

といいも終わらぬうちに、伍助がその備えを見てあれば、今まで雁行であった松尾山の金吾中納言の備えは、にわかに八門遁甲の備えに変わった。これを見た伍助、

伍「うーむ、さてはわが君のご推察の通り八門遁甲の備えに相成りました」

刑「かくなる上は、この戦いはもうだめじゃ、故太閤殿下も泉下に在って定めし残念におぼしめされるだろう、われ軍師として乗り込んだからは生き永らえてなにかせん、もはやかくなる上は是非に及ばぬ、これこれ伍助、近う」

はっと答えて湯浅伍助、乗り物の側へつかつかと進めば、

刑「おお伍助、予は戦死する覚悟ではあるが、かような見苦しき首級を関東方本陣に持ちいかれなば、臭気はなはだしく徳川方の勇士の物笑いになるは必定、よって予は生害いたすにより、そちは介錯をした上、予の首はどこでもよい、人の知れざるところに埋め、そちは生き永らえて回向をいたしくれよ、主従が死を共にするは忠義のごとくにしてさにあらず、大谷刑部少輔吉隆の最期を見届けよ、また、そこなる猿飛と由利の両人は、信州上田へ立ち帰り、安房守昌幸殿と左衛門尉幸村に、吉隆が死の際に、娘千代姫の身の上はくれぐれも頼むと申したと伝えてくれ」

それを聞いた猿飛佐助、

佐「こは奇っ怪なることを承ることかな、戦はいずれともつかざるに、ご生害とはもってのほか、万一戦い不利と相成ったるそのときは、われわれ両人にてお話つまつりますれば、信州上田まで落ち延び下され、折を待って再興を計り、豊臣の天下のためにお尽くしを願いまする」

湯浅伍助も、かたわらより、

伍「君命にはござりまするが、あまりにもお情けなきお言葉かな、泉下へのお供はぜひとも伍助に仰せつけ下さりますよう、それとも信州上田へ落ち延び下さるならば、拙者が後に踏みとどまりて潔く戦死つかまつり、首尾よくわが君を落としまいらせん」

忠義一徹の伍助は目に涙をたたえて申し上げれば、さすがに刑部少輔吉隆もあふるる涙をおし隠し、

刑「こりゃあ、なんと申す、予に上田へ落ち延びよとはなんたるたわけたことぞ、どの面下げて婿の幸村に対面ができようぞ、武士たるもの生き恥さらすは本意ならず、予はここにて潔く自害いたす、伍助、介錯いたせっ」

と厳命に及ぶ、これを聞いて伍助もこれまでなりと観念して、

伍「しからば仰せ承りました」

と、いえば、吉隆公には、

刑「これなるは太閤より拝領いたしたる正宗の太刀なるぞ、今その方に形見としてつかわす」

伍「有り難くちょうだいいたしまする」

と、押し頂いて拝受いたしました。ついで猿飛と由利を近くへ召し、

刑「両人の者、その方らは危険を冒して、予の身を保護してくれんとする志は、まことにかたじけなけれど、これもことごとく運命とあれば是非もなし、両人ともども上田へ立ち帰り、今日の有り様をつぶさに伝えてくれ、ただ今江戸中将秀忠の大軍のここに現れざるは、上田において、真田父子がにらみをきかせおるためじゃ、……もはやこれにて思い残すことはない、それ、これを形見として取らすぞ」

と、猿飛には印籠、由利には鉄扇を下されました。両豪傑もいたしかたなく右の品を拝領して、差しうつむいておりますその透きに、吉隆公には、駕籠の中にてみごと腹一文字にかっ切って自害なされました。是非なく湯浅伍助は君命に従い介錯いたして、その首を白き布に包み小脇に抱い込んでつと立ち上がって見れば、そのとき、金吾中納言には裏切りの行動を開始いたしましたから、味方の陣は敗退して支えることもならず総崩れと相成りました。そのとき伍助は猿飛に打ち向かい、

伍「うーむ是非もなし、猿飛氏、由利氏、これがこの世のお別れでござる、さらばじゃ」

といい置いて韋駄天のごとく彼方へ駆け出し、敵味方の間をぬっていずれにか逃げ去りました。

この後ろ姿を見た猿飛佐助と由利鎌之助の二人は顔見合わせておりましたが、

佐「のう由利、今湯浅殿は、これが今生の別れといったが、主君の後を追って戦死するものと見受けた、万が一にも大谷殿の首級を敵の手に渡すようなことがあっては、せっかくの遺言も水の泡となる、おれが彼の後をつけて、あくまで先途を見届けて来るから、きさまは裏切りをなしたる金吾中納言の備えの後をつき崩せ、一人で難しければおれが手伝ってやる」

由「うむ兄貴、おれ一人でだいじょうぶだ、この槍と馬さえあれば金吾風情のひょろひょろ者、

なんのことやある、この腕のつづく限りみごとけちらしてくれん、では兄貴後で会うぞ」

佐「よう し、突いてけって斬りまくりなぎ倒し、大暴れをしてこい」　由「よし承知した」

由利はそばにあったる駒にひらりと打ち乗ったかと見てあれば、大身の槍リュウリュウとしごいて、面も振らず松尾山の陣を目がけてまっしぐらに突き進んでいった。猿飛も後れはせじと、湯浅の後を追いかけて一散に駆け出す。

本多忠勝の肝っ玉ひやり

こちらは、湯浅伍助は主君から拝領した太刀を背負って走ってまいりましたが、これがあっては都合が悪いと思いましたから、家来の湯浅弥兵衛なる者にこれを預け、再三断るのを無理やりに戦場を逃れ立ち去らせました。伍助は、主君の首級をどこか適当な場所にと、あちらこちらと探しておりましたが、ここならばと適当な場所に埋めたる折しも、藤堂仁右衛門といえる武将、伍助を臨んで槍を突きつければ、すわこれまでなりと観念した伍助、

伍「あいや藤堂殿、拙者ここにて其許に首は進ぜるが、ひとつ武士道によりしっかと約束いたしたいが聞いては下さるまいか、実は今埋めたるこの首級は大谷刑部吉隆殿なり、これにはかく其許を武士と見込んでお頼み申す、なにとぞ決して口外いたして下さるな」

藤「いかにも承知いたした、しからば尋常に勝負いたそう」伍「いざ見参」

と立ち向かいましたが、この辺は昔の武士道のよいところ、まことの武士と武士のりっぱなエチケット、伍助は主君の首級さえ無事となればもうこの世に心残りなく、もう気ががっくりしているから、気負い立ったる藤堂の槍の先にあえない最期を遂げ、敵将の刀によってその首を打ち落とされました。その様子を逐一見ておりました佐助は、藤堂の立ち去るのを見定めて、大谷刑部の首級を掘り出して、埋めたところには今しがた拝領した印籠を埋め変え、他のところに首級を移し埋め、

佐「こうして置けば、だれも知るまい、うむ、これでよし」

と、乱軍の中に紛れ込んでしまいました。戦いすんだるとき、藤堂仁右衛門にあっては、伍助の首級を家康公の御前にさし出したるところ、家康公には、五百石加増をえさにして伍助の首級あるからは、大谷刑部の首級の在所を知るであろうとおっしゃったが、武士道にかけて誓った一言がございますから、知らぬ存ぜぬで押し通してしまった。

藤堂仁右衛門の武士の一言によって大谷刑部の首級は無事そのままになっておりましたが、後日、猿飛佐助から、幸村殿の奥方の千代姫に申し上げましたので、大谷の旧臣が関ヶ原に近き小山というところへ来り、その首級を掘り返して越前国へ持参いたし、本国の菩提寺に改めて埋葬いたしましたが、そのことを後で聞き及んだ家康公には、藤堂仁右衛門の武士の誉と、伍助の忠義を顕彰するため、印籠塚として石碑を建てたとのことでございます。

話変わって松尾山なる金吾中納言の陣中に躍り込みました由利鎌之助、駒をすすめて秀秋の陣営近くにやってまいりまして、天地もとどろくばかりの大音声を張り上げ、

由「やあやあそれなる金吾中納言秀秋をはじめとして一同の奴輩よっく承れ、武士は義を守る

をもって第一となす、しかるにひきょうにも裏切りしてわが身の安全を計るとは武士の風上にも置き難きやつ、畜生武士とはきさまらのことだ、かく申すは信州上田なる真田幸村の家臣由利鎌之助という者、義によってただ一騎乗り込んだり、相手が数十数百とて驚くものではない、われと思わんものは一度に掛かって来いっ、いざ見参見参」

いいながら大身の槍をリュウリュウしごいて、雲のごとく群らがる軍勢の真っただ中に面も振らず突っ込んだ。これを聞いたる秀秋の陣中はにわかに騒ぎ立ち、

△「それ、いつの間にか真田の軍勢が来たったるか、油断をいたすな」

その透きをねらって由利は摩利支天が暴れ狂うとばかり、あるいはなぎ立て、なぎ倒し、あるいは胴突き、馬蹄にかけてけちらす者数十百人、いやはや物すごい働きに、中納言の陣中はどっと雪崩を打って一陣、二陣、三陣とまたたく間に、縦横無尽に暴れ崩されております。そのときしも、はるか向こうより、紺地に白の立葵の旗馬印をひらひら風になびかせながら気負い立って乗り出してまいりましたのは、これぞ徳川四天王の随一人といわれたる本多平八郎忠勝なり、今しも家康公の下知により松尾山の戦いの模様を見届けにやって来て、この有り様を打ちながめましたから、

本「こはそもいかに、若武者ただ一騎のため、目に余る味方の軍勢かくまで斬り崩さるるとはふがいなき奴輩、いでやこの平八郎が一騎打ちの勝負に及び討ち取りくれん」

かのとんぼ切りの槍をリュウリュウと引きしごき、トットッと馬を乗り回しながら、由利鎌之助の間近へと進みより、割れ鐘のような大音声張り上げ、

本「やあやあそれなる勇士に物申す、われこそは徳川方にその人ありと知られたる本多平八郎

忠勝なり、一槍手練の槍をご覧に入れん、いざ見参見参」

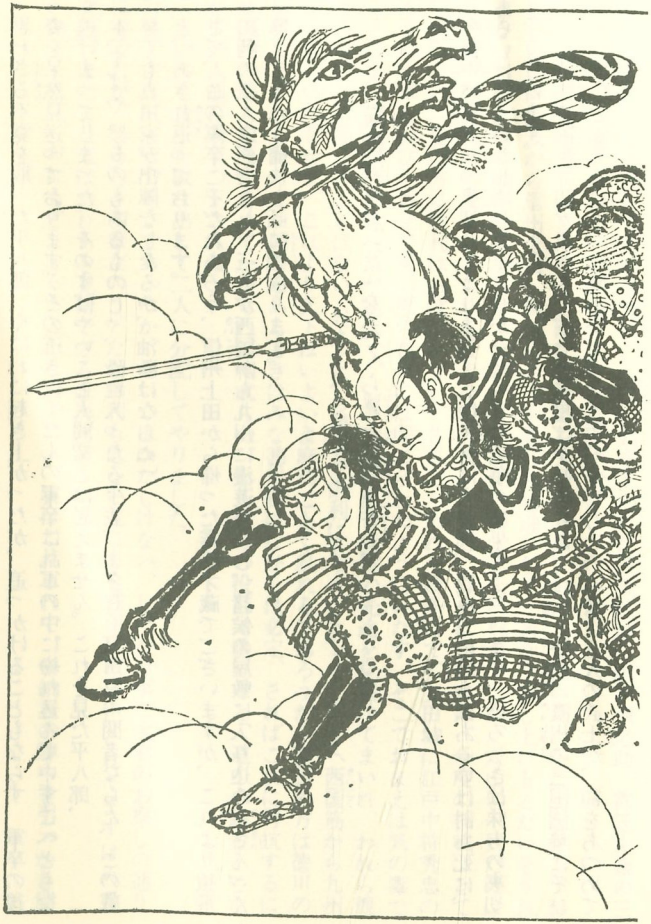
これを聞いた由利鎌之助、

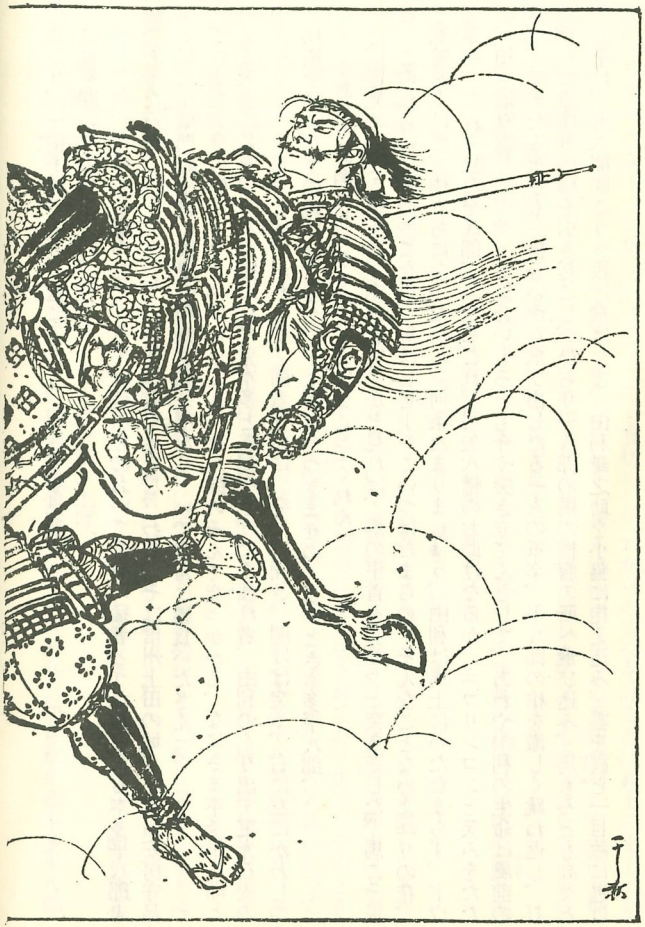
由「おおいかにも心得申した、さては徳川方において豪勇の猛者とうたわれたる本多平八郎忠勝であったるか、相手にとっていささかも不足なし、われこそは信州上田の城主、真田安房守昌幸が嫡男左衛門尉幸村の家臣由利鎌之助基房なり、いで尋常に勝負いたさん」

これまた大身の槍リュウリュウとしごき、平八郎のぞんで突っかかる、なにさま本多平八郎といえば天下に名を得たる勇猛にして鬼本多とあだなされたる強れ者、由利のくり出す電光石火の槍先をひらりひらりと体をかわして、両者互いに、突けば開き、開けば突く、右に左にかわしつつ秘術を尽くしての戦いは、なかなかに勝負がつきませぬ。このとき本多平八郎、

本「やあや、面倒なり、かくなる上はこうしてくれん」

と、電光のごとき槍先は、由利を突くかと見れば、馬の平首をグサッと突きさした。馬こそ災難、このねらいは狂いっこない、馬はヒヒーンこいつはたまらぬ、そんなことないよユリの花、と悲鳴を上げて、棒立ちになったから、何条たまりましょう、由利は馬上にいたたまらず、ドウと落馬、これを見た平八郎、これぞこれ、弓矢八幡のお助けなるか、ニコリンコンと笑みをたたえ、槍を取り直して、ヤッと気合いもろとも今や突き立てんとして、あわや由利の生命は風前の灯と見えたる折しも、横合いから飛び出したる一人の軍卒、平八郎の槍を激しく跳ね返し、打ち倒れたる由利の体を引き起こし、ひらり平八郎の馬の横腹の所へ飛び込み、馬もろとも高々とさし上げ、五六間向こうへ投げ飛ばして、由利鎌之助を小脇に抱え込み、雲を霞と一目散に逃げ去った。





思わざる不覚を取った平八郎、やにわに起き上がったが、追っかけることもならず、軍卒の後ろ姿を呆然見送っております。その透きにくだんの軍卒は乱軍の中に紛れ込んでいずこへともなく逃げ去ってしまった。そのすばやいこと人間業とは思えません。これを見た平八郎、

本「すばやいものもあるものじゃ、恐れ入ったる手並、まさしく真田家の間者ならん、この戦に早くも真田家が出陣なしたるか、油断はならぬ」

と、あきれ返っております。

さて、この軍卒こそだれあろう、信州上田から帰った霧隠才蔵でございますが、これより猿飛と由利の二人に面会なし、三人が西国から九州に漫遊いたし、諸侯の屋敷に入り込み、さんざんに悩ますという痛快な話に相成ります。

横紙破り、なにをたくらんでいるやら

金吾中納言秀秋の裏切りによりまして、徳川勢は大勝利、豊臣方の将士はあるいは討ち死に、あるいは逃走いたしました。これがただ一日の戦争の結果でございます。恐ろしきは味方の裏切りでございます。

それはさて置き、関ヶ原から、ざっと三里ばかり離れた、江州と勢州、濃州の三国国境にそびえる三国山のふもとに一つの廃寺がございます。今しもこの本堂に三人の武士が、額をあつめて

なにやらひそひそ話しております。これはいわずと知れた猿飛佐助、由利鎌之助、霧隠才蔵の三人でございます。今しも一ひざ乗り出した霧隠才蔵、

才「関ヶ原の合戦がこんなことになったのも天命であるなれば、もういたしかたがないよ、おれは備前岡山表から信州上田へ到着し、ご主君にお目通りして、書面を差し上げるとたいそうお喜びになり、有り難いお言葉を下されたぞ、話に聞いた七勇士にも会ったが、穴山岩千代だけは上杉家へ使いにいった後だったから会えなかった、ご主君の仰せになるには、今度の合戦はとてものことに、豊臣方に勝利はおぼつかない、されど、われら親子にて、上田城に江戸中将秀忠の八万の大軍をおびき寄せて関ヶ原の戦争には間に合わぬようにいたす、そこでおまえは気の毒ではあるが、関ヶ原の陣地へ乗り込んで、舅大谷刑部吉隆殿の先途を見届けてまいれ、われら親子の身の上は顧みることはない、おまえから猿飛や由利にもよくこのことを伝え、西国筋から九州路を漫遊いたさせよ、これより天下はいよいよ麻のごとく乱れるであろうが、東国の方は徳川の威勢ことごとく堅く、一朝ことあるときはみな徳川勢になびくは必定、さればこれに対抗するには関西の勢を取りまとめてかからねば相成らぬ、なんじらの役目は重いぞと、道中の路金といたして一人前百両ずつ下された」

といって金子を取り出して二人に分配してやりました。

佐「ふーむ、いやそうであったか、そいつはかたじけない、したが万事ご主君のお察しの通りになったが、恐ろしき明察だのう。だが由利も危ないところを霧隠に救い出されてまずはめでたい、まだまだ天はわれらを見捨てざる証拠だ」

由「うーむ、おれもどうなることかと思ったよ、実はこれこれで、中納言の陣中を引っかき回

してやったから、腹の虫は納まったようなものの、もう一息というときに本多平八郎忠勝が飛び出して、一命危ういとき霧隠が現れてという訳だ、おれも平八郎を討ちすえたいと思ったが、霧隠がそんなことをしても益がないと止めるからそのまま逃げて来たが、なにしろ、兄貴に会えてよかった」

佐「ふーむ、それはおもしろかったろう、だがおれたちは戦争するばかりが能ではない、余計なことをしてはかえって主家のために相成らぬ。大谷刑部吉隆殿の最期の模様は、直ちにご主君にお知らせしなければならぬ」

ここで三人は相談して書面にしたため、再び中国九州へ漫遊をすることも書き添えて、その晩のうちに飛脚を信州上田へ立てました。ここはまず安心だから今夜はここでゆっくり休んで明朝早く出立しようと、三人は休みましたが、その夜半、異様なうなり声に目をさました霧隠が、引っつかまえて見ると、これが意外にも石田治部少輔三成だったから、姿をすっかりかえて、三人は翌朝江州路まで送って別れました。

その後三人は、その足で京都にいで、関ヶ原合戦のあと始末を見届けてここを立ちましたが、道中別段変わったお話もなく、泊まりを重ねて大阪、姫路、岡山も難なく打ち過ぎ、ここに芸州広島の城下へ入ってまいりました。

ここは横紙破りで名を取った福島左衛門太夫正則が城主でございます。この福島はかつて豊臣秀吉の荒小姓として市松、その後尾州清洲において二十万石、この度の関ヶ原の合戦に徳川方の先陣となって浮田中納言の勢二万を八千余騎で打ち破った功により、今はここ芸備両国をもらって五十万石、その勢力なかなか大したものでございます。

三人は大手通りの芸州屋嘉兵衛という旅籠屋に宿をとり、酒肴を命じて、酒をちびりちびりやりながらの高話。

佐「どうだい由利、人の運というものは分からぬものだなあ、あの桶屋の市松が、よくもこれまでに出世をしたものだ」

由「うむ、いかにもな、今度の関ヶ原の合戦に石田と仲が悪かったので、徳川方についたお陰でこの出世をして威張っているが、おれにいわせれば、どうかと思うな」

佐「ふーむ、市松め、ふだんの気性に似合わず、徳川方につくとは、太閤の恩に反くものだ、石田が気に入らなければ、戦争に出なければいいものを、わざわざ関東の提灯持ちをするなど、あまりにも意気地のない話じゃないか、四十万石の五十万石のとえらそうな顔をしているのがしゃくにさわる。大名の、横紙破りのとおどしているが、つまりは腰抜け侍だ」

三人が酒を飲みながらの不平話、だんだん高声になったから、隣の部屋にも聞こえます。

この話をふすま越しに聞いた福島家の若侍、このことを早速重臣に注進しました。だんだん調べてみると、猿飛佐助の連れということが分かった。翌朝、重臣から正則公に申し上げると、福島丹後、小関石見、長尾隼人の三人に向かい、

正「猿飛が城下へまいったとはおもしろい、その方たち三人、芸州屋へまいり、三人を召し連れまいれ」

そこで、三人打ちそろって、芸州屋へまいり、

丹「拙者ら二人まかり越したるは余の儀にあらず、わが君へ御身たちが当地芸州屋に逗留いたしおる由言上に及びたるところ、わが君には至極喜ばれ、ぜひとも三人を召し連れまいれとの御

意により、われら三人使者となって参上いたしたる次第、どうか即刻ご同道を願いたい、この儀お願い申す」

と、口上に及びました。

佐「ああ、さようでござったか、それはそれは重々痛み入り申す、わざわざお歴々の三豪傑を使者としてのお招きまことに光栄に存ずる、お言葉に甘えいかにもお供つかまつるでござる」

早速に佐助が承諾に及んで、二人も身支度をさせて福島家をさして乗り込んでまいる。猿飛佐助をはじめ、三人の者は控え所に待たせて、使者の三人はずんずんなかへ入っていった。佐助は二人に向かって声をひそめ、

佐「おいおい由利と霧隠、今日福島正則がわれわれを呼び寄せたは、なにか考えがあるからに違いない、なにしろ油断はならぬぞ」

オ「いかにもそうだ、おれもそうみている、しかし、いざとなったらあべこべに荒肝を取ってやろう」

佐「うむ、そうだとも」

由「しかしきさまたちには、いざというときには忍術という調法なものがあるが、おれには腕と力という武器しか持ち合わせがないぞ、広島城内へ連れて来られたのも、つまりは忍術を知らんがためだ」

佐「おいおい由利、いまからそんな弱気でどうする、三人兄弟ではないか、互いに助け合うぞ、まさかきさまがやられているのを見殺しにするようなことはしないぞ」

オ「そうだとも、兄貴のいう通りだ、決してきさまの危ういところを見逃すようなことはいたさぬ、いざというときには兄貴とおれで助けてやるから泣言などいうな」

由「見殺しにされてたまるかよ、あっははは……これは冗談だ、兄貴そんなことはどうでもいいが、いったいなにをしようというのかな」

佐「そんなことが今から分かるはずがない、まあなにがあっても心配するな、まさかに廊下の途中で闇討ちするようなひきょうな真似はすまい、この三人がいる以上、矢でも鉄砲でも持って来い、いよいよとなったら火遁の術でこの城に火をつけて焼き払ってやるから……」

物騒な三人がこんな相談をしているとはつゆ知らず、しばらくの間三人を控えの間に待たせておきました。

吹きも吹いたり大ラッパ

控えの間にあって三人が、物騒極まる相談をしているところへ、さっきの三人が来て、

丹「ああ猿飛氏およびご両所、たいへんお待たせして申し訳なかった。さあさあこちらへおいで下され」

三人を引き連れて、大広間へ導いてまいります。正面の一段高き所には、当城の主横紙破りの福島正則公。

その左右には戦場往来の福島家名代の豪傑勇士連中が、綺羅、星のごとくに居並んでおります。

その所へ臆したる様もなく御前近くへ進みいでたる三人はっと平伏すれば、正則公はきっとご覧になり、

正「やあやあ珍しや三人の者、関ヶ原の合戦のときには、しきりに東軍を打ち悩ましたと聞き及ぶ、よくぞまいった、さあさあ近う進め」

佐「ははっ、これは大徳寺焼香以来、久々にてご対面をつかまつりまする。拙者は信州上田真田家の家臣猿飛佐助と申す者にござります」

由「ええ、てまえことは由利鎌之助にございます」

才「次なる拙者は霧隠才蔵と申しまする」

正「うむ」

佐「ご太守にはいよいよご健勝の体、かつは日々に加わるご威勢、まことにおめでたく、謹んでご恐悦に存じ上げたてまつりまする」

正「うむ、その方らも無事にてまずはめでたい。聞くところによれば、真田家では諸国へ間者を入れて、大名諸公の様子を探りおると申すが、大方なんじらも予が城内を見届けにまいったものであろう、その儀はどうじゃ」

佐「まことに無遠慮であけすけな言葉でございます。三人はむっといたしましたから、佐助が、これは異なことを承るものかな、ご当家は五十万石の大大名、真田家は四面敵の中に囲まれたるわずか五万石の小大名、しかもなおこの真田家が怖いとおぼしめされまするや」

事もなげに応答いたしますと、もとより癇癖の強い正則公のまゆがピリピリッと動いたが、知恵丹後といわれた福島丹後がパチパチッと目でなにやらサインを送ったから、正則公もこくりと

うなずき、

正「うむ、その返答、いかにも気に入った、どうじゃ酒を飲むか」

佐「はい、豪傑は酒を飲むとか申します。お勧めとあらば斗酒なお辞せずと申すところ、有り難くちょうだいいたしまする」

正「ほほ、おもしろいやつじゃ、さようであろう、ああこれこれ、用意の膳部をこれへ運べっ」

○「ははっ、かしこまりましてございます」と答えて、次の間から、小姓の運んで来た高蒔絵の膳部三台、三人の前へそれぞれ据えました。

正「うむ、よしよし、予がまず毒味いたそう」

とあって、大杯を取り上げて、なみなみとつがせ、それをもののみごとに、ぐっと一息に飲み干しました。

正「ああこれこれ三人の者、予が毒味いたした、いざ一献まいろうぞ」

佐「ははっ、これはなによりの好物、せっかくなれば遠慮なくちょうだいつかまつります」

小姓の手から大杯を受け取ってなみなみとつがせ、息をもつがずにぐっと飲み干した。つづいて由利、霧隠と順々にちょうだいいたしましたが、いずれもみごとな飲み振りでございます。

佐「これはこれはまことに結構なる灘の生一本、こくの具合といい味と申し、至極結構にちょうだいつかまつりました。お陰をもって命が延びたる心地がいたしまする」

いいながら、ふと膳部を見ますと驚いた、広島名物の牡蛎の酢の物をはじめ、たいの浜焼き、ふぐの刺身、山海の珍味が山ほど並べてあるが、さすがにビキニのまぐろだけはございません。いずれも、のどから胃の腑がのぞきに出そうなりっぱな料理でございますが、それをつまむ肝心な

はしがございません。自分のだけかと思って、隣をチラッと見たが由利の膳部にも、霧隠の膳部にもやっぱりはしが置いてない。

――いかにも奇っ怪なり、ははあ、正則のやつ、なにか考えがあってした仕事だな、つまらぬいたずらをしたものだ、はしがなくても食われぬことはあるまい、みごと食って見せるぞ――と胸中に思案を定めた佐助、両人に目配せをして、いきなり腰をひねってぬき取ったのは小柄でございます。これを浜焼きの背にぐいと突き立て、

佐「ああ、御前をはじめ方々お許し下されい、拙者らは山国育ちにして、礼儀をわきまえず戦場のことを思い出して、はしの代わりにこの小柄にてちょうだいつかまつりまする」

といって、むしゃむしゃ食いはじめた、傍若無人、当意即妙と申すのはこのことでございましょうか、佐助にならって由利も霧隠もその通りにしたから、正則公も目算が外れたからおもしろくなさそうな面持ちで、

正「こらっ、小姓ども、ふらち者めっ、膳部にはしを忘れる法があるか、客人に対して無礼であろう、すぐにはしを持ってまいれ」

佐「あいや御前、戦場往来の豪傑が、かばかりのことにご家臣をおしかりあるべからず、……これも時にとっての一興でござる」

無遠慮なるこの佐助の振る舞いに正則公もいささか虚をつかれた形でしたが、

正「その無遠慮が気に入った。……戦場と申せば、先頃の関ヶ原の戦いには、逆賊を平らげて日本晴れ、よい保養をいたしたのも同様じゃ、その方ら三人も飛び入りをいたしたそうじゃが、定めしいい気持ちであったろうな」

これを聞くと猿飛佐助は一ひざ乗り出し、

佐「あいや、御前、ただ今のご一言、拙者はなはだ心得ませぬ、関ヶ原の戦いが気保養とはいかなる意味にござりまするか」

正「あはっは……来おったな、気保養といったのはのう、天下の逆賊を討ったからじゃ」

佐「して、その逆賊とはだれをさして申さるるや、よも幼君をささるるのではござりますまい……いかに」

正「幼君秀頼公をだれが逆賊と申した。逆賊とは石田治部をさすのじゃ」

佐「あはっは……さもあろう、たぶんそうお答えあると存じました。さればうかがい申す。正則公には、太閤ご在世中、ひとかたならぬご恩顧をこうむられ、それによりて、かくは大大名となられしものと存ずる。しかるに、一朝太閤ご他界となるや、前の恩義は打ち忘れ、徳川殿の威光盛んなれば、これにこびへつらいて身を守らんとす、この一事にても逆臣たるに十分、しかもこれに味方して、幼君をいただく石田殿の軍に敵対いたさばこれすでに逆臣といわずしてなんぞや」

正「うーむ」

佐「しかも御前は、その軍をさして逆臣と仰せられたり……あいやしばらく、……正則公には逆臣とは秀頼公をさしていうにあらず、石田殿をさすと仰せられまするが、恐らく石田殿と不和なるが故に、石田殿のなさることはことごとく気にくわず、これをもって逆臣呼ばわりなさるものと存ずる、これまことに穏当ならず、御前と石田殿との不和は一私事、公私混同せる奇弁もここまでまいれば笑止千万、……ても聞くと見るとは大きな間違い、横紙破りもここまで徹すればな

にをかいわんやでござる」

これを聞いて正則公は、横紙破りの本性を顔に現し、烈火のごとくに怒りを発し、

正「無礼者めっ、ただ今の一言、聞きずてならず、予を罵詈讒謗をいたすとはもってのほか、石田を目して逆臣と申したがどうした。今一言申してみよ、そのままには捨ておかぬぞ」

はったと、にらめつければ、

佐「これはしたり、石田石田と仰せられまするが、石田殿にはご幼君をいただいておいでになりますぞ……御前において石田殿を相手となさるを潔しとせざらんか、この戦には中立ありてこそ、太閤殿の恩義に酬ゆると申すものにはあらざるか、武士は義を重んずるをもって道となす、これをなんとおぼしめさるるや」

正「黙れっ、今一言申して見よ」

目は血走り、その物すごさはいわん方なし。正則公にしてかくのごとし、控え居並ぶ福島の十傑の面々も、各〻一刀の柄に手をかけ、じりっ、じりじりと三人の者をのぞんでつめ寄って来る。殺気はこの大広間に満ち満ちて、いつ暴風をまき起こすやも知れざる形勢、いわゆる一触即発とはこのことを申すのでございましょう。

秘蔵の槍、遠慮なくちょうだいいたす

このとき猿飛佐助少しもあわてず、

佐「あいや、御前をはじめ、方々お騒ぎあるべからず、猿飛佐助幸吉、ただ口先ばかりの弁を弄するものではござらぬ、いかに武勇をもって威嚇されても、それに恐るる者にあらず、悪いものは悪い、良いものは良いと申し、正邪の道を明瞭にいたすもの、節義を重んずるものが真の武士と存ずる。時の威に媚びへつらい、わが身の栄達をはかるがごときは武士として恥ずべきことと確信つかまつる」

ひざをたたいて火を吐くように述べたてた。

自分の家臣でないものから、こうまで遠慮会釈もなく放言されて、引っ込んでいるような正則公ではございません。元来が相当の大名をすら子供扱いにする正則公のことですから、獅子の狂えるがごとく猛り立って、

正「うむ、よくぞぬかしたり、猿飛佐助、今天下に武勇の士多しといえども、予が面前においてなんじのごとく暴言を吐くものはかつてない。その方は予を目して豊臣に不忠の臣と申したが、しかとさようか」

と息使いも激しく、はったと、にらめつければ、佐助は言葉静かに、

佐「ははっ、いかにもさよう申し上げました」

正「おのれっ、ふらち千万なる申し分なるかな、なんじ忍術の心得あるにより、人も無げなる高慢不遜なる振る舞いをいたすが、よーく承れよ、万一関ガ原合戦において石田治部が勝利とならば、幼君秀頼公の御身はご安泰であると思うか、そちの考えはそこがまだ若い、内府家康公を討ち取り、己れ天下の覇を握らんの野心ある治部じゃ、だによってこれを討ったが、なにゆえ不忠であるか、さあ申し開きがあるかどうか」

佐助ニコニコリンコンと打ち笑い、

佐「さようなお考えにて徳川家へくみせられましたるか、されば拙者め、御前こそいまだご思慮が足らぬと申すものでござる」

正「いうなっ」

佐「ままま、さようにおせき込み下さるまじ、御前には豊臣家を後ろ盾にして旗挙げせる石田治部殿、大恩をかけさせられたる豊太閤殿の恩顧に対しても、その理のいかんを問わず、私の恨みをすて、加藤肥後殿と共に、力をお加わせになり、徳川勢にお立ち向かいなされなば、よも敗軍とはなるまじものをと存ずる。石田治部にいかばかりの野望あるにもせよ、福島、加藤の大勢力の前になんの力がございましょうや」

正「いうな、加藤肥後にせよ予にせよ、石田ごときにくみし得ようや、たわけたことを申すな」

佐「さあそこが考えよう一つでござる、治部少輔三成を逆賊逆賊とおっしゃるが、故秀吉公ご他界数日前、わざわざ徳川殿と前田殿をお召しになり、特にご遺言なされ、太閤なき後の事どもくれぐれもお頼みありしこと、よもやお忘れはござるまい、その遺言に背き、反間苦肉の謀を

もって諸大名を味方に取り入れ、石田治部にことさら兵を起こさせ、かえってそれを討ち滅ぼし、自ら天下を握らんとする家康こそ狸じじい、豊臣家に取りては大逆賊にはござらぬか、しかるに、豊臣家に大恩ある身が、大逆賊たる徳川家にくみして手向かいいたさるるとは、まことその意を得ざるところにござりまする」

こうまでいわれて、どんな横紙破りでも道理には勝てません。

正「うーむ、それは……その……なんじゃ」

一言の言葉も発せられず、歯ぎしりしながら脇息に寄りかかる。この様子を見てとったそばに控えておりました小関石見が、

小「これこれ控えさっしゃいっ、猿飛佐助あまり言葉が過ぎはいたさぬか、場所柄をわきまえてものを申せっ」

居丈高になって呼ばわるのへ、

佐「あはっは……なんと仰せらるるか、いや福島家のためにはお耳障りでもござろうが、……御身らが、だいたいよくない、わが身を守るために、御前をおいさめすることをせず、味噌をすりすぎるからこのようなことになるのだ」

今度は、皆に食ってかかった。

佐「ああ是非もなきことじゃが、このままでいったらわが豊臣家の滅亡は、ここ十年とはいでまい、ああ……」

佐助が一言嘆息をもらしますと、これを聞きとがめた正則公、

正「えいっ、不吉なるその一言、それへ直れ」

いいおわりもせず、そばにあったる福島家秘蔵の槍を取るやいなや、つっ立ち上がって石突きをポンと突くと鞘は空中に舞い上がった。武勇抜群の福島正則、ただ一突きと顔色物すごく、今しも猿飛佐助をのぞんで、エイッとばかりに繰り出した槍先は電光のごとく一閃、佐助の胸板をみんごと突いたと思いきや、ひらり体を開いたから穂先は空を流れた、そのとき速くかのとき遅く、パッと飛び出したる由利鎌之助、正則公の正面に立ちふさがり、あたりに響く大音を張り上げ、

由「あはっは……これはおもしろい、兄貴は引っ込んでおれ、おれが勝負する……五十万石の福島左衛門太夫正則公が相手とはおもしろい、さあさあこれからは拙者がお相手申す。槍を取っては天下の豪傑後藤又兵衛や本多平八郎忠勝と並び称せられる由利鎌之助でござる。御前の真槍の味賞玩いたしとうござる。ご一同それにてとくとご見物下されい」

と、大谷刑部吉隆公より拝領いたしたる鉄扇を持ち、

由「さあさあ御前、由利鎌之助が鉄扇一本にてお引き受け申す、どこからなりと突いておいでなされいっ」

すこぶる落ちつき払っております。なにしろ福島正則といえば賤ガ岳七槍の一人なれば、武勇の神といわれたほどの槍の使い手、

正「えい、いわして置けば高慢無礼なるやつ、どうするか見ろ、きさまの首は胴につけてはおかぬぞ」

繰り出したる槍は電光石火、ひらり体をかわした由利鎌之助、飛鳥のごとく正則公の手もとに飛び込みざま、一声気合い共に鉄扇で槍の中程をピシリッと打てば、さすがの正則公も両手がしびれて、アッと叫ぶや槍をガラリと投げ出す。しなしたり、と正則公がそれを取ろうとするところを、猿臂をのばした由利鎌之助、正則公のえり首をむんずとつかんでエイヤッとばかりに、肩に担いでハンマー投げ、正則公の体は大広間の真ん中へドッシーンと投げつけられた。

福島正則公には、起き上がろうともがいたが由利に首筋を押さえられて動くことができない。

由「御前いかがでござる、いま一勝負いたしましょうか」

と押さえながら遠慮会釈もあらばこそ、ぐっと力を入れたから、正則公は目を白黒させながらも、

正「うーむ、まま、まだ、まま、まいらぬ」

強情も、ここまでくると大したもの、うーむうーむうなりながらまだ強情を張って「まいった」とはいわぬ。あまりのことに一同の勇士の面々、このままには捨て置けませんから、総立ちになって斬りかからんといたしたときに、福島丹後、

丹「やあやあ由利無礼であろうぞ、陪臣の身をもって、仮にも五十万石の太守を手込めにいたすとは、不都合千万、その分には置かぬぞ、それ者ども」

と、声をかけたから、一同がバラバラと飛びかからんといたしたる折しも、飛び出したのは霧隠才蔵、

才「一人を相手に、その人数、あまりといえばひきょうなり、さあこの上は拙者が忍術をもってお相手なつかまつらん、されば何人でもかかってまいれ」

パッと背後に退き、口になにやら呪文唱えて、印を結んで九字を切れば、こはそもいかに、福島名代の豪傑連は、バタバタとそれに打ち倒れ、果ては、グウグウいびきをかいて、寝てしまった。

オ「あっははははは、福島の豪傑もへちまもあったものではない、どうだ、たわいもなく寝てしまったこのざまは、……おい兄貴、こんなやつらに構っていてもしようがない、この間に逃げ出そう」

佐「うむ、そうだそうだ、さあつづけ」

由「うむよしよし合点だ、いきがけの駄賃にこの槍はもらっておく、なにしろ大した槍だから遠慮なくちょうだいしていこう」

ひどいやつもあったものだ。無断で正則公の秘蔵の槍をちょうだいに及んで、逃げ出した。宿に帰るやそこそこに宿の払いをすませて、城下を後にどんどん道を急いで広島の城下を立ち退いてしまいました。

しばらくして福島正則公をはじめ、一同が目を覚ましたときには、三人の姿が見えませんから正則公、大いに立腹いたし、

正「うーむ残念なことをいたした、ふらち千万なり、忍術をもって予を眠らせ、その上予が家の重宝たる槍を持ち逃げいたすとはけしからぬ。真田家の家臣は、まるで白昼公然と盗みにまいったも同然、このまま許し置くときは、予の威信のほどにもかかわる。やよ者ども、追っ手をかけて彼奴らを召し捕りまいれっ」

きびしき下知に、追っ取り刀で宿をはじめ八方に手配りをいたして探し回りましたが、どこへ落ち延びたものやら皆目行く方が分かりません。正則公いよいよ怒り、

正「うーむ、残念じゃ、彼等ごときに嘲弄されたるか、これより真田家にかけ合って彼らを召し捕るか、次第によっては軍馬をさし向け、弓矢をもって上田城を揉みつぶしてくれよう」

と力み返ってはみたもののなにさま真田家といえば東国にあって、徳川家の命令にさえ従わぬ独立大名でございます、老臣方の諫言によりまして、このことは泣き寝入りということに相成りました。

ちょん髷チョンチョン

さてこちらは福島家の広島城下を立ち退いた三豪傑、足を早めてやってまいりましたのは、毛利領、ここまで来ればもう追っ手のかかる心配もなく大丈夫でございます。

佐「どうだい、福島正則という野郎もずいぶん強情なやつだな、由利に投げられたときにはとうとう往生したらしかったな」

由「ふうむ、おれもあのときは溜飲を下げたよ、だが、霧隠が飛び出して来て、印を結んだときには、どんなことをするのかと心配したが、眠らせたのは大出来さ、お陰で福島家秘蔵の槍をちょうだいできてなによりだ」

オ「あはっは……元どろぼうの根性は、あんなときにも抜け目なく働くから大したものだ」

由「なにをいうか、きさまもどろぼうのくせに……」

三人が笑いながら岩国、徳山を無事に通り、今しもかかって来たのは長州萩の城下、ここは防長二カ国の太守毛利右馬頭輝元公、三人はこの城下にしばらく足をとどめて、毛利家の様子を

探っておりますと、どうやら毛利家は、徳川方に心をよせているということが分かったから、

佐「おいおい毛利も徳川方になびいているようだ、ひとついやがらせをしてやろうじゃないか」

由「うむ、そいつもいいが、いったいどんなことをするのだ」

佐「ふーむ、ちょっと耳をかせ、……読者に今から分かるとあとを読んでくれぬと困るから……これこれこうこうだ、どうだ、なんと名案だろう」

オ「その役目はおれが引き受けた、心配するには及ばぬ、今は夜なり時分はよし、すぐいってくる」

直ちに黒装束に身をかためた才蔵、

オ「じゃ兄弟、いってくるぜ」

霧隠才蔵には、闇を幸い、萩城下の搦め手から、まんまと城内に忍び込んだ。

すると、彼方に灯のもれている部屋から、話し声が聞こえます。

○「どうもこう天下が泰平になると、拙者らの腕の試しようがなくて、腕はむずかゆいし身がだるくて困るのう」

△「したが、この泰平もそう永くはつづかぬぞ、近く徳川、豊臣両家の仲が割れて天下は再び麻のごとく乱れるぞ」

○「うむ、そうか、そのとき拙者は一番乗り一番槍の功名手柄を上げるから見ておれ」

×「なんの貴公が一番槍となど、これは近頃奇っ怪至極、そのひょろひょろ槍で一番乗りの一番槍のとは片腹痛い、槍は槍でも槍違いではござらぬか、あの方の槍使いの豪傑は貴公なりとわれわれ仲間でも評判」

○「これはしたり、人聞きの悪い、あの方の槍とはけしからぬ」

×「なかなかどうして貴公の一番槍を突かれて、泣き寝入りの娘や後家が数多あるとのうわさ」

○「これ無礼であろう、武士に向かって無礼な言葉、そのままには捨て置かぬぞ」

△「これこれさようなことでいい争うでない、いざ戦のそのときは、粉骨砕心、仮にあの方の槍の使い手ならば、銃後攪乱のゲリラ隊長として、使いなれたるその腕と真槍の真価を発揮すればよいではないか、いざ鎌倉というときの用意に、今からあまり無駄遣いせずに、せいぜい精力を貯蓄しておかっしゃい」

一同「あはっは……」

どうやら、宿直の若侍たちのばか話、これを聞いた才蔵、

オ「偉そうなことをいっているな、惰弱侍めっ、……よしよしひとつ手はじめにやっつけるかな、あとで泣きっ面こくな」

パッと五遁の術をもって難なく部屋の内に忍び込み、用意のはさみを取り出し、ばか話をしていた一人の若侍のちょん髷を根元から切ってしまった。

○「これはしたり、大崎氏、貴公のちょん髷がないぞ、これは不思議だ」

大崎といわれた武士、手を頭にやってみて驚いた。

大「ありゃありゃこれはけしからぬ、今までたしかにあったはずだが」

△「あったはずもないものだ、一番槍の、一番乗りのとあまり偉そうなことをいうから、そんな災難になるのだ、拙者のはちゃんとあるだろうな」

いいながら、手をやってみると、

△「やや、おれのちょん髷もない、あれ近藤氏、貴公のちょん髷もないぞ」
近「これはしたり、武士たる者が、知らざるうちにちょん髷を取られたとあっては……」
×「あれ、拙者のもない」

四人が四人あきれている、美男の大崎はもうべそをかき出しそう。四人の若侍顔を見合わせております。この様を見た霧隠才蔵ニヤリと打ち笑い、そのまま宿へ帰ってまいりました。

才「今帰った、今晩の獲物はこれだけだ」

といいながら、四つのちょん髷を見せると、

佐「はっは……いやご苦労ご苦労、この通りにして十日も通えば、宿直に出る若侍はみなちょん髷なしになるな、これはゆかいゆかい」

由「おい、霧隠そいつはおもしろそうだな、明晩はおれもいっしょに連れていってくれ」

才「ばかを申せ、おれは忍術で忍び込めるが、きさまはだめだ、足手まといになっていかん」

由「あっ、そうか、畜生、残念だなあ」

翌晩になりますと、またもや霧隠才蔵が城内に忍び込んでちょん髷を切って帰る、なにさま忍術でする仕事ですから、毎夜のことながら、だれ一人として霧隠の仕業とは知りません。十日ばかりたてつづけにやりましたが、もう七八十人のちょん髷がたまりました。こうなると城内はもうたいへんな騒ぎ、宿直の詰め所に毎晩妖怪が出るという評判が、パッと立ちました、宿直に当たる若侍は兜をかぶったらよかろうというので、ある晩は宿直の四人が、みな兜をかぶっておりますと、いつの間にか、とろとろとしてきて、ハッと気がつくともうちょん髷がないというのだから、いよいよ妖怪の仕業としか思われない。

さあこのことが太守右馬頭輝元公のお耳に入ったから、妖怪を退治たる者には五百石の加増を申しつけるということになった。

さあこうなると、名だたる毛利家の若武者の中には、日ごろ武芸自慢や力自慢の者が五百石欲しさに、われもわれもと飛びいで、宿直の詰め所へ出かけ、目を光らせて妖怪退治に詰めるが、夜半になるとやたらに眠気を催して、目が覚めるともう髷がないという始末、このようなことが毎晩毎晩つづいたからちょん髷なしの若侍が今ははや百人余り、何れも髷ののびるまで病気届けをいたして引きこもるという騒ぎ、果ては宿直に出ようという者がなくなってしまった。

輝元公には、いよいよ躍起となられ、城代家老の桂能登守、毛利名代の豪傑粟屋四郎兵衛、益田越中守などをお召しになって妖怪退治の相談をされ、第一番にその役に当たったのが、粟屋四郎兵衛が宿直することに相成りました。

早くもそのことを知った猿飛佐助、

佐「城内においては今宵は、粟屋四郎兵衛が宿直をするとのことだ、彼は毛利家名代の豪傑じゃ、仕損じては、今までのことも水泡になる、気をつけろよ」

こちら四郎兵衛にありましては、「今宵こそは」と、妖怪ござんなれと歯を食いしばって待ち構えております。

夜はだんだんと更けて、どこで打つか遠寺の八ツの鐘、

粟「うーむ、八ツ刻か、今宵は妖怪も我が武名に怖れて出られぬとみえるわ」

なおも目を光らせてあたりに気を配っておりますと、一匹のねずみがちょろちょろと欄間を渡って下に降り、四郎兵衛のそばまでやって来ては、また欄間にするすると上がっていきま

す。

粟「はてな、ただのねずみにしては怪しいぞ、さては出おったか、いざ妖怪ござんなれ」

と、キッと四郎兵衛身構えた。そのとたん、急に眠気を催して、目を開こうとすればするほど眠くなる、ハッと目を開いて、欄間を見ると、ねずみがちょろちょろと渡り歩いております。またもふらふらとなったので、やにわに腰なる小柄を取って、ひざにブスリと突きさした。

粟「こうすれば、大丈夫だ、いよいよ眠くなったら、この小柄が身に立って寝る気遣いはない」

これを見た霧隠才蔵、

才「さすがに豪傑ともなると心構えが違う、なかなか乗り込む透きがない」

ねずみは欄間からスルスルと降り立って、粟屋四郎兵衛のあたりを四五遍も回ったと思うころ、四郎兵衛の肩口に飛び上がらんとしたとき、スックと立ち上がった四郎兵衛、ひょいっと体をひねったから、くだんのねずみ空を食らってバッタリ下に落ちたそのとたん、四郎兵衛足に力をこめてけあげたから、何条たまりません、ねずみは向こうの襖にドーンとつき当たったかと思うと、術は破れて、才蔵の姿が現れた。それを見るより四郎兵衛、

四「やあ怪しきねずみと思いしに、さてはねずみに化けておれをたぶらかそうといたしたか、そんな術に乗る拙者ではない、いで引っ捕らえてくれん」

と、大手を広げてパッと飛びついた、才蔵もしまったと思ったが二三間横手にパッと飛び退き、向こうの欄間へ飛び上がった。

四「やあ、こいつ、今度は人間に化けおったか、よしこうしてくれる」

いきなり、手裏剣とって打ちつければ、こはそもいかに、燈火はフーッと消えてしまったから

四郎兵衛うろうろしている。才蔵は欄間から飛びおりてつかつかと四郎兵衛に近寄り、その頭をポカッとなぐりつけ、そのまま姿を隠し、ほうほうの体で逃げ帰った才蔵、いっさいを話すと、猿飛佐助カラカラと打ち笑い、

佐「さすがは粟屋四郎兵衛だ、ねずみに目をつけたは大したものだ、よし、明晩はおれがいくぞ」

粟屋四郎兵衛は、翌朝、太守に昨夜の首尾はこれこれこうと逐一申し上げましたから、

毛「今宵はよも妖怪は出現いたさぬであろうが、念のため、井上五郎兵衛、その方が宿直をいたせっ」

そこで、井上五郎兵衛も粟屋と同じく妖怪来らば引っつかんでくれんと待ち構えましたが、何事もなく夜は更け、東の空が明けはじめようというのについに妖怪は出ようともいたしません。

井「さては、昨夜粟屋四郎兵衛にいためつけられたので後れしよな、わが武威に怖じたるか」

と、得意満面になって、ふと後ろのついたてを見ると、こはそもいかに、

徳川の流れの水に濁されて
　はらわたくさる毛利さむらい
上気下げの妙薬進上す
　信州上田城主真田家の家臣
　　猿飛　佐助
　　由利鎌之助
　　霧隠　才蔵

と墨痕あざやかに書いてあり、しかも念が入ったことには今まで切り取ったちょん髷を引っくってぶら下げてあります。これを見た五郎兵衛、目の色がさっと変わりくちびるをブルブルと振るわして烈火のごとくに怒り、

井「うーむ、さては過日からのちょん髷切りは妖怪の仕業と思いしに、さては真田家の忍術使いのなしたることか、残念なり」

と地だんだ踏んでくやしがったが、後の祭りでいたし方ございません。

そこで夜の明けるのを待って太守にこの委細を申し述べると、

毛「井上五郎兵衛ともある者が、曲者が忍び入るを知らずにすごすとはいかなることじゃ、少少うかつではないか」

と、いわれて五郎兵衛、

五「ははっ、おそれ入りまする、いやはやどうも面目次第もござりませぬ、あまり前にばかり気を取られ、とんだしくじりをいたしました」

と、平伏すれば、太守は、

毛「このこと隣国に知れるもいかが、予の武威にもかかわることゆえ、そのついたてとちょん髷は家中の者に知らせず焼却いたせ」

命令でございますからやむなく焼却いたしましたから、だれも知らずにそのことは相すみました。

九度山麓で佐助の祝言

萩の城下を逃げ出した三人の豪傑、夜道をかけてどんどんやってまいりますと、夜の明けごろには伊佐の宿につきました。そこで昼中はそこの宿に寝まして、夜になってから宿を立って四方ガ原という所にさしかかりますと、見渡す限り茫々たる野原、身の丈ほどもある、かややすすきが生い茂っている中を踏み分け踏み分け歩いております。あちらこちらから虫のすだく声が聞こえますが、ここな豪傑にはなんの風情にもならぬ様子。

すると彼方に当たって「あれー、助けてー」という血を吐くような女の悲鳴が夜のしじまを破って聞こえてまいります。

ところが風の具合で東に聞こえたり、西に聞こえたりしております。こんなときに佐助の耳は一番たしかだ。

佐「あの声は西だっ、あっちに灯が見えるが、あすこに違いない、由利いってみろ」

いわれて由利鎌之助、

由「うむ、已れ憎き女性の敵め、出あったら最後首根っ子引っこ抜いてくれるから、覚えてろ」

灯を目当てにずんずんやってまいりますと、池があってそのそばに地蔵堂があって、そのところに二人の人影がなにかしきりに争っている様子でございます。

女「ええ、どうかお助け下さいまし、あれーあれーお願いでございます」
男「ばかなことを申せ、強情をいい張ると承知せぬぞ、さあさあ悪いことはいわん、おれのいう通りになれっ」
かすかなるご神灯の光をすかして見ると、男が女を抱きしめる様子、これを見た由利は、
由「うーむ、この夜中に女を手込めにいたさんとするか、不届きなる痴漢めっ」
ばらばらとその場に躍り出して、やにわにその男に組みついた。
由「やいやい助平野郎、こんな人なき里へ女をおびきよせ、狼藉に及ばんとはふらちなやつ、こうしてくれん」
と、大喝一声、くだんの男の女を捕らえたる手をもぎ取り、やっとばかりにつき放せば、くだんの男は、由利をねめつけ、
男「えい、無礼者、何奴なるか、じゃま立ていたすにおいては容赦はいたさぬぞっ」
今度は、由利を目がけて飛びかかり、やにわに由利の利き腕をぐっと引っつかんでねじ伏せようとしたが、さはさせじと由利鎌之助、
由「おのれちょこざいなり、武士の風上にもおけぬやつ、女を捕らえて辱めんとは言語道断なり、いでわが槍先の錆となれっ」
福島家より奪い取ったる名槍をリュウリュウしごきつつ電光石火と突き入れば、相手の武士もなかなかの腕と見えて、由利の繰り出す槍を身を左にかわし右によけ、腰をひねってスラリと抜いた一刀、正眼に構えて、じりじりとつめ寄ったり。
武「やあやあ何奴かは知らねども、われに手向かいして命を粗末にするな、さあ真っ二つだ、

覚悟をしろっ」
女はただうろうろしてあっちへいったり、こっちへ走ったり、いかになることかと心配顔。
一方は剣、一方は槍を取って必死の勝負はすでに三十余合に及びましたが、いまだに勝負の決まりそうな様子も見えない。
武「思いしに勝る手の内、打ち物業は面倒なり、かくなる上は腕ずくでまいれ」
太刀を打ち捨て由利をめがけて飛びついてくる、由利とても何条猶予あるべき、槍をかなぐり捨てて「おー」と答えて双方四つに組んでの大相撲、しばらくの間は組んずほぐれつしておりましたが、いかなる透きやありけん、武士の力の優りたるか、由利に背負い投げをくれれば、みごと由利の体はドウと打ち倒された。
そのところへバラバラとやって来たのは霧隠才蔵、
オ「おい、由利危ないぞ、敗けるな……うーむ」
と、上になったるくだんの武士を引き離そうとするが、どうしてどうして動かばこそ、霧隠才蔵これには驚いた。
オ「おお、こいつなかなか強力などろぼうだなあ、うーむうーむ」とこれまたうなっている。
おりしもいつの間に来ていたか、地蔵堂のとびらを開けて、すっと現れいでたる一人の男、これなん猿飛佐助でございます。
佐「あはっは……由利も霧隠も、もうよせよせ、それはわれわれの同志だ、同士討ちのけんかをしてもはじまらぬ」
いわれて三豪傑あっと打ち驚き力を抜けば、くだんの武士、「これは異なこと申すやつ」と、

ひょいと振り向いて見ると猿飛佐助だから、
武「ややきさまは猿飛佐助ではないか」
佐「いかにもそうだ、穴山岩千代しばらくぶりで出会ったな」
これを聞いて、由利、霧隠もつかんだ手を放し、
由「なにっ、穴山岩千代だ、ふーむ」
オ「えっ、穴山岩千代といえば真田家の家来ではないか、その穴山がどうしてこんな所へ来たのだ」
穴「おいおい猿飛、きさまも人が悪いぞ、そんならそうと最初からいえばこんなばか骨折りはせぬものを……いったいこいつらは何者だ」
佐「こいつらとは口が悪いな、この二人は由利鎌之助と霧隠才蔵といっておれと血を分けた義兄弟だ」
穴「うーむ、そうか、霧隠はおれが上杉へ使いにいっているときに、信州上田に来たと聞いたが……それは相すまなかった」
そこで二人は初対面のあいさつをする。
佐「おいおい穴山、きさまはけしからぬやつだ、なんたる面汚しだ」
穴「なにっ、さあもう一遍いってみろ、なにが面汚しだ」
佐「黙れっ、女を引っ捕らえ狼藉に及ばんとはなんたることだ。これでも面汚しでないというのか」
穴「あはっは……、そうか、この女のことか、ばかめ、おれがそんなことをすると思うのか、お

れはこの野原に迷い込んだが、日は暮れて行く先が分からない、おりよくこの地蔵堂を見つけたから、一夜をここに過ごさんとするおりしも、この女が池に飛び込まんといたしたから、それを助けんとしたのだ、死ぬ死なさぬといい争うところへ、由利が飛び込みざま、おれを突き飛ばそうといたしたのだ」
佐「うーむ、そうだったのか、オー、ミステーク」
穴「オー、ミステークもないものだ、ばか者め、女に狼藉を働くようなおれだと思うか」
由「そいつはおれが悪かった、あれー助けてーと聞いて飛んで来て見れば、きさまが女を抱き込んでいる、それを見て、狼藉っと見るのがアッタリマエでしょう」
オ「こらこら女、それに相違ないか」
女「はい、全くそれに相違ございませぬ、みーんなわたしが悪いのでございます」
穴「それみろ、あまり人を疑うものではないぞ」
佐「うむ、これは由利、きさまが早合点しすぎたなあ、まあそうと分かったらお互い様だ、許してやれ、してきさまはどうしてこんな所へ来た」
穴「さればおん物語聞かせよう」
と穴山岩千代の話すところによりますと、実はお家の一大事があって、それを猿飛らに伝えるため、九州路さしていく途中であった。実はこの度、上田城はお取り上げとなり、昌幸殿と幸村殿は、昨日に変わる浪人の身となられ、一族郎党を従え、紀州高野山の蓮華浄院というお寺に一時隠遁されたが、その後九度山麓に閑居なされ、多くの郎党には、万一事あるときは馳せ参ずるようにと、ばく大な手当を与えて思い思い故郷へ引き取らせ、今、九度山に残っているのは、三

好清海入道、三好伊三入道、海野六郎、筧十蔵、望月六郎だけだ、ご主君幸村殿がぜひきさまらを呼びよせよとのことで、おれがここまで来たときに、はしなくもめぐり合ったのだ、という話。これを聞いて鬼をもひしぐ猿飛はじめ二人の豪傑、お家の大変を聞いて涙にむせんでおります。しかるに最前よりこの話を聞いておりましたかの女、恐る恐るそれへ進みいで、

女「先刻よりのお話を承り、あなたがたは真田家のご家来のご様子、なにを隠しましょう、わたしは幸村公のおん奥方になられた千代姫さまの腰元若葉にございます。幸村さまに輿入れになりましてからお暇が出て、ここから四里ばかり離れた吉田の片田舎におりましたが、兄はその日の暮らしに困るところから、わたしに傾城に身を沈めるようにと強談、いっそこの身を投げて死にたいと、ここまでまいりましたところをお助けに預かりましたのでございます」

と涙の物語。

佐「ふーむ、さてはそちは大谷家にゆかりの者であったか、真田家にとってもまんざらの他人ではない、ここからいっしょに連れていってやろうではないか」

話がきまりましたので、四人の豪傑は若葉を連れて紀州九度山麓さして急ぎました。

こちら、九度山麓にありましては、真田父子は、千代姫、それに一子当年八歳の大助を相手に時の至るのを待ちながら、昨日に変わるわびしい暮らし。

佐助以下四人の豪傑を迎えて、ひときわにぎわいを呈しましたが、そのとき幸村公には、

幸「その方ども、大儀であった、かくかくの事情でここに閑居いたすことに相成ったが、やがて関東関西の手切れは火を見るよりも明らかなり、いったん事あるときは、予が采配を取って豊臣家のため尽くす考えである。そのときにはなんじらもよくよく心得て忠勤を励んでくれ」

とねんごろなる沙汰がありましたから、

佐「ははっ、なんともはや、いうに言葉もございませぬが、お言葉の程よくよく心していざ鎌倉のそのときは、この身を砕いて十分に働きまする」

と、答えに及ぶ。

さて猿飛佐助はかねてより侍大将海野太郎左衛門の娘楓と許婚の間柄で、やがて二十五歳のあかつきにはりっぱに結婚する約束でございましたが、その折がございませんうちに、年はは八年を経ました。そこで、幸村公には佐助をそば近くお召しになり、

幸「ああ、猿飛佐助、その方と楓とは許婚の間柄、折があったら、予が夫婦にしてやる考えではあったが、その方が漫遊の途にあるので、それもできなかった、今度帰って来たのを幸い、改めて予が媒酌人となり、今夜は祝言の杯を取り交わさせるであろう」

佐助も大いに喜びましたが、

佐「申し上げます。今はこのような時勢ゆえ、その儀はしばらくご無用に願いまする」

幸「いやいやさようではない、かねて海野太郎左衛門が死去に際し、予に向かってくれぐれも遺言したことである。楓もその方との婚約を楽しみに今もなお貞操を守り、その方の帰りを指折り数えて待ちわびておる、殊にいつ戦乱が起きるとも知れぬ、善は急げじゃ」

ご主君のたっての言葉、殊になにからなにまで準備がととのっておりますので、その夜のうちに、佐助と楓に、めでたく祝言の杯をさせましたから、両人は天にも昇らんばかりの喜びで円満な家庭を作りました。

豪傑組も変名組もめちゃめちゃ

さて、猿飛佐助もめでたく楓と祝言をいたし、思い思われた二人は楽しい日を送るようになり、また長州四方ヶ原で助けた若葉は元通り千代姫つきの腰元として仕えることになりました。

一族郎党の面々におきましては、姿を変えて、あるいは百姓になりすまして、徳川家や紀州和歌山の城主浅野但馬守の目をくらましてなれない百姓業をいたしております。

すると、かれこれ三月ばかり経ったころ安房守昌幸公が亡くなり、それにつづいて幸村公の奥方千代姫の病気が急変、ついに帰らぬ旅に立たれました。さすが豪気な左衛門尉幸村殿もいたく力を落とされ、悲嘆の涙に暮れておりましたが、かくてはならじと気を取り直し、以前は五万石の大名も今は片田舎の百姓の暮らしで、諸事節約の折から野辺の送りもまことに質素にすませ、その後は内に引きこもり平紐を作って、それを売りさばかせるため、一族郎党を全国に差しつかわしました。

ところが、この平紐が当時の人気を博しまして、真田紐といって調法がられ、今もなお市中で販売いたしております。いってみれば、この真田紐の名がつづく限り、猿飛佐助の名は朽ちず、猿飛佐助の名がつづく限り、真田紐の名も残ることでございましょう。

ところが、この真田紐を全国に売りさばくというのは表向きのことで、実は、幸村公が全国諸

大名の動静を探るのが目的であったことは申すまでもございません。

さて猿飛佐助は、ある日、幸村公に対しまして、

佐「ご主君お願いがございます」

幸「なんじゃ、改って願いと申すは」

佐「はい、殿のご命令で、今まで、中国方面の大名の動静を探ってまいりましたが、この度は江戸方面にお差しつかわし下さいますようお願いいたしたいのでございますが、いかがでございましょうか、この度は独りでまいりたいと存じます」

幸「うーむ、そうかよし、その方の思うようにいたせ」

早速に、ご主君のお許しが出ましたので、またも新妻の楓とは、久しく別れることに相成りました。

その出立の前夜、佐助は楓に向かい、

佐「そちとせっかく夫婦になったが、そちも存じおる通り天下はいつ乱れるとも知れぬ、新婚の夢に酔っていることはかなわぬ、拙者これより江戸方面へまいるが、しばらくしんぼういたせ、留守中はくれぐれも頼みますぞ、はようやや の顔を見たいが、その方はどうじゃ」

楓「あれ、そのようなこと、……でも、どうやら見るものを見ぬようでございますから、次にお帰りのころは……」

佐「うーむ、そうであったか、早いところ製造いたしたな、あっぱれあっぱれ、よくも一球で射止めた、さすが侍大将の娘だけあるわ、身を十分いたわれよ」

翌朝になりますと、早速に身支度に及び楓に送られて出立いたしました。

道を大阪、京都と経て、今しもかかってまいりましたのは江州の彦根の城下。

ここの太守は、徳川四天王の随一、井伊兵部少輔直政公で、たいそうな勢いでございます。

佐助ははるかに彦根城を打ちながめ、

佐「ふーむ、あれが井伊直政の居城か、あれで大阪方をにらんでいるのだな、よしひとつど肝を抜いてやろう」

考えている折しも、城内の向こうから十五六人の武士、いずれも馬に乗ってやって来る。佐助はこれをジロリと見て、

佐「ははあ、やって来たな、今にどうするかみろっ」

わざわざ往来の真ん中をブラブラ歩いておりますと、たちまち近づいて来た馬上の武士、

武「こらこら危ない、そこどけ、どかぬかっ」

どなりながらやって来るのへ、いきなり佐助はパッと両手を打ちひろげたから、驚いたのは馬だ。「ヒ、ヒーン」と棒立ちになったからたまりません。馬上の武士は、いたたまらず落馬。

武「こらっ、やいっ待て素浪人」

佐「なんだ、素浪人とは拙者のことか」

武「その方の外にはだれもおらぬ……なぜ馬を驚かして、拙者を落とした」

佐「はっは……、なにも拙者が落としたのではない、貴公が勝手に落ちたのではござらぬか」

武「なにっ」

そのうち、後から追いついた面々、

○「おい、木村どうした」

木「どうしたもない、この素浪人め、馬を驚かして拙者を落馬させたふらちなやつ」
○「ふーむ、それはけしからぬ、ぐずぐずぬかしおらば、構わぬから斬ってしまえ」
木「第一素浪人の分際にて、往来の真ん中を威張って通るやつがあるか」
佐「ここは天下の往来、どこを通ろうが拙者の勝手だ、きさまこそ、馬一匹自由にならぬへたくそ野郎、遠慮して隅の方をこそこそ通れ」
木「うーむ、いわして置けば、こいつめが、おれたちをだれだと思うか、今をときめく井伊家の豪傑組を知らぬか」
佐「豪傑組だか、空っけつ組だか知らぬが、それがどうした」
木「うーむ、こいついよいよもってけしからぬやつ、馬足にかけてけ殺してしまえ」
△「心得た」
向こう見ずの若侍連中、そのまま馬足にかけようといたしましたから、佐助ヒラリと体をかわしながら、
佐「ちょこざいなっ、木っ端武士になにができるか」
と、ばかり、恩師白雲斎先生からいただいた鉄扇で、馬の鼻をピシーリピシーリとなぐりつけた。馬は驚いてはね上がる。そのはずみを食らって馬上の武士はズッテンドウと落馬に及ぶ。
武「やあ素浪人、覚えておれっ」
いいのこして、ほうほうの体で逃げる、佐助はその後ろ姿を見てカラカラと打ち笑い、
佐「口ほどにもない者どもかな、これが井伊家の豪傑組とはあきれ果てたる者よ」
ぶらぶらそこを立ち退いて、そのまま城下の坂本屋甚五郎という旅籠屋へ、大手を振って泊まり込んだのは、まことに大胆不敵な話でございます。すると、案の定風呂から上がって食事をしておりますところへ、宿屋の亭主がバタバタと顔色をかえて駆け上がって来た。

亭「お武家様、た、たいへんでございます」
佐「なんだ、そのように取り乱して……」
亭「へえ、ただ今お奉行の西岡平十郎様が大勢の捕り手をお連れになり、先刻城下はずれにおいて乱暴を働いた若侍が当家にいるはずだ、ここへ引きずり出せとの仰せでございます」
佐「ははあ、まいったか、よしよしここへ通してくれ」
亭「ええっ、大丈夫でございますか」
いっているところへ、バタバタと廊下に足音がしたかと思うと、奉行の西岡平十郎、捕り手を従えて上がってまいりました。
平「こらこらその方だな、先刻城下はずれにおいて乱暴を働いたと申す若侍は……。取り調べの筋があるから役所へまいれ、ぐずぐずいたすと召し捕って引き立てるぞ」
佐「いや、なにも別に乱暴を働いた覚えはない、ただ相手があまりむちゃなことを申すから、ちょっとなでてやっただけの話だ、まあそう目をむいていないで、ここへ来て茶でも飲まっしゃい」
平「やあ素浪人め、上役人に対して嘲弄いたす所存か、無礼を申すなっ、それ召し捕れっ」
捕「はっ、……御用だ、御用」
捕り手がバラバラッと打ってかかりました。
佐「これこれ騒ぐな、せっかく飯を食わしてやろうといたすに、さては飯より、げんこつの方

がよいか、それ、ひとつこれでも食らえっ」
いいざまささえのようなげんこつで、横っ面をポカポカとたたいたから、
捕「キャッ、痛いっ」といったきりのびてしまった。
平「それ者ども、油断するなっ」
西岡平十郎、一生懸命に声をかけて下知いたしますが、とても十人や十五人では手がつけられない、たちまちにして、二階から紙切れでも投げるように投げ下ろされてしまった。
○「早く加勢を頼めっ」
△「奉行所へご注進しろっ」
と、二三人の捕り手が駆け出すとたん、現れいでたる三人の武士、
武「これこれどういたした、なにを騒いでおるのだ」
見るとこれぞ変名組の三豪傑だから、
捕「あっ、あなたがたは変名組のお歴々で……実はこれこれしかじかでございます」
武「よし、では拙者が召し捕ってつかわす、その素浪人と申すやつは何匹おるな」
捕「へえ、あすこにいるあの男が一人で」
教えられて上がって来たくだんの三人の武士、ヌッと猿飛の前へ立ちふさがり、
武「やい素浪人、きさまは町はずれで乱暴を働き、今また上役人に手向かいいたすとはふらち千万、かくいう変名組の半麦桝之進、赤井襟之助、山坂虻内と申す豪傑だ、いざ尋常に縄にかかればよし、さもなくばつかみ殺すぞっ」
居丈高になってののしるのを黙って聞いていた佐助、

佐「文句はそれだけかっ、徳川方に変名組とかいうけちなひょろひょろ組があると聞いたが、きさまたちがその一味か、とかく組をつくるやつにろくな者はおらぬ、衆を頼んで弱きをいじめおるに相違あるまい、きさまら三人では、とても召し捕ることはできぬ、どうだもう二三百人ほど呼んでまいらぬか」
それだけいって、平気な顔で飯を食べていますから、変名組の三人の怒ったこと、
山「やあやあこいつぬかしおったな、さてはきさまは大阪方の間者に相違なし、よし、覚悟っ」
いきなり山坂虻内、腰の一刀引き抜き斬ってかかれば、心得たりと佐助、ひらりと体をかわして、そのえり首引っつかんで屋根の上へほうり出せば、コロコロコロと転がる。
佐「これどうだ虻内、あぶないぞ。屋根は山坂よりあぶないぞ」
妙なところでしゃれをいっている。
半「うむ、こいつ手向かいいたすかっ」
代わって半麦桝之進、背後より佐助に抱きつくや、そのとたんに前から赤井襟之助がむしゃぶりつく、それを見ると危うく屋根から落ちそこなった山坂も飛んで来て、佐助の首を取り押さえる。なんといっても変名組の頭分、なかなか強い、衆寡敵せず、さすがの佐助も組みふせられてしまった。
半「さあどうだ、まいったか」
佐「うーむ痛い、少し手をゆるめてくれ」
山「ぜいたくをぬかすな、さっきはよくも拙者を投げおったな、この野郎」
山坂虻内げんこつをかためてポカリッ。

佐「痛いっ」
山「いまさら泣き声を出すな、おい縄を出せ」
捕「へえ」と捕り手から縄を取り、佐助をがんじがらめに縛りあげ、
山「どうだ、どんなやつでもわれわれが来ればこんなものだ」
平「まことに有り難うございました」
捕「こらこら立てっ、立たんか」
赤「こいつなかなか横着なやつだ、立たないな、しからば拙者が引っ担いでいこう」
と、赤井と半麦が佐助の手足を持って担ごうとすると、
半「おやおやこいつ、なんて軽いんだろう」
赤「うむ、いくら口は達者でも、根がやせ浪人、食うものもろくに食わぬから、目方が軽いのだ」
山「なる程そうか、引き揚げろ引き揚げろ」
いずれも引き揚げていきましたそのあとで、宿屋の亭主、ほっと胸なで下ろし、
亭「やれやれ助かった、とんでもない侍を泊めたものだ、もう少しで家まで壊されるところだった、ああああ」
ぶつぶついいながら二階へ上がって来て見るとこはそもいかに、今召し捕らえられていったはずの佐助が、すまして飯を食べている。
亭「うわーっ、出たっ」
といったまま腰をぬかしてしまった。

佐「なにが出た、ははーん、おれを幽霊と思っているな、はっは……、なにも驚くことはない、おれは召し捕られたのではないぞ、……飯がなくなった、代わりを頼む」
亭主立とうとしましたが腰が立たない、佐助がポイッとしりをたたくとやっと立ち上がりました。
亭「へえ、だんな様は、今お役人様がお連れしたのではなかったのでござんすか」
佐「あはっは……、あれは身代わりだ」
亭「えっ、身代わり……、だれが身代わりに……」
佐「身代わりは、ここにあった布団だ」
亭「へえ、妙なこともあるものでございますね」
佐「妙なことでもなんでもそうなのだ、やつらは途中で布団と気がつけば、きっと返してくるだろう」
亭「またまいりますか、それは困りましたな」
佐「まあ、そう困らぬでもよい、宿賃と布団代に五両つかわす」
亭「へえ、これでは多すぎます」
佐「つりは騒がせ料だ、みな取って置け」
亭「そんなら布団をもう二三枚いかがで……」
ばか話をしているところへ、ドヤドヤと八九人がかけ上がって来ました。
佐「亭主、やって来たから、おまえはあっちへいっておれ」
亭主が出ようとする出合い頭に山坂虻内、

山「やいやい素浪人、よくもわれわれに布団などをかつがせたな……あれっだれもおらぬではないか」

赤井襟之助ものぞいて見て、

赤「はてな、さては逃がしたかな」

山「おいおいあれを見ろ、……ほれ茶わんとはしが宙に浮いている……あっ元通りに膳の上にのっかったぞ」

赤「ふーむ、こりゃあおかしい……」

と、山坂虻内と赤井襟之助、あまりの不思議さに、呆然としていると、二人の首を押さえてコツンコツンと拍子木のように打ち合わせたから、

山「痛い痛いこら赤井なにをする」

赤「おれはなんにもしない、きさまこそ、あっ痛い」

山坂の耳を引っ張ったかと思うと、赤井の頭をたたく、半麦の鼻をつまむといった具合ですが、姿が見えないから、三人はけんかになり、ポカポカ同士打ちをはじめた。もういい時分と思ったから、佐助は三人を引っ担いでは二階から投げ出した。

変名組の三人はもう全身血だらけこぶだらけ、ほうほうの体で雲を霞と逃げ出した。

これを見てびっくりしたのは宿屋の亭主、またけんかがはじまったが、それにしては静かだと二階へ上がって来て見ると、佐助が一人で食事をしているから、びっくりしてまたも腰をぬかしてしまった、よく腰のぬけるやつでございます。

雨降らし忍術と火縄消し忍術

それから佐助は、床をのべさせて休みましたが、やがて夜は次第に更けて、草木も眠る丑満刻、どうもこの丑満刻になりませんと幽霊も出なければ曲者も出ない、これは講談の種のようで……ゴーンと打つ八ツの鐘。

ミシリミシリと廊下をふむ足音、はっと目をさました佐助、狸寝をしてグウグウいびきをかいておりますが、もとより油断はござりませぬ。

すると、襖がスーッと細目に開いたと思うと一匹のねずみがチョロチョロと入って来た。

佐「ははあ、だれか伊賀流の忍術を使っているな」

なおも狸寝をしておりますと、覆面黒装束の曲者、いきなり猿飛佐助をのぞんで突いて来た、あわれ佐助も突き貫かれたと思いきや、ひょいと首をひねって、下から曲者の急所をけ上げたから、たまりませぬ。「あっ、うーむ」と叫んでかがんでしまった。

佐「これ、きさまは何者だ、さてはおれの首をかきに来たな、きさまくらいの術で、天下の名人猿飛佐助の寝首がかけると思うか、きさまたちの五百人や千人束になってかかっても、びくともするもんじゃあない。さあ早く帰れっ」

と、いって、二階の戸を開けて、屋根にころがしてやりました。

これ以上この宿に迷惑をかけては相すまぬと思った佐助は、夜の明けきらぬうちに宿を出立いたし、町はずれの松並木の前までまいりますと、なんとなくただならぬ人の気配、佐助はピタリと足を止め、

佐「太守が留守だから、このままおとなしく立ち去ろうといたしたが、伏勢でおれを召し捕るつもりだな」

闇の中でも見える佐助、ジッとあたりをうかがうと、井伊家の鉄砲組が、百人近くも草むらの中に隠れているのがよく分かります。

佐「ははぁ、飛び道具で撃とうというのか、おもしろい、こっちにはこの手がある」

口に呪文を唱えると、一天にわかにかき曇り、やがてザーッ、ザーッと雨が降ってきた。なにさま昔の鉄砲は火縄銃といったくらい、縄に火をつけて、それが火薬について爆発させるというばかに手数のかかったもの、この火縄に雨がかかったらたいへんだと思うから、

○「ややっ、雨だ、火を消すな」

と、一同大あわてに草むらの中にもぐり込んでしまったが、やがて雨がやんだから、一人二人とのこのこ元いたところへやって来て見ると、

×「あれあれあんなに雨が降ったのに、どこもぬれていない」

○「おかしいな、たしかにザーッと音がしたがなぁ」

きょろきょろしているその間にもぐり込んだ佐助、姿を隠してブツブツ火縄の火を消して歩いた。

○「あれっ、雨がやんだのに火が消えるとはこりゃあ不思議だ」

みんなが騒いでいるうちを、半分くらいまで来たときに、パッと姿を現した。

×「さては忍術をつかったな、打てっ」

号令がかかったから、佐助に向かって一斉射撃ときた、そのときには、佐助の姿はもう見えません。これで前半分の方は前に火縄が消えているからもう打てません、後半分は今打ったばかりだから、ここしばらくは弾が飛び出す心配はない。またもパッと姿を現した佐助は、白雲斎先生から授かった鉄扇を手にして、頭上飛び切りの術で、頭をシロホンのようにポンポンたたきながら渡っていく。最後の二三人になったころ、

佐「あはっは……、ざまぁ見ろ、以来これにこりて徳川の四天王だなどと、あまり大きな面をするなよ、バーイ」

いい残して、その場をいずこともなく立ち去りました。

血だらけになった鬼勘兵衛

さんざん彦根で暴れた佐助、ぶらぶらやってまいりましたのは勢州の桑名でございます。今しも渡船場で一服しながら船の出るのを待っておりますと、身の丈六尺余りの大きな武士が二人手に手に鉄棒をドシンドシンと地響きさせながらやって来る。茶店に入って来るなり、

武甲「やい女、茶を出せ」

と、どなりながら、いきなり佐助のそばへ腰を下ろした。女中の持って来た茶を一口飲んだかと思うと、かっと吐き出し、

武甲「やいやいこんな渋い茶が飲めるか、ばかめ」

いいながら茶を投げかける、その茶が佐助の足にかかりましたので、

佐「なんて乱暴な武士だろう」と思いましたが、さわらぬ神にたたりなし、と黙って見ておりますと、

武甲「やいやい女、おれをだれだと思うか、藤堂家名代の豪傑、渡辺勘兵衛、人呼んで鬼勘、いや鬼勘兵衛を知らぬか、こらっ」

武乙「そうだそうだ、拙者は徳川家の天下三勘兵衛の一人に数えらるる小幡勘兵衛だ、無礼をいたすにおいてはそのままに捨て置かぬぞ、うふーん」

たいへんな武士もあったもので……これを聞いた人々、

○「おいおいあれが鬼勘と知恵勘だよ、へたにかんにでもさわってみろ、かんべえならぬ、なんてえことになるから気をつけろよ」

ささやくのを聞いて佐助、

佐「ははあ、こいつが乱暴者の鬼勘兵衛か、知恵勘兵衛という男もあまり知恵のある顔じゃないわい」

ニヤニヤ笑いながら、二人を見つめております。早くもこれを見つけたのは鬼勘兵衛、

鬼「やいやいここな素浪人、きさまはさき程より拙者らの方を見ては、ニヤニヤ妙な笑い方をしておるが無礼であろうぞ、この鉄棒が見えぬか、この鉄棒は張り子ではないぞ、ばかものめっ」

佐「あはっは……、きさまが大ばかの鬼勘か、そうしてこっちが知恵勘か、どいつを見てもあまりかん心しないやつらだ、きさまはよくもさっき拙者の足に茶をかけたな、まずそのわびをしろ、両手をついて、地べたに面形をつけろ、そしてから文句があったらいえ、……なんだ、そいつが鉄棒か、拙者はまた火ばしかと思った、うはっははは」

思いきった吹きも吹いたる暴言かな、いや鬼勘の怒ったのなんの、ぶるぶるっと身ぶるいしたかと思うと、

鬼「やいやい不届きなる今の一言、やせ浪人の分際にて、よくもわれらを、ぶ、侮辱いたしたな、こ、この鉄棒を火ばしとはぬかしもぬかしたり、さあもうかんべえならぬ、尋常に勝負しろっ」

頭からぽっぽっ湯気を立ててにらめつけた。

佐「あはっは……、こういうことがあるから漫遊はやめられぬて、暴れろ暴れろ、うむ、いかにも勝負するから、そうあわてるな、気をおちつけて来い、下腹に力を入れて、……さあ来い」

さんざん悪口をついてばらばらとやって来たのは砂原、

佐「さあ来い」と待ち構えれば、

○「やあけんかだけんかだ」×「鬼勘と武士の果たし合いだ」

野次馬という見せ物へいってもただで入る手合いの見物が、あとからあとからぞろぞろついて来る。

鬼勘はくだんの鉄棒をブンブンと振り回し、

鬼「さあいくぞ」

ただ一打ち、木っ端みじんになれと打ち込んで来ますが、身軽な佐助がひらりひらりと体をかわしては手元に飛び込み、白雲斎から授けられた鉄扇で鼻をピシャリピシャリとたたく。

鬼「わーっ、こいつ、なにをする」

佐「こん度は額だ、そら口だ」

と、何遍も何遍も生身を鉄扇で打たれるのですから、たまらない、顔中血だらけにはなる、たけりたつから、ますます形相物すごく、夜叉王の荒れ狂うかと思うばかり、なにさま、重い鉄棒を振り回すのですから、いくら鬼勘でもだんだん疲れてまいります。

佐「やいやい、だいぶ鉄棒の回り方が遅くなったな、もっとしっかり回せ、腹に力を入れて……ほらこい、ほらこい、ギッチョンチョンと……」

透きを見ては、横面をビシャリとやられるから、さすがの鬼勘、とうとう目がくらんでその場にぐにゃぐにゃと座りこんでしまった。これを見た知恵勘、「相棒の敵」とばかり、佐助の背後に回って気合いもろともいきなり斬りつけたが、そのとき早くかのとき遅く、「やっ」と掛け声かけるや、佐助の姿はパッと消えてしまった。鬼と知恵の勘兵衛、かんかんになって怒ったが、どうすることもできません。

きょろきょろ見回していると、鬼勘が取り落とした鉄棒が宙に浮いた、と鬼勘が「ありゃりゃ」といってるうちに川の中へドブーン。鬼勘立つに立たれず、泣きべそをかいた。

パッと姿をあらわした佐助、いきなり知恵勘のえり首をつかんで、海をめがけて投げれば、大兵の胴体は宙に弧を描いてドッブーン。浮かび上がってきた知恵勘の鼻から真っ黒な太い洟が二本さがっているから、

○「おい、海から上がったらどうだい、あの汚ねえ洟を鼻から出してさ、だらしがねえな」

×「あれあれ、あれは洟じゃねえ、だぼはぜだぜ」

○「えっ、海に投げられてもただじゃ上がらねえのかい、驚いたもんだ」

×「いまいましいんで、せめて知恵勘だから、知恵を働かせて、ばかのだぼはぜを鼻で吸い込んだのだろう、ずうずうしいもんだな」

野次馬がわいわい騒いでいると、佐助、

佐「これ船頭、早く船を出せ」

船「へえ、皆さん船が出ますよー」

それっと一同ばらばらと乗り込む、やがて船は真ん中へと出てまいりました。ほど経てようやく気のついた両勘兵衛、じだんだふんで河岸に立ちながら、

両人「おーい船頭、その船かえせーっ」

そのとき、佐助へさきに立ち、

佐「やいやい両勘兵衛、よーく聞け、拙者は真田の郎党猿飛佐助幸吉だ、船はもう返せぬ、あかんべえ」

そのうち、船は無事八里ほどの海を渡って宮の宿につきました。佐助は相変わらず、ゆうゆうと東海道を次第次第に江戸へとのんきな旅をつづけております。

ハクショイ、ヘクションが歩く

当時、江戸の千代田城には二代将軍秀忠公がおりまして、初代家康公は隠居して駿河の駿府に出養生という形、家康公のそばには徳川家随一の知恵者として、その名も高い本多佐渡守正信が控えて万事采配を振るっております。

ところがある夜のこと、その日は家康公には江戸表へお出かけになり、この佐渡守が留守居役、今静かに本を読んでおりますと、突然背後から、ピシャリと頭をたたいた者がある。

本「だれだっ」いいながら振りかえると、いずこからか、

佐「ははっははは、驚いたか佐渡、猿飛佐助だ、油断をしていると素っ首をもらうぞ」

これを聞いてさすが天下の知恵佐渡守もさっと顔色が変わった。

本「さては真田の残党らが、城内に忍び込んだな、こりゃあ油断がならぬ」

直ちに家中の者を呼び寄せ、要所要所を固めさせましたが、なにさま相手が忍術の名人でございますから、雲をつかむようなもの、いくら佐渡守でも手のつけようがない。そこで徳川家一番の忍術使いと呼ばれた芥川九郎兵衛を呼び出し、

本「これこれ九郎兵衛、その方も忍術使い、実は、猿飛佐助が城内に忍び込み、拙者の頭をたたいて逃げた。こん度忍び込み来りたるときには、なんじの忍びの術により彼奴を取り押さえよ、うまく取り押さえたるときは、五百石の加増に相成るようこの佐渡が特に取り計らいつかわす」

いわれて九郎兵衛、

九「ははっ、有り難きしあわせに存じます。たかが真田の残党、なにほどのことがありましょうや、拙者より見れば赤子の手をひねるに等しきこと、必ず召し捕ってご覧に入れまする」

本「あっぱれなる一言、されど猿飛といえる者、なかなか評判の腕前と聞く、くれぐれも油断いたすなよ」

腕よりも欲の皮の突っ張っている九郎兵衛、もう五百石加増になったつもりでいるから、いい気なものでございます。帰宅いたしますと、下男の可内を呼び、

九「これこれ可内、すぐ赤飯を炊け」

可「へえ、なぜでございます。今日はお盆のお中日で幽霊の祝言でも」

九「お盆のお中日などと、ばかを申すな、物知りに笑われるぞ、実はこれこれ五百石加増に……」

可「なったのでございますか、それはおめでとうございます。して私のお給金の方はどうなります」

本「抜け目のないやつだ、すぐにつけ上がる、まだなったのではないがなるはずだ、もう加増になったも同様だから早く赤飯を炊いて、隣近所にどんどん配ってこい」

可内も、すっかり煙にまかれて、赤飯を炊き、それを近所へ配りますと、驚いたのは近所の者、

○「おいおいあのけちん棒の芥川が赤飯を配るとは、いったいどうしたのだ、やっこさん宝くじにでも当たったのかな」

△「誕生祝いでもあるかな、ともかくちょっと礼にいってこよう」

ぞろぞろ九郎兵衛の宅へやってまいります。すると九郎兵衛、

九「さあさあどうか上がってくれ、前祝いだから酒は十分にある、足りなくなれば、すぐ酒屋に取りにやるから遠慮なくやってくれ」

たいそうな気前、なにがなんだかさっぱり分からない、近所の者たちはがまに毒気を吹っかけられたようであっけにとられております。

こちらは猿飛佐助、九郎兵衛が佐渡守にいいつかったことをちゃんと知ったから、

佐「ばかにもほどがある、名もないやつをおれの相手にするとは笑止千万、九郎兵衛というやつもよほどおめでたくできている。おれを召し捕れると思って前祝いのあのどんちゃん騒ぎ、今に肝っ玉を縮み上がらせるからみていろっ」

独りうなずきその夜はそのまま、翌日の夕暮れになるとまた城内に忍び入り、密かに詰め所をのぞいて見ると、芥川九郎兵衛独りでぐびりぐびり酒を飲みながら、しきりに大きな目をむいてきょろきょろあたりを見回しております。

もとより同じ忍術でも、九郎兵衛と佐助とでは、子供と横綱、提灯に釣り鐘ほどに違います。佐助が忍び込んで、自分のそばにいることすら分からないくらいの腕前ですからあきれたもの。

九「ああ、有り難い有り難い、今夜の酒の味はまた格別じゃ、なにしろ五百石加増になると、今までの三百石に加えると八百石、そのうちになにかの功名で二百石加増になれば千石か、人間どんなときに運が向いてくるか分からぬ……早く五百石の代物が出てこぬかなあ……早速生け捕って……えへへ……」

独りほくほくしながら、ぐびりぐびり飲んでおります。佐助はこみ上げてくるおかしさをこらえているのがつらいくらい。

佐「こいつ、おれがこうして忍び込んでいるのを知らないからいい気なものだ、今に見てろっ」

そのままそっととっくりの中へ、なにか粉薬を入れましたが、それにも気がつかない九郎兵衛またぐびりと一口、

佐「さて、こう飲んでばかりもしておれぬ、どれ、ひとつ城内を見回ってまいろうか」

杯を置いて立ち上がり、廊下へ出たとたんにさーっと夜の風。

九「ハックショイ。あれっ風邪を引いたかな、ハックショイ、ハック、うーむ、これはいかぬ、ハックショイ、ヘックション。ははあこれはいよいよ風邪を引いたな。しかし役目は役目だ、見回りもこうして姿を見せていたのでは、猿飛めもおれの勢いに恐れて出て来まい、姿を消して夜回りをしよう。……やっ」

九郎兵衛は姿をかくした。この様子を見た佐助、

佐「ふふん、それでも五遁の術は心得ているな、感心感心、どこへいくか、こうしてついていけば、あいつが案内役になってくれるわ、しめしめ」

そのまま後についていきます。九郎兵衛は佐助がとっくりに入れたくしゃみ薬のために、のべつくしゃみばかりしております。

九「ハックショイ、ハックショイ、こりゃあ困ったな、こうくしゃみをしては、せっかく姿を

かくしてもなんにもならぬ、ハクショイ、ヘクション――」
すると、部屋部屋を警戒しております若侍が驚いた。
○「だれだい、さっきからくしゃみばかりしているのは」
×「だれもくしゃみなどした者はおらぬ」
○「ほら、またハクショイだ」
△「なんだかあのくしゃみは廊下の方だぞ」
○「のぞいて見ろ」
見たがなんにも見えない、ただ、ハックショイ、ヘックションとくしゃみだけが聞こえてきます。すると中の一人が、
×「おいおい、ちょっとまて、ことによるとこりゃあうわさに聞く真田の猿飛佐助が姿を消して歩いているのかも知れぬぞ」
○「うむ、そうだそうだ、それに違いない、やっこさん風邪でも引いて、くしゃみの連発で困っているのかも知れぬ」
△「どうだ、あの九郎兵衛が猿飛の召し捕り役を仰せつかっているが、そこを抜けがけの功名で、一番われわれ七人で召し捕ろうではないか」
×「うむ、それはいいところに気がついた」
○「よしよし生け捕ろう、してわれわれ七人で五百石、一人前いくらとなる」
△「さあ、七七四十九として七十……だれかそろばんを持ってこい」
捕らぬ狸の皮算用とは、このことでございます。こんな皮算用組が待ち構えているとも知らず、九郎兵衛、しきりにくしゃみをしながら詰め所の方へやってまいります。

九「どうもおかしいな、どこで風邪を引いたろう……、ハ、ハクショイ」
そのとたん、「それ」と一人がいうと、そのくしゃみを目あてに、七人がドッと飛び出したから、いくら姿は隠れていても、実はそこにいるのですから、たちまち組み伏せられ、痛いっ、ヘックション、ハックショイ、痛い、の連発で、とうとう九郎兵衛は術が破れて、姿を現してしまった。
一同「そら、正体を現したぞ、それ七十石だ七十石だ」
暗いから姿は見えるが、だれだか分からない、これが猿飛だと思いこんでいるから、ただもう曲者だ、七十石だと、ポカポカ、
九「これこれ、おれだおれだ、ハックション」
△「なにがおれだ、七十石めが神妙にしろ」
とうとうぐるぐる巻きにふん縛ってしまいました。
○「さあその柱にくくりつけろ」
△「七十石だぞ、逃がすな、しっかり縛れ」
大きな柱に縛りつけて、
一同「さあ酒だ、祝いの酒だ、前祝いだ」
部屋に引き上げて大騒ぎ。
ところが、見回りのために奥の方から本多佐渡守が、油断なくあたりに目を配りながらやってまいりますと、詰め所の中がなにやらたいへん陽気な声、のぞいて見ると、皆が酒を飲んで大は

しゃぎ。

本「これこれ、その方たちはなにをいたしておるか、宿直番の者が、酒を飲むとはお役怠慢、不届き至極じゃ」

○「あっ、これはこれは本多様、実はえへっへ……、その前祝いをやっておりますので……」

本「前祝いか、なんの前祝いだ」

○「ここにおります七人で、七十石ずつちょっと働きましたので……」

本「なんだと、はっきり申せ」

○「はい、実は五百石の曲者、猿飛佐助を召し捕りました」

本「なにっ、猿飛を召し捕ったと申すか、うーむ」

○「されば五百石を七人で割りまして、一人前七十石のご加増……その前祝いにございます」

本「うーむ、それは大手柄じゃ、九郎兵衛はいったいなにをしておるか……してその曲者はどこじゃ、引きずり出してまいれ」

二人がいって、曲者を引っ張ってまいりますと、

九「ああ痛い痛いハックショイ、ヘックション」 ○「あれ、まだくしゃみをしているぞ、さあ、こっちへ入れっ……ありゃありゃ、いつの間に九郎兵衛に変わった」

あまりの意外さに呆然としております。

本「なんだ、九郎兵衛ではないか、早く縄を解いてやれ」

○「なんだ、猿飛と思ったら九郎兵衛か、これは情けない、七十石もふいか」

九郎兵衛怒ったがどうもしようがない、赤飯の前祝いの手前もありほうほうの体でわが家へ引

き上げてしまった。

こうなっては佐渡守においても、いよいよ捨て置けません、さらに若侍を集め、猿飛を召し捕った者には五百石加増の懸賞つきで召し捕り方を命じました。

早くもそれと知った佐助、

佐「よし、そんなら今度はこうしてくれる」

またもや城内に忍び込んで見ますと、前にも増していっそう厳重な警戒で、あちらこちらに若侍たち、目を光らせて詰めております。

佐助は五遁の術で身を隠し、いきなりその中の一人の横っ面をポカリ、次いでもう一人の頭をポカン、たちまち、うったな、殴らぬの同士げんか、そこで佐助は小柄を抜いて殴り合っている連中のちょん髷をちょいちょいと切り取り、さらに奥の間に入って、ここにいる若侍の五六人に同じくけんかをさせて、またもちょん髷をちょいちょい、こうして二三十人の髷を切り取って、それをことごとく紙に包み、

進　上　　猿飛より

と書いて本多佐渡守の机の上に置いて、さっさと城外へ飛び出し、そのまま駿府の城を後に東をさして急ぎました。佐渡守は後にこれを発見し、

本「うーむ、猿飛というやつ、さてもさても恐ろしいやつだ」と身ぶるいいたしました。

替え玉狸じじいの箱根道中

さてこちらは猿飛佐助、駿府城内をさんざんに騒がせてかかってまいりましたのは、東海道名代の難所、箱根の山でございます。折から、向こうから「下に、下におろう」と制止の声。

佐「ははあ、大名の行列だな、どこの大名だな」

パッと傍らの松の木に飛び上がり、はるかかなたをながめると、りっぱな行列がこちらへ上って来ます。

佐「ははあ、三葉葵の紋をつけているところを見ると、さては家康の行列、江戸から駿府へ帰るところだな、うむ、これはおもしろい、一番ここで狸じじいの肝を冷やしてやろう」

こんなことを心に決められた家康こそいい災難でございます。そんなことにかまわず、行列は「下におろう、下におろう」と次第に近づいて来る。

佐「ほほう、いよいよ来たな、よしっ」

松の木から降りて、今しも家康の乗り物がさしかかって来ると見るや、「やっ」という声もろとも、ヒューッと駕籠の上に飛び下りるや姿を隠してしまった。

警護の者は「あっ」と驚くひまもございません。すると、駕籠のとびらがするすると開いたかと思うと、中なる家康公の頭を鉄扇でピシャリ。

家「痛っ、何奴じゃっ」

○「それ、曲者なるぞッ」

警護の武士がばらばらと駕籠の周囲を固めましたが、なんのことやらさっぱり訳が分からない、ただわいわいいっているばかり。

佐「ははあ、あすこに仁王立ちに突っ立っているのが、徳川名代の豪傑渡辺半蔵だな、よしひとつ怒らしてやろう」

身をひるがえして松の木に飛び上がり、大きなまつかさをもぎ取ってパッと投げつけると、これが半蔵の鼻の頭にピシャッ。

半「あいたたた、これははなはな迷惑――」

槍半蔵とうたわれた豪傑、真っ赤になって怒り出した。つづいてこれも徳川の豪傑長坂血槍九郎の顔へ一つお見舞い、

血「これこれまつかさ、なんで今ごろ落ちた」

と、踏んづけて、ぷんぷん怒っている。これを見た佐助、姿を消したまま、

佐「やあやあ、われこそは真田の郎党猿飛佐助幸吉なり、どうだ狸じじいはじめ家来のものども驚いたか」

叫びながら、なおも周囲の侍の頭をポンポン鉄扇で打ちすえた。

血「ややッ、さては猿飛がこんな所に現れたか、それ者どもはやはや召し捕れっ」

いきり立つが、姿が見えないから手のつけようがありません。召し捕るどころか、ぐずぐずしていると、家康公の命がどうなるかも分かりませんから、急いでそのまま小田原へ戻り、改めて

家康公の替え玉を駕籠に乗り込ませ、ようやく箱根を乗り越えました。

佐助は、そのことをちゃんと承知しておりましたが、

佐「まあ今度はこのくらいにしてやろう、それにしても、うむそうだそれそれ」

と佐助は矢立てを取り出して、

替え玉を使うとはひきょうなり、狸じじいの首はしばらくそっちに預け置くもの也

猿飛佐助

こう書いて、家康公の替え玉の乗っている駕籠の中へほうり込んで、行列をやりすごした。

家康公小田原でこの話を聞かれ、頭のこぶをなでながら、

家「さてもさても猿飛というやつは油断がならぬ」

と、いっそう厳しく警戒をさせることになりました。佐助は佐助で、「さすがの狸じじいも少しは驚いたろう」といい気持ちになってゆうゆうと箱根を下り、小田原、大磯、藤沢の宿々を無事に過ぎて、早くも江戸表へ到着いたしました。

これより、猿飛佐助が仲間に身をやつし、城内に忍び入り、城内の様子をくまなく探るという痛快なるお話に移ります。

ドシン、メリメリ、大がまご入来！

さていよいよ江戸に入った猿飛佐助幸吉は、早速に日本橋の傍らに一軒家を借りうけ、毎日毎日市中をぶらぶら歩いておりましたが、さすがに将軍家のおひざ元、見るもの聞くものすべて大したものばかり。

ところが、彦根から駿府、箱根と、江戸へ来るまでに暴れたことが、ことごとく江戸に知らせが入って、やがて猿飛が江戸に入り込んで万一のことがあってはならないと思うから、千代田城内の警固というものはたいそう厳重を極め、剣術、弓術、忍術の名人たちといわれるものを多く集めて、二代将軍秀忠公の寝所付近はバリケードを張りめぐらし、機関銃をすえ、まるで戒厳令を敷いたようでございます。

ある夜、千代田城へ忍び込んでこの様を見た佐助、

佐「なるほど、大した警固だな、はてどうしたものか」

と、二三日腕を組んで考えておりましたが、なにを思ったか佐助は、にわかに八百屋に変装して、青物を天秤棒でかつぎ、本多佐渡守のせがれ本多上野介正純の屋敷へまいりました。

佐「え、お願い申しやす。わっちは日本橋の八百屋佐平と申しやす、今までお出入りの八百屋もたくさんござんしょうが、どこよりも勉強いたしやすから、ごひいきに預かりてえとこう存じま

して、どうかよろしくおねげえ申しやす」
手土産の小判入りのようかんを取り出しますと、その効き目のせいか、
門「よしよし中へ入って商売しろ」
通行の鑑札をくれました、これさえあればもうしめたものでございます。もうけるための商売ではありませんから、品物がよくて値段が半分だというのでたいへんな評判、どこの家でも佐平の来るのを待っているという有り様。今日は商売物を持たずにぶらりやって来た佐助、侍たちが非番で碁を囲んでいるところへ来て、
佐「え、こんちは、今日は休みなんで遊びに伺いました、吉崎のだんな、碁を拝見させておくんなせえやし」
吉「おお、佐平か、今日は休みか」
佐「へい、青物市場の方は今日は公休でござんす。魚河岸に行って見ましたらイキのいいかつおがありましたんで、いつもごひいきに預かりましたり碁を教えていただきますので、お礼に少しばかり買ってめえりやした。ひとつ召し上がっておくんなせえやし、酒も持ってめえりやした」
と、酒と肴をそのところへさし出しますと、
吉「佐平、いつも心配かけてすまんな……遠慮なく馳走になるぞ」
そこで碁は一休みにして酒を飲みはじめました。
佐「ときにだんな、少々お願いがござえますが聞いちゃいただけねえもんでござんしょうか」
吉「なんだ、拙者にできることなら……」
佐「へえ、わっちもこうして八百屋で一生を終わりたくねえんで……」

吉「ほほう、なにか望みでもあるのか」
佐「へえ、どうかして武家奉公がしてみてえんでござんす、仲間でも草履取りでもなんでも結構なんで……なんとかお世話を願えねえもんでござんしょうか」
吉「ふむ、武家奉公がしたいとは感心なやつだ、しかし武家奉公はなかなかつらいぞ」
佐「それはもう覚悟しておりやす、どうせご奉公するなら、吉崎様がいらっしゃるからこの本多様のお屋敷が、よろしいんでござんすが……」
吉「よしよし、折があったら、世話してつかわす」
二三日経つと、吉崎兵馬が身元引受人となりまして、佐助はまんまと仲間に住み込むことに相成りましたから、佐助は内心、――しめた、いよいよこれから仕事にかかれる――と喜んでおります。ところが佐平は周囲の人間に信用させて気を許させなければならないと思うから、仲間部屋へいって、
佐「え、この度まいった佐平という者でございます、どうかよろしくお願いいたします」
仲間頭の権次、それから竹蔵、梅助という古参連中にそれぞれあいさつして、
佐「どうか、これで一杯召し上がって下さい」
と一両小判をさし出した。そのころの一両といえば、今日でいえば何万円にも相当する大金、まずこの金ですっかり買収してしまった。それから猿のようによく働くから、たいへんな人気者になりました。
すると、五六日たったある日のこと、本多上野介正純殿がご出仕に相成るときのお供に、竹蔵と共に佐平も加わることになりました。

竹「佐平、今日はお供だぞ」
佐「どこへいくんだ」
竹「殿様がご登城なさるんだ」
佐「しめたっ」竹「なにがしめただ」
佐「いや、こっちのことよ」
やがて仕度もでき、行列をそろえて千代田城へ乗り込んでまいりました。
今度は忍び込んだのではない、正々堂々殿様のお供で城内へ乗り込んだのですから、このときとばかり、あっちこっちと、歩き回っております。
○「おいおい、あまりうろうろしているとお目玉を食うぞ」竹「そうか、そいつあいけねえ」
こうして何遍となくお供をしているうちに、すっかり城内奥深くまで忍び込み、とうとう千代田城の詳しい絵図面を書き上げ、これを紀州九度山のご主君幸村公のもとへ送り、なおも様子をうかがっておりましたが、ある日、城内の奥深く忍び込んでまいりますと、一室でなにやらひそひそ相談している様子。見ると、正面にはいつ駿府から来たか徳川家康公、つづいて二代将軍秀忠公、以下本多佐渡守、本多上野介父子、酒井、榊原、井伊の四天王をはじめ、いずれも老臣連中がずらりと居ならんでおります。
佐「うーむ、さては、だいじな秘密会議らしいな、よしよし聞いてやろう」
耳をすましていると、ややあって、正面の家康公一同に向かい、
家「今や天下は徳川のものになったが、まだまだ大阪に秀頼がおっては、いついかなるときに謀反を企てぬとも限らぬ、このさい軍を起こして豊臣家を滅ぼしてしまいたいが、どうじゃ」

すると本多佐渡守それに答えて、
本「いかにもわが君の仰せの通り、秀頼を一日も早く亡き者にいたし、豊臣家を取りつぶすがなによりと存じますが、さてその軍を起こす手だてを考えねばなりますまい」
一同もそれに異議を申し立てるはずもなくいずれも賛成。
家「その手だてじゃ、いわれなき戦いはあたかも徳川の野望と見られ、味方の名目が立たぬ、うーむ」
本「その手だては拙者に存じよりもあれば、その辺にぬかりはござりませぬ」
これを聞いた佐助大いに驚き大いに怒り、
佐「さてはかかる陰謀をたくらみおるか、憎みても憎みても余りある奴輩、おのれ家康よくもほざいたな……よし、こうしてくれるわ」
ちょうど庭前にありました大きな石を引っ抱え、評定をしている部屋をめがけて、投げつけた。メリメリバリバリと床は壊れ、危うく家康公のそばまで石が転がって大きなまになり、家康公をはったとにらんだから、一同の驚きはひとかたならず、さすが本多佐渡守、この有り様を見るや、
本「やあやあおのおのがた決してご油断召さるな、猿飛佐助が当城内へ入り込みましたるぞっ」
猿飛佐助と聞いて家康公思わず頭に手をやって、
家「うーむ、あの忍術使いか」
本「それ、警戒しろっ」
城内は時ならぬ大騒ぎ、部屋部屋をかためましたが、佐助は早くもそこを立ち退き、仲間部屋

に帰って知らぬ顔。ところが早くもこのことが知れ渡ったから、仲間部屋までも知れております。

竹「おいおい佐平、どこへいっていたのだ、いま奥ではたいへんな騒ぎだとよ」

佐「どうしたんだ」

竹「なんでも大きながまが出て、将軍様に毒気をふっかけたそうだ」

佐「そうか、へへえ、それはたいへんだ」

佐助も義理に驚いて見せましたが、内心では大ニコニコ、やがてお供をして本多の屋敷へ帰りました。いくら徳川でも、佐助が本多上野介の屋敷に仲間に入り込んでいるとは気がつきませんから、ますます警戒を厳重にして、草の根をわけても猿飛を探し出せと、厳しい命令が出ました。

佐助は一刻も早くこのことを、主君幸村公に細々と書きしたため、これを飛脚に頼んで九度山へ送ろうと、その夜肌に着けて寝ましたが、そもそもそれが間違いのもととなり、ここに猿飛佐助に一大危難が振りかかることになります。

しまった、密書がない！

猿飛佐助は城内の秘密会議の席上の様子や大石を投げこんだ始末などを詳しく書きしたため、幸村公に送るつもりで、肌身につけて寝たつもりなのですが、夜が明けて、飛脚を頼もうと探したがどうしたことか、どこにもその手紙が見つかりません。

佐「ややっ、だいじな密書がない、はて、どうしたのか」

もしやと思う心当たりのところを探しましたがどうしても見当たらない。これはたいへんな手ぬかりでございます。なおもあちらこちらと探しているその後ろから、

役「猿飛、御用っ」

と、来たからさすがの佐助、どきんと胸に来た、はっと振り返って見ると、五六十人の捕り方が自分を取り囲んでいる。

佐「さては密書は拾われたか、うーむ、しまった」

捕り方は、じりっじりじりっと佐助にせまって来る。ここで召し捕られては一大事、

佐「なにをこしゃくなっ、捕らえられるものなら捕らえて見ろ」

しばらくは相手になっておりましたが、一人の捕り方が十手を振りかざして飛び込んで来るやつを、気合い一声「えいっ」と叫べば姿はパッと消える、佐助はそのままここを飛び出して、日本橋の宿へ帰ってすましております。

徳川家の方では、猿飛佐助がたしかに江戸に入ったことがはっきりしましたから要所要所に番所をこしらえ、いよいよ厳しく探しましたがどうしてもその所在をつきとめることができません。そこで仲間佐平の身元引受人の本多家の家来吉崎兵馬を召し捕り、これを小石川八幡馬場で打ち首ということになりまして、そのことを辻々に貼り出しましたから、これを見た佐助、

佐「こりゃあたいへんなことになった、おれのしくじりのために、恩人の命を失っては申し訳がない、よし吉崎を助け出してやろう」

夜になるのを待ちかねて、姿を隠して仲間部屋にやって来て見ると、権次、竹蔵、梅助の三人がちびりちびり酒を飲みながら、

権「なあ竹蔵、あの佐平が真田の忍術使いとは驚いたな」

竹「うむ、兄貴がうまく密書を拾って、すぐお殿様にさし出したからいいようなものの、そうでなかったらたいへんだったぜ」

梅「そうだそうだ、それにしても兄貴は大した手柄を立てたもんだ、ごほうびに二十両いただいたというではないか」

話しているのを聞いた佐助、

佐「ははあ、権次のやつが密書を拾ったのだな、よし、仕返しをしてやる」

いきなり権次の背後へ回り、物をもいわずに横っ腹に当て身をくれたから、「うーむ」と目をまわしてしまった。

梅「持ちつけねえ金を持ったんで頓死したんじゃあねえか」

いってうろうろしている竹蔵と梅助の二人にも同じように当て身をくれたから、三人とも仲よくのびてしまった。

話変わって、吉崎兵馬は佐助の身元引受人になったばかりに打ち首ということになり、今日がその当日、悄然と仕置場に引き出されましたが、竹矢来の外には見物人が人垣をつくって、今か今かと見物しております。ひどいやつもあったもので、人の殺されるのを見に来るのですから暇な人間もあるもんで……もっとも当今では拳闘が盛んでございますが、あれも、どちらかというと、本心は判定勝負を見るのではなくて、一方が殴り倒されるのを見にいくので、中には血を出

さないとおもしろくないなんてえのがあるそうですから、昔も今もあまり変わりはございません。戦争をやめろなんていったって人間がいるうちは、なかなかなくなりそうではございません。

余談はさておきまして、こちら仕置場では、今しも首斬り役人が吉崎兵馬の背後に立って、太刀を打ち下ろそうとするとたん、ピューッと飛んで来た小石が役人の眉間に当たった。

男「あっ」と打ち倒れたから、警固の者は「すわ仕置場破りだ」とばかり八方へ目を配りましたが、いっこうそれらしい者は出ません。

役「それ、今のうちに首を打てっ」

また別の首斬り役人が出て、ヤッと斬り下ろそうとすると、またもやピューッと石が飛んで来て役人の眉間へ。役人たち、不思議なことがあるものだとあっけにとられていると、はるか東の空に一点の黒い影が見えたかと思うと、この仕置場さしてぐんぐん近づいて来る。

○「やあ、ありゃなんだ」△「あっ、鷲だ鷲だ、大きな鷲が飛んで来たっ」

△「おおかた打ち首になった後の死骸を食いに来たのだろう」

わいわい騒いでいると、大鷲は大きく輪をかいていましたが、急転直下、仕置場の真ん中めがけてさーっと鋭く舞い下がって来て、吉崎兵馬をむんずと引っつかむや、あっというまに大空高く舞い上がり、人々立ち騒ぐのをしりめにいずこともなく飛び去りました。このことを役人から、本多佐渡守に申し出ますと、

本「さてはまた猿飛の仕業だな、ふらち千万」

かんかんに怒り、今度こそは逃がさぬぞと、江戸の出入り口は申すに及ばず、千代田城の内外に

は、旗本連中の中から特に腕の優れた者を呼び出し、弓、槍、鉄砲などで固め、大久保彦左衛門をはじめ渡辺半蔵、長坂血槍九郎などの勇士に市中を回らせ、水ももらさぬ警戒ぶり。

一方、佐助は驚になって吉崎を助け出し、

佐「吉崎氏、まことに気の毒なことをいたした、実は拙者は真田家の郎党猿飛佐助幸吉と申す者、貴殿を殺しては、主君幸村公に対しても申し訳がない、それ故お助けした」

吉「こうなるのもなにかの約束ごと、幸い妻子もないから、どこかへ落ち延びよう」

佐「いかがでござる、主君幸村公は、目下紀州九度山麓に蟄居しておられるが、そこへまいれば必ず召し抱えて下さる。幸村公はまれなる名将故、貴殿も必ず世に出る機会がござろう」

吉「それは有り難い、ぜひともお頼み申す」

そこで佐助は書面をしたため、吉崎兵馬にそれを持たせて紀州九度山へ落ちのびさせました。

まんまとせしめた金一千両

佐助はその後もしばしば徳川方の様子をうかがっておりましたが、いよいよ豊臣家を打ち滅ぼそうと相談が一決した様子ですから、無念で無念でたまらない。そこでまたもやひそかに千代田城へ忍び込み、大きな石どうろうを、池の中へ投げ込んだり、あるときは庭石を廊下に投げ込んでめちゃめちゃにしたり、また、お城のやぐらで非常太鼓をドンドン鳴らしたり、こんな騒ぎが

毎晩つづくので、城内の者は、おちおち寝ることもできませぬ。さすが老中たちもこれには全く弱り果て、ついに百計つきて川越の喜多院に人をつかわし、当時家康公と対等で話のできる日本の名僧、天海僧正を召されました。

お召しによって天海僧正、直ちに家康公とご対面、待ちかねていた家康公、

家「おお天海僧正か、遠路わざわざ大儀であった、実はかようしかじか実に困ったことができた」と、いっさいの事情を詳しく話して、

家「なんとか貴僧の知恵で、これを取りひしぐことはなるまいか」

しかしさすがの天海僧正も、

天「相手が魔性とか、怨霊とかいうものなら、祈禱の力によって退散させることもできるが、忍術使いを退治する祈禱はちとむずかしい」

と首をひねりました。

こちらは佐助、夜になるとまたもや城内に忍び込み、姿を隠してだんだん奥へやってまいりますと、目の前に現れたのは一人の坊主、

佐「はて、今まで、城内に坊主がいたことがないが、さて何者なるか」

天海僧正とは知らないから、ジーッと見ておりますと、僧正、あたかもポカンと庭前をながめていると見せかけておりましたが、いきなり、

天「かーっ」

と、大喝した。その声の鋭いこと、思わず佐助が、ふいを打たれてハッとした一刹那、術が破れてパッと姿を現した、とたんに警戒の侍が、佐助を目がけて、バラバラッと駆けつけ、

警「曲者っ」と、飛びかかるのへ、

佐「なにをっ」と振り切ろうとしたが、二三十人の屈強の武士に折り重なって取り押さえられては、いくら佐助でも仕方がありませぬ、あわやと思ったが、わずかの透きを見つけた佐助、また姿を消したから警固の侍はうろうろしているばかり。

ところが天海僧正には法宝修行の洪大な力でちゃんと見えますから、

天「それそこだ、それあすこだ」

と、激しく下知しますが、警固の侍たちには姿が見えないから手のつけようがない、また佐助にしては、天海僧正ににらまれて、これまた手の施しようがないので、やむなくそのまま城外へ飛び出してしまいました。

天海僧正におきましては、まざまざと佐助の凡ならざる秘術を見抜いたものの、自分がいなくなったら、どのようなことになるやも知れないと考えたから、

天「とにかく、愚僧の目にはいくら姿を消してもちゃんと見える、この上はしばらく城内にいて彼をよせつけぬようにいたそう」

と、しばらく千代田城にとどまることに相成りました。佐助はその後もしばしば城内に忍び込みましたが、いつも天海僧正の目が光っているので、さすが猿飛佐助も困惑の体。

しかるに天海僧正ほどの方になりますと、早くも忍術の攻め手寄せ手の奥義を見抜き、わずか十日余りも城内にあって、毎夜佐助が現れる度毎に、霊感を感じ、早くも『忍術に関する十二章』を脱稿、これを家康公に献上いたしました。

家康公がそれをご覧になると忍術を防ぐ手のくだりはことの外御意に召し、後日大阪夏の陣の

ときに真田家の寄せ手の裏をかいた手口は、ほとんどこの『忍術に関する十二章』が役立ったことだろうと思うのですが、はっきりした文献はないようです。

こちら佐助においては、

佐「あの坊主がいるうちはだめだ、それでは一番手を変えてやれ」

と、それから城内には忍び入らず、城外にあって、通りかかる武士を片っ端からお堀の中へぶち込んだり、要所要所の番所に地震を起こしてゆすぶったり、いろいろ忍術のあの手この手で悩ましたから、江戸市中は戦々恐々、ついに老中もすて置けず。

真田の郎党猿飛佐助の首を持参したる者には五百石を与えて武士に取り立てる、もし生け捕りにした者は千石をもって取り立てる。

こういう懸賞つきの立て札を立てました。物見高いは江戸の常、たちまち野次馬がワイワイ、

○「おい、どうだ、ひとつ生け捕って千石の旗本になって、大久保じいさんのように天下の一大事でわがままをしてみようじゃあねえか」

△「ばかこくな、相手は日本一の忍術使いだ、知らねえうちにこっちの首がねえぞ」

○「なる程それにちげえねえ、ブルブルやめた」

江戸市中は、この札のことで大騒ぎですが、当の猿飛佐助はいっこう平気なもので、——おれの首が五百石、生け捕れば千石か、——と相変わらず市中を暴れ回っております。

ところがある日、例によって佐助は、深編みがさをかぶって、日本橋へさしかかり、例の立て札を見て、ニヤニヤながめておりますと、突然背後から、「御用だっ」と、どなった一人の武士、

○「おい、こっちへ来い、きさまあの立て札の文句が読めぬのか」

声に聞き覚えがあるので、ひょいとその顔をのぞけば、意外や根津甚八だ、往来中では話ができないから自分の宿に連れて来る。

佐「根津どうした」

根「こらやい、きさまが江戸市中で暴れ過ぎるのでご主君が、万一のことがあってはたいへんだ、おれはこの講談にまだ一度も登場していないから、せめて最後には顔を出せと、わざわざおれをおつかわしになったのだ」

聞いて佐助はすっかり恐縮、

佐「ああそれは申し訳ない、ご主君にそんなにご心配をかけたか、しかし根津心配するな。江戸のことはおいおい注進する」

そこで佐助は、千代田城での出来事はじめ、城内の様子を詳しく物語りました。

佐「なにしろ天海僧正ががんばっているので、どうにも手がつけられない」

根「ふむ、えらいやつが出て来たな」

佐「しかし、きさまが来たのはちょうど幸いだ。敵の計略の裏をかいて、金もうけをしようと思うがどうだ」　根「金もうけ――」

佐「そうだ、ご主君がまた世に出られるにしても、軍用金がなければ、どうすることもできまい。その軍用金を徳川家から一千両取るのだ」

根「まさか夜盗でもあるまい、なにか計略があるのか」

佐「うむ、根津ちょっと耳をかせ、むにゃむにゃ」聞いて根津はプッと吹き出した。

根「なるほどこれは妙案だ、よし、では早速はじめよう。しかしどこがいいだろう」

佐「さっきの所がいい、あすこは江戸でも一番にぎやかな所だからな」

根「よし、では猿飛、きさまが先にいってろ、すぐ後から出かける」　佐「うまくやれよ」

すっかりてはずをきめて、佐助は立て札のところへ来ておりますと、

根「やあやあきさまは真田の郎党猿飛佐助だな、この人相書きそっくりだ、さあもう逃がさぬぞ、おれをだれだと思う、天下の豪傑稲妻五郎という者だ」　佐「しまった」と叫んで逃げようとする。それを引っ捕らえようとして、たちまち両人組み討ちがはじまった。

根「うぬ逃がしてなるか、一千両だ、軍用金だ」　佐「しっしっ、下らぬことをいうな」

と、組んずほぐれつの見せかけ格闘、野次馬これを見て、

○「やあ、あの侍もうけやがったぞ、千石の旗本だ、おやっはね返した。あっ危ない、またねじ伏せたっ」

野次馬連もわがことのように声援する。そのところへ役人が駆けつけたから、

根「さあ生け捕った、どうだ、いくら忍術の名人でも、拙者にかかってはねこの子も同然だ、これでもかこれでもか」とポカポカ殴る。

佐「おいおい痛いぞ、本気で殴るやつがあるか、約束が違うぞ」

根「なにをいう、きりきり立て」

と、とうとう荒縄でぐるぐる巻きにして、役人と共に大威張りで役所へ引き立てていった。

根「拙者は稲妻五郎と申す者、懸賞つきの猿飛佐助を生け捕った。よく調べてもらいたい」

役人がさっそく取り調べると、まさに猿飛佐助に相違ありませぬが、念のため、例の本多の仲間を連れて来て首実検をさせると、たしかに間違いないとのこと、

役「ご貴殿のお手柄なによりでござる。ではかねての立て札の通り、一千石の旗本としてお取り立てになるでござろう。しばらくご老中のご沙汰をお待ち下さい」

と申し渡すと、根津は首をふって、

根「いやいや、拙者はもはや二君に仕える心はござらぬ、従って一千石でも二千石でも欲しくはござらぬ。しかし全然ご辞退しては、ご威光にかかわることでござろうから、一千石の代わりに一千両ちょうだいいたしたい。もしそれがかなわぬならば、直ちに猿飛の縄を解き放ち、拙者はここを立ち去り申す」と、おどかした。

役人は相談して、老中に届けたうえ、

△「では一千両下しおかれるでござろう」と、一千両さし出した。

根「では一千両、千万かたじけない」と千両箱を引っ担いで、そのまま、佐助の隠れ家へ戻って来て、佐助の帰るのを今か今かと待っております。

カチーン、佐助の首がポロリ

さてこちらは猿飛佐助、縛られたまま千代田城内に引き立てられましたが、こういう険難な人間を、なまじ入牢させては、なにをするか分からないというので、即座に打ち首にせよということになり、佐助は庭前へ引き出され、鉄の鎖で縛られ、荒むしろの上へ突き出されました。

家康公も安心して、ゆうぜんと佐助を見下ろし、

家「これこれ猿飛、もはやこうなっては逃れる術もあるまい、罪科は申し渡さずとも、なんじよく心得ておろう、神妙に討たれよ」というのを下からぐっと見上げた佐助、

佐「黙れ黙れ、なんじは天下を横領したうえ、大恩ある豊臣家を滅ぼそうとたくらむ狸おやじ、なんじごときに首が討てるか、斬れるものなら斬って見ろ」家康公むっとして、

家「それ、早く討てっ」

その下知に、かねて身構えておりました首切り役人、ヤッとばかりに打ち下ろした刃、カチーンという異様な音をたてて佐助の首が落ちた。

役「おや、妙な音がしたぞ、なんと硬い首だろう」

首切り役人、刀を見ますと、刃がぼろぼろになっている。立ち会いの役人たち、これは少し変だと思っていると、さいぜんから家康公のそばに控えていた天海僧正、スックと立ち上がり、

天「やあやあ猿飛は逃げたぞ、それは猿飛ではない」

猿飛の死骸とばかり思っていたのは石地蔵、その首が前に落ちているから、びっくりした家康公はじめ一同、歯を鳴らしてくやしがりましたがもう追っつきませぬ。

こちら猿飛佐助は、首尾よく城外に飛び出して、無事日本橋の隠れ家に立ち帰りました。

根「おお猿飛か、きさまのことだから大丈夫だとは思ったが、だいぶ遅かったな」

佐「あっちこっちと引っ張り回されたので遅くなった。しかし根津、おれはご主君から、家康と秀忠は将軍だから、忍術で首を取ってはいけない、正々堂々とやれとの仰せだが、しかし今のところ、正々堂々にも、あの天海僧正がいては手がつけられない、そこで息抜きに、しばらく江

戸を離れた方がいいと思うがどうだ、軍用金も入ったことだし、きさまといっしょにひとまず九度山へ帰ろうではないか、久し振りでご主君のお顔が見たい」

根「おいおいご主君の顔もそうだろうが、きさまの本心は楓どのの顔が見たいのだろう……うむ、そうそうすっかり忘れていた。楓どのは、先月男の子を生んだぞ、丸々太ってまあおれの見たところでは楓どのそっくりだ」

佐「えっ、男の子を生んだか、それを聞いてはもう矢も盾もならぬ、一刻も早く帰ろう」

根「現金なやつだな……まあ有給休暇というところか、労働協約にちゃんとあるからのう」

そこで、その翌日二人連れ立って、紀州九度山麓をさし江戸を出立いたしました。

さて天下の風雲は、ますます険悪となり、この分では大阪方と徳川方との間に一合戦はまぬがれぬ情勢となりました。

幸村公においては、全国にさしつかわした頼みに思う猿飛らの帰る日を一日千秋の思いで待っておいでになる。そこへ無事に帰った猿飛らの姿を見て、その喜びはひとかたならず、過分の恩賞を与え、その労をねぎらいました。

しかし猿飛佐助は休む暇もなく、真田の軍勢に加わって、大阪城に入城、軍師役真田幸村公の命に従い、目覚ましい奮戦、徳川勢百万余の大軍を悩ましつづけましたが、元和元年五月八日、さしも難攻不落といわれた大阪城もついに落城に及び、猿飛佐助はそのまま九州へ落ちのび、またもや再挙を計るという、猿飛佐助九州の大活躍の場面が展開するのでございますが、あまりお長くなりますので、今回はこのへんで……またの機会に譲ることにいたします。

（おわり）

講談名作文庫　9
猿飛佐助

昭和51年3月10日第1刷発行
昭和51年4月6日第3刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2－12－21
郵便番号 112　振替　東京3930
電話　東京(03)945－1111(大代表)
編　集　講談社出版研究所
印　刷　廣済堂印刷株式会社
製　本　有限会社千曲堂

Printed in Japan　©KODANSHA 1976
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

講談名作文庫

1 真田幸村 名将 智謀
2 水戸黄門 漫遊 洒脱
3 大岡政談 明智 度胸
4 柳生旅日記 剣豪 一代
5 赤穂義士銘々伝 忠臣 苦節
6 太閤記 風雲 痛快
7 鼠小僧次郎吉 義賊 仁侠
8 いれずみ奉行 天網 恢々
9 猿飛佐助 神出 鬼没
10 一休和尚漫遊記 頓智 飄々
11 由井正雪 正義 革命
12 快傑自来也 妖術 変幻
13 荒木又右衛門 武勇 仇討
14 伊達騒動 波瀾 万丈
15 天保六花撰 江戸 の華
16 弥次喜多道中記 珍妙 失敗

各巻　320円　挿絵多数入り